

年報

令和3年度（2021年度）



Oita University of Nursing and Health Sciences

公立大学法人大分県立看護科学大学

2021年度の年報発行にあたって

大分県立看護科学大学

理事長・学長 村嶋幸代

2021年度の年報をお届けできることを嬉しく思います。

2021年度も、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が猛威を振るった年でした。2020年1月16日に国内で初の感染者が確認され、3月3日には大分県で初めての患者が発見されました。本学では、幸い、Wi-Fiが整備されていまして2020年度の開始直後からオンライン授業を導入できました。2021年度も、感染状況に合わせてオンライン授業と対面授業を組み合わせ、学事暦を変更することなく、無事に学生たちを社会に送り出すことができました。

2021年度も感染拡大の状況は変わりませんでした。1年間の蓄積により、オンライン授業にも慣れて、むしろ、オンラインであることを、積極的に活かした試みも出てきました。詳しくは、各科目における授業の工夫をご覧くださいと思います。実習も、「臨地に行けない」まま実習が終了してしまった学生が心配でしたが、希望者に対して、卒業前に、追加の演習を行いました。卒業式・入学式は、参加者を学生だけに絞って実施できました。

このような状況下でも、学生・院生たちは国家試験に全員が合格し、元気に本学を巣立っていきました。関係者の皆様に心から御礼申し上げます。

2021年度の年報は、学内のこのような状況の中で生じた出来事をまとめたものです。新しい試みとしては、下記の事項があります。

- ① 新型コロナウイルスの医療者向けワクチンを、看護実習に行く学生・教員に学内で接種
- ② 予防的家庭訪問実習の協力者である地域の高齢者とオンラインで交流会
- ③ 韓国、仁荷大学校医科大学の学生と、オンラインで国際交流
- ④ 学部4年生に対する大学院NPコース特別選抜を導入。合格者は5年後に、修士課程に進学する。

年報は、自己点検・評価委員会の所掌事項です。本委員会は、PDCAサイクルを回しながら、全学の改善・改革を進める重要な委員会です。年報を評価にも活かしながら、「大分県における看護学の拠点となる」という本学の使命発揮に向けて、更に、改善・改革に取り組んでいきたいと思っております。2021年度の年報をご一読頂き、忌憚のないご意見、また、ご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

国家試験に全員合格

看護師・保健師・助産師国家試験に全員合格しました。大学院 NP コースでも NP 資格認定試験に全員合格しました。



2021 年度

大分県立看護科学大学

トピックス

入学式、卒業式・修了式を対面で開催

教職員の綿密な計画により三密を回避し、入学式、卒業式・修了式を対面で行いました。

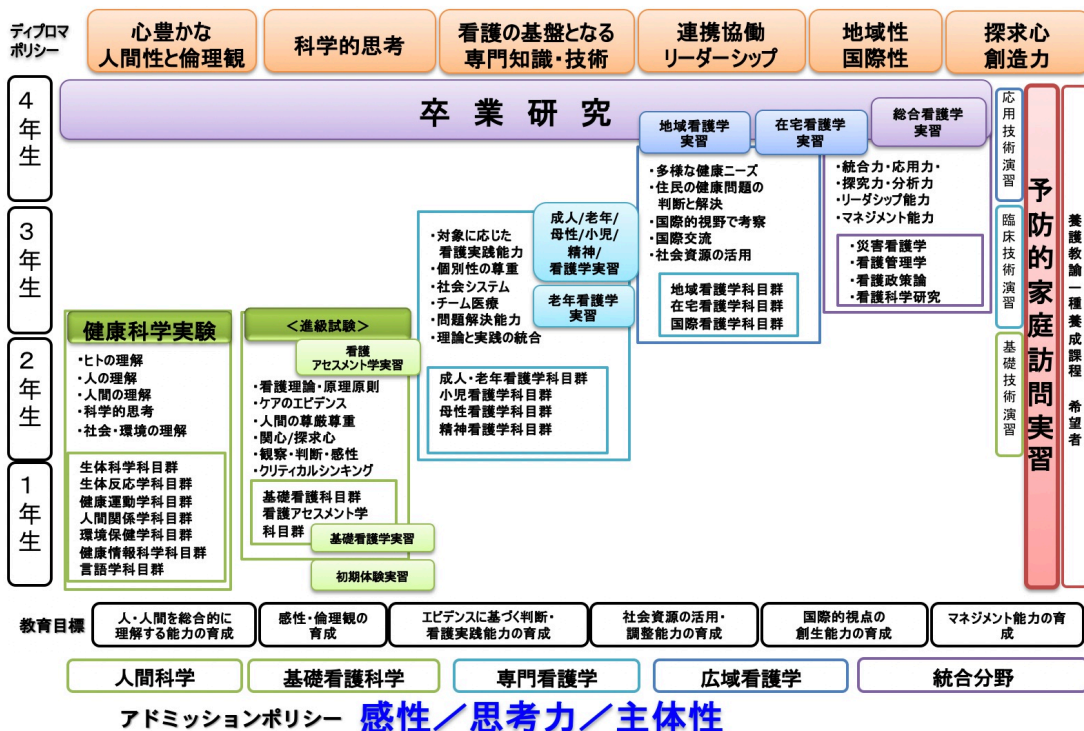


オンラインで国際交流

8月5日(木)にMOUを締結している韓国のInha大学と初めて「オンライン学生交流」を開催しました。双方の大学から各16名が参加し、元気に交流しました。



学部教育のカリキュラム2022



新しいカリキュラムを文部科学省に申請
 保助看学校養成所指定規則の改正に伴い、令和4年度からの新カリキュラムを検討するタスクグループを立ち上げ、学長・学部長が陣頭指揮を執り、全学を上げて検討を進め、文部科学省に申請し、承認されました。また、大学院の広域看護学コースと助産学コースのカリキュラム改正も承認されました。(左の図は学部のカリキュラム・ツリー)。

新しいカリキュラムを文部科学省に申請

新型コロナワクチンを学内で接種

大分県立病院から、COVID-19のワクチンを提供して頂き、6月23日に本学教員の手で学生・教員に接種しました。



看護国際フォーラムを開催

第23回看護国際フォーラム「コロナ禍における看護職のメンタルサポート」を大分県看護協会と共催し、オンラインで開催しました。萱間真美先生（聖路加国際大学）、Christine Kovner先生（ニューヨーク大学）をお迎えし、海外からの参加者も多く、盛況のうちに終わりました。

13:05~14:05	LIVE	<p>「コロナ禍における看護職のメンタルサポート」</p> <p>キーワード COVID-19 / メンタルヘルス / 医療従事者 / リモートサポート</p> <p>講師: 萱間 真美, RN, PhD 聖路加国際大学大学院 看護学研究科 精神看護学 教授</p> <p>In Japanese</p>
14:05~14:10		休憩 (5分)
14:10~15:10	REC	<p>「ニューヨークの看護師が経験した不安と抑うつ -COVIDパンデミック第一波における患者ケアから-」</p> <p>【講演(45分) + Q&A(15分)】</p> <p>キーワード うつ病 / 不安 / コロナ / 看護師</p> <p>講師: Christine Kovner, PhD, RN, FAAN 米国 ニューヨーク大学校看護大学 老年看護学 教授</p> <p>In English</p>

予防的家庭訪問実習を再開

新型コロナウイルスの感染拡大で休止をしていた予防的家庭訪問実習を10月20日から再開し、50チーム109名の学生が協力者様のお家で訪問実習をしました。



地域の高齢者とオンライン交流会

おおいた地域連携プラットフォーム実践型地域活動事業の一環で、12月24日に本学の学生と地域にお住いの高齢者の方々とオンライン交流会を開催しました。高齢者の皆さんは、Zoomを利用するのは初めてでしたが、スムーズに参加して頂くことができました。



大学院広域看護学コースの定員増

県内の保健師不足に対応するため、大学院広域看護学コースの定員を5名から10名に増員しました。

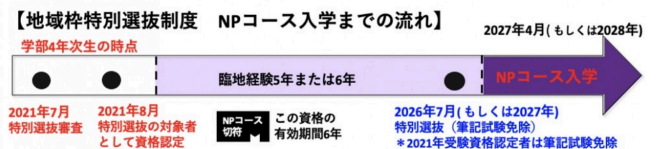


大学院 NP コースに地域枠特別選抜制度

将来、大分県で診療看護師（NP）として活躍することを考えている学部4年次生を対象にした「NPコース地域枠特別選抜制度」を新設し、開始しました。

2021年度から学部4年次生を対象に「NPコース地域枠特別選抜制度」を始めます

<p>「NPコース地域枠特別選抜制度」とは</p> <p>将来、大分県で診療看護師（NP）として活躍することを考えている学部4年次生を対象に「NPコース地域枠特別選抜制度」を開始します。本学の学部4年次の時に特別選抜で認められた学部生は、卒業後、臨地経験5年をもって受験となり、特別選抜の枠で筆記試験が免除されます。なお、NPコース修了後は大分県で働くことが必要です。</p>	<p>NPコース地域枠特別選抜の方法（2021年度）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 募集人員：若干名 2) 対象：本学 4年次生 受験要件：GPA2.6以上 全実習成績が原則A評価 3) 方法：5月 NPコース地域枠特別選抜の実施要項の配布 7月 審査実施（書類審査、小論文、面接） 8月 特別選抜の対象者として認定 4) 認定の有効期間：卒業後6年間（NPコース入学までに5年間の臨地経験が必要）
--	--



目次

1. 学内行事	1
2. 入学試験等	5
3. 学生の状況と進路	13
4. 授業等	18
5. 研究室活動	109
6. 研究助成・事業助成等	128
7. 研究業績	133
8. 社会貢献	145
9. 学務	161
10. 附属組織	192
11. 設備等	198
12. 名簿	199

1 学内行事

1-1 学年暦

前期		後期	
4月		10月	
8	入学式	1	後期授業開始
9	全学オリエンテーション	1～8	後期履修登録
9,12	新入生オリエンテーション	30	看護国際フォーラム
12	2～4年次生授業開始	11月	
12～19	前期履修登録	25	卒業研究要旨提出締切(4年次生)
13	1年次生授業開始	27	学校推薦型選抜試験および社会人選抜試験
14～	予防的家庭訪問実習開始	30	卒業研究論文提出締切(4年次生)
27,28	健康診断	12月	
5月		1,2	卒業研究発表会
10～6/4	在宅看護学実習, 地域看護学実習(4年次生)	6～20	看護アセスメント学実習(2年次生)
19	キャンパスクリーンデー(中止)	24	冬期休業開始
22,23	若葉祭(中止)	1月	
6月		7	冬期休業終了
9	学生大会	11～24	基礎看護学実習(1年次生)
19	開学記念日	14	大学入学共通テスト準備(2,3,4年次生休講)
14～7/2	総合看護学実習(4年次生)	15,16	大学入学共通テスト
7月		2月	
5～9	初期体験実習(1年次生)	10	助産師国家試験
14	大学院特別選抜	11	保健師看護師国家試験
18	オープンキャンパス	13	看護師国家試験
21	夏期休業開始	24	進級試験(2年次生)
20～8/3	小児看護学(保育所)実習(3年次生)	25	一般選抜試験(前期)および私費外国人留学生選抜試験
8月		28	後期授業終了
24	大学院入学試験	3月	
9月		1	春期休業開始
5	夏期休業終了	12	一般選抜試験(後期)
6～11/26	老年看護学実習, 成人看護学実習 I・II, 小児看護学実習, 母性看護学実習, 精神看護学実習(3年次生)	18	卒業式・修了式
11	公開講座		

1-2 オープンキャンパス

COVID-19 感染拡大予防のため 7 月 18 日（日）にオンライン開催（LIVE 配信）し、学長挨拶、大学紹介、入試概要説明、模擬授業、卒業生・修了生からのメッセージを配信した。また、模擬授業を除いた内容を 8 月中旬～10 月末日の期間、大学ホームページ上でオンライン配信した。後日配信では、動画「学生インタビュー編」「大学教育紹介編」も併せて公開した。オンライン開催に先立ち、事前に大分合同新聞など新聞社 3 社に記事を掲載、大分県オープンキャンパスガイドで広報し、TOS テレビのホットハート大分でも紹介された。オープンキャンパス当日の LIVE 配信は、事前申込総数は 207 名であったが、アンケート結果によると保護者や友人と参加した方が 5 割程度であったため、実際の参加者は申込総数を上回った。オープンキャンパス企画の中でも「合格体験談」や「在学生メッセージ」が参考になった、という意見が多かった。動画配信について、本学 YouTube の公式チャンネル登録数は 44 名（令和 4 年 3 月 31 日現在）、動画再生総数は 4,098 回（令和 3 年 4 月 1 日～令和 4 年 3 月 31 日）と、本学について大いにアピールできた。令和 3 年度は、大学見学を希望する高校生のニーズに対応するため、申し込みのあった高校生と保護者を対象にキャンパスツアーを 2 回開催した。令和 4 年度は、COVID-19 感染拡大予防に配慮しながら、可能な範囲で対面形式でのオープンキャンパス実施を計画する。

1-3 看護国際フォーラム

新型コロナウイルス感染症の流行状況及び対応のために、大分県看護協会と共催で第 23 回看護国際フォーラムを令和 3 年 10 月 30 日に、Zoom ウェビナーとして開催した。テーマを「コロナ禍における看護職のメンタルサポート」とし、米国から 1 名の講師が録画プレゼンテーション、国内から 1 名の講師がライブプレゼンテーションをした。参加者は 208 名と大盛況であり、その内訳は韓国 3 名、米国 1 名、日本の県内外から 204 名だった。参加者アンケートの結果では講演内容について 94%、質疑応答について 93%が「とても満足」「ほぼ満足」と回答しており、高い満足度を示していた。

1-4 国際交流

1) 韓国の蔚山大学校医科大学看護課程交流派遣学生受け入れと交流

蔚山大学から学部交流派遣として学部生 8 名を同行教員 2 名と共に 7 月 26 日から 7 月 30 日までの 5 日間受け入れ、本学に滞在する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の流行状況及び対応を両校で協議し、今年度は中止とした。

2) 韓国の仁荷大学校医科大学看護学部のオンライン交流会

感染拡大下でも実施可能な国際交流としてオンライン交流会を企画し、MOU 締結校である韓国仁荷大学の看護学生 16 名と本学学生 16 名が参加、8 月 5 日に実施した。両校参加学生の満足度は高

く、今後につながる企画となった。

3) インドネシア ムハマディア大学主催のオンライン国際学会の参加

MOU 締結校であるインドネシア ムハマディア大学主催のオンライン国際学会が 8 月 25・26 日に開催された際、交流活動の一環として学部生 3 名と委員会メンバーが参加、シンポジウムではムハマディア大学からの要請に応じて委員会メンバーが講演した。

4) 本学学生の派遣

本学から学部交流派遣として学部生 8 名を同行教員 2 名と共に 8 月 16 日から 8 月 20 日までの 5 日間、韓国の蔚山大学校医科大学看護課程に派遣する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の流行状況及び対応を両校で協議し、今年度の派遣事業は中止とした。

1-5 若葉祭

COVID-19 感染拡大予防のため、今年度も開催を中止した。

1-6 公開講座

新型コロナウイルス感染拡大予防のため、9 月 11 日（土）にオンライン開催した。今年度のテーマは「ステイホームのいまだからこそアラフォーから足腰の健康を考えよう！健康寿命日本一の実現」と題して、2 名の講師が講演した。講師は、近畿大学生物理工学部准教授で NHK「みんなで筋肉体操」等を通して多くの方に親しまれている谷本道哉氏、本学健康運動学研究室教授の稲垣敦氏の 2 名であり、両講師がそれぞれの専門的視点から足腰の健康づくりについて講演した。告知のチラシは県下の病院や各種施設等や、6 月の大分県看護協会総会などで早期に配布した。また、大分合同新聞など新聞社 2 社に記事を掲載した他、大分県信用金庫の県下 38 支店のデジタルサイネージにも告知を掲出し、広報した。参加者の年代は 10 代から 60 代以上と幅広く、職業も看護職のみならず理学療法士や介護職、会社員と様々で、総勢 115 名の参加があった。終了後のアンケートでは、「大変良かった」「良かった」が 98%と高い評価が得られた。参加しようと思った理由は「テーマに興味があったから」が最も多く 85%であり、情報源は「チラシ」「本学の HP」の二つで 6 割を占めた。今後の開催方法としては、オンライン開催希望が 86%と多かった。次年度も幅広い年齢層から関心の高いテーマで開催できるよう企画する。

1-7 アニュアルミーティング

アニュアルミーティングの目的は、教員相互の研究を知る機会とスキル向上の機会を持つことが目的で、全教員（助教以上）が 3 年に 1 度以上の発表をすることになっている。また、特定研究費（学内競争的研究費、海外国内派遣研修等）取得者の報告が義務付けられている。

今年度の開催は、3 月 7 日（月）13:00～15:30 に実施された。発表は研究費獲得演題 6 題、一般

演題 6 題の計 12 演題、参加者は発表者 12 名含め 57 名であった。発表の要旨集は、図書館に所蔵された。昨年度は新型コロナウイルス感染拡大防止対策としてオンライン（Zoom）による発表を 2 グループ 45 分ずつ発表者がブレイクアウトルームに待機し、参加者が関心のあるテーマのルームに入るという方法を行った。しかし、他のグループの発表や質疑応答に参加できなかったという反省点が見られた。今年度もコロナ禍にあり、方法の検討を行った結果、3 日前にカレッジホールに発表用のポスターを掲示し、参加者は事前にポスターを閲覧し、オンライン上ですべての演題の質疑を行う方式とした。12 月に発表予定者に日程を、1 月に演題登録および当日の発表形式の連絡、2 月下旬に要旨メッセジとした。発表時は、画面共有するデータ（形式自由）を用いてディスカッションし、活発な意見交換が行われた。

次年度も新型コロナウイルス感染状況をみながら運用方法等を検討していく。

2. 入学試験等

2-1 学部入試

令和4年度入学試験の選抜区分及び募集人員、入学者選抜試験結果の概略は次表のとおりである。

選抜の区分及び募集人員

学部	学科	入学定員	募集人員				
			一般選抜		特別選抜		
			前期日程	後期日程	学校推薦型	社会人	私費外国人留学生
看護学部	看護学科	80人	40人	10人	30人	注1) 若干名	注2) 若干名

注1) 社会人の「若干名」は学校推薦型の30人に含める。

注2) 私費外国人留学生の募集人員「若干名」は前期日程の40人に含める。

入学者選抜試験結果の概略

(単位：人、倍、%)

区分		志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
						計	県内(率)	男性(率)
特別	学校推薦型	66	66	30	2.2	30	30(100.0)	0(2.2)
	社会人	1	1	0	—	0	—	—
	私費外国人留学生	0	0	0	—	0	—	—
	計	67	67	30	2.2	30	30(100.0)	0(0.0)
一般	前期日程	133	126	48	2.7	39	18(46.2)	0(0.0)
	後期日程	251	83	12	6.9	11	5(45.5)	0(0.0)
	計	384	209	60	3.5	50	23(46.0)	0(0.0)
合計		451	276	90	3.1	80	53(66.3)	0(0.0)

試験教科等

区分		教科	試験期日	出願期間
特別	学校推薦型	総合問題 面接	令和3年 11月27日(土)	令和3年 11月1日(月)～11月9日(火)
	社会人			
	私費外国人留学生	総合問題 面接	令和4年 2月25日(金)	令和4年 1月24日(月)～2月4日(金)
一般	前期日程	総合問題 面接	令和4年 2月25日(金)	令和4年 1月24日(月)～2月4日(金)
	後期日程	総合問題 面接	令和4年 3月12日(土)	

2-1-1 特別選抜

① 学校推薦型

大分県内の高等学校卒業見込者の中から、各高等学校長が推薦した生徒を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。試験の配点は下表の通りである。

区分	総合問題	面接等	計
学校推薦型	200	50 注1) 段階評価を行い、評価が一定基準に達しない場合は不合格とする	250

注1) 面接等 50 点に、出願書類（活動報告書）の評価点 20 点を含む。

② 社会人

社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人選抜を実施した。

年齢が満 24 歳以上で、社会人の経験を 3 年以上有し、大学入学資格を有する者を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。試験の配点は下表の通りである。

区分	総合問題	面接	計
社会人	200	40 得点が配点の 50%以下の場合は、総合点にかかわらず不合格とする	240

③ 私費外国人留学生

日本国籍を有しない者であって、所定の要件を満たした在留資格を有する者に対して、私費外国人留学生選抜を設けているが、志願者はなかった。

「総合問題」と「面接」を試験科目とし、試験の配点は下表の通りである。

区分	総合問題	面接	計
私費外国人留学生	200	段階評価を行い、その評価が一定基準に達しない場合は不合格とする	200

2-1-2 一般選抜（前期日程）

令和4年度大学入学共通テストで本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、「総合問題」と「面接」により試験を実施した。

教科	科目		教科・科目数
国語	『国語』	1科目	5教科7科目 または 5教科8科目
地理歴史 ・公民	「世界史A」 「世界史B」 「日本史A」 「日本史B」 「地理A」 「地理B」 「現代社会」 「倫理」 「政治・経済」 『倫理、政治・経済』	左記科目から1科目 2科目受験した場合は、いずれか高得点の科目を合否判定に利用	
数学	『数学Ⅰ・数学A』 『数学Ⅱ・数学B』	2科目	
理科	① 「物理基礎」 「化学基礎」 「生物基礎」 「地学基礎」	左記科目から次のAまたはBを選択 A 理科①から2科目及び 理科②から1科目 B 理科②から2科目	
	② 「物理」 「化学」 「生物」 「地学」		
外国語	『英語』	1科目	

本学で実施する個別試験を含んだ配点は下表の通りである。

試験区分	国語	地理歴史 ・公民	数学	理科	外国語	総合問題	面接	合計
大学入学 共通テスト	100 ^{注1)}	50 ^{注2)}	100 ^{注3)}	100 ^{注4)}	200 ^{注5)}	—	—	550
個別試験	—	—	—	—	—	200	30	230
計	100	50	100	100	200	200	30	780

注1) 「国語」100点は、200点に0.5を乗じた値とする。

注2) 「地理歴史・公民」50点は、1科目100点に0.5を乗じた値とする。

注3) 「数学」の配点は、1科目を50点に換算し計100点とする。

注4) 「理科」の配点は、計200点を100点に換算する。

注5) 「外国語」の英語は、「英語（「筆記（リーディング）」・「リスニング」）」の合計点とする。

※面接は、段階評価を行い、評価が一定基準に達しない場合は不合格とする。

2-1-3 一般選抜（後期日程）

令和4年度大学入学共通テストで本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、「総合問題」と「面接」により試験を実施した。

教科	科目		教科・科目数
国語	『国語』	1科目	5教科7科目 または 5教科8科目
地理歴史 ・公民	「世界史A」 「世界史B」 「日本史A」 「日本史B」 「地理A」 「地理B」 「現代社会」 「倫理」 「政治・経済」 『倫理、政治・経済』	左記科目から1科目	
数学	『数学Ⅰ・数学A』 「数学Ⅱ」 『数学Ⅱ・数学B』	左記科目から1科目	
理科	① 「物理基礎」 「化学基礎」 「生物基礎」 「地学基礎」	左記科目から次の a または b を選択 a 理科①から 2科目 b 理科②から 1科目	
	② 「物理」 「化学」 「生物」 「地学」		
外国語	『英語』	1科目	

本学で実施する個別試験を含んだ配点は下表の通りである。

試験区分	国語	地理歴史 ・公民	数学	理科	外国語	総合問題	面接	合計
大学入学 共通テスト	(100) ^{注1)}	(100)	(100)	(100)	200 ^{注2)}	—	—	500
個別試験	—	—	—	—	—	200	30	230
計	300				200	200	30	730

注1) 「国語」100点は、200点に0.5を乗じた値とする。

注2) 「外国語」の英語は、「英語（「筆記（リーディング）」・「リスニング）」の合計点とする。

※面接は、段階評価を行い、評価が一定基準に達しない場合は不合格とする。

2-2 令和4年度大学院看護学研究科博士課程（前期）

2-2-1 特別選抜

概要

修了後、県内で活躍を希望する優秀な本学学生を確保すべく広域看護学コースおよび助産学コースに特別選抜を設定して実施している。今年度から NP コースを追加した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程 (前期)	看護学専攻	実践者 養成	広域看護学コース	2名
				助産学コース	3名
				NP コース (小児・老年)	若干名

試験の概略

(単位:人)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入 学 者		
					計	県内 (%)	男 (%)
修士課程	6	6	6	1.2	6	6(100.0)	0(0.0)

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
小論文 面接	令和3年 7月15日(水)	令和3年 6月1日(火)～6月15日(火)

2-2-2 一般選抜

概要

大学卒業者等を対象に、「総合問題」と「面接」により実施した。大卒者でないものは就業経験により出願前に資格認定を行っている。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域		募集人員
看護学研究科	博士課程 (前期)	看護学専攻	実践者 養成	研究者養成	3名
				NP コース	10名 (うち5名は 地域枠)
				広域看護学コース	5名
				助産学コース	10名
		看護管理・ リカレントコース	2名		
		健康科学専攻			2名

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	令和3年 8月24日(土)	令和3年 7月26日(月)～7月30日(金)

試験の概略

(単位:人)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入学者		
					計	県内(%)	男(%)
看護学専攻	45	45	27	1.7	26	16(61.5)	9(34.6)
健康科学専攻	2	2	2	1.0	2	1(50.0)	1(50.0)

(二次募集)

概要

8月に実施した試験の結果、合格者が定員を下回ったコース・専攻を中心に12月に再度募集を行った。志願者はいなかったため、試験自体は実施していない。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域	募集人員
看護学研究科	博士課程 (前期)	看護学専攻	研究者養成	若干名
			実践者 養成	広域看護学コース

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	令和3年 12月11日(土)	令和3年 11月22日(月)～11月29日(月)

試験の概略

(看護学専攻)

(単位:人)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入学者		
					計	県内(%)	男(%)
看護学専攻	0	0	0	-	0	0(0.0)	0(0.0)

2-3 大学院博士課程（後期）

2-3-1 進学審査

概要

本学大学院博士課程（前期）を令和4年3月修了見込みの者を対象に、特別研究に関する発表、面接及び出願書類を総合的に評価して審査した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻 健康科学専攻	若干名

審査科目等

試験科目	試験期日	出願期間
特別研究	論文審査の日 (1月末~2月初旬)	令和3年 令和4年 12月20日(月)~1月5日(水)

審査の概略

(単位：人)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 (倍)	入学者		
					計	県内 (%)	男 (%)
看護学専攻	3	3	3	1.0	3	3(100.0)	1(100.0)
健康科学専攻	1	1	0	-	0	0(0.0)	0(0.0)

2-3-2 一般選抜

概要

修士の学位を有する者等を対象に募集した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	2名
		健康科学専攻	2名

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 口頭試問	令和3年 8月24日（土）	令和3年 7月26日（月）～7月30日（金）

審査の概略

（単位：人）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 （倍）	入学者		
					計	県内（%）	男（%）
看護学専攻	1	1	1	1	1	1(0.0)	0(0.0)
健康科学専攻	0	0	0	-	0	0(0.0)	0(0.0)

（二次募集）

概要

8月に実施した試験の結果、12月に再度募集を行なった。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	2名
		健康科学専攻	1名

審査科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 口頭試問	令和3年 12月11日（土）	令和3年 11月22日（月）～11月29日（月）

審査の概略

（単位：人）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率 （倍）	入学者		
					計	県内（%）	男（%）
看護学専攻	0	0	0	-	0	0(0.0)	0(0.0)
健康科学専攻	0	0	0	-	0	0(0.0)	0(0.0)

3 学生の状況と進路

3-1 在学生の状況（令和3年4月1日現在）

学生総数 418名（学部生329名、院生89名）

（単位：人）

学 生 数	学 生 数				
	計	県 内	県 外	男	女
1 年 次 生	91	61	30	7	84
2 年 次 生	81	60	21	5	76
3 年 次 生	75	49	26	4	71
4 年 次 生	82	58	24	5	77
計	329	228	101	21	308
割 合 (%)	100.0	69.3	30.7	6.4	93.6
大学院博士前期（1年次生）	22	12	10	6	16
大学院博士前期（2年次生）	39	23	16	9	30
大学院博士後期（1年次生）	5	5	0	0	5
大学院博士後期（2年次生）	4	3	1	1	3
大学院博士後期（3年次生）	19	13	6	5	14
計	89	56	33	21	68
合 計	418	284	134	42	376

3-2 奨学金・授業料減免

■日本学生支援機構奨学金実績（人）

	貸与		給付
	一種	二種	
学部	106	73	53
大学院	11	5	0
合計	117	78	53

■その他奨学金実績

- ・ 壽崎育英財団奨学金 学部生 5名
- ・ 公益財団法人山口県ひとづくり財団 学部生 1名
- ・ K ツル奨学金財団 学部生 2名

■修学支援制度授業料・入学金減免実績（学部） （人）

	前期	後期	入学金
全額免除	25	24	4
2/3免除	14	12	4
1/3免除	9	11	1
合計	48	47	9

修学支援制度減免額計 21,191,600 円

■大分県立看護科学大学授業料減免制度実績（学部・大学院） （人）

	学部	大学院	計
全額免除	1	3	4
2/3免除	0	1	1
1/3免除	0	1	1
合計	1	5	6

本学制度授業料免除額計 2,589,700 円

3-3 卒業生・修了生の進路

3-3-1 学部卒業生

令和4年4月1日現在

1 卒業生の状況（81名）

出身地別	県内	57名	70.4%
	県外	24名	29.6%
進路希望別	就職	68名	84.0%
	進学	13名	16.0%

2 進路決定状況

就職	決定	66名	97.1%
	未定	2名	2.9%
進学	決定	13名	100.0%
	未定	0名	0.0%

3 就職先内訳

(1) 地域別

大分県内	36名 (県内出身者27名+県外出身者9名)	54.5%
大分県外	30名 (県内出身者18名+県外出身者12名)	45.5%
計	66名	100.0%

(2) 就職先

独立行政法人等	27名	40.9%
都道府県	6名	9.1%
市町村	4名	6.1%
民間	29名	43.9%
その他	0名	0.0%
計	66名	100.0%

大分県内	大分大学医学部附属病院(16)、大分県立病院(5)、新別府病院(3)、湯布院病院(2)、大分赤十字病院(2)、アルメイダ病院、三愛メディカルセンター、長門記念病院、大分県地域成人病検診センター、大分中村病院、竹田医師会病院、佐伯市立佐伯南中学校、その他1
大分県外	虎の門病院(4)、九州がんセンター(2)、福岡市立こども病院(2)、九段坂病院、横浜栄共済病院、横須賀共済病院、日本医科大学武蔵小杉病院、京都大学医学部附属病院、国立循環器病センター、大阪市立大学医学部附属病院、島根大学医学部附属病院、岡山済生会総合病院、岡山大学附属病院、山口大学医学部附属病院、九州医療センター、九州大学病院、九州中央病院、浜の町病院、小倉記念病院、飯塚病院、福岡赤十字病院、福岡和白病院、済生会熊本病院、佐賀県教育委員会(白石町立福富小学校)、山陽小野田市立龍王中学校

4 進学先内訳

大分県立看護科学大学大学院 13名（広域看護学コース8名、助産学コース5名）

3-3-2 大学院博士課程（前期）修了生

令和4年4月1日現在

1 修了生の状況（修了生37名）

出身地別	県内	20名	54.1%
	県外	17名	45.9%

2 進路決定状況

就職	決定	32名	94.1%
	未定	2名	5.9%
進学	決定	3名	100.0%
	未定	0名	0.0%

3 就職先内訳

(1) 地域別

大分県内	17名	53.1%
大分県外	15名	46.9%
計	32名	100.0%

(2) 就職先

独立行政法人等	7名	21.9%
都道府県	8名	25.0%
市町村	5名	15.6%
民間	10名	31.3%
大学	2名	6.2%
その他	0名	0.0%
計	32名	100.0%

大分県内	大分県(3)、大分市(2)、大分大学医学部附属病院(2)、別府医療センター(2)、宇佐市役所、臼杵市役所、大分医療センター、南海医療センター、大久保病院、アルメイダ病院、津久見中央病院、日本文理大学
大分県外	日本医科大学附属病院、武蔵野赤十字病院、賛育会病院、済生会横浜市東部病院、産業医科大学病院、聖マリア病院、老岐病院、佐賀県、佐賀県医療センター好生館、宮崎県立延岡病院、鹿児島市立病院、種子島医療センター、沖縄県、城西国際大学

※既に就職している施設名も併せて記載。

4 進学先内訳

大分県立看護科学大学大学院 博士課程後期3名（看護学専攻3名）

3-3-3 大学院博士課程（後期）修了生

令和4年4月1日現在

1 修了生の状況（修了生2名）

出身地別	県内	1名	50.0%
	県外	1名	50.0%

2 進路決定状況

就職	決定	2名	100.0%
	未定	0名	0.0%

進学	決定	0名	0.0%
	未定	0名	0.0%

3 就職先内訳

(1) 地域別

大分県内	1名	50.0%
大分県外	1名	50.0%
計	2名	100.0%

(2) 就職先

独立行政法人等	0名	0.0%
都道府県	0名	0.0%
市町村	0名	0.0%
民間	0名	0.0%
大学	2名	100.0%
その他	0名	0.0%
計	2名	100.0%

就職先	宮崎大学、大分大学
-----	-----------

※既に就職している施設名を記載。

4 授業等

4-1 学部

人のこころの仕組み

1 年次前期

吉村匠平

外界の対象や自分自身を認識する人間の脳の機能、2年次前期「行動療法と発達心理」の理解に必要な条件づけの基本的知識について、反転学習課題、講義時間内の小実験、ブレイクアウト機能による話し合い活動等を通して学習する機会を構築した。講義時間中にchatやzoomの投票機能を利用したアウトプットの機会を構築し、学生が他の参加者の考えに触れる機会を提供した。講義後の学習課題として、毎時講義終了後に講義内容の要約課題とコメントの作成を求め、次回授業時に採点の上返却した。講義に先立ち、評価基準を学生に開示し、学習到達状況を個別に確認できるようにした。

コミュニケーション論

1 年次前期

関根剛

コミュニケーションの基礎となる情報の受信・理解・発信を中心に、Zoomによる遠隔講義で10回の講義を行った。授業日程の関係で、最初の2回は4月、残り8回は9月に実施するという変則的な開講時間であり、最初の2回を学生同士のコミュニケーションと体験を重視した内容、後半は座学中心で実施している。今年度もコロナによる学生相互の交流の現象に対応するため、遠隔による講義は昨年度同様にチャットによる随時の自由な発言の促進、投票やブレイクアウトルームを用いてアクティブラーニングの機会を多用するよう配慮し、授業評価の結果からも十分な効果をあげている。次年度からは、コロナが終息し対面講義が主となってからも、オンラインによる小テストの実施、Zoomの投票機能・チャット機能はアクティブラーニングの手段として有効な方法となると思われる。また、次年度は、カリキュラム改正により授業コマ数が減るため、コマ以外での自主的な学習の選択肢を増やす機会を提供するなどの工夫が必要になると考えられる。

英語 I - A1

1 年次前期

宮内信治

英語音声では発音記号の習得を目標に、記号の確認と発声法を教授した。母音について認識を確

認できた。新出語彙習得における活用を今後も促進していく。講読では文法を確認し文意を理解することを目標に英語名文集をテキストとして用いた。日本語訳との対照により文法を理解させた。今後は音源 CD を活用して発音の英語らしさを意識させていきたい。英文書写、音読暗唱を課題とし、達成させた。課題文の量を増やすことが今後の展望である。接触文量と時間を増やすために易しい英語で書かれた書籍を自ら選択して読む多読では、学生自ら書籍を選び英語で読むことで世界に通じる教養に接触させた。今後は様々なジャンルの書籍を導入し、質の向上を図りたい。

英語 I –B1

1 年次前期

Gerald T. Shirley

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students participated actively in every class. The course content, learning materials and teaching method were evaluated highly in the final class survey of all students, and the survey results will be used to improve the course in the next academic year.

言語表現法

1 年次前期

松田美香

人と人がお互いの意思を伝え合い、理解し合うために有効な手段である『ことば』について理解を深めることを目的に、講義を行った。単位認定者数 76 名であった。

韓国語

1 年次前期

黄炳峻

ハングル文字と発音と書き方を覚え、基礎的な文の構造を学びながら、簡単な会話のやりとりも試みる講義を行った。単位認定者数は 63 名であった。

哲学入門

1 年次前期

西英久

医療従事者の立場から、「人間とは何か」という哲学の根本的問いを考察する講義を行った。単位認定者数は 43 名であった。

法学入門(日本国憲法)

1 年次

二宮孝富

日本国憲法について、歴史的意義・基本原理をふまえ、特に人権に関する諸問題を学び、市民としての基本的な法的素養を身につけることを目的に、講義を行った。単位認定者数は 74 名であった。

環境保健学概論

1 年次前期

小嶋光明、恵谷玲央

世界保健機関（WHO）レポートに沿って、WHO の定義する環境保健、その基本的な考え方について教示し、環境中の様々な環境有害因子がヒトの健康に及ぼす影響を理解するための方法を中心に講義している。健康障害や疾病発生を予防し、健康増進に寄与するための方策について、最新の知見や技術などを取り上げ、講義を進めることで疫学研究に必要な知識を修得できるように努めた。

今年度はオンラインで講義を行なったが、学生の質疑応答や授業参加の機会が十分ではなかった可能性がある。オンラインフォームやチャット、アンケート機能等を用いて、学生からの質問を共有しやすい方法を検討する必要がある。

健康情報学

1 年次前期

佐伯圭一郎

保健統計学、疫学の基本的な考え方を中心に講義を進め、健康情報処理演習において演習課題を組み込んで、理解の定着と応用力の向上を図っている。

昨年度はオンデマンド動画配信形式で実施したため、リアルタイムでの反応を得られなかった

ため、本年度は通常のリアルタイムのオンライン授業へと変更した。内容・教材共にわずかな改善を加えたのみであったが、不合格者が 19 名と増加し、復習の点では有効であったとする昨年度のような学生からのコメントも見られなかった。オンデマンド配信時は通常の講義時間を利用した個別のサポートを希望する少数の学生に対して実施できたが、今年は全体的に質問も減少した。また、健康情報処理演習の対面での実施スケジュールが乱れたため、演習による学習の深化が不十分だった可能性ある。来年度は新カリキュラムで 3 学期の開講となり、生物統計学との受講順も変化する点を考慮した内容の調整を行うとともに、オンライン・対面どちらの場合でも質問等の反応を誘発する授業進行に配慮することを課題としている。

健康情報処理演習

1 年次

品川佳満、佐伯圭一郎、渡邊弘己

看護職に必要な ICT のスキルや知識について教授した。各種基本アプリケーションの操作、データ管理、画像処理、データベースの利用、統計解析等については、実際に PC を使った演習により技術の習得を図った。情報セキュリティや個人情報の取り扱い等の情報倫理に関すること、看護師が医療現場で扱う病院情報システムについては、講義（オンライン）形式で教授した。新型コロナの影響については、対面で行う演習とオンラインで実施可能な講義の順番を入れ替えるなどして対応した。今年度は、オンライン上で学生・教員間のやり取りを円滑に行うために、Google Classroom を課題提出・質問等に活用した。最終評価として不合格者はでておらず、最低限必要な ICT に関する知識・技術の修得ができていると言えるが、例年通り表計算ソフトの利用を苦手とする学生が多い。来年度から始まる新カリキュラムでは、表計算ソフトの演習内容を強化し、さらに AI や IoT などの新たな話題を講義に取り入れていく予定である。

生体構造論

1 年次前期

濱中良志、岩崎香子

今年度はコロナ禍のため、Zoom の様々な機能（アニメーションや書き込みなど）を駆使して、人体の構造（解剖学）通して教授した。今年度から心電図の動画配信を行った。

生体機能論

1 年次前期

濱中良志、岩崎香子

今年度はコロナ禍のため、Zoom の様々な機能（アニメーションや書き込みなど）を駆使して、人体の機能（生理学）を通して教授した。今年度から心電図の動画配信を行った。

健康運動ボランティア演習（救急法含む）

1 年次

稲垣敦

今年も COVID-19 のためほとんどのイベントが中止になり、また開催されたイベントに関してもそれ以降の病院実習等の教育を継続するために参加を辞退した。この結果、過去 2 学年が実施できなかったことになるが、2022 年の春の時点でも再び感染状況が拡大しているため、他の課題に変更せざるを得ない状況である。

スポーツ救護

1～4 年次前期

稲垣敦

今年から、スポーツ救護講習会の主催が大分県スポーツ学会から日本スポーツ救護看護学会に変更された。しかし、この講習会には多くの実技科目があり、COVID-19 感染拡大のため講習会自体が開催されなかった。このため、この科目は開講しなかった。次年度の開講を期待している。

自然科学の基礎

1 年次前期

小嶋光明、岩崎香子、定金香里、渡邊弘己、佐伯圭一郎、恵谷玲央、吉田成一

看護学を専攻する学生が身につけておくべき基礎教養として生物、物理、化学、数学の基本的事項を講義している。高校までに十分に習得できなかった項目を学ぶと同時に、自然科学の考え方について理解できるよう努めた。オンライン講義が中心であったが、毎回講義で小テストを行うことにより学生の理解度を把握しながら講義を進めることができた。

大学ナビ講座

1 年次前期

福田広美、安部眞佐子、石本田鶴子、稲垣敦、大久保和弘、影山隆之、釘宮由美子、杉本圭以子、関根剛、高野政子、中山晶彦、濱中良志、村嶋幸代

1 年次早期に開講することで、大学で学ぶために、リテラシーと呼ばれる身につけておくべき基本的な事項および技術を習得することを目的とした。内容は、「大学カリキュラムの方針・考え方」「大学で学ぶということ」「アルバイトリテラシー」「メモ・ノートの取り方」「図書館利用法」「大学の授業と試験の受け方（大学教育及び看護系大学の教育）」「心の健康維持増進・健康な生活維持向上」「伝える技術：文を書く、レポートを書く（理論編・実践編）」「伝える技術：話す、プレゼンする」「伝える技術：アサーション（さわやかな自己主張）」の 10 回、講師 13 名で行った。本年度は、昨年度に課題とされた伝える技術で、文章を書くことを強化する実践編を新たに加え、理論的で分かりやすいレポートが書ける内容を組み込んだ。最終レポートの感想では、大学での学習の仕方が分かり大変役に立った、多くの先生から話を聞いて良かったという意見が多く好評であった。

次年度は、令和 4 年度カリキュラムにおいて新たな大学ナビ講座を開始する。学生が入学後の早期に大学で学ぶりテラシーを身につけ、将来を見据えて大学生活を送れるような授業を行う。

看護学概論

1 年次前期

廣田真里、秦さと子

看護を原理的、本質的に理解することで看護を探究し、創造していく基盤を養うことを目的としている。看護の対象である生活者としての人間理解を縦軸として、看護の役割や機能を横軸に授業を組み立て、看護とは何かを考えられるように構成した。毎回、レポートにより、その日の学習内容を復習できるように意図的に課題を課した。

10 回の講義を通して、それぞれに「看護とは何か」「生活者としての人間の理解」など、未熟ながらも 1 年次生で考えられる限りの習得はできたと考える。また、これから看護を学習していくうえで、看護学を学ぶ意味、また看護学の基盤となる学問の習得の必要性にも言及し今後の学習の動機づけとなっていることが感じられた。また、初期体験実習において、概論で習得した内容を実際に体験したことで看護の役割や機能についての知識が定着したことがうかがえた。

生活援助論

1 年次

秦さと子、田中佳子、廣田真里、神矢恵美、水迫祐人

シミュレーションあるいは学生に対して安全、安楽に配慮した技術が実施できることを目標に授業を行った。感染予防対策のため、4月の開始時期を遅らせ、5～6月は授業をオンラインにし、9月の授業を11月に変更するなどの対応をした。実際に身体を動かして実施できる時間を可能な限り確保し、希望に応じて課外でも教員指導が受けられる体制を昨年度に引き続き継続した。多くの学生が複数回、教員による技術指導を希望し対応した。学生は、概ね目標達成できた。技術修得のためには身体を実際に動かしながら理解する時間の確保が重要であり、今後も感染予防に配慮しながら整った環境下で実技演習ができる工夫を行っていく必要がある。

初期体験実習

1 年次前期

廣田真里、秦さと子、田中佳子、神矢恵美、水迫祐人

7月5日（月）～9日（金）で行われた。

COVID-19の影響により3施設での実習が不可となり、3施設20名に関しては学内、その他62名は臨地7施設で実習を実施した。

学内実習については、個人ワークとグループワークを組み合わせ実施した。

課題VTR（日本看護協会編集の5点の看護師の多様な場における活動の記録）を示し、それらを事前に学習して実習に臨むように周知した。そのうえで、臨地での看護師のケアの実際を臨場感豊かに伝えるため、実際の臨床現場で撮影しVRに編集した資料を視聴し、「患者中心の看護とは」「看護師に求められる役割とは」「患者に必要な看護を実践するために必要な能力とは」について検討し、最終日に全グループで発表会を実施した。さらに個人課題として上記3つの課題+「看護を学習していくうえで達成すべき自己の課題と将来像」についてレポートを課した。概ねそれぞれの課題についてよく検討され述べられていた。学生の反応は、「学内実習の内容が濃くて、臨地に行くよりも、目標達成はできた。」「1月の実習ではこの経験を活かせると思う。」など達成感を得られていた。

臨地で実習できた62名に関しては、各実習施設の特徴にあった患者を見させてもらい、机上の患者とは異なる高齢者やコミュニケーションを十分とれない患者等に接し、戸惑いもあったが、その事実を受け止め、自己の課題を見出し今後の学習の必要性を十分認識していた。実質3日間の臨地実習ではあったが、実践場面において既習学習を想起しケアの意味を見出している学生も多く、患者中心の看護、看護の役割必要な能力等について自分なりの考えが出来ていた。また、自己の課題と将来像を考えるにあたり、自己の知識や技術の不足を実感したことから、今後の学習及び実習への動機づけになっていた。

7月9日の実習最終日には、学内で行政保健師、開業助産師、養護教諭の3者から自己の経験を

踏まえた実際の活動ややりがい等について講話を受けた。それぞれに積極的な質問も多く、夫々の職種の魅力を受け止め、これからのキャリアプランを考えるうえでの参考になったといった反応が見られた。

健康論

1 年次前期

福田広美、荒木章裕

健康の概念と健康に対する考え方や意味を考え、健康の維持・増進の重要性について学ぶことを目的とした。本年度は、COVID-19 の影響により対面とオンラインのハイブリッド式で講義を行った。学生が、健康について基礎的な知識を学び、自らの生活を通して健康な生活について考え、食や運動、睡眠、禁煙、心の健康など、実生活の振り返りを通して学習を行った。本科目は平成 27 年度カリキュラムであり、新カリキュラムからは健康支援概論科目へ変更し開講されることになる。

予防的家庭訪問実習（1 年次）

1 年次

福田広美、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、80 チームすべてに協力者を配置することができなかつたため、協力者のいるチームを訪問組、協力者不在チームを演習組として本実習を行った。感染拡大のため訪問は 4 月に一度行った後 10 月まで休止したので、単位認定に必要な訪問回数を 1 年次生は 3 回とした。訪問組 1 年次生は 10 月 20 日以降 1 名ずつの在宅高齢者を継続的に訪問した。演習組は、地域関係者による講話を通して、訪問地域の特徴や課題、コロナ禍における地域在住高齢者の変化について学ぶ機会を持った。また、演習組も訪問の様子を体験できるよう情報機器端末を利用して訪問組チームの訪問時に、オンラインで参加するオンライン訪問を実施した。さらに、訪問を休止期間中は、ソーシャルサポートに関するグループワークをチームで行った。1 年次生は特に、協力者とのコミュニケーションと、在宅高齢者の生活・人生の全体像を捉えることを主眼とした。訪問機会は少なかったが、情報を得たり、信頼関係を築くうえでコミュニケーションが重要であり、先輩と協力者のやり取りを見て自己の課題を確認していた。演習組は、コロナ禍での自粛生活における高齢者への影響について映像資料や地域関係者による講話を通して考えることができている。また、オンライン訪問では訪問組と同様にコミュニケーションに関する学びにつなげることができていた。

人間関係学

1 年次後期

吉村匠平

心理学における「人格、性格」概念の理解について、実体論的理解（類型論、特性論）と状況論的理解の双方の視点から考える機会を提供した。反転学習課題、講義時間内の小実験、ブレイクアウト機能を用いた話し合い活動等を通して学習する機会を構築した。講義時間中に chat や Zoom の投票機能を利用したアウトプットの機会を構築し、学生が他の参加者の考えに触れる機会を提供した。講義後の学習課題として、毎時講義終了後に講義内容の要約課題とコメントの作成を求め、次回授業時に採点の上返却した。講義に先立って評価基準を学生に開示し、学習到達状況を個別に確認できるようにした。

カウンセリング論

1 年次後期

関根剛

カウンセリング理論およびコミュニケーションスキルを解説、ロールプレイを取り入れて体験的にスキル修得を目標に 10 回の講義を行った。として行った。対面講義が行える時期であったため、最小限ではあるがロールプレイを対面で行うことができ、昨年度のような全体の動きを見回すことが難しいという Zoom によるロールプレイの問題点は少なかった。反面、チャットなどによる資料提供や質問の収集、ネットの小テストへの導入と回答などの点は遠隔が優れており、対面になった時の工夫が必要になると考えられる。また、次年度は、カリキュラム改正により授業コマ数が減るため、コマ以外での自主的な学習の選択肢を増やす機会を提供するなどの工夫が必要になると考えられる。

英語 I - A2

1 年次後期

宮内信治

講読では文章の論理的構成を意識することを念頭に、未習テキストを通して文章やパラグラフの構成について理解を深めた。また、シェークスピアのソネット、新渡戸稲造『武士道』を使い、「国際人」に求められる教養と思考の一端に触れさせた。英文の書写及び音読暗唱の課題では、学習範囲からか大部分を学生に選択させ、達成させた。今後は、科学的文献の内容理解と応用へと繋げていきたい。講義後半の多読活動では、演習活動に慣れて学生の読む量が増加した。書籍の事実内容と意見や感想を分離した記録を意識して演習させた。古典的名著の多読版への興味関心を喚起し、そうした作品に触れていくよう指導していきたい。

英語 I –B2

1 年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students participated actively in every class. The course content, learning materials and teaching method were evaluated highly in the final class survey of all students, and the survey results will be used to improve the course in the next academic year.

社会学入門

1 年次後期

大杉至

社会学の巨匠たちが社会をどうとらえてきたかを概説し、それぞれの論者によって、様々な社会のとらえ方があることを理解し、社会を見る目が豊かになるように講義を行った。単位認定者数は 21 名であった。

文化人類学入門

1 年次後期

足立恵理

医療分野を含む現代的なテーマや事例の検討を通して、自他の複雑で多様な人間のあり方を見直す視点を獲得し、日常や医療の現場に応用する力をのばすことができるように講義を行った。単位認定者数は 69 名であった。

生物統計学

1 年次後期

渡邊弘己、佐伯圭一郎

看護研究を遂行する上で必要となる記述統計学、推測統計学の基礎について講義を行った。単なる統計手法の暗記ではなく、なぜそうなるかという理論部分も重視することで、統計学の考え方を

理解してもらえような講義を目指した。本年度は講堂で講義を実施したが、学生の理解度は試験やレポートの結果を見る限り、オンライン型の講義を実施した昨年度よりも向上しているとは言いがたい。今までは本科目と同時平行で統計ソフトを用いた演習（健康情報処理演習）を実施していたが、次年度以降は生物統計学の講義がほとんど終了した後に統計ソフトを用いた演習（健康情報処理演習Ⅱ）を行うことになり、演習部分の時間数が増える。そのため、次年度以降は上手く統計ソフトを用いた演習につなげられるように、今まで以上に本科目でしっかりと統計学の考え方を学生に定着させるように講義を行う必要がある。

生体代謝論

1 年次後期

安部眞佐子

生化学と栄養学の教科書を用いて講義をした。生体構造論と生体機能論がより深く理解できるように、生体分子を低分子から高分子へと基本的な性質と代謝をあつかった。酵素、ビタミン、ミネラル、情報伝達とすすみ、エネルギー代謝を生化学での細胞内の反応として説明し、さらに個体レベルで空腹摂食サイクルの臓器での代謝に力点をおいて講義した。生化学部分は、長文のレポート課題を全員が提出した。栄養学では、食品の特性の理解、食事摂取基準について説明した。オンラインでの講義となったため、毎回、正誤問題を課し、試験はその中から問題を出題した。また、講義中は、学生同士が知識を共有できるようにブレイクアウトを使用した、教科書の素読から開始し、後半は、加えてお互いの疑問点を共有、解決できるようにした。講義の感想としてブレイクアウトに利用についての意見が多く、言語化の有用性を大多数から確認できた。また、途中から学生の質問について講義冒頭で答える形式をとっていたため、予定コマ数の内容が進行しにくくなったことが今後の課題である。

生体反応学概論

1 年次後期

市瀬孝道

生体反応学概論では講義内容としては病理学総論の講義であるが、昨年度と同様に新型コロナウイルス感染拡大により Zoom による講義を行なった。病気の本体や成り立ち、修復過程が理解できるように、以下に示す病気の基本となる病変について具体的な疾患名や臨床症状等を挙げながら講義を進めた。講義内容は次に示すとおりである。退行性病変、進行性病変、代謝障害、循環障害、炎症、免疫、感染症、腫瘍、先天異常、小児疾患。

講義の工夫としては、先ず学生が病気の基本的事項を理解し易い内容の教科書（カラーで学べる病理学：廣川）を選択し、また付録のテスト問題を使って復習ができるようにした。

教科書を分かりやすく整理したプリントと病気が理解できるようにパワーポイントも使って進め

た。これらの資料を事前に学生に配布した。

生体反応学各論

1 年次後期

市瀬孝道

今年度も新型コロナ感染拡大のため生体反応学各論は Zoom による講義を行なった。講義は、例年同様に系統別に発生する疾病（病理学各論）について講義を行い、病理学総論から各論へと、疾病の基本から系統別疾患の病態を十分に理解させるのに努めた。講義内容は以下に示すとおりである。消化器疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、泌尿器疾患、生殖器疾患、内分泌疾患、血液疾患、脳・神経疾患、運動器疾患、皮膚・感覚器疾患。

学生が病気の基本的事項を理解し易い内容の教科書（カラーで学べる病理学：廣川）を選択し、また付録のテスト問題を使って復習ができるようにした。生体反応学概論と同様に教科書を分かりやすく整理したプリントと病気が理解できるようにパワーポイントも使って進めた。これらの資料を事前に学生に配布した。

微生物免疫論

1 年次後期

吉田成一、松本昂

微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について、および病原微生物に対する生体の防御反応について、理解させることを主要な目標とした。

今年度は講堂で講義を行ったため、履修者が発言しやすい環境とは言えなかったが、対面であったため、履修者の理解状況の把握は昨年度のオンライン講義と比較すると出来たと考えている。

しかし、試験の平均点および最高点は昨年度とほぼ同程度であったこと、最低点は大きく低下したことから学修意欲が高いとは言えない履修者の理解度が大きく低下し、それ以外の履修者については、同程度ある程度向上したと考える。今年度も新型コロナウイルス感染症が話題となっており、受講生が感染症に関心を持つ必要性は理解していたはずであるが、本質的に科目履修を意義について理解不十分な受講生が散見された。看護学生として本科目の必要性・重要性を伝える講義内容としているが、認識していない履修者がおり、より一層の周知が必要と考える。

なお、履修者（再受験該当者を含む）88 名中、83 名が単位を取得した（1 名は試験を受験しなかった）。また、本試験不合格者のうち、再試験を受験しない履修者もおり、学生として単位修得への意欲を維持できていない者もいた。

健康運動

1 年次後期

稲垣敦

運動の楽しさや健康の素晴らしさを体感するため、学生がしたことのないような多くのレクリエーションやニュースポーツ、具体的にはフライングディスク、アルティメット、ユニバーサルホッケー、インディアカ、ソフトバレーボール、リングテニス、フットサル、3 オン 3、バドミントン、ドッジボール等を行なった。今年は、COVID-19 感染予防のため、運動中もマスクを着用し、手、運動器具、体育館の消毒を徹底し、飲料水を持参するように指導した。しかし、年明けは COVID-19 の感染拡大により、病院実習を考慮し、他の課題に変更した。今年はこの授業の時期に、受講生に感染者が出なかったため、次年度も同様な感染予防対策の下で実施する予定である。

看護理論入門

1 年次後期

廣田真里、秦さと子、田中佳子、神矢恵美

看護現象を科学的に理解する力や看護の基盤となる看護観を養うことを目的とし、看護理論に関する基本的知識について学習し、看護理論と看護実践の関連・活用について考える科目である。

「理論」について解説し、代表的な看護理論家 6 人（ナイチンゲール、ヘンダーソン、ペプロウ、オレム、ベナー、ロイ）の看護理論を通して「看護」「人間」「健康」「環境」の看護のメタパラダイムについての理解とともに、看護について自分なりの考えを深められるように促した。6 人の看護理論家の考えを学んだ後、それらの理論を実践につなげるため、グループワークを実施した。グループワークでは、1 月に計画されている基礎実習での「対象者を社会で生活している人として理解できる」という目的を達成するために対象を理解するのに適当と思うオリジナルの記録様式を作成させた。その記録様式を用いて、教員が演じる模擬患者から情報を引き出し、整理したものを発表させた。それぞれのグループでオレムとヘンダーソン、ロイとペプロウといったように、理論家の考え方を組み合わせてオリジナルの記録様式を作成していた。看護理論の特徴をとらえた上で、自分たちなりの記録様式を作成した意図や考えを述べられており、どのグループも工夫を凝らした様式と発表であり、理論を学ぶ意味の理解がされていることを実感した。

グループワークの時間がやや少なかったが、完成度は高く、発表時のディスカッションも活発であった。

基礎看護学実習

1 年次後期

廣田真里、秦さと子、田中佳子、神矢恵美、水迫祐人

2022 年 1 月 11 日～1 月 25 日で実施予定であったが、COVID-19 感染拡大のため、2022 年 7 月 21 日～8 月 3 日へ延期とした。

看護疾病病態論 I

1 年次後期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介

2 単位 20 コマで、疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に行う。消化器疾患、呼吸器疾患、循環器疾患、血液・造血器疾患をオンラインで講義を行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。最後の 2 コマでは、病態探究演習とし、「浮腫」の病態のメカニズムを探究する学習を行った。事前学習したことをプレゼンテーションし、ディスカッションするなど反転授業を実施した。学生は積極的に発表やディスカッションを行い、理解が深まったようだ。教科書は系統看護学講座シリーズを使用した。中間試験を実施して、2 系統ずつの試験とし、知識の整理ができるよう配慮した。COVID-19 の感染拡大の影響から、全てオンラインの授業であったが、学生も慣れてきており、集中できているとの反応であった。

人間科学系との既習学習との連動を考慮して、授業の単元の進行を考慮し進めた。また病態探究演習は学生からもわかりやすいという感想で満足度も高かったため、次年度も継続する。

看護疾病病態論 II

1 年次後期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介

2 単位 20 コマで、疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に行う。腎・泌尿器疾患、内分泌・代謝疾患、脳・神経系疾患、運動器疾患、感覚器系の眼・耳・鼻・皮膚疾患をオンラインで講義を行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。最後の 2 コマでは、病態探究演習とし、「運動麻痺」の病態のメカニズムを探究する学習を行った。事前学習したことをプレゼンテーションし、ディスカッションするなど反転授業を実施した。学生は積極的に発表やディスカッションを行い、理解が深まったようだ。教科書は系統看護学講座シリーズを使用した。事前学習のためのクイズ形式で予習をさせたり、動画を視聴したり、さまざまな工夫を行った。中間試験を実施して、2～3 系統ずつの試験とし、知識の整理ができるよう配慮した。

授業の単元の進行は、人間科学系との既習学習との連動を考慮して進めた。また病態探究演習は学生からもわかりやすいという感想で満足度も高かったため、次年度も継続する。

教職概論

1 年次後期

吉村匠平、関根剛、赤星琴美、麻生良太、堀本フカエ

本講義の受講が、教職課程の履修を継続するかどうかの判断に資するよう、専門職としての教員の基本的な心構え、教職の意義、教員の役割、職務内容などについて学び、職業としての教師が、どのようなものであるのかについて各自のイメージを作り上げる機会を提供した。講義の内容についてお互いの意見や疑問を討論し、一つ一つについて自分の意見や考えがもてるようにすることを通して、教師としての構えや教師としてのありようについて考える機会を提供した。

行動療法と発達心理

2 年次前期

吉村匠平、関根剛

行動療法については、より実務的に理解できるよう、多理論統合モデルを用いて戦略的に考える視点を中心の構成とした。評価は試験及び行動改善プログラムのレポートによって行った。

発達心理については、トピックスとして、言語発達、運動発達、進化心理学、発達障害を取り上げ、受講者が互いに意見を交流する機会を設けながら、定型発達を基準として発達を理解する構えを相対化する視点の獲得を主目的とした。評価は、毎回の要約課題とコメント、反転学習課題の成績を総合して行った。評価は、それぞれの評価 50%ずつとして評価した。

音楽とこころ

2 年次前期

小川伊作

クラシック音楽、ジャズ、フォークソングの 3 つのジャンルの音楽を取り上げ、多様な音楽に触れることを通して、「音楽とは何か?」、「音楽の意味するもの」について、そして音楽と人間との関係についてふりかえる機会とし、もって音楽についての理解を深める講義を行った。単位認定者数は 62 名であった。

美術とこころ

2 年次前期

澤田佳孝

便利さを重視する現代社会においては、とかく失われがちで、人が生まれながらに持っている物

を作る力、表現する心・工夫する能力などを、描く体験を通して復活させ、自己を表現することの楽しさ、感じたこと・考えたことを形に表すこと(造形表現)の歓びを理解する講義を行った。単位認定者数は27名であった。

英語Ⅱ－A1

2年次前期

宮内信治

原書 **Word Power Made Easy** を用いて英語語彙の増強を図った。ギリシャ語、ラテン語起源の語源についての知識をもとに医療関連語彙を習得させた。単語小テストを行い、学習成果を確認させた。演習課題として教科書内の原文を音読暗唱させた。1年次に学習させた英文解釈マニュアルを活用し、看護に関する英語原著論文の緒言を文法解析させ、講義時の解説をもとに解釈の修正と文法理解を促したうえで和訳させた。論文読解における語彙の重要性と文法解析の有効性を認識させた。教養を高める語彙の取得が今後の課題である。オンライン講義時の開設スライドを改訂した。講義時に説明した内容を今後簡潔に提示できるよう提示スライドの改訂をはかりたい。コロナウイルス感染予防対策の一環として、多読活動の継続維持のために図書館蔵書の活用による自宅演習を検討していきたい。

英語Ⅱ－B1

2年次前期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students participated actively in every class. The course content, learning materials and teaching method were evaluated highly in the final class survey of all students, and the survey results will be used to improve the course in the next academic year.

保健ボランティア

2年次

福田広美

保健医療に関するボランティアを体験し、体験を通じて、保健医療現場におけるボランティアの意義について理解を深めることを目的としている。学生自らが、保健医療に関わるボランティアを探して参加手続きを行い、ボランティアに参加したうえでレポートを作成する一連のプロセスを通して自主性や行動力の向上につながっている。今年度は、新型コロナウイルス感染状況をみながら、学生が参加できるボランティアを行った。行政や病院等で行われるワクチン接種会場や子ども食堂、地域の高齢者と共に行う清掃活動等を通して、各学生が目的を達成できていた。

環境保健学詳論

2年次前期

小嶋光明、恵谷玲央

環境保健学詳論は生活の中で遭遇する身近な環境因子(物理的因子、化学的因子、生物的因子)が及ぼす健康影響についての基礎知識を講義している。熱中症、感染症・ワクチン摂取、PM2.5などの身近な健康影響をテーマとして与え、そのメカニズムや予防策について学生に発表してもらうことにより、問題の把握、予防や管理のあり方を考えることができるよう配慮した講義を行った。また、発表に対して学生間でのコメントや質疑応答を促すことで関心をもった授業参加の機会を創出することができた。同一のテーマであっても、学生の関心によって異なる視点での発表内容となり、学生にとっての気づきも多くあったと考える。

今年度はオンラインでの発表形式としたが、資料の共有の際に若干手間取る場面も散見されたためコントロールの方法を検討することが課題である。

生体薬物反応論 I

2年次前期

吉田成一

生体薬物反応論 I は薬理学総論、末梢神経系作用する医薬品および生活習慣病、感染症に用いる医薬品に関する講義を行う科目である。学習範囲が絞られているため、理解度が高い学生が多い状況であった。しかし、過去に定期試験の問題として出題していない分野あるいは医薬品(今年度は心不全と高尿酸血症)の学修修得状況は低かった。このことは、過年度以前の情報をもとに学修をすすめており、当該科目の学修内容を理解することより、単位修得のための学修となっていると考えられ、次年度以降、学問の本質あるいは全体を理解するための受講体制を構築したい。

今年度は対面での講義を行ったが講堂で行ったことから、双方向の(質疑応答を活発に行う)講

義とはならなかった。講義後に、本科目の学修について学修成果物（ノートなど）を提出するよう求め、質問事項の記載があれば回答する、あるいは、提出物に誤りがあれば指摘するなど、可能な限り、受講者と担当教員間で学修修得状況を確認、向上させるよう努めた。しかし、学修成果物の提出については、提出状況が受講者によって異なっており、ほとんど提出しない受講生もいた。提出状況と学修修得状況について関連性があるかについては検討してはいるが、学修成果物を作成することは、復習にもつながるため、次年度以降も継続するとともに、学修成果物の提出状況と学修修得状況の関係性を評価する。

試験の平均点は、処方例の更新に伴い著しく低下した。一方、過年度までの既出分野については過年度と同程度の平均点であり、最高点は昨年度より上昇していた。これは、本科目の学修を試験対策という観点ではなく、科目に対する観点で学習する視点であれば、難易度に変化はなかったことを示しており、上記にも記載したが、本科目全体を学修・理解することを求めている。また、再試験受験者の合格率は昨年同様低く、復習あるいは科目担当教員への質問など、主体的な学修を勧奨したい。特に、本試験後に、学修理解が不足している内容について教員が提示した文書について、確認するよう周知していきたい。再試験受験にあたり、一部学生と面談はしているが、状況に応じて対象者を拡大することも検討したい。

なお、履修者（再受験該当者を含む）80名中、70名が単位を取得した。単位取得率は昨年度より低下した。

健康運動学

2年次前期

稲垣敦

1年次の健康運動では運動の楽しさや必要性を体感した。2年次のこの健康運動学では、さらに科学的知見に基づいて運動の重要性を講義した。運動学も科学であるため、はじめに科学について考え、その後、バイオメカニクスや生物の進化の視点を取り入れて、加齢や不活動・運動による身体機能の変化や健康との関連性を講義することで、運動の重要性を教授した。また、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても講義した。今年は、COVID-19感染拡大のため、講堂では行わず、全てZoomで行った。

医療技術論

2年次

秦さと子、田中佳子、廣田真里、神矢恵美、水迫祐人

対象者の安全と安楽を優先するとともに、検査の目的や治療の効果が最大限に達成されるように支援する方法の習得を目指して授業を展開した。今年度は感染予防対策に配慮しながら可能な限り、整った環境下で実演しながら看護技術が学べるように対面授業の確保を行った。9月に実施

予定であった授業の一部を11月に変更して実施したが、ほとんどの技術項目について学内で授業を行うことができた。また、希望に応じて課外でも教員指導が受けられる体制も昨年度に引き続き継続した。学生は概ね目標達成できた。技術修得のためには、今後も感染予防対策に配慮しながら実際に身体を動かしながら理解する時間の確保に努めていく必要がある。

ヘルスアセスメント

2年次前期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介

ヘルスアセスメントでは、身体的側面からの観察に主眼を置き、ヘルスアセスメントの意義、基本技術、健康歴聴取、消化器系、呼吸器系、循環器系、脳・神経系、運動器系のアセスメントについて、講義・演習をオンラインで実施した。フィジカルイグザミネーションのスキルを学ぶ学内演習を対面で可能な範囲で実施し、eラーニングの事前学習やZoomを駆使して授業の工夫をした。

また最後の4コマでフィジカル事例演習を行った。事例を設定し、慢性閉塞性肺疾患の症状、メカニズム、合併症について事前学習し、注意すべき症状や身体所見や事例患者に生じる可能性がある病態とその理由について、グループでディスカッションすることで、臨床推論、仮説検証過程の思考を学ぶことができた。試験は、筆記試験と対面での実技試験を予定した。

フィジカルイグザミネーションの正しいスキルを身に付けるため、さらに授業の工夫をして改善に努めていきたい。

看護アセスメント概論

2年次前期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介

看護過程の展開の基礎的能力を身につけるため、看護過程の概要、看護過程と基礎理論、アセスメント、看護診断、計画、実施、評価について、講義を行った。看護過程を展開するために、実習経験が少ない2年次学生は患者のイメージができないため、DVD事例を視聴させ、映像として対象者をとらえることができるように工夫した。また、具体的な記録の方法の見本を示し、事例の実際のデータからアセスメントの思考ができるようにした。また途中で学生がアセスメントしたことを発表させ、学生参加型の授業を行うようにした。一人一人の学生が一連のプロセスで看護過程の思考が整理できるよう個人ワークを行い、実習記録で使用する記録用紙を活用し、身体面、心理面、社会面から必要な情報をピックアップし、アセスメント、看護診断、計画および評価までの記載を行った。教員4名で学生の記録を丁寧に確認し、何ができて、何ができていないかを学生個々にコメントをつけると共に、共通するコメントは資料としてまとめ、学生にフィードバックした。学生は再度自己の看護記録を修正し、個人ワークのレポートを完成させた。必要な学生には、担当教員が個人指導をして看護過程の学習の理解を強化した。今年度はCOVID-19の影響により、対

面での個人指導ができにくい状況はあったが、学生は全員、目標を到達できた。

看護アセスメント演習

2年次後期

藤内美保、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介

看護過程の基本的知識を活用するために、5名～6名からなるグループ演習を行った。看護過程を展開するために作成された胃がん術後の事例のDVDを視聴させ、グループディスカッションしながら看護過程を展開させた。どこでもシートと付箋を活用し、関連図を作成するのは、ディスカッションが深まり教育の効果が非常に高いので、今年度も継続した。COVID-19の感染状況が落ち着いている時期でもあり、対面での演習を行い、学習成果は例年と同様に全グループは良好な評価で目標達成できた。病名や健康障害の段階、発達段階、性別や個別性のある情報から看護診断が導けた。学生は既に個人ワークで看護過程の展開を行っているので、グループメンバーとディスカッションし、視野が広がり、理解が深まることを意図した。中間発表会と全体発表会を行い、ディスカッションすることで自己のグループの強みや不足部分を確認し改善・修正できていた。

予防的家庭訪問実習（2年次）

2年次

福田広美、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、80チームすべてに協力者を配置することができなかつたため、協力者のいるチームを訪問組、協力者不在チームを演習組として本実習を行った。感染拡大のため訪問は4月に一度行った後10月まで休止したので、単位認定に必要な訪問回数を2年次生は3回とした。訪問組2年次生は10月20日以降1名ずつの在宅高齢者を継続的に訪問した。演習組は、地域関係者による講話を通して、訪問地域の特徴や課題、コロナ禍における地域在住高齢者の変化について学ぶ機会を持った。また、演習組も訪問の様子を体験できるよう情報機器端末を利用して訪問組チームの訪問時に、オンラインで参加するオンライン訪問を実施した。さらに、訪問を休止期間中は、ソーシャルサポートに関するグループワークをチームで行った。2年次生は特に、協力者の生活を把握し、在宅生活を維持するために必要な条件を考えることを主眼とした。訪問組は、アセスメント実践して協力者の理解が深められ、協力者の生活や健康に地域や周囲の環境の変化が影響を与えることについて考えることができていた。演習組は、映像資料や地域関係者の講話を通して、地域で生活することへの理解が深められていた。また地域の高齢者を支えるために多職種連携の重要性について考えることができていた。

成人看護学概論

2 年次前期

森加苗愛

成人期に特徴的な多様な健康問題と対象への看護援助の概要を学ぶことができるよう講義を系統的に計画した。今年も COVID-19 の影響により講義は全てオンラインで実施した。

講義内容は、人間のライフサイクルにおける成人期の特徴を、発達課題、健康の側面から総合的に理解し、看護を実践していく上で基盤となる知識や理論を教授した。看護理論の講義では、事例を通して講義を展開し、看護実践を意味づけして理解できるように工夫した。看護実践の具体例では講師の臨床経験を交えつつ、看護実践がイメージできるように工夫した。また、オンラインでの講義の工夫点としてグループディスカッションや投票機能を活用して学生が主体的に講義に参加できる機会を工夫した。

本概論を基盤として、成人看護援助論で成人の特徴を踏まえた看護援助について更に具体的に教授し、学生がより看護実践に関心を深め、主体的に学ぶことができるよう支援を行っていくことが課題である。

老年看護学概論

2 年次前期

小野美喜

老年期に生じる健康問題の特徴と高齢者への看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける老年期の特徴、健康問題をもつ高齢者の身体的、心理的、社会的問題を理解し、疾患や機能障害を持ちながら日常生活を送る高齢者への看護に必要な知識を教授した。全てオンライン実施とし、各授業後に課題を提示しレポート作成ができるようにした。さらにオンライン上での小グループディスカッションにより事例検討を実施した。リモート環境によるトラブルもなくレポート学習や意見交換ができ、授業評価でも学生参加の満足度が高かった。今後も授業の工夫をし学生参加型の授業を継続する。

成人看護援助論

2 年次前期

小野美喜、佐藤栄治、宿利優子、中釜英里佳、堀裕子、森加苗愛

成人期にある対象の特性をふまえ、特徴のある健康障害について、急性期、慢性期、回復期、終末期の看護援助方法を教授した。教授方法は、今年 COVID-19 の影響から、講義はオンラインで行い、感染予防対策を行いつつ、グループワークも実施した。各教員が担当講義のハンドアウト資料と教科書を用い、講義を行った。オンライン講義では、ブレイクアウトルームによるグループ

ワークを取り入れるなど、一方的な講義とならないように努めた。

講義の具体的な内容としては、がん患者へのケアや周手術期看護を実践的に学ぶことができるよう、解剖生理に関する教材を作成し理解しやすく工夫した。また、臨床の活きた看護実践を実感できるよう、講師として急性・重症患者看護専門看護師を招聘し講義を行った。慢性疾患看護においては、事例を通して行動変容に関する理論を理解できる様にした。

学内実習は、例年血糖値測定・インスリン注射を行うが、今年は COVID-19 の影響を鑑み見合わせた。次年度、3 年次生の演習に取り入れる予定である。退院指導の講義はオンラインで行ったが、グループに分かれて胃がん患者事例、糖尿病患者事例、悪性リンパ腫患者事例を設定し、実際に退院に向けた看護問題のアセスメント、看護計画、指導媒体を作成し発表・全体討論を行った。ロールプレイを行うことはできなかったが、実際の退院指導をイメージしながら計画を立案してオンラインで発表会を行うことができた。

今後も、グループディスカッション、成果発表会等を組み込み、学生が主体的に学び、発言できる講義・学内実習内容となるように工夫をしていく。

小児看護学概論

2 年次前期

高野政子、草野淳子、足立綾

本科目は、小児看護の特質と概要、および小児の成長発達を理解することを目的としている。小児看護の基礎として、小児保健や教育・福祉・保育の概念と、小児医療の動向を講義して、小児看護の役割と重要性について教授した。今日における小児看護の重要性の理解を促すために、まず小児医療の変遷と小児看護の特殊性をスライドや DVD を使用してイメージ化すること、自分の中の子ども観を認識するための課題レポートを課した。また、小児看護において重要な家族と親子関係に着目できるように講義を組み立てた。特に重要な概念として小児の成長と発達については形態・機能的発達、小児看護で用いる理論などを講義した。講義は 10 コマで行った。次年度も同様の計画とする。

母性看護学概論

2 年次前期

林猪都子、梅野貴恵、永松いずみ

母性看護学の基本概念および意義を理解し、人間の性と生殖の側面から、女性の生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への援助活動を学び、母性各期における母性看護の役割と重要性について認識を深めることを目的として教授した。

新型コロナウイルスの影響を受けて Zoom 講義にて実施した。教材をネット配信できるように講義内容を見直して講義に望んだ。講義中に学生の反応が見えないために Google フォームによる

学び、感想を講義終了後に学生に求めた。学生の講義に対する学びや質問が見られ、次回講義に反映することができた。Zoom 講義は 2 年目となったが、研究室メンバー全員で講義を視聴し、フォローしながら講義に取り組んだ。今年は有線使用の講義に切り替えてネットトラブルを回避した。次年度も Google フォームによる学生の学び、感想を求め、次回の講義に活かしたい。

社会保障システム論

2 年次

平野互

保健・医療と福祉・介護の統合が重要視される今日の看護職にとって、社会保障の制度と社会資源に関する理解は不可欠である。講義時間数が限られているため、社会保障の全体像が把握できるよう講義内容を整理し、特に他の科目で触れることの少ないであろう福祉を多く盛り込んで講義を組み立てた。まず社会保障制度の意義と構造を論じ、次いで保健・医療システムと福祉制度の全体像を理解するために、所得保障、医療保険、医療法、地域保健、感染症対策に引き続き、母子・児童、高齢者、障がい者を対象とする個別的な保健・福祉政策について講義した。コロナ禍のため、すべて Zoom による遠隔授業となったが、期末試験の成績は概ね良好であった。

養護概論 I

2 年次前期

赤星琴美、小野治子

学校保健活動を担う養護教諭の基本理念、教育職員としての養護教諭の基本原則などを学ぶことを目的とした。具体的には、養護についての本質や基本的概念、職業倫理などを、母校の養護教諭へのインタビューを通じて理解し、さらにそれらを発表、ディスカッションにより学びを深めた。本年度は、夏休み集中講義講義とし、学生が集中して授業に参加することができるよう、個人の発表、グループワークを多く取り込み、それぞれの学生が及ぼすグループダイナミクスを活用し、主体的に学習することができた。年度により履修人数が異なるが、今後も学生が集中できる講義方法を工夫していった。

生徒指導

2 年次前期

長谷川祐介、関根剛、吉村匠平

教師として児童生徒を対象に生徒指導を行う上で理解すべき考え方（法制度を含む）や理論、実践のための方法などを理解するとともに、学校で実際に生徒指導を行うための実践能力の基礎を

養うことを目的に講義を進めた。

教育相談

2 年次前期

中島暢美、飯田法子、河野伸子

学校教育における教育相談の意義や役割について理解し、不適応とは何か、適応障害とは何かについての理解の構築を試みた。また、受講者各自が体験したことなどを課題化して、どのような対応が必要か、どのような組織との連携が必要かなどを、グループで話し合わせた。

英語Ⅱ－A2

2 年次後期

宮内信治

Word Power Made Easy を教科書として、医療を含む科学分野に関連する英語語彙の学習定着を念頭に学習させ、単語小テストを通して学習成果を確認させた。演習課題として教科書内の原文を音読暗唱させた。講読演習では文章の論理構成を意識させることを念頭に解説し、看護に関する英語原著論文本体を文法解析させ、講義時の解説をもとに解釈の修正と文法理解を促し和訳させた。論理的な文章構成と国際的な看護の現状の一端を理解させることができた。日本での活躍が期待されるナースプラクティショナーへの興味関心を促進喚起したい。

英語Ⅱ－B2

2 年次後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students participated actively in every class. The course content, learning materials and teaching method were evaluated highly in the final class survey of all students, and the survey results will be used to improve the course in the next academic year.

放射線健康科学

2 年次後期

小嶋光明、恵谷玲央

放射線健康科学では現代医療に必要な放射線と健康との関係を理解するために、放射線の諸特性、放射線の物理、生物・健康影響、その防護についての基本的な事項を講義している。また、医療における放射線利用についての理解を深めるために、X 線検査や放射線治療の具体的な事例について検査画像や写真等を用いて教示した。さらに、同時期に実施している健康科学実験(自然放射線の測定、診療用 X 線装置の散乱線の測定を通して放射線の量的な理解)と合わせて、医療における放射線利用に対する基礎知識がより深く理解できるように努めた。

オンライン形式の講義であったが、フォームとチャット機能を用いて毎回講義終了後に確認テストを実施し、学生の理解度の確認、知識の定着、関心を高めることに効果があったので今後も継続する。

健康運動学演習

2 年次後期

稲垣敦

学生が自分の健康課題を見つけ、主体的に目的や目標、運動内容を定め、前期の健康運動学で学んだ知識を活用して自分に合った運動メニューを作成して運動実施した。今年度は COVID-19 のため、ベースライン計測時には 3 密を避け、手、運動器具等の消毒を指導し、運動中のマスクの着用を義務づけるとともに、自宅周辺で運動することとした。しかし、年明けの COVID-19 感染拡大により、運動成果判定のための計測が実施できなかった。次年度も感染状況に柔軟に対応して実施する必要がある。

健康科学実験

2 年次後期

濱中良志、岩崎香子、安部眞佐子、市瀬孝道、吉田成一、定金香里、小嶋光明、恵谷玲央、稲垣敦

健康科学実験は基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的としている。実験テーマは 10 テーマからなる実験を行った。1) 人体解剖学実習 (担当者: 濱中良志、岩崎香子、安部眞佐子)、2) 組織学実習 (担当者: 濱中良志)、3) 血液検査 (担当者: 定金香里)、4) 基礎微生物学実習 (担当者: 吉田成一)、5) ラットの解剖 (担当者: 市瀬孝道、吉田成一、定金香里)、6) 放射線 (担当: 恵谷玲央)、7) 染色体異常 (担当者: 小嶋光明)、8) 呼吸循環器系持久力 (担当者: 稲垣敦)、9) 心電図 (担当者: 岩崎香子)、10) 食物栄養学実習 (担当者: 安部眞佐子)。コロナ禍のため、一部

は Zoom を用いて演習形式で行った。

看護アセスメント学実習

2 年次後期

藤内美保、廣田真里、石田佳代子、山田貴子、内倉佑介、石丸智子、神矢恵美、後藤成人、佐藤栄治、篠原彩、宿利優子、秦さと子、田中佳子、橋本志乃、姫野雄太、丸山加菜

COVID-19 感染が県内である程度落ち着いている状況で、実習施設 3 施設、大分県立病院、大分赤十字病院、大分大学医学部附属病院の全てで実習を受け入れていただいた。実習方法は実習施設により、ベッドサイド時間を 1 回に 15 分などの制限はあったが、それが意図的な関わりや何が必要な情報なのかを考えるなどの教育的効果もあった。また、制限されているなかで実習させていただき、学生も真剣に取り組む姿勢が見られた。学生も実習指導者も、臨地実習で学ぶことがいかに貴重な体験であり学習につながるかを認識されており、学生の実習目標の達成度は、ほぼ例年以上の効果があったと思われた。実際の担当教員の評価は、例年以上にアセスメントや実習態度などの評価は良かった。また、初学者の 2 年生では看護過程のアセスメントすることに時間がかかるが、今回の実習で、ベッドサイド時間が制限されていたことで、考える時間が増えたことの効果があったと考えられた。

学生は健康管理に注意し、大きなトラブルや COVID-19 に感染することもなく、無事に実習を終えることができた。

老年看護援助論

2 年次後期

小野美喜、佐藤栄治、宿利優子、堀裕子、森加苗愛

老年看護援助論では、本年度もコロナ禍のためオンラインで、グループワーク、事例検討を取り入れ講義を行った。学生は老年期に代表的な障害や疾病をもつ高齢者の健康問題が生活に及ぼす影響や、高齢者とその家族の生活の質を考えた援助方法や自立支援を学び、レポートにまとめることができた。また、エンドオブライフケアの概念に含まれる緩和ケアが必要な終末期のがん患者の事例動画を視聴し、トータルペインの視点で考えレポートにまとめることができた。

次年度は、新カリキュラムへの移行期ということもあり、成人看護援助論とも連携を取り、より急性期、回復期、慢性期、終末期領域と成人期、老年期の特徴や看護を網羅できるように構成していく。老年看護援助論では、回復期・終末期をメインに老年期の身体、心理、社会機能の特性や健康問題に対しての援助や支援方法を取り入れる。また、エンドオブライフケアにおける高齢者の意思決定支援の事例検討をグループワークで行い、学生の思考力や主体性を伸ばしたいと考える。

母性看護援助論 I

2 年次後期

林猪都子

妊娠期、分娩期の生理と異常および心理・社会的特徴とその看護を学ぶことを目的に教授した。

新型コロナウイルスの影響を受けて、昨年度は講堂で講義を実施し、教室と違って広い空間で、講義模型を提示しても見えにくく、資料の配布、講義開始前の小テストの回収の効率がよくなかった。今年度は Zoom 講義を実施した。オンラインで実際の教材を提示した時に、画面が小さくて見えにくかったと学生からの意見が聞かれたので、次年度は実際の教示を提示する場合は、共有画面を中止するなど工夫する必要がある。

精神看護学概論

2 年次後期

影山隆之

健康を心理－社会的側面から理解するために、健康日本 21、精神力動論、心理社会的発達論、ストレス論、及び国際生活機能分類などの考え方と、主な精神症状・精神疾患、アディクション、自殺予防などのトピックを紹介するとともに、歴史と法制の概要を講義した。すべての資料を一括印刷・製本し、授業前に配布した。予習とくに演習問題について考えてくることを求め、授業内でディスカッションをした。授業中にはできるだけ自験例を紹介するとともに、前年のリアクションペーパーで理解度が不十分だった内容について説明を充実させた。出席確認を兼ねたリアクションペーパーに記載された質問や感想に対する回答を 3 日以内にイントラネット上で学生に開示したが、質問は前年度より少なかった。学生による授業評価や筆記試験時に書かれた感想によれば、これらの方式は概して好評であり、精神看護への関心を高め、スティグマを低下させる効果があったと考えられたので、今後も同様の方法を継承する予定である。

家族看護学概論

2 年次後期

福田広美、荒木章裕、姫野雄太

個人を取り巻く家族に対する看護を学ぶための講義を行った。家族看護学の理論や概念、家族機能や構造などの基礎的な知識を学習した。また、家族看護に関する主要な理論として、家族発達理論、家族システム理論、家族適応理論、家族ストレス対処理論について事例を交えながら講義を行った。これらの講義で得た知識をもとに、学生は家族看護事例を通して、家族看護について実際にアセスメントを行い、家族を看護の視点から捉える学習を行った。次年度は今年度の内容を継続するとともに、臨床実習を経験していない学生の学習ニーズにも対応できるよう、より具体的な事

例を用いた解説を行っていく。

地域看護学概論

2年次後期

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、佐藤愛、藤内修二、村嶋幸代

看護の対象は地域全体（地域に暮らす個人、家族、集団、組織）であることの理解を目的としている。地域文化と健康との関連についても触れ、今後、実習における受け持ち患者の生活背景の理解へ視野が広がることを目指した。また、今年度は講堂での講義を実施したが、一方的な講義にならないよう、発表やディスカッションすることで、学生間の学びの共有を行った。

国際看護学概論

2年次後期

桑野紀子、丸山加菜

講義の目的を①世界の人々を看護の対象としてとらえ、世界の保健医療に関する課題について学び、その背景や対策について考察すること、②日本国内の在留外国人や訪日外国人への健康支援に関して、対象者の文化社会的多様性に配慮した看護について学ぶこととし、内容構成した。海外での看護実践については外部講師の体験談を組み込んだ。感染拡大予防のためオンライン講義が多かったが、開発途上国の保健医療に関する状況や健康課題への理解を深めるために適宜動画視聴を組み込むなど工夫した。また、今年度は講義終了後にGoogleフォームで小テストを実施した。小テストや感想、試験結果から、学生は概ね目標を達成できたといえる。今後は、講義内容について予習・復習を通してより理解が深まるよう工夫する必要がある。

看護管理学概論 I

2年次後期

福田広美、姫野雄太

看護を取り巻く社会背景と共に看護管理の基本となる概念や、保健医療福祉政策とその動向および法令について理解を深めることを目的とした。また、看護職とキャリアや多職種との協働・連携について理解し、安全で質の高い看護を提供するしくみを教授した。本年度は新型コロナウイルスの感染対策のためオンラインで講義を行った。学生が、授業を通して、看護管理の基礎的な知識を習得した。本年度は、医療安全の授業について新たな事例を教材として加え、学生が主体的に対策を考えることができた。今後は、医療安全以外にも看護管理の場面を取り入れながら、学習できるようにする。

看護の倫理

2 年次後期

平野 互、小野 美喜

看護職に必要な医療倫理・生命倫理の知識を習得するとともに、倫理的判断のための思考訓練を行うことを目的に講義を行った。講義は、「Bioethics・生命倫理の展開と課題」・「Profession の責任と倫理」・「臨床倫理：倫理的判断の方法」・「意思決定の倫理」・「生殖補助医療にかかわる倫理」・「出生前診断と倫理」・「人間の尊厳、個人の尊重と自立支援」・「End of life に関わる倫理」・「医療従事者の事故対応と責任」の 9 回を平野、「看護職の価値観と文化、社会規範」を小野が担当した。平野担当分の講義には「ケースブック医療倫理」（医学書院）をテキストとする事例演習を組み込んだ。

コロナ禍対応のため講堂で対面講義を行い、レポートにより最終評価を行った。

第 1 段階看護技術演習（2 年次生）

2 年次後期

秦さと子、丸山加菜、山田貴子、木嶋彩乃

本科目は、3 つのステップからなる看護技術修得プログラムのファーストステップの位置づけにある演習である。本演習の目的は、対象への日常生活援助を一人で実施できる能力を身につけることである。しかし、今年度は昨年に引き続きコロナ禍により演習の実施が困難であったことから、看護実践に必要な思考過程の育成を重視した演習内容とした。具体的には学生が主体的に学ぶことができるように、まず、個人学習として、課題事例に対し必要な看護技術の判断根拠や対象に応じた技術展開などを自ら思考させた。その後、4～5 人のグループで各自の考えや意見を共有し、担当教員の指導内容を踏まえ再検討し、グループとしての意見をまとめさせた。また、既習の看護技術に関連した知識の定着を目的に e-learning 教材を用いた学習を課した。学生の取り組みの状況は良く、実技は実施できなかったものの概ね目標に到達できたと考える。今後は COVID-19 の状況下でも、実技を取り入れた演習ができる工夫が必要である。

教育学概論

2 年次後期

鈴木 篤

教育に関する本質的理念について、これまでに受講者が有してきた経験や理解を問い直すことを通して、①教育についての基礎理論・思想を理解するとともに、②教育の歴史的発展過程を理解し、今後の変化についての見通しを持つことを目的として、講義を行った。

学校教育心理学

2 年次後期

藤田文

教職課程や心理学における教育心理学の位置づけから入り、発達、知能、パーソナリティ、学習などの個々の生徒を理解するために必要な知識について教授した。単に知識を吸収するだけでなく、自ら積極的に、教育現場に必要な心理学の知識とは何かを考えていくことを求めた。

教育課程論

2 年次後期

今井航

教員として授業計画を立案する際に、国の定める基準、即ち学習指導要領に則りながら授業内容を自ら構成できるようになるための基盤となる力の習得を目的とした。「教育課程とは何か（その形態・原理）」及び「学習指導要領とは何か」といった 2 点の問いを持って、授業を進めた。

生体薬物反応論 II

3 年次前期

吉田成一

生体薬物反応論 II は疾病の薬物治療に用いる医薬品の作用原理に主眼を置き、薬物を投与した際の生体反応（主作用及び副作用）に関する講義である。生活習慣病で使用する医薬品、中枢神経系疾患で使用する医薬品、免疫系疾患に使用する医薬品、救命救急時に使用する医薬品など多岐にわたり臨床上使用する医薬品全般について講義した。今年度は対面での講義を行ったが講堂で行ったことから、双方向の（質疑応答を活発に行う）講義とはならなかったため、講義後に、本科目の学修について学修成果物（ノートなど）を提出するよう求め、質問事項の記載があれば、回答するあるいは、提出物に誤りがあれば指摘するなど、可能な限り、受講者と担当教員間で学修修得状況を確認、向上させるよう努めた。

2 年次後期により臨床的な実習を行い、本講義で取り扱う医薬品に関し、その重要性を理解しているため、積極的に学習するという意欲が高く、理解度は全般的に高かった。一方、今年度は講義で用いる処方例の多くを更新し、過去に定期試験の問題として出題していない分野あるいは医薬品（睡眠薬とバセドウ病）についての学修取得状況は他の分野等と比較すると極めて低かった。

上記のような分野があったにもかかわらず、昨年と比較すると、平均点、最高点、最低点のいずれも同程度であったことから、試験問題として既出分野に関しての学修修得状況は高くなったと考えられる。次年度以降、試験問題として既出分野以外の処方例に関する学修を積極的に取り組むための対応が受講者・担当教員ともに課題であると考えられる。

履修者（再受験該当者を含む）77名中、74名が単位を取得した。

成人・老年看護学演習

3年次前期

小野美喜、佐藤栄治、宿利優子、中釜英里佳、堀裕子、森加苗愛

健康課題（問題）をもつ成人および高齢者の急性期、回復期、慢性期の対象に必要な援助を検討し、看護過程の展開の思考と看護技術を学内で習得することを目的とした。発達段階（成人期、老年期）の特徴を踏まえた上で、健康問題を持つ対象者に必要な看護計画を立案し、看護援助の実践がイメージできるよう視聴覚教材を取り入れ、看護技術面においては、e-learning システムを活用した。また COVID-19 感染症拡大により対面授業が行えなかったため、web 会議ツールを利用してオンライン講義を行った。オンライン講義の特徴を活かして、学生の意向や疑問点をその場で聞き取り、解決しながら、学習が進むようにした。学生からの質問等も適宜チャットやメールを活用し受け付け、学生の困難感を軽減するよう努めた。

成人看護学演習では、周手術期の看護から回復過程までの援助がイメージしやすい事例を設定した。事例は、右下葉扁平上皮がん切除術を受ける患者とした。術直後の患者観察や看護援助のみでなく、術中・術後の患者の状況に応じて評価修正しながら看護援助ができるよう、事例情報の提示の時期や方法を工夫した。老年看護学演習では、高齢者の術後管理、高齢者の経鼻経管栄養注入、高齢者の身体機能変化、高齢者の転倒予防と多職種連携に焦点を当てた。援助の実際を演習で実践する予定であったが、COVID-19 感染症拡大により対面授業が行えなかったため web 会議ツールを利用してグループディスカッションを行い、学生相互での学びの共有を図った。

次年度以降の改善点として次のように授業方法を改善する。成人事例の看護過程の展開では、紙面上のみで看護展開を行うのではなく、看護実践を演習形式で行いより実践をイメージできるように組み立てる。老年看護学演習においても、思考のみでなく実践につながるよう技術演習を組み込んでいく。

老年看護学実習

3年次

小野美喜、佐藤栄治、宿利優子、中釜英里佳、堀裕子、森加苗愛

施設に入所している高齢者の健康問題と健康の維持・増進について考え、高齢者の生活の質の維持・向上を目指した老年看護の専門性と役割を学ぶことを目的とした。

当初は介護老人保健施設および介護老人福祉施設で 1 週間の施設実習を計画していたが、COVID-19 の感染拡大の影響により施設実習を断念し、代替として学内実習を行った。

学内実習は基本的にオンライン開催とし（高齢者疑似体験を除く）、「①施設の特性と多職種連携の実際」、「②高齢者の生活機能の変化と変化に伴う援助」、「③高齢者の生活の質を維持・向上する

ための援助と看護の役割」の3課題を設定し、高齢者疑似体験や視聴覚教材を用いた事例検討を通して課題毎のグループディスカッションを行った。また、「高齢社会における高齢者施設の役割」や「施設における高齢者の生活と看護師の役割」について介護老人保健施設の管理者や看護管理者から講話をしていただいた。

施設にて高齢者への看護を経験することはできなかったが、課題レポートやグループディスカッションを通して、各課題についての考察と学びを述べることでできていたことから、実習目標に到達できたと考える。次年度以降も施設での実習を計画するが、COVID-19の感染状況と制約に合わせて、学生が実習目標に到達できるよう柔軟に対応する必要がある。

成人看護学実習Ⅰ

3年次

小野美喜、内倉佑介、佐藤栄治、宿利優子、中釜英里佳、堀裕子、森加苗愛、矢野亜紀子

今年度はCOVID-19の影響により、37名が臨地実習を行い、37名が学内実習を行った。

学内実習では、急性期の紙面事例として胃がんの周手術期にある患者を用いた。実際に患者と対面することができないため、映像情報も作成提供し、実習に近い看護展開を促した。また実習に近い形にするために、中間・最終カンファレンスを行い学生間での学びの共有に努めた。

臨地実習では、期間を縮小し、感染拡大予防に留意しつつ行った。実習施設は、大分赤十字病院6病棟で、各病棟に3～4人ずつ学生を配置して1グループ7日間の実習（学生1人5日間の臨地実習）を実施した。

本実習は、第4段階の専門看護学実習に位置付き、成人期の身体的・心理的・社会的特徴を総合的に捉えた上で、急性期・回復期の健康段階にある対象に対し適切な看護援助方法を学ぶ。また、チームの一員として適切な看護が実践できる能力や自主性、自律性を養うと共に自己の看護観を発展させることを目的とする。実習中は感染予防の観点から、実習部署や看護実践、時間の制限はありながらも、可能な限り実習指導者と相談・調整を行い、学生が主体的に実習を行えるように調整した。

教員は常駐しながらも、学生が看護スタッフと連携が図れるよう支援した。制限がありながらも実習施設の協力のもと、目標達成ができたと評価する。今後も引き続きチーム医療の中で学生が主体的に行動できるような指導方法を検討していく。

成人看護学実習Ⅱ

3年次後期

小野美喜、内倉佑介、佐藤栄治、中釜英里佳、堀裕子、宿利優子、森加苗愛、矢野亜紀子

成人看護学実習Ⅱは、COVID-19感染症予防の観点から臨地実習する病院に制約が生じたため、あらゆる健康段階にある成人の特性を理解し、看護の必要性を判断し実践・評価できることを目的

にオンライン（Web 会議ツール、Web ベースのファイル共有システム）での学内実習としました。

事例は、肝がん患者（慢性期）を用いて看護展開を促した。リアルな患者をイメージできるように各事例の動画を作成し、動画視聴で患者さんの表情や心情を理解し、患者情報も整理ながら、看護展開できるように工夫をした。

また Web 会議ツールを利用し、オリエンテーションや必要時個人面接、中間・最終カンファレンスを行った。昨年度の課題は、個人作業が多くなり学生間での学びの共有ができにくかったことであったため、学生の考えや疑問点を中間・最終カンファレンス時に共有し、学生間で解決しながら学習が進むように努めた。学生からの質問等も受けつけ、学生の困難感を軽減するよう努めた。

次年度以降も COVID-19 による制約が考えられるが、臨地の実習学生が対象への看護を思考できる実践型の実習を目指し、今後も引き続きチーム医療の中で学生が主体的に行動できるような指導方法を継続していく。また、急な変更に対応できるようにオンライン上でも学習できる方法を検討していく。

予防的家庭訪問実習（3 年次）

3 年次

福田広美、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、80 チームすべてに協力者を配置することができなかつたため、協力者のいるチームを訪問組、協力者不在チームを演習組として本実習を行った。感染拡大のため訪問は 4 月に一度行った後 10 月まで休止したので、単位認定に必要な訪問回数を 3 年次生は 2 回とした。訪問組 3 年次生は、施設実習が終了した 12 月以降 1 名ずつの在宅高齢者を継続的に訪問した。演習組は、地域関係者による講話を通して、訪問地域の特徴や課題、コロナ禍における地域在住高齢者の変化について学ぶ機会を持った。3 年次生は特に、協力者の健康維持のために大切なことを協力者と共に考え、可能な支援は実施することを主眼とした。少ない訪問回数ではあったが、協力者の経年的な変化や環境の変化に合わせ支援を行うことの重要性を理解できていた、また、チームで協働して行った支援に対し手ごたえを感じた学生もいた。演習組は、映像資料や地域関係者による講話を通して、高齢者の生活を支えるために重要とされる地域の互助について考えることができていた。また、地域包括ケアシステムにおける看護職の役割についても理解を深めていた。

小児看護援助論

3 年次前期

高野政子、草野淳子、足立綾

コロナ感染症の影響でオンライン講義を行った。小児の発達過程の特質を理解するための主要

理論に基づき、小児の行動を多面的に捉え、発達過程の応じた日常生活の援助方法と各期の保育と保健および、小児看護における援助技術や、健康障害のある小児とその家族への援助方法を教授した。授業は、看護過程の展開を個人ワークとした。教員と個別に Zoom による看護過程の指導をして、5 事例の代表者が発表し意見交換を行った。

小児看護学演習

3 年次前期

高野政子、草野淳子、足立綾

本科目は、小児の看護過程の展開について、臨地実習で経験する可能性が高い事例を用いて行った。5 事例を個人に振り分けて、教員が個人指導した。Web での指導であったため、グループ活動はできなかったが、来年度は感染の状況を見ながら、グループダイナミクスを考慮した看護過程の展開の指導を実施したい。

また、小児看護学実習に必要な技術について、実習室で演習を行った。内容は、小児のフィジカルアセスメント、救急法、点滴固定法、身体計測などであった。学生は真面目に取り組んでおり、演習目的は達成できた。

小児看護学実習

3 年次後期

高野政子、草野淳子、足立綾、渡邊一代、神矢恵美

小児看護学実習では、3 日間の保育所実習を 7 月末から 8 月第 1 週までに実施することはできた。幼児と出会うことが少ない学生には初めて子どもとコミュニケーションを学ぶこと、健康な子どもを理解して、病児と家族への関わりがスムーズに実施できることなど重要な効果がある。保育所実習では各グループで手洗い指導を最終日に行う課題を取り入れ、良く工夫して実施できたと保育所長会で成果が報告された。コロナ感染予防に活かされた。一方、コロナ感染症のため病院等の臨地実習は 9 月中は中止となった。この間は学内実習とした。病院実習の様子や、学生の実習の様子を DVD で学習した。事例は、教員が学生 1 人に 1 事例を準備して、最終日に発表した。学生の実習到達度に差があるが、他の学生の事例発表は好評であった。学生の個別性にあわせて、積極的に実習できるように指導することが課題と考える。

母性看護援助論Ⅱ

3 年次前期

林猪都子、永松いずみ、徳丸由布子

分娩期の異常と看護、産褥期、新生児の生理と異常および心理・社会的特徴とその看護を学ぶことを目的に教授した。分娩時損傷、分娩期出血、産科処置、産褥期の生理と経過、産褥期の看護、新生児の生理と看護について 3 名の教員で実施した。

新型コロナウイルスの影響を受けて Zoom 講義にて実施した。教材をネット配信できるように作成して講義に望んだ。講義内容は生殖器の内容を含むために、学生に個室で視聴する事を求めた。講義中に学生の反応が見えないために Google フォームによる学び、感想を講義終了後に提出することを求めた。対面講義ができず昨年度の評価は、課題レポートと Google フォームによる学びと感想で評価したが、今年度は学内で試験を実施することができた。4 月に開講して 1 か月で講義が終了するため、学生の反応を見ながら進める必要がある。

母性看護学演習

3 年次前期

林猪都子、永松いずみ、徳丸由布子

母性看護の実践に必要な知識を理解し、母性看護技術と看護過程を習得することを科目のねらいとした。昨年は全て Zoom によるネット配信で実施したので、今年度の母性看護技術は、母性看護学演習室にて、グループ人数を少なく 3 日間 6G に分けて、「妊婦計測」、「新生児計測」、「沐浴、子宮復古の確認」の 3 項目について実施した。6 月中旬までコロナ禍の状況がなかなか改善せず、演習日程を何度も変更することとなった。知識の習得と確認は、過去の国家試験問題を学生全員で解いてそれぞれ知識の習得状況を確認した。ウェルネス看護診断に基づいた母性看護過程の演習は、産褥期の正常と異常の 2 事例を用いて、グループ学習で看護過程を展開した。看護過程の発表会はオンライン上で実施したが、学生間の意見交換が活発であり学習を深めることができた。

母性看護学実習

3 年次

林猪都子、永松いずみ、今村知子、矢野杏子

母性看護学実習施設は 2 施設（いしい産婦人科は学生配置せず）で、実習期間は 1 グループ 2 週間（延べ 12 週間）であった。学生および教員の配置人数は、大分県立病院は学生 1G4～5 名配置（男子学生 4 名）で 3.5 日間実習とし、1G に前半、後半と 12G 配置した。残り 5 日間は学内実習とした（合計 50 名）。堀永産婦人科は学生 4 名配置（合計 24 名）で、1G 前半 3.5 日間の実習

と学内実習とした。担当教員は大分県立病院 2 名（前半、後半）、堀永産婦人科医院 1 名配置した。実習は学生 1 名につき妊婦または褥婦を 1 名受け持ち、妊産褥婦、新生児の看護について学び、母性各期の特性とニーズに応じた看護過程の展開とした。

実際には、前半 6 週間はコロナ禍の影響で臨地実習ができず、全て学内実習となった。後半 6 週間は臨地実習に行くことができた。半分の学生しか臨地実習を経験できなかったが、現地で体験することの必要性を痛感した。昨年度からサロンリラ・どーなつ助産院の実習を開始し、Zoom 講義による学級活動に参加した。今年は臨地の学生の実習日数は揃えることができたが、前半・後半の実習形態では、後半の学生の記録整理が大変で、学生から不公平感の訴えがあるので、3 か所の施設で実習ができるようにしたい。

精神看護援助論

3 年次前期

杉本圭以子、後藤成人

精神疾患の病態・治療の基本をおさえ、精神障害を持つ人に必要な看護を生活、ストレスの視点から説明できるよう講義した。科目を通して、視聴覚教材、事例を多用し、学生の理解につながるよう工夫した。各疾患の病態・治療・看護の学習は、予習を基に講義での学びを追加して実習に持参できる資料としてまとめることを学生に求めた。講義の最後に小テストと感想をオンラインフォームで提出し、次回の講義の最初に小テストの解説と感想を共有することで、前回の復習をかねて講義をつなげる工夫をした。

精神看護学演習

3 年次前期

影山隆之、杉本圭以子、後藤成人

紙上事例教材を用いて個人ごとに事例検討に取組ませ、全体で振り返りを行った。臨床で遭遇しやすい事例・状況になるようブラッシュアップしたので、学生にイメージしやすい演習となった。紙上事例ではわからない精神科医療・地域精神保健と障害福祉サービスの実際（現状）について、実習施設等から招いた外部講師による講演によって伝えた。各自が実習を行う障害福祉サービス事業所を実際に訪ね、実際の地域生活の支援について見学し、実習での学びにつなげる時間を設けた。教材や講師は、学生に概ね好評のようであった。講義を振り返り、後期の実習へスムーズに移行するための準備として、演習の基本的な構造は継続してよいと考えられる。

精神看護学実習

3 年次後期

影山隆之、杉本圭以子、後藤成人、丸山加菜、姫野雄太

実習期間のうち 6 日間は大分下郡病院、大分丘の上病院、衛藤病院に分かれて病棟実習を行い、他の日は 4 つの障がい福祉サービス事業所に分散して実習を行った後、最終日に学内でまとめのカンファレンスを行った。病棟実習で学生は、受け持ち患者について、全人的な理解とアセスメント、及び患者が受けている看護の理解について指導を受けた。病棟・病院内カンファレンスの意義と参加の仕方、退院支援、多職種連携の実際などについて意識付けを強化した。事業所では、利用者と共に各種プログラムに参加しながら、精神障がいを持ちながら社会で生活できるための条件や当事者ニーズのアセスメントなどについて、指導を受けた。最終カンファレンスで、両者の学びを統合した。本年度は幸いにして COVID-19 の影響を受けず、すべての実習を予定通り実施することができた。

第 2 段階看護技術演習（3 年次生）

3 年次前期

秦さと子、足立綾、佐藤栄治、矢野杏子

本科目は、3 つのステップからなる看護技術修得プログラムのセカンドステップの位置づけにある演習である。本演習の目的は、対象への日常生活援助を一人で実施できるとともに、専門領域別の基礎的看護技術の実践能力を身につけることであるが、今年度は COVID-19 の影響により、オンラインで実施した。実施においては、第 1 段階からの流れを考慮して学生が効果的な学びができるようワークノートを準備し、技術の根拠や手順を自ら思考して実技をイメージできる形式とした。課題事例に対する技術展開を個人でワークノートを用いて思考した上で、学生 3~4 人でのグループワークを実施した。教員はグループ毎に、課題事例の技術展開を行う上で必要な視点についての指導を行い、評価は個人及びグループのワークノートに基づき実施した。学生の取り組みの状況は良く、概ね目標に到達できたと考える。

今年度はオンライン開催により、本来の演習の在り方とは大きく様相を変更せざるを得なかった。今後は COVID-19 の状況を鑑みながら、可能な限り実技を取り入れた演習方法の工夫を行う。

在宅看護論

3 年次

福田広美、荒木章裕、矢野亜紀子

疾病や障害をもちながら多様な場で生活する人々とその家族に対して、在宅看護を行うために必要とされる基本的な考え方や援助方法を理解することをねらいとした。本年度は COVID-19 の

影響により対面とオンラインのハイブリッドで行い、学生が在宅看護に関する基礎的な知識を学び、臨地における在宅看護の実際について学びを深められるよう事例を通して教育を行った。在宅看護の関連法規に苦手意識を持つ学生が多く、今後は該当する講義時間を増やし、看護のみならず福祉的な視点を加えたケアを展開できるような学習を行う。

教育方法論

3年次前期

麻生良太、佐伯圭一郎

教師による発問、それに対する児童および生徒の考察、話し合い活動、質問行動、説明、新たな課題の発見といった教授過程や理論の実際を概説すると同時に、情報化社会に対応した教育内容や方法の実際に焦点をあて、各種情報機器の活用について紹介した。

特別教育支援論

3年次前期

古賀精治、藤野陽生

特別支援学校、特別指導学級、通級指導学級だけではなく、通常の学級にも在籍する様々な障害（発達障害や軽度知的障害など）のある児童及び生徒に対し、学習上または生活上の困難を理解し、個別の教育的ニーズに対応するために必要な知識や支援方法について教授した。

養護概論Ⅱ

3年次前期

赤星琴美、小野治子

子どもの健康課題解決、危機管理などの学校保健における課題の歴史的変遷を捉え、具体的な養護活動を展開方法やこれからの養護教諭に求められる役割について学びを深めた。今年度はオンラインでの夏期集中講義とした。オンラインでも学生が集中して授業に参加することができるよう、個人発表およびグループワークを多く取り込み、それぞれの学生が及ぼすグループダイナミクスを活用し、主体的に学習することができた。年度により履修人数が異なるが、今後も学生が集中できる講義方法を工夫していきたい。

英語Ⅲ

3年次後期

Gerald T. Shirley、宮内信治

コミュニケーション担当 Students learn English-language nursing dialogues and practice role playing these dialogues with partners to improve their pronunciation, intonation and fluency. Students also learn useful nursing and medical related vocabulary and phrases. The instructor will use the survey results of the student questionnaire to improve the course in the next academic year.

講読担当 語源学の知見を基に自然科学分野に関連する語彙を習得させた。教科書内の学習範囲から音読する英文を学生に選ばせて音読させ、理解を確認した。初回以外、オンラインですべて講義を実施したため、提示用スライドを新規に作成した。今回の講義を踏まえてスライドの改訂を進めていきたい。

環境疫学・生物学演習

3年次後期

小嶋光明、恵谷玲央

環境疫学・生物学演習では健康と環境との関係についての知見が生まれてくる仕組みを講義している。疫学的な統計によって明らかになってくる知見や分子細胞レベルの生物学的な仕組みを通して明らかになってくる知見を演習・事例を通して理解できるように努めた。演習時間内に様々な医療統計、疫学データを適切に処理し考察する力を養うことを目的とし、課題レポートを作成させて提出するやり方は、学生が主体的に問題意識を高めるとともに理解を深めることにつながる。

今年度はオンライン形式で演習を進めたが、エクセルを用いた演習の際に困難さを感じている学生や、時間内に課題の終わらない学生もいた。オンラインでも双方向性の高い講義となるように講義の進め方や指導方法を工夫することが今後の課題である。

地域生活支援論

3年次後期

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、佐藤愛、橋本志乃、鈴木由美

地域で生活している人びとのライフステージや健康課題別における実際の地域保健活動について基本的な知識のほか、現場の看護職の講義を取り入れ行った。また、地域看護学実習での実習地について、コミュニティ・アセスメントの手法を用いて地域を理解する演習を設け、実習地域の理解を深め、健康課題を見いだすことができた。今後も感染予防に配慮しながら整った環境下で演技演習ができる工夫を行っていく必要がある。今年度はオンラインにて演習を実施したため、グルー

プでの作業に不都合が生じた部分もあった。来年度はオンラインでの方法も活かした演習方法に取り組みたいと考える。

健康支援論演習

3年次後期

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、佐藤愛、橋本志乃

保健・医療・福祉の場における集団への健康問題に対する健康教育の展開方法とその実践力を養うことを目指した。健康教育が行われる対象や場を理解し、個人・集団の健康増進や疾病予防のための行動変容を促す理論やモデルを活用した健康教育の企画・実施・評価等の一連のプロセスを理解できるよう講義を行った。病院、施設、地域などにおける健康教育の場を学生自ら設定し、対象者に合わせた支援方法をグループワークで取り組んだ。各グループの発表を通じて、学生間の理解を深めることができた。新型コロナウイルス感染対策のため、今年度は講堂およびオンラインにて演習を実施したため、グループでの作業に不都合が生じた部分もあった。来年度は演習計画を早期に立案して、オンラインでの方法も活かした方法に取り組みたいと考える。

国際看護比較論

3年次後期

桑野紀子、丸山加菜

2年次の国際看護学概論の内容を発展させ、国際保健／国際看護の主要概念や世界の疾病構造の変化について理解を深めること、Universal Health Coverage や Sustainable Development Goals といった保健医療に関する世界的な取り組みについて学ぶこと、母子保健や精神保健といった各分野のグローバルな状況について学ぶことを目的とした。また、海外に渡航する日本人や在外邦人の健康支援に関する内容も組み込んだ。感染拡大予防のため、講義はオンライン講義が多かったが、課題レポートや試験結果から、学生は概ね目標を達成できたといえる。変化の激しい世界情勢に鑑み、基本的な知識の習得と共に、国際機関の最新のデータや海外の事例等から学ぶ力をつけられるよう、能動的な学習場面を増やし、予習・復習を促す必要がある。

国際看護学演習

3年次後期

桑野紀子、丸山加菜

「貧困援助について考える」、「難民について考える」、「コロナ禍における看護職のメンタルサポート」等のテーマを設定し、講義で学んだ知識を実践に結びつけて具体的にイメージできるよう、映

画や講演の視聴も組み込んだ。文化・社会的背景が多様な在留外国人患者の看護については、実践経験が豊富な外部講師をオンライン上で招聘し内容を補強した。演習後半は、或る国の健康課題と背景および対策について国際機関ホームページ等を情報源として調べ、考察し、発表するグループワークを行った。学生4～5名がグループとなり、海外の健康課題等について国際機関のホームページ等から英語で最新の情報を収集し考察した。また、調査した国と日本の比較を通して見えてきた日本の医療や看護の特徴についてもグループメンバーとディスカッションした。学生は概ね目標を達成できた。学生間のディスカッションがより活発になるよう工夫が必要である。

災害看護論

3年次後期

石田佳代子、内倉佑介、福田広美、松久美

本科目の目的は、地域や病院等における健康危機管理と災害時の対応について理解し、地域や病院等における災害看護のあり方、考え方とその実際を学ぶことである。講義では、災害の定義、種類、法律、制度、災害サイクル各期における特徴と看護活動、病院における初動体制、DMATの活動や避難所における災害支援ナースの活動など、多面性を有する災害看護の全体像がわかるような内容とし、災害および災害看護の基礎的知識の習得に重点を置いた。演習では、日本DMAT（看護師）による指導の下で、災害時に必要な技術であるトリアージ（START法）の習得に重点を置いた。また、災害発生時を想定したシミュレーション・シナリオを使って机上訓練を行った。本科目の評価はレポートによって行った。学生には事前に災害看護に関するDVDの視聴を課すとともに、本科目で学びたいことや身につけたいと考えている能力などを明確にして臨めるように配慮した。また、災害時に特有の病態や疾患についての講義を補強した。このような工夫を加えたことにより、災害時のイメージ化を図ることができ、災害時の特徴の理解を促すことが出来たと考える。講義で学んだことなどを基にレポートを書くことで、様々な場における災害時の看護のあり方や自身の責務などについて、考えをより深めることができたと考える。

新型コロナウイルス感染対策のため、今年度は演習を含めたすべての授業をオンライン方式で実施した。来年度は演習計画を早期に立案して、オンライン授業の利点を活かした教育方法に取り組みたいと考える。

看護科学研究

3年次後期

佐伯圭一郎、小嶋光明、品川佳満、藤内美保、桑野紀子、草野淳子、佐藤栄治、渡邊弘己、廣田真里

卒業研究および将来の臨床における看護研究に必要とされる基本的な考え方、知識、技術を修得することを目的としてオムニバス形式の講義・演習を行った。各回を担当する教員の経験を踏まえ

た学生にとって興味深い内容であり、授業アンケートの結果でも一定の評価を受けている。ただし、個別の事項については掘り下げる時間が不足する点や、講師間で重複する内容等もあり、講義資料のサーバへの掲載による担当講師間での確認や、学習を深めるための追加情報の紹介を各回に加えることにするなどの対応を検討している。

学校保健学

3 年次後期

草野淳子、赤星琴美、小野治子、霜山朋子、手嶋康深、吉田知佐子

講義時間数は 20 コマであった。目的は、児童生徒の心身の健康維持・増進における学校保健の役割について、保健管理、保健学習、保健指導の視点から理解し、要点を説明できるようになることである。講義は養護教諭の実践経験がある非常勤講師によって、主に行われた。内容は根拠となる法律、学習指導要領、教育課程について取り上げ、意義や内容が理解できるようにした。演習は保健室経営計画、症状アセスメント、保健教育指導案の立案とし、課題提出後に全員で討議し教員の講評を行った。評価は、発表内容と筆記試験の成績によって行った。今年度の方法は有効であったため、来年度も同様に実施する予定である。

道徳、総合的な学習及び特別活動

3 年次後期

鈴木篤

道徳教育、総合的な学習、特別活動の特質とその方法について知識・理解を深めることを目的として、学校教育の具体的な場面を取り上げながら説明した。

教育制度論

3 年次後期

今井航

世界の主要国における教育制度改革の動向や、学校の法的な位置づけを問うことにより、教育制度への関心を高めた。その上で、職務内容や遵守事項、免許制度、研修制度を取り上げ、教職員に関する制度の特徴を捉えさせた。加えて、教育委員会の制度の変遷、教員評価の制度、学校支援の制度についても解説した。

養護実習事前事後指導

3 年次後期

吉村匠平、関根剛

事前指導では、実習生としての遵守事項について学ぶとともに、実習校の概要について、HP や要項をもとに整理した上で、個別の実習目標、実習期間中の具体的な行動目標を策定し、実習生間で交流させた。事後指導では、実習目標に沿って、実習の自己評価を行うとともに、他の学生の実習体験を共有する機会を提供した。

養護実習 I

3 年次後期

吉村匠平、関根剛

大分市立植田小学校、大分南中学校、東大分小学校、荏隈小学校、原川中学校、賀来小中学校、大分西中学校、八幡小学校、大東中学校、日田市立北部中学校、豊後高田市立高田小学校、香々地小学校、杵築市立宗近中学校、竹田市立久住小学校、中津市立今津中学校で、学校体験活動を中心とする実習を行った。感染症の影響で、3 校は次年度の実施となった。

応用生体機能反応論

4 年次

濱中良志、市瀬孝道、吉田成一

今年度は、コロナ禍のため、Zoom の様々な機能を駆使して、解剖生理学、病態生理学及び薬理学の思考過程を教授した。

総合人間学

4 年次

福田広美、杉本圭以子

看護学実習や演習を経験した 4 年次生が各講師の講義を通して物の見方や考え方を学び、人間として、医療者として備えておくべき豊かな知識と感性を養うことができるように、教職員の推薦から教育研究委員会での検討を重ね、様々な分野の第一線で活躍されている 8 名の講師とテーマを決定した。さらに、看護国際フォーラムへの参加を 2 回分の講義とし、全 10 回の講義を実施した。なお、本科目は COC+による他大学学生の単位互換制度も導入し Web 受講を可能にしている。今年度は、COVID-19 の感染拡大予防策として Zoom による講義に変更を行いながら実施した。

学生全員が10回の講義を聴講できた。先生方の講義を通して、1人の人間としてももの見方や捉え方など視野の広がりを認識でき、レポートに看護職者としての学びや今後の課題について自己の意見を表現することができた。

本年度の開講日、テーマ、講師を以下に示す。

第1回9月10日自然に対する畏敬の念を忘れないー地球温暖化、自然災害を俯瞰してー
気象予報士防災アドバイザー環境教育アドバイザー 花宮広務

第2回9月17日学ぶことは生きることー院内学級の子もたちが教えてくれた大切なことー
昭和大学大学院保健医療学研究科准教授院内学級教師ホスピタルクラウン 副島賢和

第3回9月24日「働く」と「幸せ」のツナギ方ー男女共同参画とワーク・ライフ・バランスー
社会保険労務士大分県男女共同参画審議委員 篠原丈司

第4回10月1日どうぶつと共に生きる

九州自然動物園アフリカンサファリ取締役展示部部长専門獣医師 神田岳委

第5回12月7日障害を持つ人の自立を目指す気持ちを尊重した支援（講師都合で日程変更）
障害福祉サービス多機能型事業所ホビータ임理事長ブライテック代表取締役社長佐々木正則

第6回10月15日私が演劇を通して学んだこと

俳優大阪芸術大学芸術学部舞台芸術学科教授 山本健翔

第7回10月22日ひとりぼっちを作らない地域をー性的少数者(LGBT)当事者としてー
LGBTサポートチーム ココカラ！ 共同代表 奥結香

第8回10月29日多文化社会を生きるー「やさしい日本語」というコミュニケーションー
立命館アジア太平洋大学（APU）言語教育センター 教授日本語教師 本田明子

第9回第10回10月30日看護国際フォーラム 13:00-16:00

看護探究セミナー（学部）

4年次前期

福田広美

4年生に対し、実習で受け持った患者1名に対する看護を振り返り、看護をより深く考えることを目的としたケース・スタディを行った。振り返りを行う実習の事例は、総合実習を予定していたが、コロナ禍で臨地実習が限られる学生もみられ、4年間の実習で受け持った事例を振り返ることに変更した。各教員が、学生を担当し、テーマ決定からケースレポート作成までのプロセスを指導した。学生は主体的に担当教員の指導を受けながらレポートの作成を行った。また、自らの看護実践と理論を繋げて理解を深めることができた。

次年度は、振り返りを行う実習の事例について、4年間の実習の中から選択するよう学生に早めにオリエンテーションを行う。

地域看護学実習

4 年次前期

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、佐藤愛、橋本志乃、荒木章裕、姫野雄太、矢野亜紀子、桑野紀子、丸山加菜

COVID-19 の影響により、2 週間の実習を大分県下の保健所（保健部支所含む）、市町村保健センター及び支所における臨地実習と学内演習の2つのパターンで実施した。臨地の実習指導体制では、それぞれの施設の保健師が実習の現場で直接指導を行い、担当教員は各施設を巡回することで学生と実習指導者双方の状況把握を行いながら、終了カンファレンスでの指導、記録物の指導などを行った。学内演習では、TA を活用することで、実際の保健活動を学ぶことができた。金曜日を帰学日とし、学内で教員と学生間で討議することで臨地実習と学内演習での学びを共有した。次年度も臨地実習と学内演習との合同カンファレンスを行い、学びを共有を行っていく。

予防的家庭訪問実習（4 年次）

4 年次

福田広美、影山隆之、篠原彩

単位認定者を学部長とし、看護研究交流センター地域交流チームが実習マネジメントを担当した。新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、80 チームすべてに協力者を配置することができなかつたため、協力者のいるチームを訪問組、協力者不在チームを演習組として本実習を行った。感染拡大のため訪問は4月に一度行った後10月まで休止したので、単位認定に必要な訪問回数を4年次生は3回とした。訪問組4年次生は10月20日以降1名ずつの在宅高齢者を継続的に訪問した。演習組は、地域関係者による講話を通して、訪問地域の特徴や課題、コロナ禍における地域在住高齢者の変化について学ぶ機会を持った。また、演習組も訪問の様子を体験できるよう情報機器端末を利用して訪問組チームの訪問時に、オンラインで参加する“オンライン訪問”を実施した。さらに、訪問休止期間中は、ソーシャルサポートに関するグループワークをチーム毎に行った。4年次生は特に、協力者個人の生活のみならず、地域の健康課題にも目を向けて考察・提案することを主眼とした。訪問組は協力者を通して、健康に影響を与える地域の様子について考察し、地域でのつながりが健康にも影響を与えることへの理解を深めていた。また、チームリーダーとして創意工夫して役割を遂行していた。演習組では、映像資料や地域関係者による講話を通して、健康や生活に影響を与える地域の特性や問題点が世代で異なることを理解することができていた。

看護管理学概論Ⅱ 政策等含む

4 年次前期

福田広美

看護管理のプロセスおよび管理の実際を通して、看護の質を高めるための理論や看護管理に必要な理論、経営に関する基礎的な知識および、看護政策について学習することを目的とした。

本年度は COVID-19 の影響により、オンラインで講義を行った。4 年次生が、臨床や臨地で実際に経験した病院や在宅等の事例を通して、看護の質を高めていくマネジメントを考えることで、理論と実際を結びつけながら理解を深めることが出来た。次年度は、学生が主体的に看護管理の理解を深められるよう、テーマ別のディスカッション時間を設けるなど工夫を行う。

第 3 段階看護技術演習（4 年次生）

4 年次前期

秦さと子、山田貴子、荒木章裕

本科目は、3 つのステップからなる看護技術修得プログラムのサードステップの位置づけにある演習である。本演習の目標は、これまでに学んだ看護援助に必要な知識と技術を、e ラーニングにより主体的かつ計画的に再学習することで、総合的に看護技術力を強化することである。

本演習は COVID-19 の影響を受けることなく実施することができ、学生は概ね目標達成できた。また、学生はレポート課題により自己の技術習得状況を振り返り、技術修得上の課題を明確にすることができていた。しかし、一部の学生からレポート課題にあまり意味を感じないとの意見があったことから、レポート課題の意図が学生に伝わるようなオリエンテーションや実施要領の見直しを今後の課題である。

在宅看護論実習

4 年次前期

福田広美、荒木章裕、小野治子、木嶋彩乃、桑野紀子、佐藤愛、橋本志乃、姫野雄太、丸山加菜、矢野亜紀子

在宅看護論実習は、COVID-19 の影響により臨地実習、学内演習、ハイブリッド形式の 3 種類を同時進行した。学内演習においても臨地実習と同様の実習目標が達成できるよう、動画教材や演習資料を活用しながら教育を行った。また昨年度の録画媒体ではあるが、訪問看護師の実体験や、他職種との連携・協働についても、実際の様子や映像を通して学ぶことができた。次年度もハイブリッド形式になることが予想されるため、学内演習では技術面、福祉的視点、多職種連携の学習を充実させ、臨地実習との経験の差異を解消していく。

総合看護学実習

4 年次前期

桑野紀子

4 年次生 79 名が県内 33 施設において、6 月下旬から 7 月下旬の期間中に、3 週間の実習を行った。COVID-19 感染拡大の影響で、実習施設の状況や学生の県外就職試験受験状況等により、実習開始・終了日の変更や、一部学内実習とする等、例年と異なる対応が必要であった。本実習は 4 年間の看護学実習の最終段階にあたり、実習の集大成である。実習の目的は、主体的に実習課題を設定し、看護基礎教育における学びを統合しながらチームの一員として看護を提供するための総合的な看護実践能力、看護の質を保證するマネジメント能力、および看護専門職としての自律性を養うことであり、また、本実習の特徴は、計画から実施・評価までを学生が自律的に取り組む点である。制限がある中で感染対策を行いながら、各自が実習目的・目標に沿って実習し、4 年次生全員が無事に実習終了することができた。次年度も引き続き感染予防に配慮しながら、学生個々人の実習目的・目標に沿って実習を進める。

卒業研究

4 年次

福田広美

4 年次生は、各研究室に所属し、開学以降行っている 1 人 1 テーマで研究に取り組むことを継続した。研究室配置は、各研究室の教員が、研究室の特色、研究室で行う研究テーマ、これまでの卒業研究などをオンデマンド形式で紹介し、それを学生が各自視聴した上で、研究室の希望に沿って研究室配置を決定した。各研究室において、教員の指導のもとに、卒業研究のテーマを 3 月 31 日までに決定した。テーマ決定後は、研究計画に基づき研究に取り組んだ。今年度は COVID-19 の影響により比較的文献研究が多かったが、実験研究や調査研究など多彩なテーマや方法の研究も多数みられた。研究の倫理審査を要する研究は、研究倫理・安全委員会に計画書を提出し、研究倫理についての学習過程を踏み、学びを深めた。4 年次生は、研究室の配属から約 10 ヶ月間で、研究を実施し、要旨、論文、パワーポイントの作成までを行った。研究発表会は、感染防止のため Zoom で 3 分科会に分かれて実施した。3 セクションが同時進行のため、視聴できない研究もあったが、録画により教員は発表を視聴できた。次年度は、学生にも録画を視聴できるようにする。今年も学生、教員ともにルーブリック評価を行った。卒業研究優秀賞は、視聴した教員全員が評価し、各セクションから上位 2 名、計 6 名を選出する方法とした。

原著講読

4 年次

福田広美

卒業研究で配属された研究室で、教員の指導のもとに原著講読を行った。目標は、専門領域の原著論文（英語論文が望ましい）を 2 本以上読み、その知見を述べるができること、卒業論文作成時に、原著講読で学んだ知見を活かすことである。ルーブリック評価を用いて、学生が段階的に自己の成長を確認するように評価し、担当教員は最終的な評価をルーブリック評価で行った。いずれの学生も一定のレベルに到達することが出来た。

養護実習Ⅱ

4 年次前期

吉村匠平、関根剛

大分市立碩田学園、明野中学校、西の台小学校、南大分小学校、大分西中学校、大平山小学校、日田市立北部中学校、佐伯市立東小学校で、学校保健活動を中心とする実習を行った。

看護スキルアップ演習

4 年次後期

秦さと子、杉本圭以子、荒木章裕、足立綾、矢野杏子

成人・老年（急性期、回復期）、母性、小児、在宅領域の事例に対し、根拠に基づくアセスメントおよび適切な看護技術を提供できる実践能力を養うことを目的として実施した。1 グループを学生 8 名で構成し、各グループで課題に取り組み発表会を実施した。必要と考えられる看護の根拠や意図が伝わるように動画や写真、パワーポイント資料の作成を課すことにより、発表が分かりやすいものとなった。さらに、同じ事例を 2 グループが担当したことでディスカッションが深まり、看護系教員および人間科学系教員からの助言をうけることで多角的な視点があることに気づいたと学生から多数意見があった。オンラインでの発表により、資料が細部まで分かりやすく、ディスカッションも活発であり、担当以外の課題についても理解が深まったと学生からの意見が寄せられ、オンラインによるメリットを生かす形で発表会が実施できたと考える。

次年度は、事例について最新の治療動向など適切な情報を盛り込むことでさらに効果的な演習が実施できるように検討する。

教職実践演習（養護教諭）

4年次後期

吉村匠平、関根剛、小野治子

養護実習で実習することができなかった領域を中心として、学校保健活動を行う現場を念頭に置いた実践的な授業を演習形式で行った。

学内演習では、構成的エンカウンターグループのファシリテーター体験、場面指導案の作成と7分間のミニ保健指導の実施、投影的な自己理解促進の手段としてのフォトコラージュ体験などを行った。

4年間の教職課程の学びを振り返り履修カルテを完成させた。

4-2 博士課程(前期)

生体科学特論

1 年次前期

濱中良志、安部眞佐子、岩崎香子

今年度はコロナ禍のため、Zoom を駆使して、各臓器における解剖学・生理学・生化学の復習をした後、関連する重要疾患の病態生理から各臓器の正常の機能を教授した。今年度から心電図の動画配信を行った。

病理学特論

1 年次前期

市瀬孝道

本年度も新型コロナ感染拡大のため、本講義は Zoom 配信によって行った。講義内容は昨年度同様に疾病の基本的事項を理解するために生体防御システムに関わる炎症、免疫やアレルギー、また、腫瘍、代謝障害、先天異常などの病気の基礎を講義した。これら疾病の基本的事項と系統別の個々の疾患とが繋がるように詳しく講義した。また、Zoom による講義の中では病理学の教科書を分かりやすく整理したプリントや疾患症例について、マクロ病理（解剖時の所見）とミクロ病理（病気の組織像）についてパワーポイントを用いて説明し、これらの資料も学生に事前に配布して、予習、復習ができるようにした。

病態生理学特論

1 年次前期

濱中良志、黒川竜樹

今年度はコロナ禍のため、Zoom を駆使して、各臓器別の疾患の成り立ちに関する病態生理学を解剖生理学との関連性を重視して教授した。

健康増進科学特論

1 年次前期

稲垣敦、安部眞佐子

はじめに、科学について概説し、測定と評価、運動の強さと量の測定について説明した。臨地で運動メニューの作成や運動指導ができるようにするため、ストレッチング、筋力、筋力トレーニング

グ、エネルギー代謝、有酸素能力、加齢と体力、運動強度、身体活動量、運動療法等について講義した。また、身体活動量の実習を行なったが、COVID-19 のため最大酸素摂取量に関する実習はできなかった。栄養学に関しては、栄養素の基礎の復習をし、英語の栄養学の教科書を使って、腸内細菌と栄養の話を読み、解説した。

人間関係学特論

1・2 年次後期

関根剛、吉村匠平

2名の教員により、関根8回、吉村7回の計15回の講義をZoomによる遠隔講義で行った。講義内容はシラバスを基本として、参加学生の希望するテーマを取り入れて構成した。今年の内容は、関根はグループワーク、カウンセリングスキル、リーダーシップ、犯罪非行、行動変容、吉村は家族システム論であった。受講生は12名と少人数であったため、学生同士の討議、質問、演習などアクティブラーニング要素を多く取り入れた方法で行った。評価は教員それぞれがレポート等を課した結果を総合して評価した。複数のコースの学生が受講する夜間の講義では、遠隔講義のメリットは多い。しかし、遠隔では演習が実施しづらいこともあり、今後は遠隔と演習の2つの方法で講義を行なえることが有用と考えられる。

看護管理学特論

1・2 年次後期

福田広美、志田京子、佐藤弥生、甲斐仁美、柿本貴之

看護管理特論では、保健・医療・福祉に関する制度と組織、看護管理の基本となる組織論、人材育成や経営等、マネジメントに関する理論とその展開について教授した。学生が看護管理の実践現場において理論を応用しながら改善、改革を進められるよう、講義の内容を踏まえた発表とディスカッションを行った。学生は質の高い看護サービスやマネジメント等について、実践と理論を結び付けながら看護管理に対する理解を深めた。今後は、学生の看護管理に関する経験を活かしたプレゼンテーションの機会を授業に組み込み、実践の場に役立つ教育を行う。

看護管理学演習

2 年次

福田広美

看護管理に関する実践力を高めることを目的に、臨床現場における組織の現状分析を行い、課題を明らかにしたうえで看護管理演習の計画の立案、実践および評価に関する教育を行った。学生

が、実践の場の組織分析を行い、改善に向けた実践計画を実践の場の組織員とともに立案を行った。さらに、立案した計画をもとに実践の場で、計画を組織員とともに実施し、実践に対する評価と次の改善に向けた計画立案を行った。学生は、組織分析から評価に至るプロセスで発表とディスカッションを行い、各段階において、看護管理実践について理解を深めた。また、看護管理の実践を行うプロセスで文献を活用し、改善に取り組んだ。学生が、看護管理の実践力を高めていけるよう、演習のまとめの際に振り返りのポートフォリオを加える。

看護理論特論

1・2年次後期

秦さと子、高野政子、藤内美保、桑野紀子、杉本圭以子

看護理論の基本構造や理論評価の意義及び視点について理解し、看護実践への活用について検討することを目的に、教員による講義と学生によるプレゼンテーションで構成した。履修生6名であったため、1人の理論家に対し2~3名の担当を希望に基づいて決定し、理論の概説と看護実践への活用の具体例についてそれぞれ発表させた。感染予防対策のため発表会はすべてオンラインで実施した。5名の担当教員が各理論家の発表会にチュートリアル形式で支援した。それぞれの発表では、理論の解釈だけでなく実践への活用例について発表出来ており、活発な意見交換につながっていた。そのため、次年度も同様の授業構成で実施予定である。

看護教育学特論

1・2年次後期

高野政子、藤内美保、梅野貴恵、秦さと子、吉村匠平、山崎清男

看護を担う人材育成には質の高い看護教育が重要であるという視点から、教育学の理論と技法を理解し、使えるようになることを目標に、一般的な教育原理、教育方法、教育評価をはじめ、専門分野の看護教育学、看護教育カリキュラム、看護教育理論等を教授した。外部講師1名を招聘し、教育原理、教育方法を分担した。次年度は担当教員を加え、また、新たに海外における看護教育や保健師および助産師教育に関する内容を加える予定である。

看護コンサルテーション論

1・2年次後期

杉本圭以子、吉村匠平、関根剛、竹村陽子

看護におけるコンサルテーションの概念と方法、プロセスの概略を講義し看護コンサルテーションの全体像をつかんだ後、外部講師（専門看護師）により現場でのコンサルテーションの実際

を講義し、臨床現場に即した現実的なコンサルテーションについて考察した。さらに対象者理解のための心理的アセスメント、効果的な心理教育と心理的援助の方法について講義した。講義での学びをふまえ、後半は学生が経験した事例を持ち寄り、ディスカッションすることで看護コンサルテーションについてさらに理解を深めた。

看護倫理学特論

1・2年次前期

関根 剛、小野美喜、平野 互

3名の教員により、関根2回、小野3回、平野6回の計11回の講義と担当教員ごとに3回の事例演習、さらに最終回には受講生の事例報告（レポート）による討論の計15回の講義を行った。講義は遠隔を基本としながら、一部対面を含めて実施した。最終回のレポート内容および討論の状況によりそれぞれの担当の教員が評価をした。実務的な思考やスキル、演習など体験的な講義内容もあり、レポートを評価したところ、講義目的は達成されていると思われる。ただし、受講者は24名とやや多く、遠隔講義では、個別の思考訓練やコミュニケーションスキルについて細やかに確認しづらい面もあった。

講義は、「Professionの責任と倫理」・「Bioethics・生命倫理の展開と課題」・「倫理的判断の方法」・「人間の尊厳と自己決定権」・「プライバシー権」・「医療政策による人権侵害」を平野、「看護職の責任と倫理規程」・「看護職の価値観と倫理」、「看護場面の倫理的ジレンマとその解決ステップ」を小野、「倫理的行動とコミュニケーション」・「問題解決のためのコミュニケーション・スキル」を関根が担当した。事例演習は、3名の教員各々が講義と関連付けて行った。受講生が多くコロナ禍対応でリモート授業適応となったため、開講時期を7月にずらし、一部対面で講義を行った。最終回の事例報告は、例年同様受講生が20名を超えたので、レポートのテーマをもとに3名の教員で割り振り、それぞれ討論を主宰して評価を行った。

看護政策論

1・2年次後期

影山隆之、小山明夫、小池智子、中西三春、立森久照、村嶋幸代

日本の看護・保健・福祉政策の最新の動向と、政策や事業の評価方法及び評価の実例、及び大分県における看護政策について、オムニバス形式の講義を開講した。狭義の看護政策だけでなく、対策立案の方法、NPOの政策的関与、研究エビデンスの政策への反映などについて、実例や演習の要素を取り入れ、学生に好評であった演習の時間を前年度より2コマ増やした。履修者の反応は好評であった。

健康社会科学特論

1・2年次後期

平野互

人間の健康に関わる研究や職業的実践においては、個々の人間行動の分析・探求と並んで、社会政策など社会システムに対する分析、社会学や文化人類学等の社会的アプローチが重要である。これら社会科学的思想と方法論の基礎を習得することを目的として、講義と課題演習を行った。

受講生が1名であったため、集中講義の形で行った。社会学、医療経済学、文化人類学等の方法論や基本的な理念に関する知識を伝授するための講義のほかは、受講生の視野を拡大することと、キャリアや研究テーマに寄与できることを目的に、受講生の学問的関心に沿った課題に限らず、これまで接してこなかったであろう分野の研究の紹介と討論を行った。課題演習は、受講生の選択したテーマに沿った文献のレポート作成を行った。

看護科学研究特論

1・2年次前期

小嶋光明、村嶋幸代、藤内美保、影山隆之、佐伯圭一郎、平野互、関根剛、桑野紀子、大田えりか

看護科学研究の理論および手法を概観し、研究活動を自ら展開するために必要な事項を論じて実践的能力の育成を行った。実験的研究、質的研究、文献研究を実際に行っている先生方に講義をしてもらうことで研究手法がより理解できるように努めた。また、今年度は研究倫理規範意識を向上させるため、APRIN eラーニングを活用した。

保健情報学特論

1・2年次前期

佐伯圭一郎、品川佳満、渡邊弘己

保健医療分野において必要とされる情報入手・情報処理・情報管理の基盤となる理論と技術について、演習も交えながら教授した。後半の生物統計学については、事前学習と発表を組み込んだ形式で学習の充実をはかるとともに、事前事後の試験により知識と技術の定着を確認した。

生物統計学パートのテキストは全体的には適正な難易度であったと評価するが受講者ごとのレディネスや理解度のバラツキに対するサポートが今後の課題と考えられた。また、演習課題についてもテキストとの対応や難易度の調整などをさらに改善していきたい。

英語論文作成概論

2 年次前期

甲斐倫明

テキスト（ポタージュ先生の医学英語論文講座）と配布資料を用いて、英語論文を執筆することの意義、英語論文の書き方の概要、さらに科学論文で使用する英語表現の基本的パターン（動詞）と基本表現までを教授した。英語論文の構造化アブストラクトを書けることを目標に実験系および調査系の論文アブストラクトを例示しながら講義を行った。提出されたアブストラクトの添削指導を行った。次年度から担当教員が代わり、内容も一新する予定である。

原書講読演習

1 年次前期

宮内信治

英語習得における基礎的要素の確認定着を目標とし、発音記号、英文法基礎知識、語源学の知見を基にした医療看護英単語を教授した。演習として看護（Nurse Practitioner：NP）に関する英文原著の読解翻訳に取り組みその成果をレポートに編集させることで、NP および看護の国際的な情報知識を認知させ、英語読解能力の重要性を認識させることができた。NP コース以外の受講生については、コース別、個人別に演習課題を指定し、文法解析と和訳を演習させ評価した。学生個人の研究に沿った課題選定を取り入れていきたい。

課題研究

1～2 年次

稲垣敦

履修者が各自の研究テーマについて、指導教員の指導を受けながら研究に取り組み、学会で発表し、学術雑誌に投稿した。また、研究中間報告会（8/25）、論文レビュー報告会・研究計画報告会（8/26）、研究成果報告会（3/4）で発表した。今年度の修了生は、次のとおりであった。

（助産学コース）

岩尾知保：妊娠期女性の抑うつ症状とライフイベントとの関連についての研究（主指導教員：影山隆之、副指導教員：山田貴子）

江藤美咲：出生前診断検討段階から出産前までの夫婦の心理的特徴と医療職としての支援（主指導教員：梅野貴恵、副指導教員：杉本圭以子）

川上美咲：出産施設退院後の母親が乳房ケア専門助産院へ受診するに至った状況とその後の心身の変化（主指導教員：梅野貴恵、副指導教員：姫野綾）

田中裕奈：4 か月児をもつ母親の母乳育児継続を阻む要因（主指導教員：梅野貴恵、副指導教員：岩崎香子）

辻憂華：微酸性電解水と一般消毒薬の皮膚影響に関する比較－1 か月間の反復投与の影響－（主指導教員：樋口幸、副指導教員：吉田成一）

土肥真由子：死産を経験した女性への退院後の継続看護の実態（主指導教員：林猪都子、副指導教員：永松いずみ）

中原彩花：妊娠期女性の抑うつ症状の評価方法に関する研究：EPDS を用いた精神的不調者スクリーニングの可能性（主指導教員：影山隆之、副指導教員：山田貴子）

森楓：清拭素材がヘアレスマウスの皮膚に及ぼす影響－皮膚バリア機能と表皮に焦点をあてて－（主指導教員：樋口幸、副指導教員：小嶋光明）

森下麗華：新生児期のおむつ皮膚炎の発症に関連する要因の検討－保清・スキンケアと皮膚バリア機能に焦点を当てて－（主指導教員：樋口幸、副指導教員：姫野綾）（広域看護学コース）

（NP コース）

大谷清太郎：プライマリケア領域 NP 資格認定を受けた診療看護師(NP)が行う意思決定支援の現状：患者の療養生活への支援に着目して（主指導教員：小野美喜、副指導教員：甲斐博美）

倉原千春：へき地における糖尿病患者支援の現状と NP に求められる役割（主指導教員：森加苗愛、副指導教員：中釜英里佳）

深江裕美：「皮膚」のフィジカルアセスメントに関する海外文献の検討－看護の視点からの問診に焦点を当てて－（主指導教員：藤内美保、副指導教員：福田広美）

山口宏満：特定行為研修を受けた認定看護師が経験している倫理的問題の現状（主指導教員：小野美喜、副指導教員：甲斐博美）

佐藤英三：大分県豊後大野・竹田地区の介護老人保健施設における感染症予防対策の現状と課題（主指導教員：福田広美、副指導教員：小野治子）

荒木将晴：特定行為研修を受けた看護師が特定行為の実践において経験した倫理的問題：小野美喜、副指導教員：甲斐博美）

岩本由衣：妊娠糖尿病既往女性が糖尿病発症予防のために夫に期待すること（主指導教員：森加苗愛、副指導教員：小野治子）

大石直之：A 病院における小児への PICC 挿入と管理上の課題（主指導教員：高野政子、副指導教員：草野淳子）

小野智佳子：高齢化率が高い地域の医療機関に勤務する診療看護師 (NP)が行う予定外再入院予防への活動の実際（主指導教員：杉本圭以子、副指導教員：小野美喜）

高橋知子：外来でがん薬物療法を受ける高齢がん患者に CGA（高齢者機能評価）基本チェックリストを用いた看護介入と QOL の変化（主指導教員：小野美喜、副指導教員：堀裕子）

竹之内卓：米国ナースプラクティショナーが人工呼吸器装着患者に関わることの効果（主指導教員：小野美喜、副指導教員：中釜英里佳）

(広域看護学コース)

安藤亜実：働く女性の月経随伴症状への対処行動に関する実態調査（主指導教員：赤星琴美、副指導教員：小野治子）

江藤亜美：韓国の COVID-19 対策における移動経路の公開とプライバシー保護－SNS から見た国民の受け入れについて－（主指導教員：品川佳満、副指導教員：恵谷怜央）

後藤ゆめ：安全に出産・育児をするための保健師による妊娠期からの継続支援（主指導教員：赤星琴美、副指導教員：徳丸由布子）

富高稜華：歩行場所による衝撃の差異について－加速度による検討－（主指導教員：稲垣敦、副指導教員：草野淳子）

名嘉飛呂野：A 県における在日外国人への産後の母子保健サービスの提供時の保健師の困難感について（主指導教員：桑野紀子、副指導教員：影山隆之）

永家実歩：台湾の COVID-19 対策に用いた位置情報監視システムに対する住民の認識－Twitter の投稿内容を対象とした分析－（主指導教員：品川佳満、副指導教員：恵谷玲央）

中房玲衣：乳幼児期のアレルギー疾患発症予防に関する養育者の知識と行動（主指導教員：赤星琴美、副指導教員：関根剛）

藤井瑞生：日本における幼児肥満対策の現状と課題に関する文献検討（主指導教員：安部眞佐子、副指導教員：赤星琴美）

牧瀬香穂：一地域における救急搬送自損例の性・年齢階級・重症度・曜日別発生数の分析－2020 年の社会情勢下での検討－（主指導教員：影山隆之、副指導教員：岩崎香子）

(看護管理・リカレントコース)

友永大輔：講義とグループディスカッションを組み合わせた心電図教育プログラムの開発－新卒看護師の心電図アセスメント能力への効果－（主指導教員：福田広美、副指導教員：藤内美保）

本村理恵：呼吸の異常から急変を判断するケースリフレクション教育の試み－看護師の呼吸アセスメント力への効果－（主指導教員：福田広美、副指導教員：藤内美保）

後藤美和：中核市保健師の多分野の活動経験が保健師活動にもたらす影響（主指導教員：赤星琴美、副指導教員：小野治子）

特別研究

1～2 年次

稲垣敦

履修者が各自の研究テーマについて、指導教員の指導を受けながら研究に取り組み、学会で発表し、学術雑誌に投稿した。また、研究中間報告会（8/25）、論文レビュー報告会（8/26）、研究計画報告会（3/3）、研究成果報告会（3/4）で発表した。今年度の修了生は、次のとおりであった。

(研究者養成コース)

安藤聡美：地域周産期母子医療センターで出産した褥婦への助産師による産後 2 週間健診の精神面への効果の検討 (主指導教員：梅野貴恵、副指導教員：樋口幸)

内倉佑介：呼吸・循環管理が特徴である部署の看護師による胸部単純 X 線画像活用の実態調査－単純 X 線画像学習の看護基礎教育への導入に向けて－ (主指導教員：藤内美保、副指導教員：恵谷玲央)

矢野亜紀子：地方の中小規模病院におけるトップマネージャーの自施設外における学びと看護管理行動および人材育成の関連 (主指導教員：福田広美、副指導教員：村嶋幸代)

(健康科学専攻)

蓮見令奈： β -セクレターゼ欠損マウスにおける成長ホルモン分泌と行動に関する検討 (主指導教員：濱中良志、副指導教員：安部眞佐子)

吉岩舞：介護福祉士を目指す外国人留学生在が経験する困難感についての介護福祉士養成施設の認識に関する調査－校種間比較から－ (主指導教員：影山隆之、副指導教員：丸山加菜)

看護アセスメント学特論

1 年次後期

藤内美保、高野政子、石田佳代子、杉本圭以子

看護職が問題解決過程を展開し、そのための信頼性のあるアセスメントができる能力の獲得を目指し、オムニバス形式で、各教員の専門領域において、アセスメントの基礎理論から応用まで、幅広い観点からアセスメントについて考察できる能力を修得できるよう教授した。1 点は看護過程を展開する場合の看護理論による違いにより、看護診断に違いがあるか、診断過程の違いがあるかなど具体的な事例展開をして、理論の限界や応用について考察した。2 点目は小児のフィジカルアセスメント、家族看護とアセスメント及び看護の実際について考察した、3 点目は災害看護における概念や理論の探求、災害看護の課題とその解決の探求について学びを深めた。4 点目は精神看護におけるアセスメントの講義および事例展開演習により、具体的な方法を学んだ。いずれも、基礎理論を踏まえた看護判断に関する具体的適用方法の課題学習を行い、レポートおよび出席状況により評価した。今後は、本科目の総合的な観点からの学びの共有の必要性を検討していく。

基盤看護学演習

2 年次後期

藤内美保、影山隆之、品川佳満、伊東朋子

基盤看護学演習においては、研究の方法についてさまざまな観点から、その手技方策を具体的に解説し、学生自身がその手法を理解することを目的としている。4 名の教員によるチュートリアル

形式とし、担当教員の専門的な領域から演習形式で行った。「生物生理学的測定法」「アセスメントツールの開発」「精神健康測定法」「自律神経機能とその測定法」にそって、レポートや発表およびディスカッションにより評価した。今年度は新型コロナの影響でオンラインでの授業とした。

生殖看護学特論

1 年次前期

林猪都子

思春期、成熟期、更年期、老年期の各ライフステージにおける女性の身体的、精神的、社会的特徴と看護問題および学生の学習テーマである母性看護学実習や生命倫理について講義し、ディスカッションした。また、現在の日本や海外における母性、助産活動の現状と課題について探求した。

発達看護学演習

1・2 年次前期

高野政子、林猪都子、小野美喜

人間の生涯発達するという立場から本科目では、小児、成人・老年、母性領域の教員が担当している。本科目の講義内容は、受講生の希望で担当教員が決定される。今年度の受講生はリカレントコースの保健師1名であったので、受講生の希望する小児看護の基盤となる理論と看護について、演習課題と交えながら教授した。最初に発達看護学の基礎となる人間発達学や発達理論について講義し、対面で人間と発達について討論した。また、乳児期から思春期に至る発達と看護について教授した。その間、演習課題は、遊びの理論、エリクソンの心理発達理論、家族アセスメント事例検討などをテーマに3つの課題をレポートし発表した。最終課題演習のレポートは「新型コロナウイルス感染症による子どもの発達への影響」という課題を提出した。

広域看護学演習

2 年次

赤星琴美、桑野紀子、福田広美

公衆衛生看護、看護管理、国際看護および公衆衛生領域における最新のトピックスを扱った論文を取り上げ、各教員が分野ごとにチュートリアル方式により演習を行った。

特に、各保健領域での法改正や事業の見直しなど、常に新しい情報を学生へ提供しつつ、学生のプレゼントや討論を取り入れ、具体的に理解できるように工夫した。

NP 論

1 年次前期

小野美喜、高野政子、田村委子、藤内美保、光根美保、村嶋幸代

大学院 NP コース 8 名の学生を対象に開講した。NP コースの学習の導入科目でもあり、NP の理解やコンピテンシー等の基本的知識を教授した。また、グループ・個人学習の発表・意見交換を適宜交え、個々の看護職としての経験から視野を広げる学習展開ができた。科目後半には、特定行為の手順書作成や、海外 NP に関する学習発表などプレゼンテーションと意見交換の場を設けた。COVID-19 の影響でリモート授業ではあった学生交流に支障はなかった。履修者は大学院生として自ら探索する、意見交換する、という能動的な学習姿勢がみられ、全学生が学習目標に到達した。次年度も COVID-19 の影響が考えられるが、学生が授業の内容を自身で深めていけるような授業展開となるよう工夫を継続する。

NP 実習

1 年次前期

高野政子、甲斐博美、小野美喜、草野淳子、堀裕子

COVID-19 感染対応の為、学内実習を 3 日と臨地実習を 2 日実施した（可能な 2 施設のみ）。

学内での実習と NP の診療活動に同行することで NP の役割を理解し、NP に必要な看護実践能力について考察し、自己の学習課題を明確にすることをねらいに 7 名が履修した。学内実習では、診療看護師（NP）や、看護管理領域の教員による講義を実施した。病院や老人保健施設では、NP に同行し、包括的健康アセスメントと看護的治療マネジメントの実際を理解し、施設内における安全管理体制やチーム医療における NP の役割を学んだ。実習終了後のレポートにより、「NP の活動を促進するための医療組織体制と NP に必要な行動・姿勢・態度」「病院・施設における NP の実践と役割」をまとめ、現時点での自己の課題を明確にし修了後の活動についての考察を深めた。臨地実習の制限があるが、今後も学内での実習や隣地とオンラインによる学習等の改善工夫をしていきたい。

老年 NP 特論

1 年次後期

森加苗愛、庄山由美、高根利依子、堀裕子、光根美保

当初の計画から講師や内容を一部変更して実施した。NP としての看護を実践する理論、方法を探究することを目的としてオンラインによる講義を行った。5 名が履修した。講義は各講師が専門とする内容を担当し、また現在活躍している NP から地域中核病院や訪問看護ステーションでの高度実践看護の実際を学び、自己の今後の活動について学び考えることができるように支援した。

小児領域の NP の実践の講義も聴講し、発達段階を老年だけにとどまらずプライマリケア NP として学ぶ足掛かりとした。その後、自己の看護実践事例を振り返り、看護理論や受講した NP の活動を踏まえて、自己の NP としての今後の活動戦略を検討・考察した。

今後の課題は、自己の活動戦略を練るにあたり、活動基盤を分析して課題や強みを把握する能力を高めることと考える。そのために自己の課題とも向き合い、看護実践能力、組織（活動基盤）分析能力、調整力、人間関係能力等総合的に向上できるよう支援するプログラムを更に検討していく。

老年疾病特論

1 年次後期

濱中良志、一万田正彦、財前博文、竹下泰、甲原芳範、加隈哲也、塩月成則、木村成志

NP としてプライマリケアを提供するために、老年期によくみられる慢性期の疾病について病態生理学との関連性を学び、その診断・処方（薬・検査）・治療について知識を教授した。

老年臨床薬理学特論

1 年次後期

吉田成一、伊東弘樹、田中遼大

診断後、医薬品を処方するにあたり必要となる基礎的な薬理学総論および各種疾患の治療に用いる医薬品に関し、作用、副作用、相互作用等の面を重点的に身につけるための講義を行った。医薬品の商品名と一般名の双方を理解できるよう心がけ、講義を行った。

一度提示した処方や注意点については理解できるが、現象を一般化して、多様な条件で判断することに到達しておらず、臨床薬理学という視点での学習内容の習得状況は不十分である受講者が散見された。

履修者（再受験該当者を含む）5名全員が単位を取得したが、2名が再試験での単位取得であった。単位取得率で評価すると、一定の学修修得状況にあるといえるが、本質的理解が進んでいない現状が過年度以前より継続している状況の改善が必須である。特に、講義時間中に実施している確認問題に類似した正誤問題の正答率はほぼ 100%であるが、記述問題等になると正答率が下がる現状は、理解ではなく、記憶力で対応していると考えられる。

老年診察診断学特論

1 年次後期

濱中良志、加隈哲也、糸永一朗、阿部航、安藤優、中村雄介、中村朋子、佐分利能生、溝口博本、宮崎美樹、藤谷直明

プライマリーケアから臨床医学の各専門領域にわたって、専門医師による講義、演習を行った。今年度は、病態生理学との関連性を重視して教授した。

老年アセスメント学演習

2 年次前期

甲斐博美、小野美喜、濱中良志、立川洋一、光根美保、宮川ミカ

コロナ禍のため、老年期（成人期を含む）の対象者への包括的健康アセスメント及び看護的治療マネジメントを行うための専門的知識と技術を修得するために、シミュレーショントレーニングを行うことを目的にオンラインでの演習を展開し10名が履修した。演習では、学生毎に慢性疾患や症状を伴う高齢者（成人を含む）の事例のプレゼンテーションを行い、医師とNP修了生の講師から、情報を整理しアセスメントすることを通して臨床推論能力や、必要な検査の選択と結果の解釈、診断、ケアプランの作成の助言や指導を受けることができた。修了生である診療看護師からは、看護マネジメントに必要な能力の促進することができた。今後もオンラインを活用して臨床の症例から臨地に近い形の演習ができる体制作りを整えていく。

老年薬理学演習

2 年次前期

甲斐博美、塩月成則、大仲將美

コロナ禍のため、オンラインで症例毎にディスカッションを行い、病態の理解や検査や処方判断、治療マネジメントも含めた薬理学を学ぶことができた。演習では老年領域におけるNPの役割を理解し、必要とされる薬理学に関する高度看護実践能力を獲得するようにと動機付けを行った上で導入した。1事例に対し複数名の履修生がプレゼンテーションすることにより、事例をより深めて学べ、オンラインを活用しての小テストも導入したことで、知識の定着に繋がった。演習の症例には特定行為に係る内容も含まれ、並行して履修する老年アセスメント学演習との相乗効果で学習の到達度をあげることができた。今後は、近年の高齢者医療の課題であるポリファーマシーの事例を取り入れた演習ができる体制作りを整えていく。

老年実践演習

2年次前期

甲斐博美、足立綾、石田佳代子、恵谷玲央、小野美喜、草野淳子、迫秀則、佐藤博、高野政子、竹内山水、田村委子、藤内美保、中村雄介、平井健一、藤谷悦子、古川雅英、堀裕子、山本真

コロナ禍で日程変更が相次いたが、講師の先生方が柔軟に対応して下さい、また、病院施設での演習が多い為、感染予防対策を十分に講じた上で、目標である対象者への看護的治療マネジメントを行うための専門的知識と、技術を修得するために、シミュレーショントレーニングを行う演習ができた。加えて、今年度は特定行為パッケージ化に向けての移行期として、M1もM2と一緒に一部参加することもできた。このシミュレーション演習は、補講実習で実際に特定行為を実践する時に、役立ったとの学生からの評価も得た。来年度からは、eラーニングシステムを活用して、事前にeラーニングで学習して、テストで100点になってから参加する体制を整えていきたい。

老年 NP 実習 I

2年次前期

甲斐博美、石田佳代子、小野美喜、藤内美保、濱中良志、光根美保、森加苗愛

今年度もコロナ禍の影響を受け4名は学内実習4週間から開始となり、病院施設4週間の実習を行った。他6名は8週間の病院施設実習を行うことができた。カンファレンスで臨地実習組の事例や特定行為の実践を共有し意見交換の内容から、学内実習組と臨地実習組との学びに差はなかったと考える。老年NP実習Iでは病院実習で基本的な診療を学び、特定行為のみならず、判断やアセスメント、臨床推論の能力を強化することを目標に実習を行った。また、記録量を調整するために実習開始後より、特定行為事例よりも事例展開を行うことに重きを置いた。来年度も、コロナ禍での実習が続くと考えられるため、修了生NPから事例提供を受け遠隔での指導を受けられるような体制作りを整えていく。

老年 NP 実習 II

2年次

甲斐博美、小野美喜、濱中良志、堀裕子、光根美保、森加苗愛

老年NP実習IIは、感染状況が少し落ち着き10名全員、3週間の臨地実習と1週間の学内実習を行うことができた。診療所外来では軽微な症状の初期診療・慢性疾患の診療に関して、また指導医の訪問診療・往診に同行し、在宅で継続診療について学ぶことをねらいとしている。訪問診療などは厳重な感染対策を講じて同行させていただき、医師からの指導の元で医療面接や身体診察などを実施し、在宅での継続療養中の患者に対する包括的アセスメントを学んだ。次年度も感染の動向により、学内実習となることが考えられ、医師からの遠隔指導が受けられるように体制を整えて

いく。

老年 NP 実習Ⅲ

2 年次

甲斐博美、小野美喜、濱中良志、堀裕子、光根美保、森加苗愛

老年 NP 実習Ⅲは、感染状況が少し落ち着き 10 名全員、2 週間の臨地実習ができた。入所している高齢者およびデイケアに参加する在宅高齢者の包括的アセスメント、看護的治療マネジメント（特定行為を含む）を実施することと、急変を含めた健康状態の変化を早期発見し、医療的処置の必要性判断と実施をすることをねらいとした。また、担当となる対象者に対しての看護的治療マネジメント、医療面接や身体診察を通じて包括的アセスメント能力を強化した結果、実際に骨折の早期発見に繋がる事例もみられた。次年度も感染状況によっては、オンラインを活用した臨地との統合による学びの体制を整えていく。

老年 NP 探求セミナー

2 年次後期

小野美喜、甲斐博美、濱中良志、堀裕子

老年 NP コース 10 名が履修した。老年 NP 実習で担当した症例を振り返る①ケースレポート作成、②特定行為技術のシミュレーショントレーニング、③診療所や老人保健施設などで展開される在宅医療の学習、これらを組み合わせて各学生が学習計画を立案し履修した。教員は学生の学習を支援し、適宜助言をした。学生の習熟度と次課題の準備性が整い学習目標は概ね達成できた。より学習が充実できるよう個々の学生の計画立案時の介入を検討していく。

フィジカルアセスメント学特論

1 年次前期

藤内美保、石田佳代子

クライアントの包括的・全身的な身体的健康状態のアセスメント能力を高めることを目的に教授した。適切なスキルのもと観察ポイントや根拠に基づいた判断できる能力を確実に身に付けるため、五感を駆使した問診、視診、触診、打診、聴診の基本技術を基本に理論と実践を学んだ。全身、頭部、頸部、胸部（肺および心血管系）、腹部、直腸、四肢、神経系のフィジカルアセスメントを系統的に実施した。COVID-19 の影響によりオンラインで学生が担当を決め、事前学習をしてプレゼンテーションとディスカッションをした。演習では異常な状態把握ができるようにフィジカルアセスメントモデルのシミュレーターを使用し、確実なスキルとその根拠を修得できた。試

験は中間試験と総合試験を実施し、それぞれ筆記試験および OSCE を行った。

学生の授業アンケートでも、満足度は高かったが、教員の説明時間をもう少し確保してほしいという要望があり、次年度改善する。

小児 NP 特論

1 年次後期

高野政子、草野淳子、大末美代子、佐々木真理子、黒木雪江、後藤愛、松本佳代

講義は科学的根拠に基づいたケアを展開できる実践能力を高めるために、小児の成長発達と発達課題を基本的・理論的に理解し、NP（診療看護師）としての看護実践する探求的視座を持つことを目的として行った。講師は大学教員の他、臨床実践で小児を対象に活動を行っている糖尿病認定看護師、訪問看護認定管理者、小児 NP（診療看護師）などが行った。

最終回で小児 NP の実践活動を紹介してもらい、学生が将来の NP の活動をイメージできるように討論した。このことにより、学びを深めることができたため、来年度もこの取り組みを行う。

小児疾病特論

1 年次前期

高野政子、大野拓郎、久我修二、福永拙、井原健二、岡成和夫、末延聡一、糸永知代、井上真紀、保科隆之、関口和人、清田晃生

小児に適切なプライマリケアを提供するために、小児期によくみられる疾病について学び、その診断・治療（検査・処方）について理解することを目的に行った。地域の医療機関で小児の診察を行っている各専門領域の医師がオムニバス形式で講義した。最後に筆記の試験を行い理解度を評価した。講義内容は適切であった。

小児臨床薬理学特論

1 年次前期

高野政子、吉田成一、松本康弘

医薬品についての知識に必要な薬理学の概要や薬物動態など基礎的な薬理学総論を学んだ。後半は小児疾患に対する薬物療法を理解し、小児の薬用量、服薬指導などの知識を学んだ。特に小児に多い発熱、下痢や腹痛、アレルギー等の疾患の治療に用いる医薬品の作用、副作用、相互作用などを理解し、小児の特殊性に焦点を当てて講義した。最後に筆記試験を行い評価した。

小児診察診断学特論

1 年次前期

高野政子、江口春彦、別府幹庸、井原健二、前田知己、岡成和夫、大野拓郎、久我修二、長濱明日香、小林修、末延聡一、石和翔

小児の臨床における診察や診断の臨床推論能力を身につけるために、小児の全身的な臓器・器官ごとに必須の知識や技術について理解することを目的に行った。地域の医療機関で小児の診察を行っている小児科医がオムニバス形式で講義をした。最後に筆記試験を行い、知識の習得状況を確認した。

小児アセスメント学演習

2 年次前期

高野政子、草野淳子、大野拓郎

小児期の対象者への包括的健康アセスメント及び看護的治療マネジメントを行うための専門的知識と技術を修得するために、シュミレーショントレーニングを行うことを目的に演習を展開した。まず、臨床推論の考え方と記載方法を学び、次に紙上事例について4事例を展開した。学生は4事例についてプレゼンテーションを行い、それを踏まえて医師や教員が指導をした。この演習を行うことで包括的健康アセスメント能力を身に付けることができた。

小児薬理学演習

2 年次前期

高野政子、草野淳子、松本康弘

小児領域における必要とされる薬理学に関する高度実践能力を獲得するために事例によるシュミレーションを通して学んだ。症例を通じて、病態の理解や処方判断を演習で強化した。知識修得と演習を行うことにより学生の理解は深まった。最後に試験を行い、学生の理解度を確認した。

小児実践演習

2 年次前期

高野政子、古川雅英、佐藤博、迫秀則、前田徹、竹内山水、山本真、田村委子、藤谷悦子、草野淳子、恵谷玲央、平井健一

集中演習及び主体的な訓練プログラムにより、初期診療で頻繁に遭遇する疾病に対する診察・治療技術の習得を目指した。シュミレーターを用いたフィジカルアセスメント技術、超音波検査など

の医療機器を使用した診察・検査技術の習得、創傷主知、胃瘻カテーテルの交換などの治療技術について安全確実に実施できるようにした。NP としての実践力を養うことができた。

小児 NP 実習 I

2 年次前期

高野政子、草野淳子、大野拓郎

プライマリ診療を行う場で実践力を身に付けることを目的に小児 NP 実習を展開した。総合病院 8 週間の実習とし、小児病棟や小児外来にて臨床推論能力を養うために、医師の診療の場に参加した。具体的には医師の回診に同行して、診察技術や臨床推論力を身に付けるため、医師よりの指導を受けた。毎日、実習記録を教員に提出し、学生の実習目的の修得状況を確認した。

小児 NP 実習 II

2 年次後期

高野政子、福永拙

医療型障害児入所施設で実践力を身に付けることを目的に小児 NP 実習を展開した。施設 4 週間の実習とし、小児病棟や小児外来にて臨床推論能力を養うために、医師の診療の場に参加した。具体的には医師の回診に同行して、診察技術や臨床推論力を身に付けるため、医師よりの指導を受けた。また、特定行為の実施の場にも参加した。毎日の実習記録を教員に提出し、学生の実習目的の修得状況を確認した。

小児 NP 実習 III

2 年次後期

高野政子、草野淳子、長濱明日香

プライマリ診療を行う場で実践力を身に付けることを目的に小児 NP 実習を展開した。診療所 2 週間の実習とし、小児外来にて臨床推論能力を養うために、医師の診療の場に参加した。具体的には医師の診察に陪席・往診に同行して、診察技術や臨床推論力を身に付けるため、医師よりの指導を受けた。毎日、実習記録を教員に提出し、学生の実習目的の修得状況を確認した。

小児 NP 探求セミナー

2 年次後期

高野政子、草野淳子

小児 NP 実習 I・II・III が終了後に、実習での包括的健康アセスメント、治療的看護アセスメントの総括として 5 日間で 1 事例のまとめを行った。パワーポイントに臨床推論の過程をまとめ、他学生や教員の前で発表し、意見交換した。発表の内容を修正し、評価を行った。

広域看護学概論

1 年次

赤星琴美、小野治子、川崎涼子、木嶋彩乃、佐藤愛、藤内修二、村嶋幸代

地域社会におけるヘルスプロモーションおよびプライマリヘルスケアの概念やそのアプローチ方法、健康の保持・増進を支援するための理論と概念、活動方策を教授した。また、地域保健領域で活用可能な理論について、学生それぞれがプレゼンテーション、ディスカッションを行い、理論の解釈だけでなく、実践での活用方法について探求した。学生の発表では、学生間での活発な意見交換ができ、来年度も同様の形式を実施したい。

地域保健特論

1 年次

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、桑野紀子、佐藤愛、久澄千里

保健師がおこなう支援の基本的な考え方を理解し、人びとが生活している地域における看護の役割と機能を理解できるよう講義した。また、学生間の討議の機会をもち、個人を対象とした支援から地域社会全体を対象とした支援までの保健師活動方法について意見交換を行い、実践的な活動方法について理解を深めた。

産業保健特論

1 年次後期

赤星琴美、高波利恵、吉田愛

労働環境および作業上の諸条件から発生しやすい疾病・障害を防止し、身体的・精神的・社会的健康と福祉を維持増進するための産業保健システム、活動、看護の位置付けと役割、具体的な活動方法をヘルスプロモーションや産業保健に関する理論およびモデルを用いて講義を行った。また、企業で働く保健師より、職域における保健師活動の現状と課題について実際の活動事例を示しな

がらディスカッションを含めた講義を行った。次年度に行われる広域看護活動研究実習（産業分野）と連動するよう講義内容を構成した。

学校保健特論

2 年次

赤星琴美、小野治子

学校保健安全法に基づく学校保健のあり方と、学校保健を担当する専門職、特に養護教諭の役割と機能について教授した。現在の学校が抱えている健康課題や地域の保健師との連携の取り方など実際の状況について各学生が調べ発表した。さらに最新の文献を用い、変化する子どもの健康問題に対応するための地域保健の連携や組織的な解決手段についてディスカッションを通じて考えを深めた。

健康危機管理論

1 年次後期

赤星琴美、小野治子、佐藤愛、木嶋彩乃、玉井文洋、本山秀樹

地域社会における健康危機管理（災害時保健活動を含む）に関する基本的な考え方の理解を深めることができるよう、実際の事例を用いた講義を行った。さらに、基本的な考えを応用できるよう、事例の検討、学生の発表やディスカッションを取り入れた。県健康危機管理の経験者や大分 DMAT で活躍している講師による講義を通して、大規模災害発生時等の実際の対応についての講義を取り入れ、実践へと応用できるよう講義内容を構成した。

健康増進技術演習

1 年次

関根剛、稲垣敦、安部眞佐子

3名の教員により、年間を通じて、運動指導6回、栄養指導7回、心理相談8回の合計21回の講義を Zoom による遠隔講義により行った。講義内容は重複しない異領域であり、それぞれが独立した形式で行っており、評価もそれぞれのものを合計して総合的な評価としている。受講者は5名と少人数であったため、全員の顔を確認しながらビデオでの対面、随時の質疑など対面に準ずる環境での講義が可能であったものの、実際の実験器具や検査用紙などを手にとって見せることができない等の課題は残った。遠隔講義が続く場合、講義時間範囲外に手にとって見る機会を作るなどの工夫が必要と思われる。

広域看護アセスメント学演習

1 年次前期

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、佐藤愛、村嶋幸代、高城翔平

地域看護診断の基礎的考え方や方法論を教授した。地域の既存資料や地区視診を行うことで、対象集団の理解やニーズを多面的にアセスメントし、地域の抱える健康課題、地域住民の健康課題を抽出し、支援方法を立案する演習を行った。また、大分県国民健康保険団体連合会の担当者により、国民健康保険データと KDB システムの理解を深める講義・演習を実施した。さらに、「地域マネジメント実習」を行う対象の市の二次データを用いて地域看護診断演習を行い、2 回の中間報告で学生や教員との討議を重ね、活発な意見交換を行い、実習科目との連動を図った。

精神保健学特論

1 年次前期

影山隆之

精神保健の基本的な考え方、つまり精神健康のモデルと評価法、精神保健の法制と政策、最新の自殺対策等について講義した。とくに広域看護学コースでは、行政保健師・産業保健師に必要な内容として、実践的なインテイクの方法と事例アセスメント、職場メンタルヘルス活動の実際などを紹介した。他方、研究者・リカレントコースには別途、夜間開講し、災害メンタルヘルスなど受講者の関心が高いトピックスを加味した。すべてリモート形式で開講し、昼間働いている夜間履修者も欠席なしで受講できた。

健康教育特論

1 年次前期

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、佐藤愛

個人と集団が、自らの健康の維持増進のための主体的な取り組みが行えるための支援方法について講義を行った。必要な知識・技術を対象者に効果的に伝達できる能力を習得できるよう講義と演習を組み合わせ教授した。また、理論の活用し個人・集団・組織に教育的に働きかける方策と保健師の地区活動の展開方法について教授した。また、家庭訪問指導や集団に対する健康教育では、一人で企画、指導案の立案、実施のデモンストレーションを行い、学生と教員間で討議し、さらに修正していくという過程を踏むことで学習を深めた。

健康リスクアセスメント演習

1 年次後期

赤星琴美、小野治子、佐藤愛、木嶋彩乃

個人、家族、集団が抱える潜在的な健康問題（リスク）を的確に予測し、保健師としてのリスクマネジメント、支援のあり方を習得するために講義と結核事例や感染症事例を用いて演習を行った。学生が各事例について発表、討議することで、対象者または対象集団がリスクを予測し、自らリスクマネジメントができる支援方策を深めることができた。

疫学特論

1 年次前期

佐伯圭一郎

人間集団における健康事象の頻度分布とそれに影響を与える多様な因子を分析するために不可欠な疫学の理論と実践の手法を教授した。テキストの講読とディスカッション、演習、確認のための小テストを組み合わせ学習の定着をはかった。さらに保健師としての活動で特に必要度の高い調査手法とその具体例について理解を深めた。一部オンラインで実施したため、演習を含む内容について実施がやや困難であったが、その部分を対応する疫学・保健統計学演習で実施することにより対応した。

保健統計学

1 年次前期

佐伯圭一郎

健康情報の調査法とその概要、ならびに分析法について、その発生源から取り扱い、解釈に至るまで体系的に扱った。また、それら健康情報を適切に整理・分析するための生物統計学の手法を演習を交え教授した。生物統計学についてのテキストを一昨年と同じものに戻したことにより、内容としては十分なものになったが、履修者のレディネスの違いへのフォローが十分でない点が反省される。今後は事前の評価により、履修者個別の準備状況を考慮した課題や指導なども検討が必要であろう。

疫学・保健統計学演習

1 年次後期

佐伯圭一郎、品川佳満、渡邊弘己

疫学特論および保健統計学と連続した内容として、習得した知識を活用して実践する能力を身につけることを目的として演習を行った。また、保健師業務に必須である ICT 技術を身につけ、情報収集・分析・発信に活用できる能力を養った。

社会保障システム特論

1 年次前期

平野互

保健師の活動に不可欠な知識である社会保障制度について、その意義および理念と構造に対する理解を深めるために講義を構築した。社会保障の存在理由である生存権の意味と法・行政など社会制度の位置づけ、諸制度の内容と課題を理解することを目的に、総論として法と行政の構造、財政の仕組み、社会保障理念の変遷について論じ、次いで各論として、所得保障の諸制度、医療制度とマンパワー、医療の安全管理、公衆衛生施策の体系、高齢者の保健とケアの制度、児童福祉、障がい児・者福祉の諸制度について講義した。今年度もコロナ禍の中にあっただが、少人数の講義であったため、広い教室で対面での双方向型授業を行い、学生の積極的な発言を促した。来年度も同様に対面での双方向型の講義を考えている。成績評価は、講義内容に関連して中間と期末の 2 回、情報を収集し考察を行うレポートにより行った。

保健医療福祉政策論

1 年次後期

平野互

保健師の職務に必要な政策形成、企画立案の能力を涵養する目的で、保健・医療・福祉の基本的な政策理念と政策上の課題、社会保障財政の現状と課題、障がい論とくに社会モデルの意味と課題、自立支援について講義し、さらに事業評価ならびに地方行政における政策形成については、理解を深めるために、教員自身の経験した事例（保健事業評価、社会福祉事業第三者評価および県条例策定）を基に実務の現実を紹介した。コロナ禍の中にあっただが、少人数の講義であったため、広い教室で対面での双方向型授業を行い、学生の積極的な発言を促した。来年度も同様に対面での双方向型の講義を考えている。成績評価は、大分県内の保健・医療・福祉に関する基本計画を検索、整理して課題分析を行うレポートにより行った。

疾病予防学特論

1 年次前期

池邊淑子、藤内修二、三浦源太

さまざまな健康レベルにある個人、集団を取り巻く家族、集団、社会の健康状態を的確に判断・評価する能力を身につけるために、解剖・生理学、疾病病態学、フィジカルアセスメント、臨床検査法等、診断治療学などの医学的な知識を教授した。また、疾病予防のためにエビデンスに基づいた保健師としての健康教育・健康相談の実践活動ができるようにするために、特定健診の検査結果を解釈するために必要な知識、および実践能力を取得できるように、医師の講義により教授した。

実践薬理学特論

1 年次前期

吉田成一

生体内に投与された薬物の生体への影響（薬力学）と、生体内に入った薬物の生体処理法（薬物動態学）を理解し、薬害と有害作用、処方概要と投薬設計、治療効果と副作用についての基礎知識に関する講義を行った。特に生活習慣病を中心とした疾患（糖尿病、高脂血症、高血圧症など）に対する主な治療薬の作用機序、副作用、注意事項など、保健指導に活用できる実践薬理学の基礎知識が習得できるような講義内容とした。また、医薬品の治療効果に関する論文データの見方、意味を評価できるような講義も行った。

本年度は受講者が5名であったが、受講者の学修状況に差は認められず、学修修得状況も高かった。次年度以降も継続した状況としたい。

薬剤マネジメント学特論

1 年次

井上真

地域で治療や服薬指導に関わる看護職として、薬剤コンプライアンスの基礎知識を学ぶとともに、ノンコンプライアンス者とその家族への処方内容・指示に関する指導、家庭での薬剤管理（残薬管理等）と服薬方法などについて実践に繋がる知識が得られるよう教授した。保健師の保健指導に必要な知識などについて、具体的な理解の定着を図るために講義ごとの前回の小テストと振り返りをおこなった。来年度も同様に小テストを取り入れていきたい。

環境保健学特論

1 年次後期

甲斐倫明

健康と物理的要因（電離放射線、電磁界）、化学的要因（化学物質）、生物的要因（ウイルス）および社会的要因との関係について、基礎を整理した講義を行った。特に COVID-19 に関する JAMA の 89 Viewpoint の最新のニュースの論文を学生に割り当て、学生が論文の概要をプレゼンすることで最新知見の現状と課題を理解するように指導した。オンラインによるプレゼン後の討論においては、学生の考えを積極的に発言できるよう対話形式を重視した。来年度も積極的な討論ができるよう工夫する必要がある。

地域生活支援実習

1 年次

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、佐藤愛、村嶋幸代

個別ケースを通して、対象者とその家族が地域で暮らしていけるように、ケアマネジメント、地域ケア資源の活用方法について考えることを目的として県内 4 か所の市町及において保健師に同行あるいは院生単独で訪問し、実習を行った。6 月から 3 月までの 10 か月間に合計 4 回～6 回の訪問を行い、成果報告会を 2 月 3 日に行った。実習前、実習中にはカンファレンスを行い、実習目標の検討、方法の共通理解と評価の共有を行うなどして連携をとった。

地域マネジメント実習

1 年次

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、佐藤愛、村嶋幸代

広域看護アセスメント学演習や健康教育特論の演習や発表と連動し実習が効果的に行えるように組み立てた。地域看護診断では、地域全体の健康課題の解決に向けた地域活動支援を実施し、評価ができる能力を養うことと、地区組織化活動や地区管理を通して、関係者・関係機関との連携・調整・交渉などができる能力を養うこと、地域資源の過不足をアセスメントする力を養うことを目的に実習を展開した。県内 5 か所の市町において、4 週間の合計 20 日で構成した。5 名の学生が履修し、実習指導保健師の指導を受けながら実習を行った。9 月 30 日に実習施設だけでなく、大分県国民健康保険団体連合会、全国健康保険協会大分支部、大分県福祉保健部医療政策課の方々の参加を得て、実習成果報告会をオンラインにて開催し、実習成果の共有とともに各市町の健康課題についての意見交換を行った。

広域看護活動研究実習

1 年次後期、2 年次前期

赤星琴美、小野治子、木嶋彩乃、佐藤愛、村嶋幸代

開発すべき社会資源や健康政策・保健医療福祉システムについて考察・探求し、地域社会の健康づくりの組織者として、個人のみならず地域社会全体の QOL を向上させる活動について研究的視点を持ちながら実行できる能力を養うことを目的に実習を展開した。

広域看護活動研究実習 I では、県内の保健所および市において、準備期間、まとめ期間を含む 5 週間実習を行った。4 名の学生が履修し、実習指導保健師の指導を受けながら実習地で現在進行形の課題を実習テーマとして取り組んだ。12 月 16 日にオンラインにて、実習成果報告会を開催し、実習指導保健師だけでなく、国保連合会、協会けんぽ等からも参加を得て実習成果を共有した。

広域看護活動研究実習 II では、県内の企業 4 か所（大分キャノンマテリアル株式会社、大分キャノン株式会社、株式会社大分銀行、ソニー・太陽株式会社）、大分労働衛生管理センターで職域における産業保健実習を行った。また、由布市地域包括支援センターにおいて地域包括支援センターの機能と保健師の役割について学ぶ実習を行った。

助産学概論

1 年次前期

梅野貴恵、林猪都子

助産の基本概念および女性をとりまく社会的背景を認識し、助産師の責務と社会で期待される役割と重要性について、さらに助産師活動に取り組む姿勢・態度や助産師のキャリアラダーについて系統的に教授した。新カリキュラムによる令和 5 年の助産師国家試験に備え、「プレコンセプションケアの概念や内容」を教授内容に追加した。COVID-19 感染状況をふまえて、講義形式の内容は Zoom を使用し、パワーポイントを用いて教授した。2~3 名の学生グループによる事前課題のプレゼンテーションを行い、ディスカッションを行う方法も実施した。「女性を取り巻く社会の変化、親子関係をめぐる問題」では、女性とその家族の性と生殖に関わる課題を述べ、女性やその家族に対する助産師としての支援を具体的に調べ発表した。また個別課題の研究論文のクリティークや『WHO 勧告にみる望ましい周産期ケアとその根拠』等の資料を用いたディスカッションを通して、助産とは何か、妊産婦が望む出産、社会に求められる助産師の役割について自己の考えを述べることはできていた。次年度は新カリキュラムに対応し、内容の精選を行う。

周産期特論

1 年次前期

梅野貴恵、飯田浩一、後藤清美、佐藤昌司、豊福一輝

講義内容は周産期における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得を目指して産科医師・新生児科医師を講師とした。妊娠・分娩・産褥・新生児の生理とその医学的管理についての基礎知識、さらに周産期における異常の判断をするために、産婦人科診療ガイドラインに基づき、疾患の病態・検査・治療や NICU における新生児管理、新生児救急蘇生法について教授された。評価は、筆記試験を実施し全員合格した。

母子成育支援特論

1 年次前期

梅野貴恵、井上祥明、上野桂子、宇留嶋美弥、桑野紀子、佐藤敬子、高野政子、平野亙、吉村匠平

女性のライフサイクルにおける性と生殖の問題である不妊や出生前診断、生命倫理などの母子とその家族をとりまく様々な問題、国内外の子育て支援制度など助産師活動を実践する上で基盤となる内容を教授した。学内外の専門家を講師とするオムニバス形式で実施した。子育て体験は、感染対策の上、夏期休業中に育児体験人形を自宅に持ち帰り、学生がおむつ交換、授乳やあやすなどの子育てを 24 時間体験した。初めての子育ての困難さなど母親の心理を理解する機会となった。また、地域で活躍する開業助産師の活動を聴き、病産院以外の助産師の活躍の場を学ぶことができた。評価は、各講師によるレポート課題等の評価で行った。

リプロダクティブ・ヘルスト論

1 年次前期

梅野貴恵、井上貴史、井上尚美、宇津宮隆史、竹内正久、中村聡、花田克浩

講義内容は助産の基礎知識として、女性の性と生殖の健康における正常・異常を判断するために必要な最新の医学的知識と技術の習得のために産婦人科医師と遺伝の専門家を講師とした。性・生殖器に関する形態機能から主な疾患及び治療に対する基礎知識、遺伝疾患や遺伝カウンセリング、最新の生殖補助医療の現状と課題、ワクチン接種等の予防を含めた子宮頸癌の動向や今後の展望についても教授された。評価は、筆記試験を実施し全員合格した。

ウィメンズヘルス特論

1 年次前期

梅野貴恵、市瀬孝道、甲斐倫明、影山隆之、桑野紀子、實崎美奈、林猪都子

女性の生涯を通じた健康づくりを視野にリプロダクティブ・ヘルスを推進するために女性のライフサイクル全般における性と生殖に関わる心身の健康問題や環境・社会問題を理解し、健康相談や教育を実施するための知識や技術を教授した。講義は、講師の専門性を活かしたオムニバス形式、一部 Zoom で実施し、発表やレポート課題で各講師からの評価を得た。

妊娠期診断技術学特論

1 年次前期

姫野綾、安部眞佐子、梅野貴恵、小嶋光明、吉田成一、渡邊しおり

妊娠期の経過及び生活状態に関する情報収集に必要な基礎的な知識と実践の手法、そして、薬理、栄養、放射線障害などの知識を教授した。事例を用いたアセスメントを行うことで、正常逸脱を予防するアセスメントと助産技術の重要性及び妊婦とその家族を取り巻く環境の理解を深めた。ハイリスク妊婦への支援においては、事前課題を提示した。自己学習後に講義に臨むことで、予防的視点を意識した看護について考える導入となった。さらに、課題を皆で振り返る時間を確保したことが学生の理解を深めることに効果的に働いた。コロナ禍の為、オンラインでの講義が殆どであったが、そのような環境下でもディスカッションや自己学習したことを共有する場を設けることで、学生間の意見交換の機会にもなった。しかし、ディスカッションの盛り上がりには欠けたため、その点の改善点が必要である。

分娩期診断技術学特論

1 年次前期

樋口幸、生野末子、姫野綾

分娩期の経過及び生活状態に関する必要な情報を収集するためのフィジカルアセスメントや助産診断を行うための基礎的な知識及び助産技術を習得することを目的にしている。今年度の入学生の全員が COVID-19 の影響で母性看護学実習を行えていないか、もしくは分娩見学が行えていなかった。例年であれば講義開始前に分娩見学を実施するが、その機会も設けられなかったため、講義に DVD や視聴覚教材を多く取り入れ、臨床場面をイメージしやすいように工夫した。さらにローリスク分娩、ハイリスク分娩、緊急時の対応について、模擬事例を用いたシミュレーション教育を取り入れた。学生は、母子の安全をと満足いく分娩という視点を持ち、対象理解と状況把握が重要であることを学び、正常からの逸脱を迅速かつ的確に判断し、他の周産期医療専門職種と連携して緊急性の高いニーズにも対応し得る助産師としての基本的な知識及び技術を習得できた。

しかし、妊娠・分娩・産褥・新生児期を継続的にアセスメントし、予防的な助産ケアに繋げる視点は弱い。次年度以降は、多様化する母子とその家族に対する多職種との連携や継続的な支援の在り方と助産師の役割についても必要がある。

産褥・新生児期診断技術学特論

1 年次

樋口幸、姫野綾

産褥期にある女性と新生児、乳幼児の健康状態を包括的にアセスメントし、褥婦のセルフケア能力を高めるための支援や新生児の胎外生活適応過程のケア方法を教授した。また、身体的・精神的・社会的ハイリスク状態にある母子とその家族に対する他職種や地域との連携の実態と課題については、講義とグループディスカッションを組み合わせ実施した。学生は積極的に講義、演習に参加し、産褥期と新生児・乳幼児期の心身の生理的変化についての基礎知識を習得した。また、母乳育児の支援方法については、実際の事例や場面を想定し、学内の乳房モデルや模型を使用して乳房トラブル予防のためのマッサージ（堤式）方法や授乳指導の演習を行った。さらに、退院指導では、産後 2 週間での家庭訪問の内容充実を目標に指導案を作成し、パンフレットを用いて、ロールプレイを実施した。対象者が産褥期の生理的変化や退院後の育児・生活をイメージできるための工夫について、学生同士で活発なディスカッションとリフレクションができた。その中で、対象者の生活背景に合わせた個別対応の困難さと継続支援の重要性を理解できた。次年度は、個別性のある支援と継続的なかわりがイメージできるように、産後ケア事業や社会資源の活用も含めた教材・事例の工夫を行っていく。

周産期診断技術演習

1 年次

樋口幸、安部真紀、梅野貴恵、軽部薫、佐藤昌司、姫野綾

妊産褥婦と胎児・新生児の健康状態をエビデンスに基づいて診断する技術と、具体的な支援方法について教授した。COVID-19 の感染予防対策として、演習は少人数で分散して実施したが、学生間の学びの共有ができるようにリフレクションの時間を ZOOM で設けた。胎児の健康状態の診断は、超音波診断機器と高機能シミュレーターを用いて胎児の計測や奇形の有無などから成長・発達、健康状態の診断、異常の早期発見に関する知識と技術を習得し、OSCE で到達度チェックを行った。また、胎児の健康状態を診断するために、実際の CTG 波形から児の状態を判読し、適切に対応できる能力を養った。新生児蘇生法は、アルゴリズムに沿って迅速かつ正確な蘇生処置が行えるよう、新生児シミュレーターを用いて、出生直後の処置、呼吸確立、胸骨圧迫に至るまで技術演習を実施した後、日本周産期・新生児医学会の新生児蘇生法「一次」コースを受験し、全員合格した。さらに、妊娠中のマイナートラブルの緩和や出産・育児に向けた心身の準備・体力づくりの

ための方法として、マタニティーヨーガやマタニティーピクス、骨盤矯正や産褥体操について、解剖生理も含めて学び実際に体験も行った。学生は、刻々と変化する母子の経過をアセスメントするための基礎知識と観察技術、状況に合わせた迅速な対応力を習得できた。次年度は、現状把握から今後の予測し予防的に行動するという、臨床での一連の思考と行動を意識して演習の構成を検討する。

助産保健指導演習

1 年次後期

姫野綾、梅野貴恵、種恵理子、林猪都子、樋口幸、矢野杏子

女性のライフサイクルにおける性と生殖に関する問題を理解した上で、保健指導案の立案及び実践方法を教授した。妊娠期、産褥期の保健指導や受胎調整指導の演習を行った。妊娠期・産褥期の保健指導では、指導案立案と共に教材作成後、模擬患者への実施を行った。妊娠期の保健指導は、演技経験のある模擬妊婦への個別指導を実施し臨場感を出す工夫を行ったが、一方的な指導となりがちであった。対象者の反応や日常生活をイメージしながら保健相談、健康教育、援助活動の効果的な実践が実施できる能力を養うには、効果的な保健指導をイメージできるような改善が必要であるため、次年度は教員による保健指導のロールプレイを実施しイメージギャップを埋める工夫を行う。コロナ禍の為、小学校における性教育実践の機会は無かったが、実施を前提とした指導案を作成し学習を深めた。次年度以降もコロナ禍であることが予測され、小学生への実施の機会を設けることが困難である事が考えられる為、対象がいることを想定した演習を実施・録画し、学生と教員でリフレクションを行う等、学習方法を工夫することが次年度以降の課題である。

分娩期実践演習

2 年次前期

姫野綾、梅野貴恵、種恵理子、樋口幸、矢野杏子

昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大防止策を行いながら演習を進めた。自己学習素材として教員間で作成した分娩介助場面の動画を活用し自己学習することで、デモンストレーションの機会を減らした。さらに、実習施設毎に時間をずらして練習を行う等、集団になる機会を減らす対応を行いながら学習を深める対応を行った。自己練習時間は例年に比べ短時間となったが、事前の動画学習が効果的に働き、分娩介助 OSCE は 1 回で全員が合格した。事例を用いた分娩入院時の対応シミュレーションは、実習室で距離を保ちながら実施した。実施後は、リフレクションを行うことで学生が自分の行動を振り返る機会となるだけでなく、学生や教員でディスカッションをすることの重要性を理解する機会となり良い学習となっていた。分娩第一期の心音低下のシミュレーションも例年実施しているが、こちらは接触の機会も増える為、事例設定場面について各自で事前に考察し、オンライン上でディスカッションを行った。オンライン上ではあったが、心音

低下時の対応について学習を行うことで、実習場面で生じた際にどのように行動するかを考え、実習に活かせる演習となった。助産学統合実習終了後に、フリースタイル分娩介助・会陰切開縫合術の演習を計画していたが、こちらはオンラインで学習を深めるのは困難な為、今年度は実施することが出来なかった。次年度もコロナ禍であることは予測されるため、オンラインでも学習が深まるよう動画を作成するなど、工夫を行う。

助産過程展開演習

1 年次後期

樋口幸、梅野貴恵

助産を実践するための基本的な助産過程の展開について、実際の事例を用いて実践に応用する思考過程を教授した。まず、講義形式で助産診断の概念・助産診断のプロセスを教授した後、妊娠期の異常事例、分娩期の正常事例とハイリスク事例の 3 つの事例について助産過程を展開した。事例の展開方法は各自で自己学習したのち、2 名ずつのグループで『実践マタニティ診断』の診断指標についてディスカッションし発表した。演習の中で、これまで学習してきた知識を使って思考・アセスメントを行っていた。分娩期の事例は、初期診断だけでなく数時間経過後の状態の情報（パルトグラム）を追加し、経過診断の修正と初期診断計画の修正を行い、ハイリスク事例は分娩進行中に医療介入（点滴誘発）が実施された場合の診断名、計画の修正を取り入れ、臨床推論力を強化した内容とした。提出されたレポートから、妊娠期および分娩期における母児の安全・安楽を保障するために、妊産婦の身体的・心理的・社会的健康状態、胎児の発育・発達および健康状態について判断し助産診断名を記述できていた。しかし、問題志向型の傾向がみられたため、今後は wellness の視点を強化したケア計画の立案が課題である。

助産マネジメント論

1 年次後期

梅野貴恵、安部真紀、生野末子、戸高佐枝子

助産師の職務、業務範囲および法的責任を理解し、助産業務を遂行するために開業も含めた助産管理について教授した。講義は資料や視聴覚教材を用いて実施し、周産期領域における管理的視点を養う内容とし、講師それぞれの助産師としての専門性を考慮し、オムニバス形式で Zoom や対面で実施した。特に、産科領域で起こりがちな医療事故や災害時の母子への助産師としてのケアなど、身近な問題を教授しディスカッションした。評価は、発表内容や筆記試験から行った。次年度は、新カリキュラムに対応し、助産政策の立案や助産の質保証の内容を追加する予定である。

地域母子保健学特論

2 年次後期

梅野貴恵、赤星琴美、市原恭子、鈴木由美

日本の地域母子保健の現状について理解を深め、社会に求められる助産師の役割を明確にするための内容を教授した。母子保健の変遷、大分県の母子保健の現状をふまえた母子保健施策と母子保健の水準、育児を取り巻く社会環境や地域における具体的な母子への支援について、事例をとおしたディスカッションで理解を深めた。最後に、『子育てを取り巻く環境と助産師の役割』について、母子保健統計データや文献をもとにプレゼンテーションを行い、それぞれの発表に対して意見交換を行い、母子保健をめぐる状況と助産師としての役割について深めることができていた。

助産マネジメント演習

2 年次後期

梅野貴恵、安部真紀、樋口幸、姫野綾、矢野杏子

助産業務の行われる病院・助産所において、母子保健医療チームの一員としての助産師の役割と責任を認識し、助産の対象者の健康管理や助産マネジメントを実践する能力を習得するための演習とした。COVID-19 感染防止対策で昨年度に引き続き、臨地での助産院管理を経験することは中止し、開業助産師のケアの実際を DVD 等から学び、第 35 回日本助産学会、第 62 回日本母性衛生学会のオンデマンド講義を Zoom で聴講して学びを深めた。また、災害時の避難場所における母子への支援を想定し、実習室でシミュレーション学習を行った。周産期母子医療センターへの母体搬送事例 3 事例をもとに、施設助産師として求められる役割と助産ケアの実際についてグループでディスカッションを行い、実習室でシミュレーション学習を行う予定であったが、COVID-19 感染防止対策で、Zoom で実施した。模擬妊婦や模擬医師役を教員が行って実施した。自分達で話し合った内容を口頭で説明するため、臨場感には欠けるものの、臨地での実習経験を生かし報告するなど、助産師としての役割を考え発表することができた。実施後、デブリーフィングによって学びを深めた。期間を置いたのち、助産師としての自己の課題と将来の目標をレポートし、それぞれが明確にすることができていた。次年度は、感染状況を踏まえてグループでのディスカッションなどの機会を増やすように計画していく。

助産学統合実習

2 年次前期

梅野貴恵、樋口幸、姫野綾、矢野杏子

人間尊重の基本理念に基づき、新しい命の誕生に携わらせていただくことへの感謝と責任をもって、妊娠期から産褥・育児期まで継続して母子とその家族を受持ち、個別に応じた助産ケアの

実践能力を養うことを目的に 3 施設で実習を行った。COVID-19 感染状況により、各実習施設で受入れ開始日時、受入方法が異なった。別府医療センターは、施設の方針として実習受け入れ条件はコロナワクチン 2 回接種、接種後 3 週間経過の条件で、今年度は条件を満たせず実習中止とした。あおい産婦人科は 5 月 17 日から、アンジェリック浦田は 5 月 31 日から、堀永産婦人科医院は 6 月 7 日から開始し、8 月 31 日まで実習を行った。分娩介助例数は、平均 10 例（9～12 例）の実施となった。実習期間中に COVID-19 のワクチン接種が重なったが、施設の協力も得られ、感染者や濃厚接触者を出すことなく実習できた。学生個々の学習意欲は高く、チームとしての連携もよく、学びを共有しあい助け合う姿がみられた。各施設ともに新型コロナウイルス感染防止対策のため、通常より待機の回数を減らすなどしたが、対象の妊産婦との関係性は保たれ、ケアも熱心に実施した。家族の面会禁止等の措置があり妊産婦との関係は築けたが家族とのかかわりの機会が少なく課題もみられた。中間カンファレンスでは、学生個々の学びの状況に応じた助言をいただき、後半は、さらに成長した学生がほとんどで継続事例を通して学びが深まっていた。継続事例 3 例を妊娠期から産後 1 か月まで受け持ち、家庭訪問を含む助産実践を指導者の指導を受けながら行うことで、妊産婦個々の問題に寄り添いケアを実践することができていた。次年度は、COVID-19 感染状況をみながら、体調面の管理を行い、全員が 10 例以上の分娩介助を実施できるように指導者と連携し指導していく。

ハイリスク妊産婦ケア実習

2 年次前期

梅野貴恵、樋口幸、姫野綾、矢野杏子

周産期におこる異常やリスクに対して的確な判断力と高い予見性、緊急事態に対応する能力を養うことを目的に総合周産期母子医療センターで 2 週間の実習を行う予定であったが、COVID-19 感染防止のため実習施設の受け入れが困難で延期する計画とした。しかし、夏の助産学統合実習が長引いたことや、感染が再拡大したこともあり臨地での実習を中止した。助産学統合実習中に帝王切開事例を受持と、経過を観察しケアの実践ができた学生は、その事例で事例展開した。その他の学生は、9 月に Medi-EYE を使用してハイリスク事例（一絨毛膜二羊膜性双胎、TAPS 疑、37 週帝王切開）のペーパーシミュレーションを実施した。また、11 月中旬に大分県立病院総合周産期母子医療センター産科病棟の副師長によるハイリスク妊産婦へのケアの Zoom 講話（昨年度録画分）を許可を得た上で視聴し、周産期センターの助産師の役割や助産ケアにとって必要とされることは理解できた。次年度は、感染状況をみながら可能な範囲で臨地での経験ができるように計画していく。

妊娠期課題探究実習

1 年次後期

梅野貴恵、樋口幸、姫野綾、矢野杏子

妊娠期の助産診断技術を活用し、妊婦と胎児の健康水準を助産師が自律的に判断し、科学的根拠に基づいた助産診断を行い、妊婦のニーズに寄り添い、安全で快適な出産を迎えるための保健指導ができる能力を身につけるための実習である。COVID-19 感染状況により当初の予定を繰り下げて10月18日から11月16日の期間に、1学生が大分県立病院1日、わたなべ助産院2日、生野助産院1日の計4日間実習し、12月8日からは、堀永産婦人科医院、あおい産婦人科、別府医療センターに分かれて実習した。大分県立病院総合周産期母子医療センター産科外来はほぼ見学実習であったため、後日、姫野助教が事例を用いて妊婦健康診査を学内で補習した。新型コロナウイルス感染防止のため不可となった。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、別府医療センター産科外来での1月の実習は中止となり、他の2施設も1月後半から見合わせるようになった。2月中は、オンラインで担当教員が指導案の指導を行い、模擬妊婦を活用し、保健指導の実際を行うなどの演習に取り組んだ。3月から再開し、6～7月に出産予定の妊婦を継続事例として受持ち健診日に実習した。別府医療センターは再開できなかつたため、3月からアンジェリッククリニック浦田で開始した。臨地の産科医師や助産師の指導を受けながら、超音波診断装置を用いた妊婦健康診査4～5例と個別に応じた保健指導の実際4～5例程度と例年より例数は少なかったが、補習等で実習目標は何とか到達した。

NICU 課題探究実習

1 年次後期

樋口幸、梅野貴恵

今年度はCOVID-19の感染予防対策のため、体調、入室人数と時間の管理を徹底し、大分県立病院総合周産期母子医療センターでNICU課題探究実習を実施した。2週間の実習期間のうち、臨地実習は2日間であったが、ひとりの学生に1名ずつ対象児を受け持たせていただき、ハイリスク新生児の生理的特徴を理解し子宮外生活適応の過程をアセスメントした。また、個別に応じた看護を展開し、母子分離された母親とその家族への親子関係成立のための看護計画を立案した。看護ケアの実際は臨地で見学を行った。臨地での学びが深まるように、事前に学内でNICU看護の特徴やハイリスク新生児への看護援助の視点を学習した。臨地で見学できなかった母子分離された両親への愛着形成促進へのケア、家族とのつながりや退院後の生活を考えた育児環境の調整や他部門との連携については、指導者から臨床講義をして頂いた。その後、学内で看護計画に基づく新生児の看護実践について、高機能シミュレーターやSimPadを用いてトレーニングを実施した。学生は、ケアの視点や具体的な方法、助産師として妊娠期から果たすべき役割について活発にディスカッションし学ぶことができた。次年度も状況を鑑みながらの実習運営となるが、学生の教育効果を高めるため臨床との連携体制を強化していく。

地域母子保健演習

2 年次後期

梅野貴恵、鈴木由美、樋口幸、姫野綾、渡邊しおり

助産師として地域における母子保健ニーズに対応し、質の高い母子保健活動を展開する能力を養うための演習とした。大分市の母子保健事業の概要と母子保健の水準等を自己学習したのち、全員が 1 歳 6 か月児健康診査に参加し、大分市の担当保健師とディスカッションを行い、母子保健環境の特性や、健診状況から母親と子どもの関係性を理解し、問題解決へ向けた保健師の対応や多職種、他機関との連携を理解した。堀永産婦人科で実習した 5 名は施設での 3 か月児健康診査に参加し、継続事例の母子の状態を把握した。参加していない継続事例を持つ学生や他 2 施設の学生は施設の許可を得て 4 か月児健康診査後の時期に継続事例に電話訪問を行った。実践マタニティ診断の産後期の診断名等を参考に、情報収集計画を立案し、実施した。4 か月健診後の受け持ち母子の様子を電話での聞き取りから、家族や地域の人に支えられ成長している母子を理解し、助産師として育児期までの支援を認識する機会となった。次年度は、4 か月頃の継続事例の家庭訪問を予定しているため、実習中に許可を得ておくなどの準備が必要となる。

健康生理学演習

2 年次前期

濱中良志、安部眞佐子、岩崎香子

培養細胞からタンパク質を抽出し電気泳動を行いう演習を行うことによってウエスタンブロットの原理と得られた結果の解釈について教授した。

健康栄養学演習

2 年次

安部眞佐子

栄養に関わる代謝のメカニズムについて説明し、討論をした。教科書として、Principles of nutrigenetics and nutrigenomics : fundamentals of individualized nutrition を用いて、摂食調節に関わる要因、体重調節についての遺伝子発現、発育に関する DoHaD 仮説などを取り上げた、基礎知識の補充として、シグナル伝達、活性酸素と過酸化、遺伝子発現について解説した。

メンタルヘルス学演習

1 年次前期

影山隆之

メンタルヘルスに関する文献を抄読し、精神健康の評価法と研究のための分析法についてゼミ形式で開講した。履修者に自身の研究のテーマや方法論と関連づけた内容を選ばせる方式が好評なので、今年度も同様にして履修者の学習意欲を高めることにした。

対人援助演習

2 年次

関根剛、吉村匠平

2名の教員により、関根8回、吉村8回の計15回（1回は合同）の講義を行った。受講生は1名のみであったため、教員と学生の1対1による対面での講義の形式で行った。講義内容は対人援助に関する文献の購読、受講者自身が行った援助的対話についてカウンセリングスキルの視点から助言・指導、また対人理解について細かく検討するなど、理論・実践面からの演習を実施した。コース定員上、ほぼ1対1の講義となるため、受講者個々の知識やスキルにあった講義内容に調整する必要がある。この点は最初にニーズ等を確認して内容を調整する現在の方法が有効と考えられる。

健康科学研究特論

1・2 年次前期

小嶋光明、村嶋幸代、藤内美保、影山隆之、佐伯圭一郎、平野互、関根剛、桑野紀子、大田えりか

健康科学研究の理論および手法を概観し、研究活動を自ら展開するために必要な事項を論じて実践的能力の育成を行った。実験的研究、質的研究、文献研究を実際に行っている先生方に講義をしてもらうことで研究手法がより理解できるように努めた。また、今年度は研究倫理規範意識を向上させるため、APRIN eラーニングを活用した。

4-3 博士課程(後期)

精神保健学特論

1 年次

影山隆之

メンタルヘルス学特論Ⅱと合同で、履修者のニーズをふまえ、地域・職域・学校におけるメンタルヘルス活動に必要な精神保健の知識や考え方について、文献を読みゼミ形式で開講した。履修者自身の研究テーマや方法論と関連する題材を選択させ、関心と学習意欲を高めるようにした。

看護基礎科学演習

1～3 年次

稲垣敦、安部眞佐子、市瀬孝道、小嶋光明、影山隆之、佐伯圭一郎、吉村匠平

この科目は、オムニバス形式で実施され、また同時並行して進められた。各教員から学生の学位論文を考慮した課題が提示され、学生は調査分析を行い、各教員に対してプレゼンテーション、あるいはレポートによって報告し、指導を受けた。

看護管理学特論

1 年次後期

福田広美

看護管理学の理論や最新の研究に関する動向について教授した。学生が看護管理について関心のあるテーマについて文献レビューを行い、発表とディスカッションを行った。学生が看護管理に関する理解を深めることができた。今後は、将来的に今後、必要となる研究についてもディスカッションを行う。

発達看護学特論

1～3 年次

高野政子、小野美喜

人間の発達について理論を通して学び、看護を考える授業展開とした。受講生 2 名に対し、乳幼児期、学童思春期、成人期、老年期の各期の発達過程の特徴をオムニバスで教授した。さらに各期の看護については受講生のプレゼンテーションと意見交換等を含めて展開した。受講生の看護背景を授業に反映しながら人間の発達を考えることができた。

看護専門科学演習

3 年次後期

高野政子、赤星琴美、梅野貴恵、小野美喜、影山隆之、藤内美保、林猪都子、福田広美

看護専門領域教員によるオムニバス形式で、学生 2 名の背景や研究領域に関連した以下に記述する内容を講義し、学生による課題発表とディスカッションを通して学びを深めた。全ての講義やディスカッションは Zoom を用いて実施した。演習内容は、米国における小児領域 NP の活動と日本の小児 NP の活動の実際、小児看護領域の課題、わが国の衛生を取り巻く社会状況と公衆衛生看護学の位置づけ、学生の居住する地域の特性や健康課題、現代女性の性や生殖の課題とプレコンセプションケア、更年期女性の研究課題、母子メンタルヘルスの測度に関する文献抄読、看護師の臨床推論とその教育方法、tanner の理論、子育て世代包括支援センターと産後ケア事業、看護管理学における理論と最新の研究である。学生は、全ての課題を完了し単位を取得した。

特別研究

1～3 年次

稲垣敦

履修者が各自の研究テーマについて、指導教員の指導を受けながら研究に取り組み、学会で発表し、学術雑誌に投稿した。また、研究中間報告会（8/25）、論文レビュー報告会（8/26）、研究計画報告会（3/3）、研究成果報告会（3/4）で発表した。今年度の修了生は、次のとおりであった。

（看護学専攻）

安藤敬子：規則的な三交替勤務に従事する日本人男性労働者における眠気改善にむけた睡眠衛生教育の効果に関する研究（主指導教員：影山隆之、副指導教員：佐伯圭一郎）

竹山ゆみ子：施設入所高齢者に活用可能な簡便な客観的栄養評価指標の検証および新規指標の探索（主指導教員：藤内美保、副指導教員：安部眞佐子）

放射線健康科学特論 II

1 年次

小嶋光明、恵谷玲央

放射線リスクや放射線治療に関する最新の英語原著論文の抄読を課して、論文の解説をプレゼンさせる研究室ゼミのスタイルで進めた。取り上げた内容は、放射線皮膚炎に対するスキンケアの効果、小児 CT 検査とがんリスク、放射線被ばくによる継世代影響、バックグラウンド放射線と小児がんの関係、深い畳み込みニューラルネットワークを使用したコンピューター断層撮影での大腸炎の検出と診断、マイクロビーム放射線療法による抗がん効果。

健康情報科学特論Ⅱ

1 年次後期

佐伯圭一郎、品川佳満、渡邊弘己

著しい情報通信技術の進展に対応し、保健医療看護領域の情報システムの構築・運用・評価のための知識と技術を教授するとともに、情報を適切に分析・評価するための理論と技術を修得する。また、保健医療看護領域において特に重要な課題である、情報の適切な取り扱いに関する規則・モラルについても深く探求する。

以上の目標の下に、今年度は 1 名の履修者に対して、実際の研究データの取り扱いと解析を題材として、指導とディスカッションを交え、学習を深めた。

メンタルヘルス学特論Ⅱ

1 年次

影山隆之

精神保健学特論と合同で、履修者のニーズをふまえ、地域・職域・学校におけるメンタルヘルス活動に必要な精神保健の知識や考え方について、文献を読みゼミ形式で開講した。履修者自身の研究テーマや方法論と関連する題材を選択させ、関心と学習意欲を高めるようにした。

メンタルヘルス学特別演習

2 年次

影山隆之

メンタルヘルスに関する調査研究を例として、データの収集と分析の手法について、実際の文献を素材としたゼミを開講した。

対人援助特論Ⅱ

1 年次

吉村匠平、関根剛

レスポネント条件づけの基本原理の理解をベースとして、対象者の直接的行動変容を目的として行われた介入事例の文献の購読を行った。また、援助を行う以前に問題点の発見を如何にするかという視点から、いわゆるアンケートをどのように使うか、効果的に思いや意見を吸い上げるためにどのように作成するのかなど、アンケート用紙の効果的な作成と利用方法について講義と質疑を行った。併せて、従来の調査を統計的な視点から読み込むスキルとして、統計的手法の見方と

利用方法について講義と質疑を行った。

4-4 その他の教育活動

4-4-1 CALL 英語学習システム講座

Gerald Shirley

本年度も例年と同様に前期と後期の2回実施した。年間を通し、全ての学生（1～4年次生、大学院生）が自ら自由に英語学習に取り組めるよう、受講希望者を募った。

4-4-2 大学生消防応援隊（Oita-NHS-team）

4年次生 松谷美紗希（リーダー）、村田美和子（リーダー）、永路彩乃、玉田光来

3年次生 安藤捺葵、一幡紗彩、貴島可菜、久米杏奈、豊田歩果、濱田桃子、浜田怜海、山内珠鈴

2年次生 池田亘希、上田凌輔、永瀬天音、中野弘之将、森口泉、山本瞭花

1年次生 上田美羽

担当教員 石田佳代子、内倉佑介

1. 消防応援隊の活動目的

大学生消防応援隊による活動は、大分県が若者の消防に対するイメージアップや消防に対する意識啓発と消防防災組織の育成・支援を図るために実施している「大分県ハイスクール消防クラブ及び大学生消防応援隊の結成・活動支援事業」の一環である。本学の消防応援隊は、平成25年度に大分県生活環境部消防保安室消防班の担当者から結成の打診を受けて同年度の3月に結成された。本学消防応援隊の活動目的は、地域での防災・減災の活動や災害時の活動を学び、地域での防災・減災活動に参加し、看護学生として地域に貢献することである。そのために、消防本部等の関係機関と連携をとりながら消防・防災に関する活動に参加することにより、消防に関する正しい知識、情報及び技術を習得する。

2. 本年度の活動計画と実施内容

1) 防災訓練における一部の企画・運営（11月実施、学内）

例年、総務グループからの協力要請に応じて、本学の防災訓練における一部の企画・運営を担っている。本年度は、新型コロナウイルス感染対策により1年次生と教職員が訓練に参加することとなった。3年次生（実習中のため不参加）以外の消防応援隊学生全員で学生等の避難誘導・学年ごとの点呼（安否確認）・AEDの使用訓練を中心に活動した。

2) 災害備蓄品の検討（1～3月実施、学内及び各自の自宅にて）

現在の本学の災害備蓄品を知り、災害備蓄品の一部を試用して、その結果をアンケートにより集約し、学生の立場からの考えなどを提案することで、今後の災害備蓄品の検討に役立てるための活動を全員で行った。（新型コロナウイルス感染対策のため、活動は個別に自宅等で行った。）また、ポータブル電源を購入し、災害時の停電に備えて電気の備蓄を行った。

3) 救急の日の啓発活動

本学の新型コロナウイルス感染対策において、サークル活動は自粛する方針だったので、学外での活動は行わなかった。

4) 1日体験入校

本学の新型コロナウイルス感染対策において、サークル活動は自粛する方針だったので、学外での活動は行わなかった。

3. 今後の課題など

消防応援隊学生が防災訓練などに積極的に参加することを通して、本学全体の防災意識の向上などにつながっているのではないかと思われる。感染状況を考慮しながら、今後も活動できる機会をより増やせるように取り組んでいく。消防応援隊としてのスキルの習得も重要な課題なので、消防本部等の関係機関と連携をとりながら進めていけるように、計画的に取り組みたいと考える。

4. 補助金について

令和3年度理事長裁量予算枠事業費 110千円

5 研究室活動

5-1 生体科学研究室

1 活動方針

学部では、本学の教育理念の一つである「看護に関する専門知識・技術の習得とともに、科学的根拠に基づく問題解決能力などを養う」に沿って、人体の仕組みを解剖学的・生理学的・生化学的に理解し、その破たん状態（病気）の本質を十分理解する看護師を育成する。大学院においては、疾患の基礎となる生理学を細胞内のレベルまで深く掘り下げて理解し更に発展させることができる研究者および実践者を育成する。4年次生の卒業論文の作成の補助を行いながら、教員自身の研究を推進させる。その成果は、学会発表を国内または海外において年に1回以上行う。ある程度、成果がまとまったら、論文としてその成果を発表する。

2 教育活動の現状と課題

学生間の学力の差が大きくどこに照準を合わせて授業を行うかが最近の課題であったが、今年度は、平均的な学生に合わせて通常の授業をオンラインで行った。意欲の高い学生向けに動画配信を行い学生の事前学習・事後学習に役立てた。新入生の中には、コロナ禍で友人が出来ずに孤立化し学習意欲が低下し、単位取得が出来ない学生が複数人いたので、そのような学生に対して学習意欲を上げることが課題である。

3 研究活動の現状と課題

今年度は、コロナ禍のため、4年次生と密な状態を避けながら、動物や細胞を使用した実験を行い、卒業論文として、まとめることが出来た。学会活動は、現地でポスター発表を行った。研究室で2年間、指導した大学院生も修士号を取得できた。

5-2 生体反応学研究室

1 活動方針

生体反応学研究室の教育活動に関しては、病理学、薬理学、免疫微生物学といった看護の専門基礎分野の科目の教育を担当している。外的・内的要因に対する生体反応、これによって発症する様々な疾病、その発生メカニズム、薬の薬理作用や病原微生物による生体反応を理解することによって、体の変調や病気の成り立ち、回復過程を科学的に捉え、これらから得た知識が看護実習や将来の看護実

践に結びつけられるように看護の基盤教育行っている。

生体反応学研究室の研究活動に関しては外部の競争的研究費を獲得し、積極的に英語の研究論文を海外の学術雑誌に発信して行くことを目標にしている。

2 教育活動の現状と課題

講義に関しては例年と同様に生体反応学概論、生体反応学各論、微生物免疫論：1年次生、生体薬物反応論I：2年生、生体薬物反応論II：3年生の講義と健康科学実験（血液検査・ラットの解剖・基礎微生物学実験）を行ったが、COVID-19の感染拡大によって殆どがZoom配信による講義となった。Zoomでの講義の進め方の工夫としては、これらの講義資料（教科書を分かりやすく整理したプリントとパワーポイント）は事前に学生に配布してZoom配信でも予習・復習ができるようにした。成績不良者の対応としては面接等を行うと共に、一般の学生にも試験問題（正解付）や解答用紙を返却して、正解とどのような間違いをしたのかを理解させた。そのため令和3年度では例年よりも単位を落とす学生が減少した。しかしながら、解剖学や生理学と共にこれらの病理学、薬理学、微生物学が看護実践を行ううえで十分に理解しておくことの重要性を認識させ、講義を進めることが重要であると考え。基礎科目の解剖、生理、病理、薬理、微生物学の成績は看護の科目の成績に比べると悪い。来年度もZoom配信で講義が行なわれる可能性もあるため、更なるZoomでの講義の進め方の工夫や成績不良者の対処を考える必要がある

3 研究活動の現状と課題

外部研究費は2名の教員が獲得しており、科学技術振興機構（JST）・戦略的創造研究推進事業・チーム型研究費（CREST）を獲得（分担）して、課題名「環境中微粒子の体内、細胞内動態、生体・免疫応答機序の解明と外因的、内因的健康影響決定要因、分子の同定」の研究を行なっている。また、学術振興会基盤研究(B)を獲得してPM2.5構成成分の複合胎仔期曝露による出生仔雄性生殖系・免疫系に及ぼす影響についての研究を行なっている。卒論生に対しても外部研究費に関連するテーマで研究を進めることができた。今後の課題としては、前記の外部研究費が今年度で終了するため、令和4年度では学術振興会等の科研費を必ず獲得すると共に、積極的に英語論文を投稿して競争的研究費を獲得して行くことを目指す

5-3 健康運動学研究室

1 活動方針

当研究室の教育目標は以下の6つである：①科学的なものの見方や考え方を学ぶ。②実際に運動を通して体を動かすことの楽しさを体感する、③個人、社会、人類にとって運動が重要であることを理解する。④健康・体力を維持・増進するための運動量、運動強度を確保する。⑤自分に合った

運動を見つけ、運動習慣を身につける。⑥ボランティアを通して様々なことに気づき、考え、今後の人生に活かす。

研究に関しては、社会に貢献できる研究、あるいは研究活動自体が社会貢献につながるような研究を目指している。

2 教育活動の現状と課題

講義に関しては、Zoom を活用して双方向で実施し、授業アンケートでも高い評価を得た。実技科目である健康運動に関しては、2021 年内は感染状況が改善されていたため、マスクをつけ、3 密に注意して実施したが、年明けは病院実習を考慮し、他の課題に変更した。また、一昨年からの課題であった健康運動ボランティア演習に関しては、今年もほとんどのイベントが中止になり、また開催されたイベントに関してもそれ以降の病院実習等の教育を継続するために参加を辞退した。この結果、過去 2 学年が実施できなかったことになるが、2022 年の春の時点でも再び感染状況が拡大しているため、他の課題に変更せざるを得ない状況である。

3 研究活動の現状と課題

年度途中で任期満了で 3 期務めた複数の学会での学会長や代表理事を辞任し、以前よりは時間が出来たため、秋には日本公衆衛生学会で研究発表することができた。次年度は、論文執筆に取り組みたいと考えている。

5-4 人間関係学研究室

1 活動方針

周りの人と喜びや苦しみを分かち合うとともに、自他の独自性及び個別性を尊重することのできる豊かな人間性を養うため、心理学の知見をベースとした、人間関係に関わる基本的な知識やスキル、人間の行動や発達についての理解・洞察を深めるために必要な知識、精神看護学の基礎となる知識の習得を目的としたカリキュラムを編成し、教育活動を展開している。本学における教職課程の運営を担当している。大学院教育においては、院生自身が、課題の設定から、研究方法を確定、調査（実験）の実施、資料解析、論文の作成を、主体的に行うことができるよう、個別にゼミを開催し、指導を行っている。

2 教育活動の現状と課題

今年度は感染拡大予防のため、全ての講義をオンラインで実施した。授業時間内では、アプリケーションの機能を援用し、学習者に参加、発言の機会を提供することができた。また、授業時間外の課

題に関しても、オンラインのアプリケーションを利用して、課題の提示、提出、フィードバックを円滑に実施することができた。遠隔講義の環境下においても、学生が受け身にならず、放置されることもなく、教員のマネジメントの下に主体的に授業に参加する機会を保障している。次年度以後、対面に戻ったときに、現在の環境をどのように維持するのかを検討するのが、次年度の課題である。

実習校、教育委員会、文部省との折衝を含め、養護教諭養成課程の運営を担当している。非常勤講師との事務連絡、養護実習I、II、教職実践演習の運営、教員採用試験への対応、進路ガイダンスの実施、県内実習体制の環境整備、文部科学省提出文書の作成などにより、相応の負担が発生している状況であるが、現時点でこれを解消する見通しはついていない。

3 研究活動の現状と課題

研究活動に関しては、大学院修士課程における課題研究や修士論文の指導、博士課程の学生の指導がメインになっている。博士課程の学生1名が投稿論文二本受理されたので、次年度は学位論文を提出し審査を受ける。大学院生の指導と養護教諭養成課程の運営の両立が課題になる。

5-5 環境保健学研究室

1 活動方針

環境保健学研究室は、WHO が定義する「Environmental Health」に沿って「環境」を、物理的要因、化学的要因、生物的要因、および行動に影響を与えるすべての関連要因と健康との関係を科学的に理解するための基礎的事項とその予防対策の考え方についての教育を学部の環境保健学概論（1年次）、環境保健学詳論（2年次）および環境疫学・生物学演習（3年次）で行っている。また、現代医療に必要不可欠な放射線教育も、開学以来、全国の看護系大学の先頭に立って実施してきた。看護コアカリキュラムの教育項目に明記されたことで、本学の放射線教育モデルが他の看護系大学の参考になることが期待されている。その関係で看護教育者を対象にしたトレーナーズトレーニングを文科省事業として平成30年まで実施し、その後も、引き続き、研究室独自の主催で看護教育者の放射線教育を他大学と連携して進めている。大学院教育では、研究者コースを対象として「放射線健康科学特論」を教授している。NP コースの放射線や画像診断教育にも貢献している。健康科学専攻では、主に診療放射線技師の社会人の放射線の教育研究を実施している。

2 教育活動の現状と課題

放射線を含む環境保健の教育は、基礎が多分野な内容を含むために、1,2年生の段階では教育が難しい点がある。そのため、社会問題のようなトピクス（今年度は新型コロナウイルス感染症の危機管理など）を取り上げることで関心を持たせ、その理解には物理や生物、病理生理、免疫、生物統計といった関連科目の基礎的な知識が重要であることを認識させるようにしている。さらに、2年次の

環境保健学詳論、3年次の演習「環境疫学・生物学演習」でアクティブに関わる授業を実施し、主体的に理解を深めることを狙っている。プレゼン資料の作成、質問応答、課題レポート作成などを通して、できる限りすべての学生に対して個別に指導することでより効果の高い講義・演習にしていくことを目指している。学生による授業アンケートから講義・演習の目的はおおよそ達成できたと考えるが、今年度はオンライン講義が中心であったことから、学生間で意見交換をする機会がなかった。環境問題に対してお互いの考え方を共有し合うことができる工夫を考えていく必要がある。

3 研究活動の現状と課題

放射線をテーマに研究を続けている。医療被ばくによる健康リスクを生物学的に明らかにすることを目的とした研究では、マウスの急性骨髄性白血病をモデルとして、頭部 CT を想定した頭部への繰り返し放射線被ばくによる白血病関連遺伝子の蓄積性を調べる研究を行ってきた。これに関連して、数 μ 幅に絞った X 線 (X 線マイクロビーム) を用いた研究では細胞に生じる生物学的影響が放射線の照射面積に依存していることが分かり、細胞間の相互作用が組織レベルの影響につながっていることを明らかにした。この成果は、放射線治療法の基礎研究につながると考え、新たな放射線生物のテーマを開拓している。大学院生の指導では、CT 診断やマンモグラフィを対象にした臨床研究を進めてきたが、最終の論文作成段階に入っている。令和 4 年度も、共同研究の形で行う動物実験研究やマイクロビームを利用した細胞レベルの研究や医療被ばくの防護に関する研究を引き続き進め、放射線の健康リスクに関する研究にさらに貢献していく。

5-6 健康情報科学研究室

1 活動方針

科学的根拠に基づいた看護実践の基盤となる、情報収集と分析および発信のための知識と技術の修得をめざして教育を行っている。また、学習と業務における情報処理の能力を早期に高めることができるよう配慮し、実践的な教育内容を展開している。

特に、単なるデータの取り扱い技術や数的処理の知識として学ぶのではなく、看護職として、また一人の社会人として適切に判断・行動ができる能力を養うため、具体的な事例において自ら考えて学習することを推進している。

また、教育及び研究のみならず、本学の ICT 環境の管理と運用を通じて大学全体のパフォーマンスを日常的に支援することを実践している。

2 教育活動の現状と課題

学部教育における担当科目の教育成果については、授業アンケート等からもほぼ例年通りの成果だと評価する。しかし、対面授業ができない期間の影響で健康情報処理演習のスケジュールが予定通

りに進行しないため、健康情報学及び生物統計学の演習を内容とする回の調整など困難もあった。また、オンライン形式であった健康情報学についてはオンデマンド配信からリアルタイム配信に変更したが、この変更についてはオンデマンド配信時の方が、好評価のコメントが多く、新年度はオンライン継続となった場合にはリアルタイム＋一部録画をオンデマンド配信という形式を試みて、受講者の評価を待ちたい。

大学院における統計学テキストについてはほぼ必要とする水準に対応するテキストを選定できたが、自己学習のための演習課題等について充実させる必要を感じており、テキストに対応する形で演習課題、復習問題等の整備を行う予定である。この点については、来年度に着任する統計学を主な担当とする新任教員と検討を進めたい。

3 研究活動の現状と課題

研究室メンバーそれぞれが科研費を獲得しており、2021年度からは品川准教授、渡邊助教の2名が新たなテーマでの科研費による研究をスタートしている。

コロナ禍のため、教育現場を対象とした研究など対象の側、また研究メンバー間のコミュニケーションの課題など、一部研究課題について遅延が続いており、この状況下での円滑な研究遂行について解決を要する課題は認めるが、効果的な対策が打てていない現状である。

また、本年度末で渡邊助教が転出するため、来年度に着任する新任教員を含んで研究室としての研究活動および研究支援体制を再構築していきたい。

5-7 言語学研究室

1 活動方針

言語活動の四技能である **Speaking, Listening, Reading, Writing** をバランスよく伸ばすことを念頭に、将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くよう、実用的で易しい英語コミュニケーション (**Speaking, Listening**) に取り組ませている。また、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるために、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施している。更に、教室内での活動を課外でも維持継続できるよう、CALL (**Computer Assisted Language Learning**: コンピューターを用いたウェブ学習システム) による TOEIC 対策英語学習プログラムを実施している。

2 教育活動の現状と課題

ネイティブ・スピーカー教員の授業では、自作の教材を毎回配布し、学生はパートナー同士、または、小さなグループで英語コミュニケーション (**Speaking, Listening**) を練習した。1年次生の講義内容は、一般的な日常生活の話題 (**Food, Shopping, Home**, その他)、2年次生の講義内容は、看護

英語であった。各話題について3～4週間かけてじっくり練習を行い、同じ学生が毎回同じグループに含まれないように配慮することで、新鮮な気持ちで楽しく学習できるよう工夫した。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換などの言語活動を行った。また、1年次生前期の授業では、CALL学習を必修授業として取り入れている。授業を二部構成とし、上記の自作教材の英語コミュニケーションの練習と、CALL学習を行なった。発音の向上を図ることを念頭に、教員の発音を確認、反復させ、学生間で反復練習させる時間を以前よりも長く確保した。結果として発音を意識した英語での発話の機会が増え、発音の技術が改善したと考えられる。今後は語彙習得が未熟な学生を念頭に、生活において頻出する語彙を習得させる効果的な方法を検討していきたい。

日本人教員の授業では授業を二部構成とし、前半では英文テキストの日本語訳を最初に配布し読ませることでテキストの内容を理解、把握させ、それをもとに課題となるテキスト部分についての語彙、文法、発音についての講義を行った。また、ネイティブ・スピーカーの発話を音声CDで確認し、実際に発声の反復練習を行った。講義で取り扱った課題テキスト部分は次週までに暗唱できるようにすることを課題とし、次週には実際に暗唱(含む筆記)できるかの確認を行った。後半では、易しい英語で書かれた書物を辞書なしで読み、総読書語数増進を目指す多読を実施した。学生自らが読む本を自由に選択することで学習動機の維持を図った。講義前半内容に対応する課題を達成できない学生に対し、講義時間外での学習指導を実施した。学習の習慣づけが成果につながることを学生自身が体感し、結果につながったようである。新型コロナウイルス感染予防に伴う講義形態の変更が、学生の継続的な学習に支障をきたした部分が見られたため、突発的な変更に対応できる形の学習課題を検討していきたい。

言語能力の向上には継続学習が不可欠である。しかし時間的な制約もあり、教室内での活動は限定的にならざるを得ない。そこで、年間を通し、全ての学生(1～4年次生、大学院生)が自ら自由に英語学習に取り組めるよう授業外での多読教材の貸し出しや、CALLシステムによるTOEIC対策のための英語学習、学習期間前後のTOEIC IP試験を実施している(前期:1年次生必修。後期:全ての学生を対象に希望制にて実施)。受講した学生は、真剣に取り組み、結果として学習効果の向上がみられた。

CALLシステムについては、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、7月のオープンキャンパスにて、模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際にCALLシステムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

学生の英語学習に対する意欲の維持や学習活動の継続を図るべく、日々学習環境の整備を模索している。さらに魅力的な教室内活動の実現と自主的な学習へのきっかけ作りをいかに構築していくかが今後も継続課題である。

3 研究活動の現状と課題

今年度は、教育活動で取り組んでいるCALL学習の効果を英語学習に対する態度と動機の視点から分析した。CALL受講によって英語教育が必要と考えた学生が大半を占めた。CALL受講前にTOEIC得点が高い学生ほど受講によりモチベーションと英語学習への自己評価が増加した。受講前

TOEIC 得点が低い学生は受講により TOEIC 得点の伸びは大きいですが、自己評価が下がる結果が得られた。この結果から、今後の教育に関する示唆が得られた。本研究の結果および卒論生の研究成果についても関連学術誌に投稿するなどして学外へ発信する予定にしている。

5-8 基礎看護学研究室

1 活動方針

研究室の円滑な運営を行い、学生へ最適な教育の実施ができることを目的とし、4年間での基礎看護学教育の土台となる基礎看護学についての教育目標及び内容の共通理解を深め、適切な教育内容の教授を目標とした。

人事異動による弊害を最小としたうえで、良好なチームワークを形成し、教授活動に最大の効果を期待して活動した。

2 教育活動の現状と課題

COVID-19 の影響で 6 月まではオンラインによる授業のため、援助論等の対面が必ず必要な内容については順番を変更したうえで、影響の少ない項目から授業の工夫を凝らして実施した。9 月後半から対面授業が可能となり、実習室を使用して対面でなければ難しい技術演習を開始した。本来、前期で終了すべき演習を後期に持ち越し、技術チェックを実施できたのは 11 月であった。その時期は次の実習計画ができていない時期であるため、実習要件である「生活援助論」「医療技術論」の単位未修得者の氏名を配置表から除外し配置しなおすこととなった。(学生には演習の結果が出るまでは、配置は未公表にしていた)

① 講義主体の授業については、オンラインで計画通りに実施できた。Web による学生の反応も特に問題はなく、理解についても変化はなかったと考える。

② 演習については予め使用物品を学生に配布し、自宅で実施できるように工夫した。Web で演習指導を行うため、カメラでのズームや録画を駆使して実施した。対面でなければできない演習については、時期を後期に変更して対応した。11 月に技術チェックを計画し、7 月には技術チェック項目を公表し、夏季休暇中及び土日実習室の開放を行い、指導体制も明示して、主体的かつ計画的に早期から練習できるように環境を調整した。

学習効果を最大にするため、教員の準備が非常にタイトであった。

③ 後期の準備がタイトであったこと、学生へのアナウンスは 7 月からしていたものの、危機感の薄さから練習回数の少ない学生も散見したことから、技術チェックの時期及び練習時間の確保のためにも、チェックを受けるための要件の整備等について検討が必要である。

④ 看護学概論や看護理論における学習がどのように実践で行かされるのか臨地実習での記録物の整理等について確認する必要がある。

3 研究活動の現状と課題

研究室全員がそれぞれの研究課題に向かって各自努力を続けるとともに、常に論文投稿や新たな研究課題の探求に努力している。今後は実績を出していくことが課題である。

5-9 看護アセスメント学研究室

1 活動方針

看護アセスメント学は、基礎看護科学講座に位置づけられ、人の健康問題を根拠に基づきアセスメントできる能力を養うことを目的とし教育を実施している。看護の基盤となる人間科学講座で教授された内容との融合を図りつつ、身体的、心理的、社会的側面から看護学の視点で根拠に基づくアセスメントができることがねらいである。看護アセスメント学研究室の担当科目は、1及び2年次の履修科目が多く、基礎的な理論や科学的な見方、クリティカルシンキングなど、エビデンスを追及する姿勢とともに、看護への関心、喜びなど感性を高め、専門領域に繋げるという教育的役割がある。現在教授している具体的な科目は、「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」「ヘルスアセスメント」「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」「看護アセスメント学実習」である。「看護疾病病態論Ⅰ」「看護疾病病態論Ⅱ」では、主要な疾病の理解や病態の理解、さらに「ヘルスアセスメント」においては、看護師の五感を活用し頭部からつま先まで身体の観察ができる能力を身につけ、身体的なアセスメントができる基礎的能力を身につける。「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」は、看護過程の展開の基礎的能力が身につくことを目的とし、講義および演習を組み合わせて、知識の習得を段階的に行っていく。「看護アセスメント学実習」では、受け持ち患者と関わり、初めて実際の患者に対して看護過程の展開を行うことを通し、自己の課題を明確にし、専門看護学領域の基盤とする。

大学院教育においては、「フィジカルアセスメント学特論」「看護アセスメント特論」「基盤看護学演習」など、根拠に基づくアセスメント、臨床推論能力を高めることを方針とする。

2 教育活動の現状と課題

毎年、学生の学びの達成度を評価しつつ、授業の目標、授業構成、授業方法などの見直し改善を行っている。「看護疾病病態論」や「ヘルスアセスメント」などフィジカルに関する科目はメカニズムの学修ができるよう工夫している。学修評価の試験では、筆記試験は過去問による断片的で暗記の知識にならないよう、理解に重点をおくための試験問題を毎回新たに作成した。さらに「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」など、人間の見方を身体以外の心理、社会面まで統合して人を包括的に捉えることの重要性を教授している。また「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」「看護アセスメント学実習」では、看護過程の理論を活用し、患者を理解し、よりよい看護実践ができることを目標としているが、看護過程の展開自体が主眼とならないよう指導が必要な場面

もあるが、患者の状況や症状がイメージできるよう DVD の視聴をした看護過程の展開の工夫や、教員 4 名で個別に看護過程の基本的考え方や記録方法を丁寧に指導した。

今年度は COVID-19 のため、ヘルスアセスメントのスキルの演習の一部はオンラインで実施したが、一部は対面で授業を行い、スキルの定着を図るように努めた。看護アセスメント学実習は、実習施設で通常と同様の 2 週間の臨地実習を行うことができ、学生全員が目標達成した。

課題は、症状から病態を探求していく力、観察をポイントの修得、臨床推論能力を育成などさらに強化していきたい。また人間科学講座の教員とも連携をとりながら、重要な知識やメカニズムの理解の積み上げや統合ができるような授業の工夫が必要と考える。

3 研究活動の現状と課題

それぞれの教員が、自分の専門的研究領域で研究を推進している。4 名全員、科学研究費を取得し研究を自律的に実施している。また、卒業研究や課題研究の指導により、各分野の研究の幅を広げている。論文の公表を積極的に推進することが必要である。

5-10 成人・老年看護学研究室

1 活動方針

成人・老年看護学は、成人期・老年期の対象への看護実践に必要な専門知識・判断能力・援助技術を習得することを目標としている。そのため、成人看護学概論、老年看護学概論、成人看護援助論・老年看護援助論、成人・老年看護学演習、成人看護学実習ⅠⅡ・老年看護学実習の各教科を設定している。概論は 2 年次前半に開講し、各発達段階の特徴や保健、理論について学ぶ。さらに援助論では、急性期、回復期、慢性期、終末期の疾患や傷害をもつ人への看護を実践する力を養う。専門的知識の教授とグループワークによるディスカッション等を設け、学生が考える力を養う学習方法を展開している。さらに 3 年次前期には、成人・老年看護学演習において、模擬事例への看護について考え学び進められるよう教材づくりと看護過程の展開を行った。意見交換、発表を通して実習にむけた看護実践につながった。さらに 3 年次前期・後期には実習科目をおき、成人看護学、老年看護学の学習成果を実践に反映できるように展開している。

また、大学院では老年 NP コースの科目として、NP 論、老年 NP 論、老年アセスメント演習、老年薬理学演習、老年実践演習、老年 NP 実習ⅠⅡⅢの科目を開講している。法的に認められた特定行為研修を含みつつ、ナースプラクティショナー（仮称）の制度化も視野にいれた老年 NP を育成することが目的であり、自律性のある実践者の育成に取り組んでいる。

2 教育活動の現状と課題

成人・老年看護学は青年期から老年期までの対象者への看護の学びであり、学習範囲は非常に広範

困である。看護の場での代表的疾患を持つ対象者の看護援助ができるようにプログラムを構築した。また、これまで同様に学生が必要に応じて主体的に学習する機会が得られるように活動した。さらに今年度は COVID-19 の影響でほとんどがオンライン授業であった。より一層多くの画像教材（呼吸器の周手術看護、高齢者の経管栄養など）を作成し、学生が症例を視覚化してとらえ、患者が抱える課題解決できるようにした。媒体は昨年のナースングスキルに加えメディアイを追加使用した。学生は繰り返し教材を確認しながら学習できており、効果があった。次年度以降も成果を継続的にみていく。また、大学院では 2020 年度からのコロナ感染症対策のためのオンライン授業の体制が整えられ、学習が円滑にすすめてきた。学生も授業形態に慣れてきており、今後も学習効果について評価をしていく。

3 研究活動の現状と課題

成人・老年看護学では、認知症高齢者、糖尿病患者などの慢性期疾患看護、急性期の看護、高齢者の生活に着目した研究、NP の成果に関する研究など各教員のテーマによる研究を行っている。COVID-19 の影響で研究活動がすすみにくい領域もあったが、引き続き研究を行う。課題としては先の領域の研究再開と国内外での研究成果の公表の機会をつくることである。

5-11 小児看護学研究室

1 活動方針

小児看護学の教育活動は、2年次生と3年次生に専門看護学として、対象とする小児に関する小児保健と小児看護の特殊性を理解でき、実習後には小児と家族への関心を深め、隣地で看護実践する能力を身につけることをねらいとしている。そのため、講義では小児の成長と発達について発達理論を学び、小児の健康の維持増進・健康障害の現象に対する家族を包含する小児看護の特殊性について理解を深め、演習では小児看護の看護過程の展開とそれに必要な援助技術を学ぶことが目的である。

小児看護学実習では、基礎看護科学講座で看護理論や看護技術を学んだ学生に対して、小児とその家族の関わりにおいて、小児看護の倫理を思考し小児看護の実践ができることを教育や指導をしている。学生が健康・不健康に関わらず小児とその家族への援助者としての態度を身につけ、肯定的な子ども観を構築できるよう配慮している。小児看護学研究室の研究活動に関しては、学外や学内の競争的研究費を獲得し、研究論文が積極的に学術雑誌に投稿することを目標にしている。

2 教育活動の現状と課題

令和3年度も新型コロナウイルスの影響を受け、4月から小児看護学の講義は、オンラインと対面授業で行った。その為、試験はレポート提出などで評価した。また、15コマの小児看護学演習は視聴覚教材と事例検討を行った。2年次前期の概論では、小児を取り巻く保健、福祉、看護などの課題を学

ぶ。学生が自分自身の「子ども観」をレポート求めた。自己の子ども観を認識するように工夫している。

3年次前期はより小児看護の専門的な講義と学内演習を通して、学生は多くの小児に関する学びを深める。3年次後期は、それまで学んだ専門的知識を臨地実習で実践し、看護場面に知識を応用する。令和3年度は9月は学内実習となり事例の展開を課題として指導した。10月からの8週間は臨地実習で通常の実習ができた。学生の授業評価で満足度4.5以上と高かった。

3 研究活動の現状と課題

小児看護学研究室では、小児看護の中でも小児がん看護の研究や、小児保健分野の予防接種関連の研究や、幼児後期の食行動と保護者の食育意識の研究、また、小児在宅医療に関連した医療的ケアの研究を軸に取り組み、学部の4年次生には課題を提案し協働した。令和1年度も各自が取り組んでいる研究を学会発表等で発信した。大学院では、小児NPコースの1名が修了することができた。また、修士課程1年には2名が在籍しているので継続して支援する。

4 その他

ボランティア活動：糖尿病サマーキャンプ（Young Wing Summer Camp）は、糖尿病をもつ子どもを対象とするキャンプで計画していたが、コロナ感染症のため令和3年度も中止となった。

5-12 母性看護学研究室

1 活動方針

母性看護学では、学部教育において、女性のライフサイクルおよびマタニティサイクルにある妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子およびその家族への援助の理論と方法について学ぶことを目的としている。科目は母性看護学概論、母性看護援助論Ⅰ、母性看護援助論Ⅱ、母性看護学演習、母性看護学実習で構成している。母性看護学では、学内で学んだ理論と技術を実習で実践し、理論と実践を結びつけることを目標としている。特に母性看護学実習は周産期に重点をおいて実習を展開している。

2 教育活動の現状と課題

母性看護学の講義、演習、実習は、今年度コロナウイルス感染の影響を受けて、オンラインと対面講義で実施した。オンライン講義は2年目になるが、再度講義内容を見直し、事前に資料の配布またはオンライン上に資料を掲示した。学生の講義における反応は、講義終了後グループフォームにて、講義における学びや感想、質問を提出してもらい確認した。

母性看護学技術演習は大分県のコロナ感染がステージⅡになってから、学生の人数を減らして演習室で実施した。母性看護過程の演習はオンラインでグループ学習にて実施した。発表会もオンラインで行ったが、学生から積極的な意見交換が見られた。

母性看護学実習は前半の6週間はコロナ感染症の増加を受けて学内実習とした。後半の6週間は大分県立病院（25名）と堀永産婦人科（12名）で臨地実習を実施することができた。臨地実習時間が3.5日と短い実習であったが、学生が実際に現場を見学して体験して学ぶことの大切さを実感した。昨年の母性看護学実習の課題は、臨地実習期間が短くなり経験値が減ったこと、日数を学生に平等に配置できなかったことであった。今年は学生の実習日数は平等に配置できたが、コロナ禍の影響で半数の学生が臨地を体験できず、臨地に行けても実習日数は半分程度と経験値は少なくなっている。

3 研究活動の現状と課題

母性看護学研究室は、女性の健康に関する研究、父性に関する研究、性教育、受胎調節、家族計画に関する研究、乳房ケアや産後ケアに関する研究に取り組んでいる。今年度は大学院生に指導した「未就学児を育てる女性看護職の就業継続促進要因の検討」と「西日本地域におけるアドバンス助産師更新の現状と課題」の研究課題について、修了後母性衛生に論文を投稿することができ、2022年7月号に掲載されることが決定している。次年度も大学院生の研究成果を論文投稿していきたい。

4 その他

日本助産師会と大分県助産師会が主催する2023年10月開催の九州・沖縄地区研修会の運営に母性看護学研究室が協力している。

5-13 助産学研究室

1 活動方針

本研究室は、大学院助産学コースの教育を担っている。大学院助産学コースでは、高度な判断力と実践力をもつ自律した助産師を育てることをめざしている。助産師が専門職として社会に対して果たすべき役割について理解し、高度な周産期母子医療に対応するためにハイリスク妊産褥婦を含めた助産診断能力及び助産技術、またリプロダクティブ・ヘルスを推進するために他職種との連携・協働、社会資源の活用能力を身につけるための教育を展開している。特に、模擬事例を用いたシミュレーションや体験型の演習、段階的OSCEを取り入れた技術試験などの教授方法をCOVID-19感染対策を実施したうえでやっている。さらに、大学院修了の専門職業人として旺盛な探究心や豊かな人間性を身につけることを目指し、オンラインを活用した発表や交流の機会を設けディスカッションの場としている。研究活動は、各教員のテーマを深め研究力を高めること及び卒業研究、課題研究の指導をとおして、学会発表や論文投稿を行い、助産学領域全般の研鑽を積んでいる。また、オンライ

ン研修等に積極的に参加し自己研鑽を積み、アドバンス助産師として CLoCMiP® レベルⅢ認証更新を行った。

2 教育活動の現状と課題

助産学コース学生は、夜間に共通科目を履修し、1年次の前期は昼夜にわたって講義・演習があるため、課題の重複や体力・健康面の支援も行っている。今年度は、新型コロナウイルス感染状況をみて、授業は、大学の方針に沿って対面と Zoom によるオンライン授業を組み合わせて感染対策を行った。1、2年次生が重複し密になる時間を避けるように実習室の使用日時の調整をし、感染対策を行い短時間で効率よく練習する方法をとった。1年次生の段階的 OSCE は、通常よりディスカッションの期間が短いこともあり、事例に応じた方法を身に着けるまでには至っていない学生もあった。1年次後期の NICU 課題探究実習は、実習時期を変更し、臨地 2 日と学内での実習を行った。担当教員が、オンラインを活用してディスカッションするなどし、学びが深まるようにしていた。妊娠期課題探究実習は、感染状況により時期や日数を変更し実施した。担当教員が学内で補習を行うなど工夫した。1月以降の蔓延防止期間は中止し、2月後半から継続事例の実習を実施した。昨年度よりも超音波診断装置を用いた妊婦健康診査や保健指導の件数は不足したが、自粛期間中にオンラインを活用した演習を数回実施し補足をした。

2年次生は、4月実施の分娩介助演習は、昨年度作成した動画を活用し、各自で事前学習を行い、手順等をふまえて 2 グループに分かれて練習するなど感染対策を行いながら OSCE も予定通り実施した。分娩介助を伴う助産学統合実習は、施設との打ち合わせを入念に行い、感染対策を実施しながら 5月から8月にかけて約 4 か月間の実習を行い、実習目標は達成できた。今年度は経済的な事情による心身の負担がある学生と、発熱、咽頭痛（PCR 検査を実施）の学生 2 名が 1 週間程度欠席した。他の 7 名は体調を崩すことなく実習した。実習開始後に、5 名が大分医療センターのキャンセル待ち、他の 4 名は大学内の集団接種でワクチンを 2 回接種した。接種後の発熱などで、翌日は実習を休みとした。就職試験による県外への移動後は PCR 検査を受け、陰性を確認してから実習再開とした。教員は、学生個々の問題解決能力や対人対応能力に応じた指導を展開した。学生は、直接分娩介助を平均 10 例（9～12 例）実施した。助産師国家試験受験に必須の分娩介助経験であるため、実習施設の指導者の理解を得ながら、可能な限り臨地で経験できるように、次年度も全教員で学生の体調管理に引き続き支援していく。

2年次後期の助産所助産師の自律した助産ケアの実際は新型コロナウイルス感染防止対策で中止した。第 35 回日本助産学会学術集会や第 62 回日本母性衛生学会のオンライン講義の視聴や母体搬送シミュレーションを経験し、助産師としてのアイデンティティの基礎を形成した。課題研究は指導教員の指導を受け、全員提出し成果を報告した。今後、関連学会等に発表や投稿をする予定であるため引き続き支援していく。令和 3 年度修了生 9 名は、県内 3 名、県外 6 名の病院に就職した。

令和 4 年度から新カリキュラムのスタートでもあるため、段階的 OSCE の修正を行い、大学院生としての思考力、自己学習力を養い人間関係スキルを向上させる方法をディスカッションし実施する予定である。

3 研究活動の現状と課題

学内外の研究費を獲得し各自の課題を探究し続けており、関連学会での発表や学会誌に投稿をしている。卒業研究は、教員の研究テーマの一部や教員のテーマとは直接関係しないものの助産学の発展の基礎となる研究を指導した。大学院生の特別研究・課題研究は、主または副指導教員として指導に携わり、共同研究者として関連学会で発表し成果を残している。過年度修了生の論文を投稿するべく継続して支援していくことは継続課題である。

5-14 精神看護学研究室

1 活動方針

学部教育の基本目標は従来通り、1)精神科領域以外の様々な場でも展開できる精神看護、2)対象者の社会参加・自己実現や生きにくさに焦点を当てた看護、3)看護者自身の特徴や“治療的人間関係”に留意した看護、及び 4)医療と保健・福祉サービスとの連携を意識した看護の修得と設定して教育を展開した。この目標のために講義・演習・実習が一連の流れとして接続するよう、担当教員が連携し、随時話し合っている。卒業研究に関しては、できるだけ各学生の関心に沿ったテーマで研究を進められるよう配慮し、今年度は5名の学生を担当した。教員の研究については、それぞれの専門領域を生かしつつ、行政や病院と協働で研究を推進できる体制の構築を図っている。コロナ禍の中で調査を依頼しにくい面があり、既存資料や文献の研究がやや増えた。

大学院では、精神看護学特論、メンタルヘルスト論、看護政策論、看護コンサルテーション論、看護理論特論、看護アセスメント学特論などを担当している。広域看護学コースの精神看護学特論は、国家試験出題範囲にとらわれず、保健師の地域・職域精神保健活動の実際に必要な内容を扱っている。それ以外の科目は、大学院各コースの共通科目に指定されている単位が多いので、履修者全体の関心とニーズに対応する授業内容を目指している。

2 教育活動の現状と課題

学部の教育内容については、国試の出題基準変更も視野に入れ、心の健康と疾患、精神医療・看護の歴史と現状、看護の対象者の精神的・社会的側面に着目したアセスメントと援助、治療的環境と看護の役割、社会と精神看護の関係などによって構成した。新型コロナウイルス感染症拡大により臨地実習が十分できない可能性にも備えた。講義ではテキスト以外に追加資料や視聴覚教材も多用し、できるだけアクティブラーニングを実現できるよう努めた。演習では、紙上事例や動画事例に基づく課題を精選し、体験的学習、実習施設や家族会・NPOのスタッフによる活動紹介などで構成し、実習への準備性を高めるようにした。実習は精神科病棟と障害福祉サービス事業所での実習を例年と同じ比重で展開し、ほぼ予定通り進行できた。卒業研究では、学生の関心・能力と計画の実現性をすり合わせ、卒論完成後も国試に至るまで支援を続けた。

3 研究活動の現状と課題

大学院生や学外の病院・企業・自治体と協働して、自殺予防、交替勤務と睡眠、精神障がい者のリハビリテーション、コミュニティでの看護教育等の領域で研究活動を展開した。自殺予防に関しては、大学院生と協働で住民調査データに基づく論文を公表した。交替勤務者の睡眠に関する研究はフィールド調査を終了し、結果を投稿準備中である。精神科病院と協働して、精神障害者の社会参加に向けたリカバリー支援心理教育（IMR）の効果評価と実施者と参加者の関係性についての研究や、保護室（隔離）からの早期解除を目指した看護師用のアセスメントツールの作成などを進めており、成果を逐次発表・論文投稿している。

4 その他

学会の役員・編集委員として、学術活動に貢献し、また日本精神科看護協会大分県支部の役員として、県内の精神科看護師への教育や研究の支援を行った。大分アディクションフォーラムの実行委員として、様々な嗜癖問題を抱える当事者や家族の支援を行った。リカバリー支援心理教育（IMR）の普及として、県内の精神科病院デイケア、精神科クリニックデイケア、就労支援継続 B 型施設での実施支援を継続し、講演会を開催した。

5-15 保健管理学研究室

1 活動方針

学部教育については、看護管理学や在宅看護論に関する授業を通して、学生がマネジメントやリーダーシップ、在宅看護に関する能力の育成を方針とする。大学院教育では、看護管理・リカレントコースをはじめとした実践者を対象に、看護管理学に関する教育を行い、実践に役立つ授業を行うことを方針とする。さらに、看護管理学や在宅看護論に関する研究を行い、研究の新たな知見を学部と大学院教育に役立て、教育と研究を通して地域社会に貢献することを方針とする。

2 教育活動の現状と課題

学部教育では、学部 2 年次生に看護管理学の基礎を教授した。また、4 年次に対しては、看護管理学に関する基礎知識をもとに、実習経験を通して看護管理を考える教育を新たに行った。次年度に向けた課題として、グループワークと全体共有の時間配分を考慮することで学習成果に繋げる。3 年次開講の在宅看護論の講義では、学生が地域で生活する在宅療養者や家族に看護を提供できるよう、学生の主体性を引き出す教育を行った。本年度は訪問看護のイメージを持てるよう、現場で活躍する看護師による講義を充実させた。次年度に向けた課題として、多くの学生が苦手とする在宅看護の関連法規を充実させることで学習成果に繋げる。

大学院の看護管理学特論では、学生が看護管理学に関する主要なテーマについて、講義を受講し、自らの臨床経験を踏まえたプレゼンテーションとディスカッションを行った。これにより、学生のアクティブラーニングを促進できた。次年度は、学生自身が、看護管理に関するテーマを考える機会も設け、受講者のニーズに沿った授業を行うことで、より実践てきなマネジメントの知識やスキルを高められるようにする。

3 研究活動の現状と課題

看護管理学や在宅看護学に関する研究として、令和3年度は大分県中小規模病院等看護管理者支援研修に加えて、国東地域と宇佐中津地域で支援を行った。令和4年度は、宇佐中津地域に加えて、西部地域で支援を行う。また、令和4年度は、新たに科研費による研究として「中山間地域の訪問看護ステーションにおける課題と安定・持続化に向けたモデルの検討」「中小規模病院の看護師がやりがいを獲得するプロセスの解明と支援指針の開発」「中小規模病院の看護管理者の管理行動が看護の質と定着に及ぼす効果予測モデルの開発」を開始する。

5-16 地域看護学研究室

1 活動方針

学部教育では、看護の対象を個人から集団、地域へと視野を広げ、看護の活動の場を地域に拡大し展開できる看護職の育成をめざしている。地域全体を包括的に捉え、生活の場での看護や生活に目を向けた看護職育成への社会的要請を反映し、すべての看護職者の基礎的知識として「地域看護」の思考を持った看護師の育成を目指している。

大学院教育では、少子高齢社会における生涯を通じた健康づくりの支援や、産業・学校を含む地域全体を対象として活動できる保健師の育成を目指している。また、社会変化に対応し、新人期から困難事例に対応できる能力、新たな取り組みを企画立案できる保健師を育成する。

2 教育活動の現状と課題

学部教育では、2年次後期に地域看護学概論、3年次後期に健康支援論演習、地域生活支援論の講義を行った。3年次後期の地域生活支援論では、コミュニティ・アセスメントの考え方を活用し、4年次で実施する実習地のデータを用いた演習を行い、実習と連動した学習を強化した。今年度、Zoomによる講義・演習となり、演習でのグループワークではオンラインによりグループダイナミクスを活かすことができないグループもあり、教員の演習への効果的な介入方法が来年度の課題である。また、4年次の実習では、COVID-19により臨地実習に行かれない学生もおり、臨地実習の経験値の差を少なくする実習・演習方法へと工夫が必要である。

大学院教育では、学生・教員・自治体（企業）が一体となり実習に取り組んだ。実習におけるテー

マ設定の場面から、学生の関心のあるやりたいことと、実習地が直面している「現代進行形の健康課題」などについて打ち合わせを行い、現場とともに一緒に考え、実習に臨むことができた。しかし、COVID-19により経験できる事業等が限られるため、学生の経験値の共有を図り、能動的に考察できるよう工夫する必要がある。

3 研究活動の現状と課題

学部の卒業研究では、4名の学生に各教員が研究指導指導を行い、研究としてまとめた。大学院教育では、大学院生の実習の成果を教員指導のもと「日本公衆衛生看護学会」で1名の学生が発表した。また、「日本公衆衛生看護学会」で全国の大学院修士課程保健師養成の学生との交流会を持つなど、活発に研究活動を実施した。

教員は各研究テーマで科研費等を獲得し研究に取り組んでいる。それぞれの成果は国際学会および国内学会で発表、論文として投稿した。今後も、研究の継続と課題研究や実習の成果を学会発表や雑誌投稿できるよう教育をおこなっていく。

5-17 国際看護学研究室

1 活動方針

学部教育では、国際看護学概論（2年次）、国際看護比較論・国際看護学演習（3年次）、大学院では、国際看護学特論、広域看護学演習、その他講義で海外事情に関する内容を担当している。講義・演習では、日本国内のみならず世界の人々を看護の対象と捉え、1) 地球規模の保健医療に関する課題について理解し、その直接的・間接的要因や、課題に対する地域／グローバルな規模での対策について学ぶこと、2) 在留外国人や訪日外国人の増加等により急速に多様化する対象者の文化・社会的背景に着目し、文化に配慮したケア (Transcultural nursing) について学ぶことを目的としている。世界の健康課題の背景を理解するため、保健医療についてだけでなく、歴史や風土、経済的側面など、複眼的な視点を持ってもらえるよう留意している。また、グローバルヘルスに関する最新かつ包括的な情報は、国際機関のホームページ等から得ることができるため、信頼できる情報源から英語で情報をとる内容を演習に組み込んでいる。大学院では、受講生の研究テーマに沿い、ニーズに対応した内容を目指している。

2 教育活動の現状と課題

今年度は COVID-19 感染拡大予防のため、オンライン講義が中心となり、グループワークもオンラインとなった。当研究室では、グローバルヘルスに関する基本的な知識の獲得や、講義や演習を通して多様な価値観に触れ、文化社会的背景が人々の健康に及ぼす影響について理解することをめざしているが、ディスカッションを通して考察を深める機会が少なかった。学生は講義・演習の目標は概ね達成できたと考えるが、対面形式以外でもより能動的に学べるよう工夫する必要がある。また、

総じて予習・復習が不足しているため、予習、講義・演習、復習を効果的につなげ、相乗効果が得られるよう教授内容や方法を考えていく必要がある。

3 研究活動の現状と課題

今年度は、国際交流委員会主催で行ったオンライン国際交流を題材とした卒業研究を行い、オンライン国際交流の成果や課題について今後につながる研究成果を得ることができた。また、ワクチン接種に関する関心が高まる中、日本の中学生の保護者を対象として HPV ワクチンに対する認識を調査し、海外事情と比較して考察する卒業研究にも取り組んだ。

教員は各々のテーマ「在日ムスリム女性の感染症に対する認識・態度・講堂と文化社会的要因―結核に着目して」、「看護系単科大学における学生の異文化感受性を高める国際看護学教育プログラムの検討」で科研費を獲得し研究に取り組んでいる。令和 4 年度は、前者のテーマで MOU 締結校の研究者とも協力し卒業研究に取り組む予定である。

4 その他

大分県国際交流プラザ、JICA デスク大分、大分市国際課から国際交流に関するイベントをご紹介いただき、学生・教職員に発信している。また、大分市国際課が開催した「おおいた国際協力啓発月間」において、研究室活動のパネル展示を行った。

6 研究助成・事業助成等

6-1 研究助成

6-1-1 日本科学振興会科学研究費助成事業（科研費）

石田佳代子

災害時における「黒エリア」での対応に向けた実践モデル的教材の開発. 基盤研究(C). (代表)

岩崎香子、安部眞佐子

CKD 誘発オステオサルコペニア発症を防止する食事性タンパク質摂取のあり方.. 基盤研究(C).
(代表/分担)

岩崎香子

身体不活動が腎疾患に糖尿病を誘発する機序の歩行制限モデルラットにおける解析. 基盤研究(C).
(分担)

梅野貴恵

離乳後女性のエクオール産生能と骨代謝プロフィール回復状態の推移との関連. 基盤研究(C).
(代表)

小嶋光明

マイクロビーム放射線療法の抗がん効果の仕組みを細胞間コミュニケーションから紐解く. 基盤研究(C). (代表)

小野美喜

看護師の裁量範囲の拡大により生じる倫理的問題と倫理教育のあり方に関する研究. 基盤研究(C).
(代表)

小野治子、赤星琴美

生活習慣病の服薬者の医療費削減に向けた保健指導の構築. 基盤研究(C). (代表)

草野淳子

医療的ケア児を支える訪問看護師と専門支援相談員をつなぐ連携教育プログラムの開発. 基盤研究(C). (代表)

桑野紀子

在日ムスリム女性の感染症に対する認識・態度・講堂と文化社会的要因—結核に着目して. 基盤研究(C). (代表)

佐伯圭一郎

量的な看護研究における統計手法利用の現状分析と報告のためのガイドラインの提案. 基盤研究(C). (代表)

看護学生のシビリティ (civility) を育むアクションリサーチ. 基盤研究(C). (分担)

看護系大学における臨床実習前の共用試験の検討. 基盤研究(B). (分担)

佐藤愛

地域在住高齢者のオーラルフレイルの実態調査と口腔・嚥下・咳嗽機能向上の介入の試み. 若手研究. (代表)

佐藤栄治

自発的掛け声と立ち上がり時の体幹前傾動作が体幹及び下肢筋活動に及ぼす影響. 基盤研究(C). (代表)

品川佳満

看護学生の情報倫理統合力の修得を目的とした学習支援ポータルサイトと演習教材の開発. 基盤研究(C). (代表)

保育者養成をベースとした妊娠から始まる子ども子育て支援者養成カリキュラムの開発. 基盤研究(C). (分担)

篠原彩、桑野紀子

女性外国人技能実習生のリプロダクティブヘルスニーズに対する支援の構築. 基盤研究(C). (代表, 分担)

秦さと子

嚥下機能評価のための血中および唾液中サブスタンス P 濃度の基準値の検討. 基盤研究(C). (代表)

杉本圭以子

精神科デイケアにおけるリカバリー支援心理教育プログラムの標準的実施の可能性. 若手研究. (代表)

田中佳子

シャント血流音から狭窄を評価する機器の開発に関する基礎的研究. 基盤研究(C). (代表)

藤内美保

看護基礎教育における臨床推論の看護の思考形成を導く教育プログラム開発. 基盤研究(C). (代表)
診療看護師 (NP) が行う在宅療養移行支援に関する質指標の開発. 基盤研究(C). (分担)

濱中良志

骨粗鬆症に対する新しい発症機序の解明と新規薬物開発. 基盤研究(C). (代表)

樋口幸

予防的スキンケアのための画像解析による新生児の皮膚評価ツールの開発. 基盤研究(C). (代表)
スキンプロットティング法を用いた新生児の皮膚トラブル発症のメカニズム解明. 基盤研究(B). (分担)

福田広美、村嶋幸代

ピアサポートによる中小規模事業所の看護管理者能力開発と地域ネットワーク推進の研究. 基盤研究(B). (代表)

丸山加菜、桑野紀子

看護系単科大学における学生の異文化感受性を高める国際看護学教育プログラムの検討. 基盤研究(C). (代表, 分担)

森加苗愛

糖尿病をもつ成人期男性のセクシュアリティの看護ケアの質評価基準の検証. 若手研究. (代表)

山田貴子

熟練訪問看護師の臨床判断モデルの開発—新卒訪問看護師教育の開発に向けて—. 若手研究. (代表)

吉田成一

PM2.5 構成成分の複合胎仔期曝露による出生仔雄性生殖系・免疫系に及ぼす影響. 基盤研究 (B). (代表)

渡邊弘己

ファクターモデルに基づく高次元データ解析の新展開. 若手研究. (代表)

6-1-2 その他の研究助成

市瀬孝道、吉田成一、定金香里

環境中微粒子の体内、細胞内動態、生体・免疫応答機序の解明と外因的、内因的健康影響決定要因、分子の同定. 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業 (CREST) 研究補助金. (分担)

岩崎香子

新規ビスホスホネート[4-(メチルチオ)フェニルチオ]メタンビスホスホネート (MPMBP) の慢性腎臓病に伴う骨・ミネラル代謝異常の発生抑制効果の検討. 公益財団法人日本腎臓財団公募助成研究 CKD 病態研究助成金 (代表)

小嶋光明

放射線照射したマウスの骨髄・脾臓内造血幹細胞の細胞動態の解析～放射線誘発マウス急性骨髄性白血病のメカニズムを考える～. 2021 年度放射線災害・医科学研究拠点共同研究 (代表)

樋口幸、吉田成一

微酸性電解水を用いたディスプレイの開発. 鳥繁産業株式会社 受託研究費. (代表、分担)

姫野雄太

中小規模病院に勤務する看護師のやりがいを獲得するための支援に関する研究. 2021 年度株式会社ユピア「オリーブの枝助成金」. (代表)

村嶋幸代

ICT 活用による保健師活動評価手法開発事業, 一般財団法人日本公衆衛生協会 令和 3 年度地域保健総合推進事業 (分担)

6-1-3 学内の競争的研究資金

岩崎香子

慢性腎臓病に伴う血管石灰化の発生と骨代謝異常の進展に対する食事性フラボノイド摂取の効果.
先端研究

恵谷玲央

機械学習を適用した胸部診断画像の継時的解析による異常画像の早期検出法の検討. 奨励研究

影山隆之、福田広美、荒木章裕、堀裕子、永松いずみ、木嶋彩乃、篠原彩

予防的家庭訪問実習における世代間交流が高齢者に及ぼす効果に関する研究. プロジェクト研究

定金香里

輸入果実に使用される防かび剤経口曝露によるマウスアレルギー性喘息への影響評価. 先端研究

廣田真里

コロナ禍における新人看護職員研修と臨床実践能力到達度の実際. 先端研究

吉田成一

加熱式たばこの使用により雄性生殖系が受ける影響. 先端研究 (代表)

6-2 事業助成

篠原彩、影山隆之、福田広美、荒木章裕、堀裕子、永松いずみ、木嶋彩乃、村嶋幸代

看護学生による情報通信技術を活用した遠隔予防的家庭訪問実習～コロナ禍での長期自粛生活による高齢者のフレイル予防～ おおいた地域連携プラットフォーム 実践型地域活動事業

福田広美

令和3年度大分県地域医療介護総合確保基金大分県中小規模病院等看護管理者支援事業

6-3 外部研究者受入れ

本年度実績なし

7 研究業績

7-1 著書

- 監修 村嶋幸代, 岸恵美子. 保健学講座 1 巻 公衆衛生看護学概論, メヂカルフレンド社, 2022.1,
監修 村嶋幸代, 岸恵美子. 保健学講座 2 巻 公衆衛生看護支援技術, メヂカルフレンド社, 2022.1,
監修 村嶋幸代, 岸恵美子. 保健学講座 3 巻 公衆衛生看護活動展開論, メヂカルフレンド社, 2022.1,
監修 村嶋幸代, 岸恵美子. 保健学講座 4 巻 疫学/保健統計, メヂカルフレンド社, 2022.1,
監修 村嶋幸代, 岸恵美子. 保健学講座 5 巻 保健医療福祉行政論, メヂカルフレンド社, 2022.1,

7-2 原著論文・査読付総説

峰松恵里, 赤星琴美, 村嶋幸代: 公共交通機関の少ない地域における運転免許返納者の返納理由, 車のない生活の受け止めと外出状況, 日本看護科学会誌, 41, 334-343, 2021.

足立綾: 産科施設における小児期予防接種教育の実態. 母性衛生, 62(4), 845-852, 2022.

石田佳代子: 看護学生の批判的思考育成を図るための教育方法の工夫に関する文献レビュー. 第 51 回日本看護学会論文集 看護管理・看護教育, 139-142, 2021.

石丸智子, 秦さと子, 田中佳子: 教員が演じる模擬患者参加型授業と基礎看護学実習の連繋による学生の学び, 日本医学看護学教育学会誌, 30(3), 71-79, 2022.

松井咲樹, 梅野貴恵, 樋口幸: 温泉地の妊婦の温泉入浴頻度と温泉入浴への希望、禁忌症からの「妊娠中」削除の認知に関する実態. 母性衛生, 62(1), 152-157, 2021.

Ojima M, Ito A, Usami N, Ohara M, Suzuki K, Kai M: Field size effects on DNA damage and proliferation in normal human cell populations irradiated with X-ray microbeams. Sci Rep.,11, 7001-7009, 2021.

Matsumoto H, Shimada Y, Nakamura A, Usami N, Ojima M, Kakinuma S, Shimada M, Sunaoshi M, Hirayama R, Tauchi H: Health effects triggered by tritium: how do we get public understanding based on scientifically supported evidence? J Radiat Res., 62, 557-563, 2021.

小野治子, 赤星琴美: 看護系大学における養護教諭養成課程の意義と求められる能力. 看護展望, 47(1), 57-59, 2022.

Ono H, Akahoshi K, Kai M: Change in waist circumference and lifestyle habit factors as a predictor of metabolic risk among middle-aged and elderly Japanese people: population-based retrospective 10-year follow-up study from 2008 to 2017. Archives of public health. (2022) 80:75 <https://doi.org/10.1186/s13690-022-00836-z>

後藤智美, 小野美喜: 諸外国における Nurse Practitioner と医師の協働に関する文献研究—促進要因・阻害要因に焦点をあてて. 日本 NP 学会誌, 5(1), 43-52, 2021.

高橋梢子, 小野美喜, 八尋道子, 八代利香, 小西恵美子: 日本の看護職の倫理綱領の改訂: 改定案と改訂プロセスへのクリティック. 日本看護倫理学会誌, 14(1), 43-47, 2022.

安藤敬子, 影山隆之: 三交替勤務に従事する男性労働者の深夜勤務中の眠気に対する睡眠衛生教育の効果について. 産業精神保健 29: 273-285, 2021.

大畑江里, 影山隆之: 日本の一都市における成人住民の自殺念慮有症率とその関連要因: 地域自殺対策のための標的集団とその背景. 看護科学研究 19: 47-56, 2021.

齊藤友子, 影山隆之: 日本の知的障害者施設で働く職員の精神健康およびその関連要因についてのレビュー. 産業ストレス研究 29(2), 275-290, 2021.

草野淳子, 神野桃子, 高野政子: 訪問看護師が行う医療的ケア児への看護の実践に関する文献検討. 日本小児看護学会誌, 31, 87-93. 2022.

松本佳代, 草野淳子, 高野政子: 米国において小児領域に従事する NP の臨床推論の過程及び看護実践に関する文献検討. 日本 NP 学会誌, 5(2), 71-82, 2021.

Kuwano N, Kameya M: Comparative Study on the Intercultural Sensitivity of Japanese and Korean Nursing Students: International Journal of Nursing & Clinical Practice. 2021 Dec 27. <https://doi.org/10.15344/2394-4978/2021/350>

後藤成人, 岡崎敬一郎, 河向勝貴, 足立大作, 若林美紀, 山崎悦子, 衛藤龍: 隔離室使用時の自傷・暴力行為に関する具体的観察項目: 隔離中の患者への観察項目と精神科看護師の意識に焦点をあてて. 日本精神科看護学術集会誌. 64(1). pp328-329. 2021.

馬場悠介, 後藤成人. 暴力リスクのある患者への精神科看護師のコミュニケーションの工夫の実態. 日本精神科看護学術集会誌. 64(1). pp380-381. 2021.

佐藤愛, 吉田成一, 嵐谷奎一, 赤星琴美 : PM2.5 中の PAHs と炎症性サイトカイン・ケモカイン発現および呼吸器疾患との関連. 日本健康学会誌. 88(1), 3-14, 2022.

Shinohara A, Kawasaki R, Kuwano N, Ohnishi M: Interview survey of physical and mental changes and coping strategies among 13 Vietnamese female technical interns living in Japan. Healthcare for Women International 2021 Jul 30. <https://doi.org/10.1080/07399332.2021.1963966>

杉本圭以子, 森崎令士 : 精神科デイケアにおけるリハビリ支援プログラム (IMR) : パーソナルリハビリの促進に影響する要因. 看護科学研究, 19, 13-20, 2021.

巻野雄介, 田中佳子 : 看護師の経験からみた末梢静脈穿刺が困難となる要因に関する質的研究. 日本健康学会誌, 87(2), 57-65, 2021.

竹山ゆみ子, 永松有紀, 藤内美保 : 施設入所高齢者の自立度別栄養状態の実態と舌圧・身体計測の栄養評価指標としての活用可能性. 看護理工学会, 9, 143-152, 2022.

竹山ゆみ子, 永松有紀, 藤内美保, 甲斐由紀子 : 高齢者の栄養評価指標としての舌色の有用性の検討. 日本未病学会, 27 (3), 30-37, 2021.

Yano H, Hamanaka R, Zhang JJ, Yano M, Hida M, Matsuo N, Yoshioka H.: MicroRNA-26 regulates the expression of CTGF after exposure to ionizing radiation. Radiat Environ Biophys, 60(3), 411-419, 2021.8.

樋口幸, 巻野雄介, 田中佳子, 大貝和裕 : 微酸性電解水の 1 週間反復噴霧がヒト皮膚に与える影響—二重盲検プラセボ対照並行群間比較試験—. 看護理工学会誌, 9, 72-80, 2022.

姫野雄太 : 新型コロナウイルス感染症流行下にがん手術を受ける患者の術前の体験—消化器がん患者を対象とした分析—. 日本手術看護学会誌, 17(2), 186-191, 2022.

福田広美, 原田千鶴, 副田明美, 田辺美智子, 河野壽壽代, 大戸朋子, 竹中愛子, 村嶋幸代 : 中小規模病院等の人材育成に関する看護管理向上のプロセス—地域の看護ネットワークを基盤としたアクションリサーチ—. 日本看護管理学会誌, 25(1), 1-11, 2021.

坂本貴子, 福田広美, 村嶋幸代 : 中小規模病院に勤務する看護師の職務継続意思につながる看護師長の基本的心理欲求支援行動評価尺度の開発. 日本看護科学会誌, 41, 815-823, 2021.

坂本貴子, 福田広美, 上田智之, 下條三和, 田渕康子, 村嶋幸代: 看護師の職務継続意思と看護師長からの基本的心理欲求支援行動－中小規模病院に勤務する看護師調査－, *国際ナショナル Nursing Care Research*, 20(3), 9-18, 2021.

森加苗愛: 糖尿病をもつ成人期男性のセクシュアリティの看護ケアの質評価基準の開発. *日本性科学会誌*, 39(1), 59-75, 2021.

Seiichi Yoshida, Research Trends on Biological Effects of Heated Tobacco Product. *Indoor Environment* 24(2) 109-116 2021.

Nakagawa T, Watanabe H, Hyodo M: Kick-one-out-based variable selection method for Euclidean distance-based classifier in high-dimensional settings: *Journal of Multivariate Analysis* 2021 Jul. <https://doi.org/10.1016/j.jmva.2021.104756>.

7-3 その他の論文等

赤星琴美, 小野治子: 地域看護学の卒業時到達目標と内容・方法から考える「地域・在宅看護論」の新たな授業づくり. 看護展望, 46(6), 549-554, 2021.

浜田信行, 藤淵俊王, 石川純也, 伊藤照生, 恵谷玲央, 小野孝二, 西山祐一, 松原孝祐: NCRP Statement No. 13 「腹部・骨盤部単純 X 線撮影時の慣例的な生殖腺遮蔽の廃止に向けた NCRP 勧告」とその付属文書 National Council on Radiation Protection and Measurements. 日本保健物理学会誌, 56(2), 80-93, 2021.

Ojima, M., Ito, A., Usami, N., Ohara, M., Suzuki, K. and Kai, M. The Response of DNA Damage in Normal Human Cell Populations Locally Irradiated with X-Ray Microbeams of Different Beam Sizes: Basic Study to Clarify the Health Effects of Internal Exposure. Photon Factory Highlights 2020., 54-55, 2021.

小嶋光明, 伊藤敦, 宇佐美徳子, 大原麻希, 鈴木啓司, 甲斐倫明: X 線マイクロビームを用いた不均一照射による細胞集団の応答-内部被ばくへの健康影響を考えるための生物基礎実験-. Photon Factory Activity Report 2020, #38, 2021.

影山隆之: 「新型コロナウイルス問題」と現代社会における心の健康. 心と社会 52(3): 10-16, 2021.

影山隆之: 日本の自殺予防研究の現状と課題. 臨床心理学 21(5), 515-519, 2021.

影山隆之: 日本の地域自殺対策の現状. 精神科治療学 36, 939-943, 2021.

影山隆之: 「コロナうつ・コロナ不安」を防ぐ. 地域保健 52(1), 32-35, 2021.

草野淳子, 高野政子, 足立綾: コロナ禍における小児看護学実習(3年次生)の取り組み. 第21回九州・沖縄看護教育研究会誌, 21, 33-36. 2021.

廣田真里, 秦さと子, 石丸智子, 田中佳子: 主体性を高め臨床判断能力の基盤を強化するためのカリキュラム. 看護展望, 47(4), 19-23, 2022.

福田広美, 原田千鶴, 大戸朋子, 庭瀬朋美, 荒木章裕, 姫野雄太, 矢野亜紀子, 村嶋幸代: 大分県独自の看護管理者支援事業 地域ネットワークで看護管理能力を向上 集い、解決し合う場づくり. 看護のチカラ, 578, 38-45, 2021.5.

宮内信治: 自由間接話法における Wh-疑問文の音調. 英語教育音声学, 創刊号, 147-151, 2022.

村嶋幸代, 川崎涼子: 「市町村保健師の人材育成体制の構築支援事業」から見えてくるもの, 地域保健, 52(3), 24-29, 2021.5.

村嶋幸代, 木嶋彩乃: 〈解説〉地域包括ケアシステム構築に向けた保健医療福祉の連携強化の方法論, 看護, 73(9), 34-46, 2021.7.

7-4 プロシーディングス

該当なし

7-5 報告書

小嶋光明, 恵谷玲央, 鈴木啓司: 放射線照射したマウスの骨髄・脾臓内造血幹細胞の細胞動態の解析～放射線誘発マウス急性骨髄性白血病のメカニズムを考える～. 放射線災害・医科学研究拠点 2020年度共同利用・共同研究課題研究成果報告集, 2021.

7-6 学術講演

市瀬孝道, 定金香里, 三上剛和, 本田晶子, 高野裕久 : シンポジウム SC09 環境中微小粒子による生体組織への影響 ～新たな技術で見えてきたもの～ 4.環境中粒子による肺のアレルギー悪化と細胞外小胞の変化. 第 127 回日本解剖学会総会.(Web 開催). 大阪, 2022.3.

Ichinose T, Sadakane K, Maki T : Workshop 2PW-02 Scientific verification of biological effects of aerosols and droplets in the air. Induction of allergic airway inflame. Yokohama (Web), 2021.12.

岩崎香子 : シンポジウム 1 CKD-MBD と骨粗鬆症の接点. CKD における骨粗鬆症の成因. 第 5 回日本 CKD-MBD 研究会, 東京都, 2021.5.

Yoshiko Iwasaki : Symposium 1. Science of uremic toxins. “Uremic toxins-related bone metabolic disorders in chronic kidney disease.” 64th Japan Society of Nephrology Annual Meeting. Yokohama. 2021.5.

恵谷玲央 : 「IRPA Practical Guidance for Engagement with the Public on Radiation and Risk」翻訳 WG 企画セッション. 医療における public engagement. 第 3 回日本放射線安全管理学会・日本保健物理学会合同大会, Web 開催, 2021.12.

影山隆之 : 労働、メンタルヘルス、自殺予防. 第 45 回日本自殺予防学会シンポジウム 3 社会の危機と自殺対策—改めて“自殺対策”を考える, 東京 (ウェブ開催), 2021.9.

影山隆之 : 心の健康はどのように成り立つか? 第 37 回日本精神衛生学会大会シンポジウム 3 あらためて心の健康とは何かを考える～ひきこもり、自殺、ハラスメントなどの多発から見えるもの. 水戸 (ウェブ開催), 2021.12.

Kuwano N: Plenary session. “Overview of utilizing technology in clinical setting, in the community in Japan.” 3rd International Conference of Nursing (ICONURS). Online, 2021 Aug 25.

吉田成一 : 研究紹介. 加熱式たばこ研究討論会. 東京都, 2022.1.

7-7 学会発表等

足立綾, 高野政子, 草野淳子: 保護者が行う予防接種スケジュールの管理と看護師の支援に関する文献検討. 日本小児看護学会第 31 回学術集会, 埼玉, 2021.6.

石田佳代子: 災害時に「黒エリア」を担当する看護師に必要な能力に関する自由記述の分析—災害拠点病院の看護管理者に対する調査結果より—. 第 27 回日本災害医学会総会・学術集会, 広島県 (オンライン口演発表), 2022.3.

市瀬孝道, 定金香里, 池田彩也香, 三上剛和, 本田晶子, 高野裕久: ディーゼル排気微粒子による肺のアレルギー増悪と細胞外小胞の変化. 第 62 回大気環境学会, (Web 開催) 土浦市, 2021.9.

岩崎香子, 吉田有依, 今村美穂, 大和英之, 深川雅史. フラクトオリゴ糖の継続的摂取は腎障害初期の骨脆弱性形成を緩和する. 第 64 回日本腎臓学会学術集会. 横浜市. 2021.5.

岩崎香子, 今村美穂, 吉田有依, 大和英之, 深川雅史. 水溶性食物繊維の摂取による腸内環境の維持は慢性腎臓病の骨弾性低下を緩和する. 第 23 回日本骨粗鬆症学会学術集会. Web 開催. 2021.10.

恵谷玲央, 小嶋光明: X 線頭部部分照射の繰り返しがマウス造血幹細胞中の Sfp1 遺伝子変異に与える影響. 日本放射線影響学会第 64 回大会, Web 開催, 2021.10.

恵谷玲央, 小嶋光明: 頭部への X 線繰り返し照射は白血病発症プロセスに関与するか -放射線誘発急性骨髄性白血病モデルマウスを用いた検討-. 第 3 回日本放射線安全管理学会・日本保健物理学会合同大会, Web 開催, 2021.12.

Ojima M, Asao S, Etani R, Kai M: The lack of radiation-induced rescue effect in normal human cells X-irradiated with a low dose, 日本放射線影響学会第 64 回大会, 水戸, 2021.9.

小嶋光明, 星野美幸, 甲斐倫明: マイクロビーム放射線療法を模擬したすだれ状照射による細胞集団の応答～DNA 損傷と細胞動態を指標としたレスキュー効果の検証～. 第 3 回日本放射線安全管理学会・日本保健物理学会合同大会, 金沢, 2021.12.

名嘉飛呂野, 小野治子, 佐藤愛, 木嶋彩乃, 赤星琴美, 村嶋幸代: コロナ禍の豪雨災害における避難所運営の課題-修士課程保健師教育における地域マネジメント実習-. 第 10 回日本公衆衛生看護学会学術集会, オンライン開催, 2022.1.

Ono H, Akahoshi K, Kawasaki R, Sato A, Murashima S : Significance of Master's Level Public Health Nursing Education. 6th International Conference of Global Network of Public Health Nursing. Web,2022.1.

小野美喜, 松下由美子, 吉川洋子 : 現法下における診療看護師 (NP) の倫理的活動を考える. 日本看護倫理学会第 14 回年次大会, 長野県, 2021.5.

太田勝正, 勝原裕美子, 小野美喜, 小西恵美子, 八代利香 : コロナ禍の看護職のトーク広場. 日本看護倫理学会第 14 回年次大会, 長野県,2021.5.

高橋梢子, 小野美喜, 八尋道子, 八代利香, 小西恵美子 : 「倫理綱領の改訂案」について考えよう. 日本看護倫理学会第 14 回年次大会, 長野県,2021.5.

影山隆之 : 日本の 2020 年における都道府県別自殺者数 : 前年比の増減の地域差の観察. 第 45 回日本自殺予防学会総会, 東京 (ウェブ開催), 2021.9.

影山隆之, 黒岩千翔 : 病棟で交替勤務に従事する看護職者の日勤時と夜勤時の眠気 : 個人属性・職場ストレス要因・当日の条件との関連. 日本睡眠学会第 46 回定期学術集会,福岡,2021.6.

草野淳子, 神野桃子, 高野政子, 足立綾 : 在宅で訪問看護師が行う医療的ケア児への看護の実践に関する文献検討. 日本小児看護学会第 31 回学術集会, 千葉県(オンライン), 2021.6.

草野淳子, 高野政子, 足立綾 : 重症児看護の研修会を受講後の訪問看護師の看護実践. 日本小児看護学会第 31 回学術集会, 千葉県 (オンライン), 2021.6.

草野淳子, 大貫良平, 高野政子, 足立綾 : 医療的ケアが必要な在宅療養児をもつ父親の心理的变化に関する文献検討. 第 68 回日本小児保健協会学術集会, 沖縄県(オンライン), 2021.6.

宮本翔平, 後藤成人 : アルコール依存症患者に対応する看護師の援助要請態度と関連要因との検討. 第 31 回日本精神保健看護学会学術集会. 山形. 2021.05.

佐伯圭一郎 : 統計解析を中心とした量的看護研究論文執筆ガイドラインの提案. 第 41 回日本看護科学学会学術集会, オンライン開催, 2021.12.

佐藤愛, 小野治子, 木嶋彩乃, 赤星琴美 : 特定健診受診者の主観的咀嚼能力と HbA1c との関連. 第 10 回日本公衆衛生看護学会学術集会, オンライン開催, 2022.1.

品川佳満, 橋本勇人: 看護系大学における情報倫理に関係する教育の現状: シラバスの分析をもとに. 第 22 回日本医療情報学会看護学術大会, 盛岡市, 2021.7.

篠原彩, 影山隆之, 福田広美, 木嶋彩乃, 村嶋幸代: 看護学生による予防的家庭訪問実習 (第 8 報): コロナ禍での訪問実習と学生の学び. 第 80 回日本公衆衛生学会総会, 東京, 2021.12.

杉本圭以子: 精神科デイケアにおける IMR 参加者のリハビリ促進に効果的な参加者と実施者の援助的関係. 日本精神障害者リハビリテーション学会第 28 回愛知大会, 愛知, 2021.11.

佐々木萌, 林猪都子, 永松いずみ, 徳丸由布子: 女子看護学生におけるマタニティマークと逆マタニティマークに関する意識. 第 62 回日本母性衛生学会総会・学術集会, 岡山, 2021.10.

塩出千尋, 徳丸由布子, 永松いずみ, 林猪都子: 卒乳・断乳における母乳育児支援の実態とニーズに関する研究. 第 62 回日本母性衛生学会総会・学術集会, 岡山, 2021.10.

蓮見令奈, 濱中良志, 矢野博之, 矢野真美, 後藤武, 大森直哉: BACE1 ノックアウトマウスの表現型である成長遅延の機序. 第 44 回日本分子生物学会, 横浜, 2021.12.

矢野博之, 濱中良志, 矢野真美, 蓮見令奈, 樋田真理子, 松尾哲孝, 吉岡秀克: 骨芽細胞分化における長鎖非コード(lncRNA)の機能解析. 第 44 回日本分子生物学会, 横浜, 2021.12.

樋口幸, 森楓, 安田愛子, 島田達生: 清拭素材が皮膚に及ぼす物理的刺激の影響. 医学生物学電子顕微鏡技術学会 第 37 回学術講演会, 金沢, 2021.10.

山田ゆず, 樋口幸: プロダクティブヘルスからみた性教育の内容の変遷と今後の課題. 日本母性衛生学会 第 62 回日本母性衛生学会学術集会, 岡山, 2021.10.

三浦彩南, 樋口幸: NICU に入院した児を持つ母親の愛着形成促進のためのケア. 日本母性衛生学会 第 62 回日本母性衛生学会学術集会, 岡山, 2021.10.

樋口幸: 早期新生児期の保清方法の違いが皮膚に与える影響—皮膚バリア機能、炎症性サイトカインの発現に焦点を当てた前向き調査研究—. 日本助産学会 第 36 回日本助産学会学術集会, 大阪, 2022.3.

Himeno, Y., Kitaike, T., Ikezaki, S.: Effectiveness of Perioperative Outpatient Focusing on Patients' Preoperative Anxiety. 24th East Asian Forum of Nursing Scholars, Manila, Philippines(Web), 2021.4.

吉田浩二, 堀裕子, 他: プロジェクションマッピングを利用した看護職者への放射線防護教育～採択されやすいコツを交えて.(編集委員会企画、優秀論文賞受賞講演), 日本放射線看護学会第 10 回学術集会, オンライン, 2021.9.18.

神田容子, 堀裕子, 他: 当院におけるコロナ禍でのエンゼルケアの現状と課題. 大分県病院学会, オンライン, 2021.11.28.

宮内信治: 自由間接話法の談話音調 - Emma の自己欺瞞の検討 - . 日本オースティン協会第 14 回大会, Zoom Meeting, 2021.06.

森加苗愛, 原田和子, 山崎優介, 岡佳子, 岩橋淑恵, 朝倉智美, 原光明, 岩本由衣: 孤独じゃない! 糖尿病をもつ男性のセクシュアリティの看護の悩みとはじめの一步. 第 26 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会, 神奈川 (WEB 開催), 2021.9.

森加苗愛, 東めぐみ, 岡佳子, 餘目千史, 佐藤栄子, 清水安子, 住吉和子, 藤原優子, 村角直子, 山崎優介, 山本裕子, 高橋慧: 看護支援のエッセンスとリサーチクエスチョンについて考えてみませんか ～高齢糖尿病患者の事例報告から事例研究への繋げ方～. 第 26 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会, 神奈川 (WEB 開催), 2021.9.

原光明, 山崎優介, 森加苗愛, 岩本由衣, 窪岡由佑子, 熊野真美, 大佐古三香, 佐々木亜衣: 明日から使える! 「臨床推論」体験セミナー ～糖尿病看護のあるある場面を通して～. 第 26 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会, 神奈川 (WEB 開催), 2021.9.

山田貴子, 藤内美保: 転倒転落リスク場面における看護師と看護学生の注視時間とアセスメントの特徴－眼球運動測定器とインタビューより－. 日本看護研究学会第 47 回学術集会, 2021.08.

Yamada, T., Kawano, S.: Factors developing clinical judgment of home care nurses: A literature review in Japan. The 11th Hong Kong International Nursing Forum 2021, Hong Kong, China

吉田成一: 妊娠マウスの加熱式たばこ気化蒸気吸入が出生仔雄性生殖系および免疫系に与える影響. 令和 2 年度助成研究発表会, 東京都, 2021. 9.

吉田成一, 市瀬孝道: 加熱式たばこの胎児期曝露が雄性胎児の遺伝子発現に与える影響. 日本薬学会第 142 年会, 愛知県, 2022. 3.

中川智之, 渡邊弘己, 兵頭昌: ユークリッド距離に基づく判別分析の変数選択について. 応用統計学会 2021 年度年会, オンライン, 2021.5.

7-8 開発・特許等

(発明者) 秦さと子、小原亜希子、石川準一：特許第 7029697 号，嚙下機能改善剤.2022.2.24.

7-9 受賞

恵谷玲央，小嶋光明：第 3 回日本放射線安全管理学会・日本保健物理学会合同大会優秀ポスター賞（若手の部），頭部への X 線繰り返し照射は白血病発症プロセスに関与するか -放射線誘発急性骨髄性白血病モデルマウスを用いた検討-,Web 開催，2021.12.

8 社会貢献

8-1 講演等

石田佳代子

臨床に役立つフィジカルアセスメント実践編. 令和3年度大分県看護協会研修会, 大分市, 2021.7.
看護過程. 令和3年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会. 大分市, 2021.8.
フィジカルアセスメント (心音・呼吸音・全身皮膚). 令和3年度看護力再開発講習会. 大分市, 2021.11.

岩崎香子

第41回日本骨形態計測学会 ハンズオンセミナー. 2021.7.
大分県教育委員会教育人事課主催 令和3年度免許法認定講習 解剖学・生理学. 2021.7.

梅野貴恵

大分県看護協会 保健師助産師看護師実習指導者講習会 助産師教育課程

小嶋光明

放射線・放射性物質とは・健康影響とその防護 大分県消防学校. 大分市, 2021.10.
放射線の健康への影響 郡山市放射線セミナー. 郡山市, 2021.11.

小野美喜

認定看護管理者教育課程ファーストレベル研修 看護専門職論. 看護実践における倫理, 大分市, 2021.7.
大分県看護協会実習指導者講習会.実習指導計画・指導案作成の実際. 大分市, 2021.9.

影山隆之

精神科看護の基礎. 日精看大分県支部研修会 (初任者研修), 大分市, 2021.5.
メンタルヘルス. 大分県自治人材育成センターマネジメント研修, 大分市, 2021.5.
メンタルヘルス. 大分県自治人材育成センター新任課長級研修, 大分市, 2021.7.
睡眠と健康. 大分産業保健総合支援センター衛生管理者研修, 大分市, 2021.7.
睡眠と健康管理. 大分産業保健総合支援センター産業医研修, , 大分市, 2021.7.
子どもの自傷行為と自殺予防のための理解と対応. 別府市生徒指導主事会研修, 別府市, 2021.7.
子どもの自傷行為と自殺予防のための理解と対応. 杵築市いじめ・不登校対策委員会研修, 杵築市, 2021.8.
労働、メンタルヘルス、自殺予防. 第45回日本自殺予防学会総会シンポジウム: 社会の危機と自殺対策—改めて”自殺対策”を考える, 2021.9 (オンライン).
COVID-19と大学における自殺予防. 第59回全国大学保健管理協会関東甲信越部会研修会, 2021.9

(オンライン).

平時のストレスマネジメント対策と惨事ストレス対策. 大分県消防職員幹部教育中級幹部科研修, 由布市, 2021.11.

平時のストレスマネジメント対策と惨事ストレス対策. 大分県消防団上級幹部科研修, 由布市, 2021.11.

平時のストレスマネジメント対策と惨事ストレス対策. 大分県消防団防災指導員研修, 由布市, 2021.12.

草野淳子

令和3年度大分県医療的ケア教員研修会, 大分市, 2021.7.

令和3年度大分県医療的ケア看護師研修会, 大分市, 2021.8.

令和3年度医療的ケア児等コーディネーター養成研修会, 大分市, 2021.10.

後藤成人

看護研究のすすめ方. 日本精神科看護協会大分県支部研修会, 2021.9.

定金香里

初年次地域キャリアデザインワークショップ. おおいた地域連携プラットフォーム, 大分市, 2021.7.

品川佳満

やってみよう看護研究2 量的研究と分析. 大分県看護協会教育研修, 大分市, 2021.7.

秦さと子

基礎看護学における実習指導. 2021年度保健師助産師看護師実習指導者講習会, 大分市, 2021.9.

指導案作成演習の支援. 2021年度保健師助産師看護師実習指導者講習会, 大分市, 2021.9-10.

杉本圭以子

やってみよう看護研究1 テーマの絞り方から研究開始まで. 大分県看護協会教育研修, 大分市, 2021.5.

やってみよう看護研究4 看護研究のまとめ方とプレゼンテーション. 大分県看護協会教育研修, 大分市, 2021.9.

精神看護学における実習指導. 保健師助産師看護師実習指導者講習会, 大分県看護協会教育研修, 大分市, 2021.9.

リカバリーを支援する心理教育プログラム「疾病管理とリカバリー (IMR)」。日本精神科看護協会大分県支部教育研修, 大分市, 2021.2.

精神科デイケアにおける IMR 参加者のリカバリーの変化. デイケアの役割とリカバリーについて考える会 大塚製薬株式会社, 別府市, 2021.6.

関根剛

リーダーシップ;看護チームのマネジメント. 大分県看護協会看護管理者教育課程ファーストレベル, 大分市, 2021.5.

対話の基本・カウンセリングの基礎知識. 大分県警察学校警察安全相談実務専科教養, 大分市, 2021.6.

面接技術. 訪問看護 e ラーニングを活用した訪問看護師養成講習会, 大分県看護協会, 大分市, 2021.7.

信頼関係を築くコミュニケーション. 県教育庁体育保健課新規採用栄養教諭研修, 2021.7.

地域の住民だからこそできる自殺予防. 大分市保健所ゲートキーパー研修会, 大分市, 2021.7.

地域の住民だからこそできる自殺予防. 大分市保健所ゲートキーパー研修会, 大分市, 2021.8.

性犯罪被害者の心理と支援. 大分県警察学校性犯罪捜査専科, 大分市, 2021.10.

惨事ストレス対策. 大分県消防学校専科教育警防科, 大分市, 2021.10.

自殺予防のために地域ができること. 臼杵市保健健康課自殺予防ゲートキーパー研修会, 2021.10.

メンタルヘルス. 大分県自治人材育成センター係長級研修, 大分市, 2021.11.

大分県庁商工観光労働部メンタルヘルス研修会, 大分市, 2021.12.

小さいサポート・会話から始める支援. 母子・父子自立支援員研修会, 大分市, 2022.3.

自殺のサインと対応. 中津市職員自殺予防ゲートキーパー研修, 中津市, 2022.3.

惨事ストレス対策. 大分県消防学校専科教育救急科, 大分市, 2022.3.

高野政子

誤嚥を防ぐための摂食指導のポイント - 姿勢や形態. 2021 年度大分県立別府支援学校校内研修会, 別府市, 2021.8.

医療的ケア校内研修会, 大分県立由布支援学校, 由布市, 2021.7.

たんの吸引の基礎. 令和 3 年度第 1 回医療的ケア看護師研修会, 大分県教育庁特別支援教育課, 大分市, 2021.4.

経管栄養の基礎. 令和 3 年度第 2 回医療的ケア看護師研修会, 大分県教育庁特別支援教育課, 大分市, 2021.8.

ヒヤリハットの共有・分析. 令和 3 年度第 3 回医療的ケア看護師研修会, 大分県教育庁特別支援教育課, 大分市, 2021.12.

小児看護学実習. 大分県看護協会実習指導者講習会, 大分県看護協会, 大分市, 2021.9.

臨地実習で使える教育学の理論と技法. 令和 3 年度「人が育つ実習指導」研修, 大分県看護協会, 大分市, 2021.9.

藤内美保

看護師に求められる臨床推論とその教育方法 - 診療看護師の教育に関わった立場から -. 石川県看護教員現任研修, (石川県) オンライン, 2021.9.

大学教育課程, 大分県看護協会実習指導者講習会, 大分市, 2021.6.・

実習指導案・指導計画. 大分県看護協会実習指導者講習会, 大分市, 2021.9.
臨床に役立つフィジカルアセスメント実践編. 令和3年度大分県看護協会研修会, 大分市, 2021.7.
フィジカルアセスメント. 別府市医師会, 大分市, 2021.10.
大分県立看護科学大学のNP教育. 専門看護師・認定看護師・特定行為研修を修了した看護師・認定看護管理者の交流会 大分県看護協会, 大分市, 2021.8.
看護研究とは. 竹田・豊後大野逐合同看護研究学会, 豊後大野市, 2021.9.
日常生活に必要なフィジカルアセスメントを確認しよう. 大分赤十字病院新人看護師公開研修, 大分市, 2021.8.

濱中良志

大分県教育委員会免許法認定講習(養護教諭), 2021.7.
国際健康コンシェルジェ養成講座, 2021.6.

廣田真里

看護サービス質管理. 認定看護管理者教育課程ファーストレベル, 大分県看護協会, 大分市, 2021.6.
組織管理論Ⅱ 組織分析. 認定看護管理者教育課程セカンドレベル, 大分県看護協会, 大分市, 2021.8.
人材管理Ⅱ(人事・労務管理). 認定看護管理者教育課程セカンドレベル, 福岡県看護協会, 福岡市, 2021.10.

福田広美

ヘルスケアシステム論. 分県看護協会令和3年度認定看護管理者教育課程ファーストレベル, 大分市, 2021.8.
統合演習. 大分県看護協会令和3年度認定看護管理者教育課程ファーストレベル, 大分市, 2021.9.

村嶋幸代

行政保健師に求められるもの—『新人』の時代に何をするか—. 令和3年度福岡県地域保健師研修会(新規採用), 福岡県地域保健師研究協議会, オンライン, 2021.6.
令和2年度地域包括ケアの実現を支える保健医療福祉連携システムの構築 事業報告. 2021年度第1回全国保健師職能委員長会, オンライン, 2021.7.
「保健師の活動方法と成果の提示」(第9回), 「地域包括ケアを推進する看護職の活動方法—都道府県保健師の活動方法に焦点を当てて—」(第10回) 令和3年度 聖隷クリストファー大学大学院 博士前期課程 看護政策論 第9, 10回, オンライン, 2021.7.
地域の健康危機管理能力を高める保健師活動について考える～平時からの保健活動マネジメントと人材育成～., 令和3年度九州ブロック保健師等研修会, 佐賀県看護協会, オンライン, 2021.8.
今、改めて考える公衆衛生看護とは～コロナ禍での保健師活動から～. 令和3年度第1回全国保健師長会愛媛県支部研修会, 全国保健師長会愛媛県支部, オンライン, 2021.11.

森加苗愛

新人看護職員研修 2 看護記録の基礎. 大分県看護協会研修, 大分県, 2021.4.

看護研究とは. 九州糖尿病看護認定看護師会研修, 福岡県 (オンライン研修), 2021.8.

やってみよう看護研究 3 質的研究と分析. 大分県看護協会研修, 大分県, 2021.8.

吉村匠平

人間関係づくりプログラムファシリテーター. 大分県立佐伯豊南高校, 2021.4.

構成的エンカウンターグループの理解と実践. 大分県立津久見高校 (教職員対象), 2021.4.

構成的エンカウンターグループを用いたコミュニケーション演習 (1). 大分医師会立アルメイダ病院新入職員研修, 大分市, 2021.6.

勇気づけのコミュニケーション. 大分医師会立アルメイダ病院プリセプター研修, 大分市, 2021.7.

Be a good sleeper. 大分県安全運転管理者講習, 豊後高田市, 2021.9.

人間関係づくりプログラムファシリテーター. 大分県立津久見高校, 2021.10.

人間関係づくりプログラムファシリテーター. 大分県立佐伯鶴城高校, 2021.10.

構成的エンカウンターグループを用いたコミュニケーション演習 (2). 大分医師会立アルメイダ病院新入職員研修, 大分市, 2021.11.

8-2 非常勤講師

石田佳代子

中津ファビオラ看護学校 基礎看護技術 I

稲垣敦

熊本大学養護教諭特別別科 教育の方法・技術
大分医学技術専門学校 運動学

岩崎香子

大分大学福祉健康科学部 理学療法コース 生化学

梅野貴恵

藤華医療技術専門学校助産学科 助産学研究

恵谷玲央

久留米大学認定看護師教育センター 放射線療法における放射線の安全な取り扱い

小嶋光明

久留米大学認定看護師教育センター 放射線療法における放射線の安全な取り扱い

小野美喜

鹿児島大学保健学科 離島看護学
島根県立大学看護学科 NP 論

影山隆之

別府大学人間学部 精神保健の課題と支援
別府市医師会看護専門学校 精神看護学概論、精神看護の方法 I

桑野紀子

藤華医療技術専門学校 看護の統合と実践 II (国際社会と看護)

後藤成人

中津ファビオラ看護学校 看護研究

定金香里

大分リハビリテーション専門学校 生理学 I、生理学 II

佐伯圭一郎

神戸薬科大学 医療統計学 I

品川佳満

別府医療センター附属大分中央看護学校 情報科学、情報科学演習

関根剛

大分大学医学部医学科 導入Ⅱ（自己理解のための心理臨床学入門）

大分大学医学部看護学科 臨床心理学

大分医学技術専門学校 心理学

藤内美保

広島大学医学部保健学科 ヘルスアセスメント

名桜大学看護学研究科看護学専攻 包括的健康アセスメント

中津ファビオラ看護学校 基礎看護技術Ⅰ、ヘルスアセスメントの実際

濱中良志

大分臨床検査技師専門学校臨床検査学科 生化学

智泉福祉製菓専門学校社会福祉学科・精神保健福祉学科 医学一般

樋口幸

藤華医療技術専門学校助産学科 助産学研究

丸山加菜

藤華医療技術専門学校看護学科 看護の統合と実践Ⅱ（国際社会と看護）

宮崎大学医学部看護学科 統合看護論Ⅱ

宮内信治

大分県立芸術文化短期大学 英語Ⅰ

大分大学理工学部 英語Ⅰ、英語Ⅱ

渡邊弘己

大分大学医学部看護学科 保健統計学

中津ファビオラ看護学校 情報科学

8-3 研究指導

大分県立病院

佐伯圭一郎

草野淳子

大分赤十字病院

森加苗愛

石田佳代子

岩崎香子

大分医師会立アルメイダ病院

関根剛

杉本圭以子

衛藤病院

影山隆之

堀裕子

別府医療センター

樋口幸

吉田成一

8-4 学会役員等

荒木章裕

日本高齢者ケアリング学研究会 理事

稲垣敦

日本体育測定評価学会 会長（～2021.6.30） 顧問（2021.7.1～）

大分県スポーツ学会 代表理事・理事長 編集委員

日本体育学会 測定評価専門領域 代表

日本体育学会 代議員 学会賞選考委員

日本スポーツ救護看護学会 顧問

岩崎香子

日本骨粗鬆症学会 評議員

日本 CKD-MBD 研究会 評議員

ROD21 研究会 幹事

第 23 回日本骨粗鬆症学会学術集会 プログラム委員

梅野貴恵

日本助産診断実践学会 理事・編集委員

大分県母性衛生学会 理事

恵谷玲央

日本本保健物理学会 コミュニケーション委員会委員

日本保健物理学会 「IRPA Practical Guidance for Engagement with the Public on Radiation and Risk」翻訳 WG メンバー

日本保健物理学会 「生殖腺防護に関する NCRP 声明」翻訳 WG メンバー

日本放射線影響学会 論文紹介企画小委員会委員

小嶋光明

日本放射線影響学会 災害対応委員会委員

日本放射線影響学会 グローバル化委員会委員

日本保健物理学会 倫理委員会委員

日本保健物理学会 エックス線事故検討 WG メンバー

放射線影響懇話会 実行委員

大分大学医学部付属病院 臨床研究審査委員会委員

放射線生物研究 編集委員

小野美喜

日本看護倫理学会 理事
日本 NP 教育大学院協議会 理事

影山隆之

日本精神衛生学会 理事長
日本精神衛生学会 編集委員
日本自殺予防学会 常務理事
日本自殺予防学会 編集委員長
日本学校メンタルヘルス学会 評議員
日本学校メンタルヘルス学会 編集委員
日本産業ストレス学会 評議員
日本産業精神医学会 評議員
日本看護科学学会 編集委員

草野淳子

一般社団法人 NP 教育大学院協議会 委員
一般社団法人日本小児看護学会 評議員
一般社団法人日本小児看護学会 災害対策委員

桑野紀子

大分県看護協会 実習指導者講習会運営委員会 副委員長
日本国際看護学会 理事会研究委員会評議員

佐伯圭一郎

日本テスト学会 編集委員

定金香里

日本生理学会 評議員
大気環境学会 健康影響分科会幹事

高野政子

日本小児看護学会 評議員
九州沖縄小児看護教育研究会 幹事
大分県小児保健協会 理事
日本小児看護学会 国際交流委員会 委員
日本小児がん看護学会誌 査読委員
日本看護科学学会 和文誌専任査読委員

藤内美保

特定行為研修指定研修連絡会 理事
特定行為研修制度の普及促進に関する委員会 委員
日本 NP 教育大学院協議会 監事, NP 教育課程審査委員
大分県看護協会理事
日本看護研究学会九州・沖縄地方会 役員
大分県立看護科学大学特定行為管理委員会 委員

永松いずみ

大分県母性衛生学会 幹事 (事務局庶務担当)
大分県看護協会 助産師職能委員

林猪都子

大分県母性衛生学会 理事, 学術集会実行委員
大分県助産師会 副会長, 九州・沖縄地区研修会実行委員長

濱中良志

癌・炎症・抗酸化研究会 評議員

樋口幸

看護理工学会 評議員, 将来構想委員会委員
日本助産学会学会誌 専任査読委員

姫野綾

大分県助産師会 教育委員

廣田真里

大分県看護研究学会 学会委員長

堀裕子

日本放射線看護学会 編集委員会委員

宮内信治

日本言語音声学会 常任理事
日本英語教育音声学会 常任理事

村嶋幸代

日本 NP 教育大学院協議会 副会長
全国保健師教育機関協議会 理事
日本看護系大学協議会 監事
日本看護系学会協議会 監事
日本看護科学学会 監事
日本 NP 学会 監事
日本地域看護学会 監事・代議員
日本在宅ケア学会 監事・代議員
日本公衆衛生学会 評議員
日本公衆衛生協会 評議員

森加苗愛

一般社団法人日本糖尿病教育・看護学会 理事, 評議員, 研究推進委員会委員長
日本慢性看護学会 評議員
社)日本 NP 教育大学院協議会 資格認定更新委員会委員
大分県看護協会 教育委員

吉田成一

日本アンドロロジー学会 理事
精子形成・精巣毒性研究会 評議員
日本薬学会 代議員

渡邊弘己

日本計算機統計学会 第 36 回大会実行委員

8-5 その他委員等

石田佳代子

大分県リハビリテーション協議会 委員

稲垣敦

大分県介護予防運動機能向上専門部会委員

大分市営陸上競技場及び津留運動公園指定管理者予定者選定委員

大分市森林セラピートレイルランニング大会実行委員

大分市ななせの里まつり実行委員

梅野貴恵

おおいた地域連携プラットフォーム教育プログラム開発部会 FD・SD 事業ワーキンググループメンバー

小野治子

大分県保健師連絡会委員 委員

大分市建築審査会委員 委員

大分市風俗関連営業建築物審査会委員 委員

小野美喜

日本看護倫理学会 課題検討委員長

日本看護倫理学会 査読委員

日本 NP 教育大学院協議会 資格更新委員会委員長

日本 NP 教育大学院協議会 制度検討委員会委員長

日本 NP 学会 第7回学術集会企画委員

日本看護協会 ナースプラクティショナー（仮称）制度検討委員会委員

日本看護系大学協議会 APN グランドデザイン委員

大分県立病院 地域医療支援病院運営委員会委員長

大分県立病院 特定行為研修管理委員

社会医療法人啓和会 大分岡病院特定行為研修管理委員

影山隆之

大分県ギャンブル等依存症対策推進協議会 会長

大分県自殺対策連絡協議会 副会長

大分県精神疾患医療連携協議会 委員

大分県アルコール健康障がい対策推進協議会 委員

大分県公害審査会調停委員会 委員

大分県社会福祉協議会日常生活自立支援事業契約締結審査会 審査委員
大分市民のこころといのちを守る自殺対策行動計画策定推進検討委員会 会長
別府市自殺対策計画策定推進委員会 委員長
豊後大野市自殺対策連絡協議会 助言者
日出町自殺対策連絡協議会 委員

後藤成人

日本精神科看護協会大分県支部 教育委員長

佐伯圭一郎

ホルトホール大分選定委員

定金香里

大分県理科化学教育懇談会 幹事
大分県環境影響評価技術審査会 委員
大分県リサイクル認定製品審査会 委員

品川佳満

大分県情報公開・個人情報保護審査会 委員

関根剛

総務庁消防庁緊急時メンタルサポートチームメンバー
大分県こころの緊急支援チーム 運営委員・メンバー
大分県 DPAT 運営委員・メンバー
(公社) 全国被害者支援ネットワーク 理事 (九州・沖縄ブロック担当)
(公社) 大分被害者支援センター副理事長

高野政子

大分県医療的ケア連絡協議会 会長
大分県障害児適正就学指導委員会 委員
大分県立特別支援学校第三者評価委員会 委員長
おおいた医療的ケア児等支援関連施設連絡会 委員
大分市特別支援教育メディカルサポート事業委託事業者選定委員会 会長
大分県特別支援教育 摂食指導のてびき作成委員会 委員

藤内美保

大分県医療計画策定協議会委員
大分県医療費適正化推進協議会委員

大分県国民健康保険運営協議会委員

林猪都子

大分県地域保健協議会 母子保健小委員会委員

大分県准看護師試験委員

大分市おおいた都心まちづくり会議委員

村嶋幸代

国立保健医療科学院 評価委員会 委員

国立保健医療科学院 健康安全・危機管理対策総合研究事業事前評価委員会 審査委員

宮崎県地方独立行政法人評価委員会 評価委員

ヘルシー・ソサエティ賞 審査委員

社会福祉法人 三井記念病院 評議員

大分県都市計画審議会 委員

大分県医療審議会 委員

健康寿命日本一おおいた創造会議 委員

生涯健康県おおいた 21 推進協議会 委員

大分県国民保護協議会 委員

大分県公私立学校教育協議会 委員

大分県石油コンビナート等防災本部員 委員

大学コンソーシアムおおいた 理事

おおいた地域連携プラットフォーム 監事

野津原地域まちづくりビジョンフォローアップ会議 委員

樋口幸

大分市産業活性化プラザ産学官連携推進事業検討委員会 委員

おおいた地域連携プラットフォーム地域交流・課題検討部会 産学官成果共有 WG

廣田真里

大分県ナースセンター事業運営委員会委員

宮内信治

大分市立横瀬小学校 評議員

大分県高等学校教育研究会英語部会 顧問

吉田成一

環境省 光化学オキシダント健康影響評価作業部会 委員

大分県 第二次生涯健康県おおいた 21 喫煙対策部会 委員

吉村匠平

九重町教育支援センターほっとスペース 教育相談員

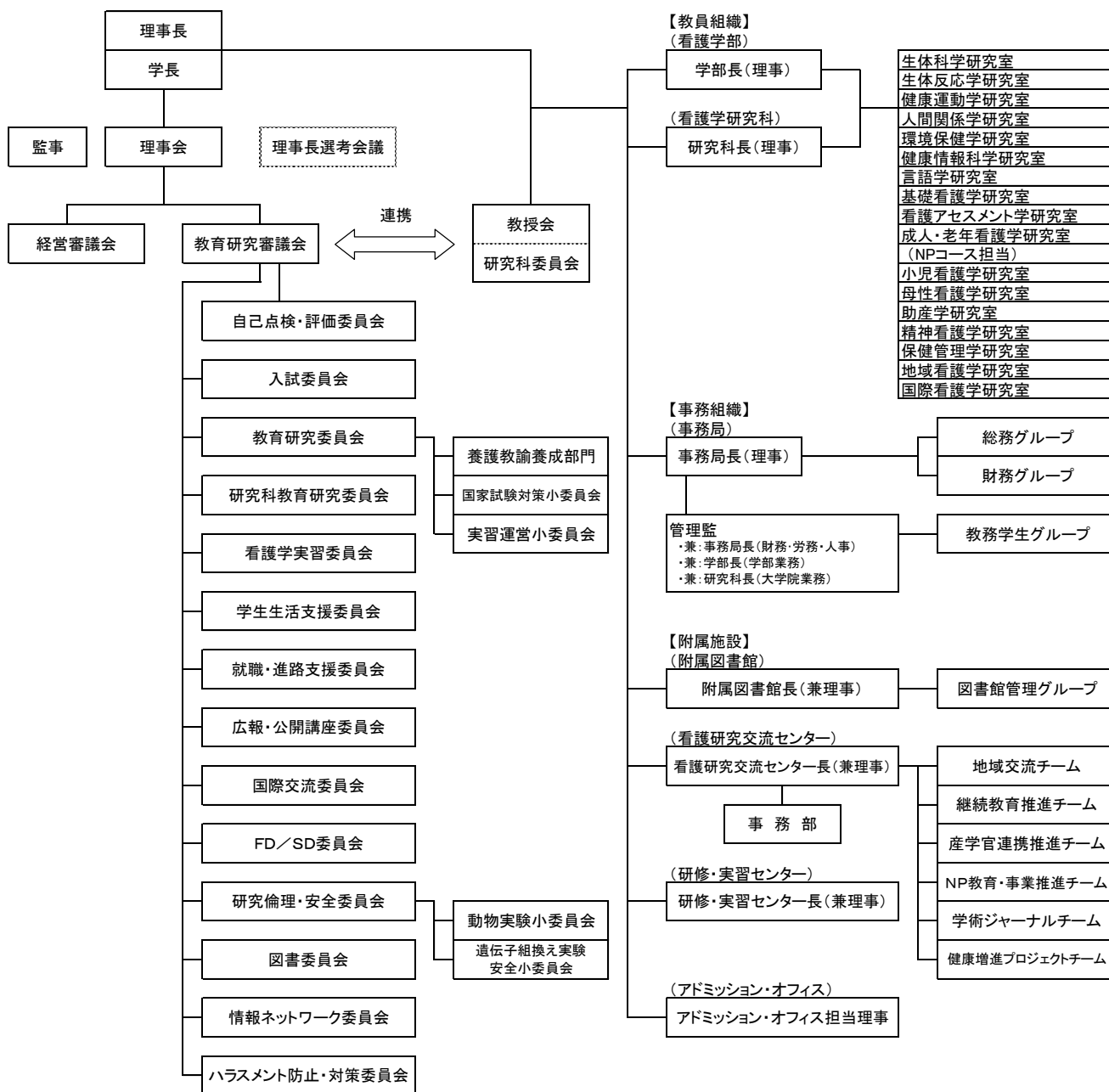
社会福祉法人皆輪会つくし保育園 育児相談員

9 学務

9-1 組織図

法人組織図

大分県立看護科学大学



9-2 危機管理対策本部

本部長 理事長 村嶋幸代

副本部長 学部長 福田広美、研究科長 稲垣敦、事務局長 岡田浩明

本部員 小野美喜、市瀬孝道、廣田真里、赤星琴美、佐伯圭一郎、桑野紀子、
釘宮由美子、黒木貴子、菊池誉志、尾割勇作

COVID-19（新型コロナウイルス感染症）への対応については、「感染防止に努め、学生・教職員から感染者を出さない」、「細心の注意を払って授業を継続し、学生の学ぶ権利を保障する。」、「大変革期にあたり、学生・教職員自身が情報を得て自律的に行動すると共に、COVID-19 と共存する世界を見据えて必要な準備をする。」という3つの方針を掲げ、県と連携しながら、各委員会や事務局から学生や教職員に対して体調管理の徹底等の注意喚起などを行ってきた。

令和3年度4月には、新型コロナウイルス感染症への各種対策を行うため、大分県立看護科学新型コロナウイルス感染症対策マニュアルを策定した。

このマニュアルに基づき、大分県から発表されるステージの段階に応じて、サークル活動の自粛や図書館等の施設の利用制限を行とともに、授業はオンラインを積極的に活用することで、学事暦を変更することなく、進められた。

また、学生及び教職員が感染した場合や濃厚接触者となった場合は、行動歴や常在した部屋を特定し、速やかに消毒を行い、学校内での集団感染は発生しなかった。

新型コロナウイルス感染症対策の国及び県の関係情報を教職員全員で情報共有し、感染状況に応じた対策を調整するため、現況や本学における新型コロナウイルス感染症対策の取組等について、毎週1回サマリーレポートを作成した。

9-3 委員会等活動

9-3-1 理事会

理事長 村嶋幸代

学内理事 福田広美、稲垣敦、岡田浩明

学外理事 三股浩光、佐藤昌司、姫野昌治

監事 福田安孝、中野洋子

理事会の役割は、法人の運営に関する重要事項を審議することである。本年度は5回の理事会を開催し、教育研究審議会報告の後、年度計画に関する事項、地方独立行政法人により知事の許可または承認を受けなければならない事項、重要な規定の制定または改正、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価などについて審議した。

特記すべき報告および審議事項として、第1回は、新型コロナウイルス感染症への対応について、令和3年度在学生の状況、令和2年度卒業生・修了生の進路状況の報告の他、議題は2030年に向けた本学の課題と解決策についてであった。第2回は、教員の採用、本学大学院学則の一部改正、知的財産マネジメント体制に関わる規程類の制定、研究活動に係る不正行為防止等に関する規程の一部改正、令和2事業年度における業務の実績に関する報告書、令和2年度決算を議題とした。第3回は、新型コロナウイルス感染拡大に伴う影響及び対策、令和2事業年度に係る業務実績に関する評価結果、大学院入学者選抜試験の実施状況、令和3年度第4、5回教育研究審議会報告、教員人事の進捗状況などが報告された。第4回は、教員の採用について、知的財産マネジメント体制に関わる規程類の制定、職員の通勤手当の支給に関する細則の一部改正、教員の昇任基準の改定、令和3年度中間決算、令和4年度予算編成方針などが審議された。また入学者選抜試験の実施状況が報告された。第5回は、大分県立看護科学大学人事基本計画、教員の採用と昇任について、規程等の一部改正（就業規則、育児や介護休業、勤務時間や休日、休暇等）、規程等の一部改正、第3期中期計画に係る令和4年度計画（案）、令和4年度予算（案）について審議された。その他、令和3年度卒業、修了生の状況や入学者選抜試験の状況が報告された。

大学の円滑な運営のために活発な意見をいただいております、今後も引き続き、外部理事の方々の意見をいただき議論をして決定するよう進める。

9-3-2 経営審議会

理事長 村嶋幸代

学内理事 福田広美、稲垣敦、岡田浩明

学外理事 三股浩光、佐藤昌司、姫野昌治

経営審議会委員 千野博之、吉松秀孝、佐藤政昭、大戸朋子

本審議会の役割は、法人の経営に関する重要事項を審議することである。法人の経営状況について報告し、審議した。

本年度は 5 回の経営審議会を開催し、年度計画に関する事項のうち、法人の経営に関するもの、地方独立行政法人により知事の許可または承認を受けなければならない事項のうち法人の経営に関するもの、重要な規定の制定または改正に関する事項のうち法人の経営に関するもの、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価に関する事項のうち法人の経営に関するもの、組織及び運営の状況について自ら行う点検および評価などについて審議した。

なお、理事会成員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も関係することから経営審議会と同時に開催し、特記すべき報告および審議事項は、理事会と同様の内容である。

運営費交付金が年々減額されていく状況のなかで、外部資金の獲得をさらに推進すること、大学の魅力を発信し優秀な学生の継続的な確保の戦略が必要であり、効果的・効率的な経営に関して継続的に審議する。

9-3-3 教育研究審議会

学長 村嶋幸代

学部長 福田広美

研究科長 稲垣敦

事務局長 岡田浩明

委員 犀川哲典（学外委員）、濱中良志、市瀬孝道、吉村匠平、小嶋光明、佐伯圭一郎、

Gerald T. Shirley、廣田真里、藤内美保、小野美喜、高野政子、林猪都子、梅野貴恵、

影山隆之、赤星琴美、桑野紀子

本教育研究審議会の役割は、大学の教育研究に関する重要事項の審議を行うことである。本年度は 11 回の教育研究審議会を開催し、各種委員会報告を行うと共に中期目標・中期計画に関する事項、規定等の改正、学生の就業、進級判定、休学、復学、退学、学位の授与に関する事項、教員の人事及び評価に関する事項、教員の自己点検・自己評価に関する事項、各種諸規定等について審議・承認した。各回の教育研究審議会の議事内容は理事会で報告された。

特記すべき審議事項として、第 1 回は、新型コロナウイルス感染症対策マニュアルの見直しを行い、学内の感染対策の周知徹底を行った。また、実習室近代化に向けてタスクグループの新設が承認

された。第2回は、知的財産マネジメント体制に関わる規定が新たに承認された。また、研究活動に係る不正行為防止等に関する規程の一部改正が承認された。第3回は、大分県立看護科学大学大学院学則の一部改正として、広域看護学コースの定員を5名から10名に変更することが承認された。第4回は、2030年に向けて研究室の在り方を見直し、教育研究審議会の委員数は、原則として変えないこととした。また、看護学の方向性は、強化すべき領域を検討することが承認された。第5回は、社会看護学分野の教員選考を行うため、新たな選考委員が選出された。

第6回は、新カリキュラムの導入に備えて、カリキュラムツリーやアセスメントポリシーの案について検討を行うこととした。また、職員の勤務時間、休日及び休暇等に関する規程の一部改正が行われた。あわせて、研修・実習センター規程の一部改正が行われ、使用手続きや建物、鍵の管理について現状に合わせて規程を変更した。その他、構内駐車規程及び自動車等による通学の許可基準の一部改正を行い、学生の申請手続き等について実情に合わせて書類の変更することとなった。

第7回は、大学院長期履修規程の一部改正として、長期履修を申請する時期の見直しを行い、休学後でも長期履修を認めることが承認された。2030年に向けた学内の方針に沿って助教ポストを看護系にするため、選考会が設置された。

第8回は、各種委員会規程の一部改正について現状に合わせた明確な表記について、変更案を各委員会で検討することとなった。また、職員の通勤手当の支給に関する細則の一部改正が承認された。その他、教員（講師・准教授）の昇任基準が一部改定され、論文執筆の本数と期間の要件が一部緩和された。令和3年度中間決算と令和4年度予算編成方針案が承認された。令和4年度カリキュラムの進級要件科目について検討を行った。第9回は、大分県立看護科学大学履修規程の一部改正が行われ、令和4年度新カリキュラムの導入に伴い、履修登録を学期毎から年度初めに変更することが承認された。平成27年度カリキュラムの単位未取得者について、令和4年度（新カリ）以降の対応を科目ごとに一覧表にし、入力することとした。

第10回は、大分県立看護科学大学学生生活規程の一部改正について、本学の入学時「保証書」や授業料滞納時の「誓約書」について様式の変更を承認した。研究倫理・安全委員会の承認申請を必要としない研究計画に関する細則の変更について、他の研究と同様に倫理審査を行うことが承認された。第11回は、教員の昇任が承認された。社会看護学研究室の創設に伴い、大分県立看護科学大学人事基本計画を改めることが承認された。規程等の一部改正について、①期限付雇用職員就業規則の一部改正として、育児休業の取得要件の緩和、②職員の勤務時間、休日及び休暇等に関する規程の一部改正、不妊治療と仕事の両立を支援するための特別休暇（出生サポート休暇）を新設、④職員の介護休業等に関する規程の一部改正、期限付き雇用職員の介護休業の取得要件の緩和、⑤兼業に係る新たな手続きを令和4年度から活用を開始。その他、個人短期海外研修支援奨学金制度の創設、令和4年度予算案が承認された。令和3年度の進級は1年生84名、2年生76名、休学等による留年は1年生7名となった。

以上、令和3年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止に努めながら本審議会の運営を行った。令和4年度も引き続き、感染防止対策を行い、大学の教育研究に関する重要事項の審議を行う。令和4年度は学部と大学院において、新カリキュラムが開始となる。令和3年度までに準備してきた対応によりスムーズなカリキュラム移行が行えるよう、本審議会でも対応を行う。また、令和4年度は、外部認証評価が予定されている。本審議会として大学の教育研究の改善に向けた活動を進める。

9-3-4 教授会

学長 村嶋幸代

学部長 福田広美

事務局長 岡田浩明

委員 稲垣敦、赤星琴美、市瀬孝道、梅野貴恵、小野美喜、影山隆之、佐伯圭一郎、Gerald T. Shirley、高野政子、藤内美保、濱中良志、林猪都子、廣田真里、安部眞佐子、石田佳代子、岩崎香子、小嶋光明、草野淳子、桑野紀子、定金香里、品川佳満、秦さと子、杉本圭以子、関根剛、樋口幸、宮内信治、森加苗愛、吉田成一、吉村匠平、堀裕子、荒木章裕

本教授会の役割は、大学の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、卒業、その他の在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行うことである。

本年度は5回の教授会を開催し、学部入試の合否判定、卒業判定、および学生の表彰に関する事項について審議・承認した。看護師国家試験は合格率100%であった。4年次の学生表彰は、学長賞1名、優秀賞3名、卒業研究優秀賞7名、学生賞1名の計12名、在學生は、1年次の基礎看護学実習が新型コロナウイルスの感染防止対策に伴う2年次への延期を受けて、表彰の基準を本会議で変更し、新2年次生の表彰は3名、新3年生の表彰は2名が承認された。教育研究審議会で審議・承認された休学、復学、退学、進級判定についての事項は教授会で報告された。

令和4年度入學生は80名、卒業生は75名を予定している。今後も入学、卒業に関して量的、質的な観点から審議し、優秀な学生の輩出に向けて努力する。

9-3-5 研究科委員会

学長 村嶋幸代

研究科長 稲垣敦

事務局長 岡田浩明

委員 赤星琴美、荒木章裕、安部眞佐子、石田佳代子、市瀬孝道、岩崎香子、梅野貴恵、小嶋光明、小野美喜、影山隆之、草野淳子、桑野紀子、佐伯圭一郎、定金香里、品川佳満、秦さと子、Gerald T. Shirley、杉本圭以子、関根剛、高野政子、藤内美保、濱中良志、林猪都子、樋口幸、廣田真里、福田広美、堀裕子、宮内信治、森加苗愛、吉田成一、吉村匠平

本委員会は、大学院の教育課程の編成、学生の入学、修了等の在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行う。本年度は審査の遅れた修士論文があったため、委員会を5回開催し、特別選抜と2回の入学試験の合否判定、進学判定、修了判定等について審議した。今年度はCOVID-19のため全てZoomで開催したが、必ず研究室からZoomに参加することとし、画像で研究室からの出席を確認した。また、委員全員が集まる機会が限られているため、委員会時に意見を求めた。

次年度は、分掌事項にもあるように、大学院生の表彰について審議するため、まずは研究科教育研究委員会でその可能性を検討する。

9-3-6 自己点検・評価委員会

委員長 佐伯圭一郎

副委員長 宮内信治

委員 小嶋光明、樋口幸、小野治子、稲垣敦、尾割勇作、松尾美沙

自己点検・評価委員会は、本学の教育研究水準の向上を図り、かつ本学の目的及び社会的使命を達成するため、大学の自己点検・自己評価に関すること、内部質保証に関すること、年報の編集・発行に関すること、本学の中期目標・中期計画に関すること、および認証評価その他の第三者評価に関することを分掌している。

1) 大学の中期目標・中期計画：年度当初に令和 2 年度実績報告を取りまとめた。年度末には令和 3 年度計画に基づく実績報告について各種委員会等からの資料収集を開始した。令和 4 年度計画について、各種委員会等の計画を取りまとめた。2) 年報の編集・発行：2020 年度年報を編集し公開した。今年度もやや編集作業が遅れていたが、2021 年度年報については早期の完成を目指して年度内に作業を進めた。3) 大学の外部認証評価：大学機関別認証評価の受審を 2022 年に控え、大学教育質保証・評価センターの説明会および研修会に当委員会メンバーや FD/SD 委員会メンバーが参加すると共に、10 月に学内教職員を対象とした研修会「大学機関別認証評価について」を開催し、点検評価ポートフォリオの作成を開始した。4) 議事録の学内への公開状況および記載等を随時チェックして、整備を推進した。

2022 年度の外部認証評価の受審に向け、点検評価ポートフォリオの完成、訪問調査の準備などが来年度早々の課題である。

9-3-7 入試委員会

構成員は非公開としている。

入試委員会は、学部の入学者選抜を分掌し、令和 4 年度入学者選抜の全体及び大学入学共通テストの実施を統括するとともに、入学者選抜の方法及び入試広報について検討した。特に、前年度より変更した本学の入学者選抜方法に関する検証と、新型コロナウイルス感染症問題への新しい対応のために、さまざまな観点から情報収集・分析と検討を行い、可能・必要なことを実施した。

文部科学省及び他大学からの情報収集のため、令和 3 年度全国大学入学者選抜研究連絡協議会（オンライン開催）に 2 名が参加し、国の方針に加え、感染拡大下における各大学の対応について質疑を行った。高校の新学習指導要領が令和 4 年度の高校 1 年生から導入され、これに伴い令和 7 年度

大学入学共通テストから実施科目が変更になるので、新指導要領に関する情報収集を開始した。

入試に関する広報活動を、広報・公開講座委員会と協力して行った。延べ 23 会場で業者主催進学説明会に参加し、高校生・保護者等延べ 425 名の相談を受けた。前年度に続き受験生と担当者が 1 対 1 で相談できるオンライン進学相談会を企画し（延べ 4 日間）、google フォームで予約した高校生 6 名の相談に委員が対応した。県内高校の進路指導担当者等を対象としたオンライン進学説明会を 6 月 7 日に開催し、24 校 30 名の教諭が参加した。対面方式で開催した場合と参加者数は変わらず、今後もこの方法を継続しても差し支えないものと判断された。新型コロナウイルス感染症防止のため今年度もオープンキャンパスがオンライン開催となったが、その中でも進学相談会を開催した。

大学入学共通テスト（1 月 15、16 日）の本学会場では、特別な配慮を要する受験生の受入れを含め、大きなトラブルなく試験を実施した。令和 4 年度入学者選抜を、別項（2.入学試験等 2.1 学部入試）に整理したとおり実施した。志願者数は、学校推薦型選抜では前年度より 23 名の減少、一般選抜前期日程では前年度より 11 名の増加、一般選抜後期日程では前年度より 58 名の増加で、社会人選抜 1 名を合わせると総計では昨年比 46 名増加であった。これらへの準備として、文部科学省から矢継ぎ早に発出されるガイドライン等を逐一検討し、感染症対策（試験会場環境・人員配置・受験生への対応等）に努めた。具体的には、独自試験では入館時の検温等を実施するとともに、感染等により受験できなかった受験生のために試験区分毎の追試験の方法を決め、また国のガイドラインに沿って、新型コロナウイルス感染症のため共通テストを受けられなかった受験生の追試験等についても検討した。結果として、一般選抜後期日程を受けられなかった受験生 1 名に追試験を実施した。

ウェブを活用した出願システム及び主体的活動に関する得点評価システムの導入を前年度から検討してきたが、発注に向けて交渉していた業者のシステム開発の遅れにより、今年度からの導入はできなかった。このため他の業者について情報を収集し、別業者と改めて交渉を始め、次年度導入に向けて準備中である。

前年度から学校推薦型選抜と一般選抜では前年度から面接試験の得点化を導入し、学校推薦型選抜では受験生による主体的活動の書類の得点評価も導入したので、前年度の入試実績と面接試験・書類評価との関係を分析し、評価方法を検討するための参考とした。これらの結果に基づいて、面接担当者説明会を開催し、書類の様式等の改善を図った。これまでの入試実績と総合問題との関係についても分析し、作問の参考とした。今年度は、学校推薦型選抜／社会人選抜と一般選抜後期日程の総合問題で出題ミスがあった。前者は合否判定後に発見されたので、この問題について全受験者に得点を与える措置を取り、得点集計をやり直した結果、合格者に変動はなかった。今後は作問過程で正答根拠の確認をいっそう確実に行うこととし、作業手順書を改訂した。

一般選抜では合否発表後に入学手続をとらない合格者が予想より多かったため、1 名を追加合格とした。

今後も入試の広報と運営方法の両面について改善のための検討を重ねながら、年度計画に沿って活動していく予定である。

9-3-8 教育研究委員会

委員長 福田広美

副委員長 杉本圭以子

委員 石田佳代子、岡田浩明、定金香里、品川佳満、秦さと子、濱中良志、原田千夏、吉村匠平

本委員会は学部学生の教育と教員の研究を効果的かつ円滑に行うために教育・研究関連の活動と教育・研究予算の策定を行っている。本年度も例年通り、毎月（8月除く）定例の委員会として11回の会議を開催した。

1. 2022年度改定カリキュラム移行に向けた準備

令和4年度カリキュラムの開始に向けて、2年次から3年次の進級判定の要件となる科目について検討を行った。基礎系の科目は、平成27年度カリキュラムの7科目から6科目に変更した。看護学実習に関する科目については、学生が履修や進級の要件として理解しやすいよう、学生便覧の表記を改めた。また、再受験科目と再履修科目についても、学生が進級要件と合わせて理解しやすいように、学生便覧に説明を加えた。その他、平成27年度カリキュラムの入学で留年等により単位未取得の場合に、行う対応について、科目ごとに対応を示す一覧表を作成し、令和4年度に備えた。

2. カリキュラムツリー・マップ・ポリシー等

新カリキュラムのカリキュラムマップとカリキュラムツリーを作成した。各科目とディプロマポリシー（DP）との関係を明確に表すため、全教員に担当科目のDPへの貢献度を確認しカリキュラムマップを完成させた。カリキュラムツリーは、科目の順序性と人間科学系科目と看護学系科目に分類して可視化して作成し、マップとともに学内に周知した。

さらにDPに沿った教育課程による成果を可視化し、教育課程の改善につなげるための評価方針であるアセスメントポリシーと運用のためのチェックリストを検討した。

3. 2年次・4年次に実施するカリキュラムポリシー、ディプロマポリシーに関するアンケート

教育効果の検証として、4年次生に1月、2年次生に2月にアンケートを実施した。DP、CPの到達度は前年とほぼ同様の結果であった。4年次生から本学の教育課程について肯定的な意見が多く寄せられた。

4. 就職先指導者の意見、卒業生へのアンケート

卒業生のディプロマポリシーに関する到達状況を調査するため、卒業生が多く就職している主な20施設128部署を対象にアンケート調査を行い19施設から回答があった。卒業生新人1年目のDPの総括的評価は、DP3の豊かな人間性の評価が高く、DP2のマネジメント力やDP5の国際性の評価は低かった。

5. シラバス関連

令和4年度の学部シラバスの作成を行った。令和4年度から始まる新カリキュラムから、3学期制になりDPも変更されるため、新カリキュラム科目については、それに準じた新たなフォーマットとした。また、同じ授業形態・単位数でも科目によって授業回数が異なるため、「授業回数」を新たな項目として追加した。

6. 入学前教育

1年次生を対象に行ったアンケート調査の結果、入試の種類や高校時の履修科目に依らず、難しいと感じる科目が共通していた。この結果に基づき、入学前教育の対象者を推薦入試合格者だけでなく、一般入試の合格者にも広げることとした。令和4年度入学予定者から、従来と同様に「生物基礎」「生物」で入学前に重点的に学習して欲しい範囲を提示する。

7. 総合人間学

様々な分野で活躍されている県内外の講師による講義から構成される科目として運営した。教職員から講師を募り、教育研究委員会で検討し、計画、調整した。全10回のうち1回のみ講義室でおこない9回はオンラインによる講義で実施した。大分県内他大学との単位互換制度の科目としてweb受講ができるよう他大学と連携した。

8. 感染対策・教育環境について

令和3年度も学事暦を変更せず予定通り授業を実施した。授業方法は、県内の感染ステージに合わせて、オンラインと対面によるハイブリット（分散登校）、または、全面的なオンライン授業を行った。試験については、全面的なオンライン授業の期間であっても実施し、教室を分けて密を避ける等、感染対策に留意して実施した。

9. 卒業研究

令和3年度の卒業研究は、文献研究や二次データを活用した研究が、調査や実験研究に比べて比較的多かった。本年度も担当教員による卒業研究および原著講読のルーブリック評価を行い、一定レベルに到達し単位をできた。また、学生による自己評価も実施した。卒業研究優秀賞は、卒業研究発表会の3分科会から2名ずつ、合計6名の優秀賞を選出することとし、本年度は同点者がいたため合計7名が選出された。

10. 卒業研究発表会の運営

新型コロナ感染防止のため昨年に引き続き要旨・論文は、Googleフォームでの提出とし、発表会は、Zoomによるオンライン方式で実施した。3つの分科会を同時に進行させ、トラブルは、ほとんどなく1日間で全演題の発表が終了した。発表会後に実施した卒論発表会の方法に関するアンケートの結果から、本年度の実施方式に賛成する意見が多数あったことから、来年度以降もオンライン・分科会方式で実施とすることとした。

11. 学生表彰

卒業式に4年次生の学長賞1名、優秀賞3名、卒業研究優秀賞7名、学生賞1名の計12名を表彰した。

12. 国家試験対策小委員会（石田委員）、実習運営小委員会（秦委員）、進級試験WG（濱中委員）、養護教諭養成部門（吉村委員）の活動は、別途項目により記載しているため、ここでは省略する。

今年度の課題と次年度の取組

令和4年度から新カリキュラムが開始される。新カリキュラムと平成27年度カリキュラムが、同時に問題なく実施できるよう、令和3年度に準備した移行期の対応を実施、評価する。また、令和3年度までに作成した、カリキュラムマップやツリー、アセスメントポリシーを活用し、教学マネジメントをさらに進められるよう検討を行う。令和4年度も新型コロナウイルスの感染拡大防止に努め、

学事暦を予定通り進められるよう授業を行う。

9-3-8 1) 養護教諭養成部門

部門長 吉村匠平

委員 赤星琴美、秋本慶子、小野治子、草野淳子、佐伯圭一郎、関根剛

事務局 菊池誉志

養護教諭養成課程の運営を担当した。主な業務は、履修生全員に対する履修カルテ面談の実施、図書整備（学術誌、雑誌、図書）、新入学生全員を対象としたガイダンス、非常勤講師の時間割（教科書）調整及び遠隔講義の実施対応、実習校選定業務（大分市教育委員会と連携）、実習校の巡回指導（養護実習Ⅰ、Ⅱ）、養護実習Ⅰ履修者選考（15名中12名に履修許可）、大分県内者（大分市の学生を除く）対象の母校実習（豊後高田市2校、杵築市1校、竹田市1校、中津市1校、日田市1校、別府市1校、佐伯市1校で実施）、大分県採用試験のガイダンス（5月、12月）の開催、教員採用試験二次対策講座（実技、場面指導）、教員採用試験一次対策の遠隔配信での実施、採用試験終了後の就職活動の支援、教員免許の一括申請、新カリキュラムの施行に伴う教職課程変更届の文部科学省への提出である。

平成30年度入学生（養教課程第4期生）は、9名が養護教諭一種の免許状を取得した。教員採用試験の受験者は4名、1次試験合格者は1名（佐賀県）、最終合格者は1名だった。9名の進路は、佐賀県養護教諭1名（正規）、大分県非常勤講師2名、山口県非常勤講師1名、大学院等進学1名、医療機関就職者4名。教員就職率は、50.0%、教員として勤務する卒業生の大分県内就職率は50.0%だった。

養護実習Ⅱに関しては、大分市教育委員会、日田市教育委員会、佐伯市教育委員会、別府市教育委員会、実習校との連携の下、順調に進めることができた。養護実習Ⅰの実施に関しては、感染症拡大の折、実習期間を変更するなどして対応した。18名中3名に関しては、実習校と調整の上、次年度の実施とした。

今年度の課題は、養護実習Ⅰを近隣校での学校ボランティアの形で実施するための事前調査、関係機関との連携であったが、感染症拡大のため、実習機会の調整、確保に追われたこと、学校が学外のボランティアを受ける入れないという状況にないことから、実質的な進展はなかった。継続して検討課題とする。

9-3-8 2) 実習運営小委員会

委員長 秦さと子

委員 杉本圭以子、荒木章裕、足立綾、木嶋彩乃、佐藤栄治、徳丸由布子、丸山加菜、矢野杏子、山田貴子、永松いずみ

実習運営小委員会の主な活動目的と役割は、①1年次から4年次までを通じ、学生が段階的に看護実践力を修得できるように、看護技術修得プログラム（統合科目）および看護スキルアップ演習を企画・運営・評価すること、②学生が効果的に看護実践に関する学習ができるように、研究室領域間で情報交換し、臨地および学内における実習に関する環境整備を行うこと、③臨地実習に関する指導指針、ガイドブック等の作成・見直しである。7月を除く月1回の定例会議および臨時会議1回を開催し、前述に基づき主に以下の活動を行った。

1. 看護技術修得プログラムの企画・運営・評価

第1～3段階看護技術演習（ファーストステップ：2年次後期、セカンドステップ：3年次前期、サードステップ：4年次前期）を実施した。COVID-19の影響で全てのプログラムはオンラインで実施した。第1段階看護技術演習（2年次後期）および第2段階看護技術演習（3年次前期）は、課題事例に対し学生が自分の考えをつくりあげるために個人ワークを課し、その後、考えを持ちよってグループで討議しながら技術の根拠や手順をまとめさせた。また、第1段階看護技術演習では、事例の取り組みに加え、日常生活援助に関するeラーニングも実施し、知識の再確認を行った。昨年度に続き同じ形態での実施となったが、学生の取り組みの状況は良く、概ね目標に到達できたと評価した。第3段階看護技術演習（4年次前期）では、学生が主体的・計画的に学習する環境の提供としてeラーニングを行い、知識の習得やレポートを通して看護技術の習得を目指すことができていた。今後は、グループワークでの取り組みが学生によって偏らないような工夫の検討が必要である。

2. スキルアップ演習の企画・運営・評価

本演習は4年次生を対象に看護基礎教育の総仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を統合し、アセスメント能力および看護技術実践能力を養うことをねらいとしている。今年度もオンラインで実施した。昨年度の課題であったオンラインでの演習方法については、感染予防に配慮し事前に動画または写真、パワーポイント資料等でコンテンツを作成し、事例に対して適切かつ安全安楽な看護技術をどのように提供しようと考えたかが伝わる発表にしよう指示した。その結果、実施後の学生からのアンケートではディスカッションの充実等の意見があり、教員からも見せ方の工夫により学生の学びがわかりやすかったなど好評であった。次年度も同様の方法での開催を継続する。今後は現状にあった事例の見直しが必要である。

3. 看護技術演習将来構想検討

2022年度改正のカリキュラムで本委員会が担当する2年次後期『基礎看護援助技術演習（選択科目）』、3年次前期『臨床看護援助技術演習（必須科目）』、4年次前半『応用看護援助技術演習（選択科目）』に関する授業内容、および具体的な運用システムの検討を実施した。概ね授業構成は完成し、現在は2023年度開講に向けて具体的な運用システム等について計画的に取り組んでいる。

4. 実習環境の整備

1) 南大分キャンパス

臨地実習において必要な環境整備について、各領域の実習中の状況など情報共有しながら確認した。昨年度整備された開錠時間の設定は、サイボウズ上での予約入力によりスムーズに運用された。臨地実習中のキャンパス内の施設管理について事務局と相談しながら整理、確認を行った。また、ネット環境整備の要望について各研究室にアンケートを取り、意見を集約した。

2) その他実習施設環境整備

学生が効果的に看護実践に関する学習ができるように、看護物品の補充などの環境整備を行った。また、感染予防対策で備蓄していた物品を整理した。

3) 学内実習環境の整備

教育用電子カルテの導入初年度であることから、運用のための整備および相談窓口を担った。また、製品の内容や運用に関するアンケートを2回(8月、12月)実施した。コロナ禍により臨地実習が学内実習へ変更されたことに伴い、教育用電子カルテの活用も増加した。今年度は、他社の教育用電子カルテの検討も1、2月に行った。また、看護技術修得支援のためeラーニング教材の運用、相談窓口を担い、活用状況についても評価した。本教材は広く活用されていることが確認された。今後も活用状況の確認を行い、学習効果について意見を確認しながら教材としての適性を判断していく。その他、学内実習等で必要な消耗品、備品等の購入により環境調整を行った。今後も各研究室間で情報共有しながら必要な環境整備を行っていく。

5. 実習関連マニュアルの内容検討および整備

1) 看護技術習得確認シート

今年度より紙媒体の記録シートからweb上の記録シート(Google スプレッドシート)へ移行し、全学年に配布した。また、4年次生に対し卒業時看護技術確認アンケートを実施した(2021年11月実施、回収人数77名/79名中回収率97%)。卒業時まで全員が単独で実施できることが望ましい技術項目:22項目のうち、8割以上の学生が「単独で実施できる」と自己評価した項目数は13項目で、昨年度より6項目増えた。その要因としては、コロナの影響で臨地での実習が経験できなかった分、学内演習での反復学習の機会が自信につながった可能性や、一方で臨地実習が実施できた時には意欲的に取り組めたためと考えられる。また、家族の面会が制限される中で、学生がかかわる場面が増えた部分もあったことが考えられた。

2) 実習ガイドブック・実習指導指針の見直しと作成

実習ガイドブックは学生対象に、実習指導指針は教員など指導者を対象にすることを前提に見直しを行った。2022年度からの新カリキュラムが現行のカリキュラムと並行して運用されるため、実習ガイドブックおよび実習指導指針では、どちらのカリキュラムにも対応できるように掲載を工夫した。実習ガイドブックでは個人情報取り扱いに関わる内容を主に見直し、実習指導指針では実習構成の変更に伴う改訂を行った。実習ガイドブックは715部作成し、685部を学生および実習施設へ配布した。実習指導指針は250部作成し、194部を関連部署へ配布した。今後も活用による評価と社会の変化に応じた内容の見直しが必要である。

9-3-8 3) 国家試験対策小委員会

委員長 石田佳代子

委員 定金香里、佐藤愛、宿利優子、原田千夏、姫野綾

委員会では、看護師の国家試験合格率 100%を目指し、学生が主体的に学べる教育環境を整備する役割を担っている。具体的には、年間模試計画の早期立案、実施、結果分析を行い、個別・少人数指導体制の整備、国試ガイダンスの充実、学習環境の工夫などにより、学習への動機づけを高めることである。

本年度の看護師国家試験合格率は、全国の 91.3%に対し、本学は 100%であった。

国試対策のスタートとして学生委員とともに 4 月にガイダンスを行い、6～7 月には国試対策セミナーを実施した。本セミナーでは、外部講師による「解剖生理の勉強のやり方講座」を視聴して、国試対策への動機づけを高めるとともに、基礎学習を積み上げて学力を上げることを目的として行った。本年度は、根本からの理解ということをテーマに挙げて、解剖生理の知識を疾病の理解につなげられるように意図して演習を企画した。また、学生が本学の成績の傾向を知ったうえで、国試対策の検討に役立てられるように、看護師国家試験結果の概要と本学の成績の傾向について説明した。12 月には必修問題と状況設定問題対策として、国試対策セミナーを実施した。学生委員と連携を図り業者模試を 7 回、学内模試を 2 回実施した。模試結果は自己採点し、自分の力を把握するとともに必ず問題のやり直しをすることを求めた。成績低迷者に対しては個別対応を行った。また本学が全国の結果と比較し正答率が低い問題をチェックし、それがどのような問題か学内の教員間で共有できるようにした。冬の直前期には集中的に必修問題対策を実施した。学内の雰囲気づくりとして、Google フォームで過去問題を作成して送信し、他学年に対しても国試対策に対する意識が高まるように取り組んだ。また、1～2 月に健康管理や感染対策等の説明を行い、試験直前期にもガイダンスを充実させた。

学習環境の工夫として、新型コロナウイルス感染対策で学生が登校できない時期などには、模試を各自の自宅で受験できるように学生委員が研究室ごとに配布するなどして対応した。また、自己学習場所の確保については、徹底した感染対策の下で利用できる場所を確保するなどして対応し、大学全体で支援できるように配慮した。

次年度の課題は、学生の国試対策への主体的な学習をさらに支援するため、国試の傾向と対策について情報を提供し学習環境を整えることで、特に早期対策につながる方法や、冬の直前期に有効な対策を検討し、提供することである。

9-3-8 4) 進級試験ワーキンググループ

リーダー 濱中良志

メンバー 佐伯圭一郎、山田貴子、佐藤栄治、橋本志乃

進級試験 WG の役割は、進級試験問題作成と、学生への周知、進級試験の実施を行うことである。6月3日に2年生を対象にオンラインで説明会を開催し、進級試験の目的、概要、出題範囲の説明を行った。7月末に教員へ本試験・再試験の進級試験問題の作成を依頼した。問題回収後、WG 内で問題の検討、推敲を経て問題冊子の作成を行った。

令和4年2月24日に2年次生を対象に進級試験を実施し、合格率は94%であった。不合格の5名のうち4名が3月3日の再試験を受験し、全員が合格した。

9-3-9 研究科教育研究委員会

委員長 稲垣敦

副委員長 梅野貴恵

委員 赤星琴美、影山隆之、高野政子、福田広美、神崎正太

オブザーバー 村嶋幸代

本委員会の任務は、大学院研究科の運営に関する事項について審議することである。本年度は審査の遅れた修士論文があったため、委員会を12回開催した。入試の結果は、第2章に記載した。

今年度、以下の事案について検討し、運用開始した：(1)長期履修制度の申請要件の変更、(2)NPチームの課題研究指導体制の変更、(3)NP事業推進チームの名称変更、(4)NPコースの特別選抜制度の開始、(5)授業料減免について、(6)ハラスメント防止・対策委員の選出、(7)危機管理対策本部委員の選出、(8)KPIの検討、(9)日本看護協会「看護の知」事業該当者の推薦、(10)入試の平日実施、(13)NPコースへのエルゼビア学習システム(e-learning)の導入決定と予算の計上、(14)QUOカード Payによる研究謝金支払いの試行、(15)指定規則の改正に伴う保健師及び助産師教育のカリキュラム変更の届出、(16)広域看護学コースの募集人数の増員に伴う大学院学則変更、(17)NPコースの週3日の昼夜開講、(18)学生便覧の変更(ハラスメント相談員の記載等)、(19)キャンパススクエアを使った履修登録の電子化、(20)大学院院生室の移動及び拡張。

その他、次のようなルーティンな業務を行った：(1)入学式の準備・運営、(2)休学、復学、長期履修、退学の確認、(3)指導教員の変更、(4)大学院生の困りごとの相談、(5)退学希望者と面談、(6)大学院生のTA雇用の承認、(7)大学院研究費及び大学院研究室の消耗品購入の検収、(8)NPコースの進級判定、(9)在学生の履修状況の確認、(10)特待生授業料免除について、(11)大学院生オリエンテーション、(12)日本学術振興会の優秀賞について、(13)特別選抜の募集要項の作成・配付・事前相談・問題作成・準備・設営・試験監督・採点・集計・合否判定案作成、(14)NPコースの基礎学力試験の結果の確認、(15)新入生の既習得単位の確認、(16)長期履修申請の確認、(17)学部生のキャリアガイダン

スにおける大学院進学について説明、(18)指導教員の確認と未決定の学生との面談・調整、(19)日本学生支援機構大学院奨学金推薦について、(20)大学院説明会の企画・準備・運営、(21)博士課程後期への進学審査の募集要項の作成・配付・事前相談・問題作成・準備・設営・試験監督・採点・集計・合否判定案作成、(22)入学試験の募集要項の作成・郵送・事前相談・問題作成・準備・設営・試験監督・採点・集計・合否判定案作成、(23)研究中間報告会・研究計画報告会・論文レビュー報告会・研究成果報告会の企画・運営、(24)年間スケジュールの検討、(25)大学院特待生入学料免除について、(26)大学院入試の過去問題と解答例の配付、(27)学生便覧とシラバスの編集、(28)二次募集の募集要項の作成・配付（今年は受験者希望者なしのため実施せず）、(29)日本学生支援機構大学院第一種奨学金返還免除について、(30)学生と語る会（助産学コース）・院生と語る会（広域看護学コース）の企画・運営、(31)修士論文と博士論文の審査員の推薦、(32)大学院研究生の募集要項の作成・配布、(33)年度目標の実施状況の確認・次年度の目標と予算案の作成、(34)修了要件の確認と修了判定案の作成、(35)修了式・学位授与式の準備と運営、(36)研究費の繰越の審議、(37)日本学生支援機構奨学金予約採用について、(38)特定行為研修管理委員会について。

次年度は、NP コースのカリキュラムの大幅な変更が予定されており、これに関連する文部科学省及び厚生労働省への届出が必要である。また、指導教員の要件、英語教育、KPI 等、広く大学院のあり方について検討する。

9-3-10 看護学実習委員会

委員長 赤星琴美

委員 梅野貴恵、小野美喜、影山隆之、桑野紀子、佐藤英、高野政子、藤内美保、林猪都子、
廣田真里、福田広美

本年度の会議は、毎月（8月除く）の定例委員会 11 回を開催した。

令和元年 5 月にいただいた問い「大分県立病院で実施させていただきたい本学の看護学実習の内容と理由」についてまとめ、4月 19 日に報告した。また、総合看護学実習の研究室ごとの学生配置に関する方針内容を決定した。新型コロナウイルス感染症を踏まえた看護学実習における「大学の方針」及び「実習停止の考え方」、「実習停止判断フロー図」を実情に合わせ改訂した。必要十分な教育を受ける機会を確保し、教育の質を担保するために大分県立病院の協力を得て、新型コロナワクチン接種の計画立案・実施（114 人：1 回目 6 月 23 日、2 回目 7 月 14 日）を担当した。実習施設から陰性証明の求めがあった場合の学生の抗原検査・PCR 検査体制も検討した。さらに、入学時の健康診断項目についてツベルクリン反応検査を中止し、HBs 検査を定性検査から定量検査に変更することを決定した。昨年度に続き、県立病院で実施している実習指導者短期教育プログラム、実習指導者・大学教員交流会は中止した。

9-3-11 学生生活支援委員会

委員長 小野美喜

副委員長 関根剛

委員 内倉佑介、菊池誉志、後藤成人、釘宮由美子、篠原彩、永松いずみ、丸山加菜

学生生活を充実させるための環境整備をはじめ、困難を抱える学生へのタイムリーなサポートを提供することを目的とし、以下の活動を行った。

1) 担任による学生サポート

各学年担任が学生の学習相談や留年対応などの学生相談に応じた。面談件数はのべ69件であり、低学年ほど相談件数が多かった。メンタル面でのサポートが必要な学生は保健室と連携した。カウンセラーによるカウンセリング件数はのべ35件であった。カウンセリングを受ける学生は前年度よりも増加した。

2) 新入生・学生オリエンテーション・1年生親睦会

新学期にあたり4月9日に新入生および2～4年生に対するオリエンテーションを実施した。1年生を2会場に分散配置し、2～4年生はリモート参加として感染予防策を講じた。トラブルなく全学年での新学期スタートができた。また、4月12日に新1年生を対象とした親睦会オリエンテーションを実施し新入学生間の交流ができた。

3) 新型コロナウイルス感染予防と学生生活環境の改善

1年を通して感染ステージはⅠ～Ⅲを推移したため、継続して感染予防対策を講じた環境整備を行った。4月には大学のマニュアルに基づき「新型コロナウイルス感染対策と学生生活」を令和3年度版に修正し、学生に伝達するとともに学生ポータルサイトで公開した。また食堂やカレッジホールの机椅子の距離を開けるなどの環境整備を随時行った。8月は感染力の高いデルタ株の流行があり、夏季休暇明けの生活の注意事項を学生にメール配信した。さらに講義室前の消毒薬配置や感染注意を促す掲示物を大学内に設置し、厳重なリスク管理を行った。学生の使用状況を確認しながら、学生が集団をつくりやすい演習室の入室制限を行うなど、感染リスクを最小限にするための活動を行った。

全国的に感染が拡大し、学生の感染者や濃厚接触者が生じたが、連絡体制が機能し、学内連携対応にて学生間の集団感染を予防できた。

4) 1年生を対象としたデートDV等の研修

夏季休暇前の生活安全の一環として1年次生を対象にデートDVに関する講習会を開催した。対面での講習会を中止し、オンラインを活用し、動画教材による学習および視聴後学習成果を報告する課題の提出により実施した。学生は、デートDVについて理解し、当事者意識を持つとともに発生の予防について考えることができた。

5) 学生の交通安全の推進

交通安全指導講習会は、対面講習会を中止し、動画視聴および視聴後の簡単な課題の提出により実施した。今年度もコロナ感染予防のため1年生からの自動車使用が認められた。また、自動車通学許可は毎月リモートによる面接を行った。自動車使用許可は委員長による面談を必要

としていたが、学生の利便性を考慮し、次年度から必要書類と誓約書提出への変更を提案し、学内で承認された。

6) 学生生活実態調査

12月にGoogleフォームを用いた実態調査を実施した。回答率は52.9%であった。結果はキャンパススクエアの掲示板で公開し、学生からの要望は各関係部署に伝え回答を得るようにした。

7) 自治会活動、サークル活動など学生関連イベント支援

コロナ禍で学生による自治会活動ができず、次学年への引き渡しなども懸念されたため、会計や事業計画などの支援をした。サークルは感染ステージIに引き下げられた際には再開の通知をし、体育館や学外での感染予防への注意喚起を行った。若葉祭やキャンパスクリーンデイなどの行事は感染拡大を考慮して中止した。

8) 九州地区学生指導研究集会、九州地区公立部長会議の参加

昨年度に引き続き文書開催となり、文書での意見交換を実施した。

次年度の課題

コロナ感染拡大が2年にわたり学生生活への影響が懸念される。リモート授業、自治会やサークル活動の自粛による学生交流の少なさが問題であり、学生実態調査でも低学年ほど交流が少ないことが伺えた。コロナ感染予防を強化するとともに、教員・学生間の交流の機会をつくる。メンタルサポートも必要であり、カウンセラーを増員するなどを検討する。さらに学生が自治会活動などの学生行事が継続できるよう支援を強化する。

9-3-12 就職・進路支援委員会

委員長 廣田真里

委員 草野淳子、佐藤愛、中釜英里佳、姫野綾、神崎正太、竹中愛子

就職を希望する学生については就職率100%、県内就職率50%以上を目指して取り組みを行った。

4月から4年次生全員の進路希望状況にそって、進路相談を受け、履歴書及び小論文指導及び希望者全員の模擬面接を計画的に実施した。その結果、看護職として病院への就職希望者の9割は夏休み前までに内定を取得できた。残りの者も10月までには全員内定を取得できた。養護教諭を希望する者については、希望する県の内定は取得できたものの、配置先については、3月末ごろの連絡を待っている状況である。各研究室の協力もあり、4月から積極的に県内就職を呼びかけた成果もあり、最終的に54.7%の県内就職となった。進学希望については、13名全員が本学の助産学コース及び広域看護学コースに合格した。

キャリアガイダンスを3回計画し、計画通りに実施できた。3年次生に対しては2021年7月と2022年2月に2回実施し、キャリアデザインの重要性を説き、9月からの専門領域実習が翌年からの就職活動につながることを理解させることができた。特に2月のキャリアガイダンスでは、就職・進学活動に実際に役立つ小論文や履歴書の書き方、自己アピールに役立つ自己分析の方法等具体的

な内容で学生の高い満足感を得られた。2年次生に対しての2月のキャリアガイダンスでは、3年次で始める就職・進学活動における情報収集及びインターンシップや説明会等への参加をタイムリーに行えるように説明した。また就職活動を始めるにあたり、専門領域実習の重要性を説明した。学生のアンケートからは、内容を理解している反応が多かった。

大分県の医療政策課と連携を取り、大分県内の魅力を発信する企画を学生に案内したが、1割以内の参加者であった。しかし、昨年よりも確実に成果は上がっていることから、方法としては今年度の活動をベースに引き続き実施していくことが重要である。

次年度も、県内就職率の今年以上の成果をめざし、県とも連携して活動する必要がある。

9-3-13 FD/SD 委員会

委員長 梅野貴恵

副委員長 吉田成一

委員 安部眞佐子、伊東美穂、後藤成人、中釜英里佳、宮内信治

FD/SD 委員会は、教職員の能力開発、教育/研究内容及び教育方法の改善、組織間の連携を推進することを目的とした委員会である。主とする分掌は、①FD/SD の研修、②教員の授業評価の実施及び授業内容・方法の改善及び向上、③教員の教育、研究等に関する資質向上、それぞれの企画及び推進に関することである。令和3年度の本委員会の活動内容は、以下の1)～9)である。

1) FD/SD 研修：10-4 FD・SD 活動参照

今年度は新任教職員研修を感染対策の上、対面で実施した。新任教員は看護系教員であったことから、数日に分けて試行的に看護基礎教育に関する基礎知識の研修会を実施し、初めて教育に関わる新任教員には好評であった。科学研究費説明会・研修会は、応募締め切りが早まったことから学内締切時期の変更を含めたアナウンスと今年度科研費新規採択者の具体的な計画書の工夫点を Zoom で講義してもらった。教育に関する研修会（①「アンガーマネジメントで上手に怒れる人になる」石井良佳氏）はハイブリッド（対面と Zoom）で実施し、（②「教育効果をあげるための ICT の活用」佐伯圭一郎教授と荒木章裕講師）と人権に関する研修会（「部落差別問題」江藤裕子氏）は、Zoom で実施した。学生理解に関する研修会（「学生のメンタルヘルスの現状理解」大嶋美登子氏）は対面で実施した。今年度は、Covid-19 感染拡大防止の為、ほぼ Zoom を用いたオンライン研修を実施した。

職位・経験別の研修は自己の課題や関心が異なり、集合研修としては実施が難しいため、実績を把握する目的で、各教職員の実績について Google フォームによるアンケートを行った（7月28日）。教職員の約4割から回答を得て、自主的に FD/SD 活動を行っているものは6割以上で、教育に関することであった。参加費を自己負担しているものも2割あった。自己研鑽のために、3年に一度程度の頻度以上に、研究・教育・大学運営に関わるような研修への参加を促進することや研修費用を補助することを決定し周知を図った。

今年度は、COVID-19 感染拡大防止の為、大分県自治人材育成センター県職員研修への派遣は行わなかった。事務職員は、自己研鑽のため SD 研修としてオンデマンド研修を利用した。

また、事務職員育成のためのSD研修の一環として、大学職員としての意識改革、自己啓発となるようプロパー職員1名を大分県福祉保健部へ研修派遣した（令和2年7月1日～令和4年3月31日）。

2)学内競争的研究費の活用促進として、4月12日にメールにて学内競争的研究費の募集を行い、奨励研究1件、先端研究3件、プロジェクト研究1件の新規応募があった。5月12日にFD/SD委員会主催の審査会（審査員7名：FSDS委員会から4名、教育研究審議会メンバーから2名、担当理事1名）で審査し、審査結果により助成額を決定した。令和2年度採択分の2年目課題のうち、奨励研究2件、先端研究1件は、令和3年度科研費に新規採択されたこと等から辞退の届出があった。令和2年度に採択された2年目の研究課題と合わせて、令和3年度は、奨励研究1件、先端研究5件、プロジェクト研究1件への助成を行った。1月に先端研究1題の助成期間の変更があり、6題の研究成果（進捗状況）は、3月7日のアニュアルミーティングで報告された。

令和4年度の学内競争的研究費の募集は科研費採択結果が前倒しになったのを受け、令和3年度内から行い、次年度4月から研究実施ができる体制とした。また、令和4年度新規採用者が学内競争的研究費を利用できるようにするため、新規採用者の募集は別途行うこととしている。

3)科学研究費助成金申請の促進を行うために、全教職員対象に上記1)のとおり研修会を実施した。4月15日に新任教員のために、研究費申請にあたり情報提供を行った。申請書のピアレビューは、申請28件のうち13件であった。

4)国内/海外派遣研修の応募申請者の利便性を考え、申請用のアドレスを新規に作成し周知したが、参加希望はなかった。

5)授業評価は、実習科目も含みWebによる方法で、1年次生35科目、2年次生39科目、3年次生31科目、4年次生5科目の全110科目（のべ121回）であった。回収後は、FD・SD委員会事務担当者が集計後に、担当教員へ結果の通知を実施した。年度末に科目ごとの回答数と平均値一覧をWebにアップした。1年次生の回答率は、後期に向けて55%から20%へと低下しており、2～4年次生の回答率は、ばらつきはあるものの10～30%程度であった。学生に現行の授業アンケートについての意見を集約することを目的に、2月後半から春期休暇期間にかけてGoogleフォームを用いたアンケートを実施し、139名からの回答があった。次年度から、実施方法や学生へのフィードバックの方法を変更する予定である。大学院科目の授業評価は昨年同様に実施することとなり、Googleフォームを用いたwebアンケートの実施を単位認定者に依頼した。授業アンケートの実施は39科目（全132科目中）であった。

6)教員相互の授業参観を促進するためのメールでの案内を行った。令和3年度の実績は、所属研究室内の授業参観が、のべ56人、所属研究室外の授業参観が、のべ12人であった。

7)アニュアルミーティングは、令和4年3月7日に開催した。新型コロナウイルス感染拡大対策として、3日前にカレッジホールに発表用のポスターを掲示し、参加者は事前にポスターを閲覧、当日は質疑を行う方式とした。当日は、Zoomを用いて発表者による簡単な説明と質疑応答を実施し、教職員57名が参加した。学内競争的研究費の応募者による発表6題、一般演題6題が、ポスターやパワーポイントを用いて発表された。発表の要旨集は、冊子体にして図書館に保管した。

8)平成30年から開始された大分県内大学等FD・SD合同フォーラム担当者会議が、令和3年度におおいた地域連携プラットフォーム教育プログラム開発部会FD・SD事業ワーキンググループと改

変された。オンラインで4回開催され委員長が参加した。第4回大分合同FD・SDフォーラム(Zoom)は、「教育活動の改善に向けた点検・評価 学生募集と教育課程変遷の観点から」のテーマで、3月25日に大分大学教育支援課の支援をうけて本学が担当し開催された。学長ほか、本委員会メンバーや教職員14人が参加した。

9)学内全教員へ他機関からのFDに関する情報提供を31回行った。

今後の課題

今年度の学部の授業評価は、web アンケートで実施した。回答率低下があり、実施方法等の意見を集約した。次年度のweb アンケートの回答率をあげる工夫を実践し、状況を確認することとした。教員の教育力を高める方法の一環として授業参観を推奨しているが実施率をあげ、教員相互の授業評価について検討進める必要がある。また、教育・研究・大学運営のための研修参加促進のための予算や国内・海外派遣研修費の利用者が少ないため、周知して研修参加を促進することとする。

9-3-14 研究倫理・安全委員会

委員長 藤内美保

委員 濱中良志、小嶋光明、森加苗愛、荒木章裕、小野治子

外部委員 二宮孝富、西英久

事務局 松尾美沙

研究倫理・安全委員会は今年度13回開催した。今年度の本委員会の重点目標として、研究倫理委員会が、よりサポート的な体制を作り、研究の取組みを推進できるための役割を担うこと、また大学院生を含めて研究倫理教育を確実に行うこととした。定例の審査以外に臨時会議を設け、①研究計画書の手引き及び申請書のフォーマットの改正、②計画書の見本例の策定、③計画書提出時のチェックリスト作成、④研究実施報告書の作成、⑤大学院生の倫理教育の強化を行った。①手引書の改訂、及び研究実施報告書は1年かけて見直しを行い、令和4年度から改訂版で開始する。特に申請を必要としない研究について、規程の改正を行った。また、審査当日の待機制を変更し、必要な場合のみ待機を要請するなど変更した。②研究計画書の見本例により、記載の仕方がわかり易くなったという肯定的な意見が多く聞かれた。③チェックリスト作成は、従来から課題であった大学院生の申請において、指導教員の目が入っておらず審査のコメントが多くなるケースがあったため、注意してほしいことをチェックリストの項目とし、指導教員のサインをするようにした。④審査後のモニタリングを行うために人を対象とする研究も、動物実験と同様に研究実施報告をすることとした。⑤大学院生の看護科学研究の科目にAPRINの倫理教育受講を含めて単位認定を行うこととした。大学院1年生は100%の受講となった。

今年度の申請件数は83件、うち動物実験は15件、外部からの申請の審査は1件であった。新型コロナウイルスのためか、研究申請件数は昨年度よりも少ないので、さらに研究推進のためにも申請を増やしていく体制が必要である。また、2・3年次生の大学院生のAPRIN未受講が課題となってお

り、対策が必要である。

9-3-14 1) 動物実験小委員会

委員長 小嶋光明

委員 市瀬孝道、定金香里、恵谷玲央、松尾美沙（事務局）

令和3年度動物小委員会は7回開催した。動物実験研究計画書15件の審査を行い、新規審査件数10件；変更・追加件数5件）であり、14件が学長によって承認された。令和3年度では計画に沿った動物実験が13件実施され（うち1件は健康科学実験）、使用動物匹数はマウスが806匹（市瀬292匹、定金56匹、吉田458匹）、ラットが62匹（岩崎57匹、市瀬3匹、定金2匹）で、総使用匹数は868匹であった。前年度の総使用匹数800匹に比べて今年度は8%増加した。これらの使用された動物のそれぞれの実験おける「自己点検・自己評価」を実施すると共に、動物実験実施報告書を作成し学長に報告する。前年度（令和2年度）使用動物の慰霊祭は新型コロナ感染症拡大によって中止された。動物実験教育訓練に関しては令和3年4月15日(23名)に動物実験講習会（小嶋・恵谷）を実施した。また、令和3年12月11日(75名)に実験研究（恵谷）、令和3年1月19日(75名)に研究の倫理と安全の中で動物を対象とした実験（市瀬）について学部3年生を対象に実施した。例年、年度末の3月に実施している人獣共通感染症の教育訓練は外部講師と日程調整を行い、来年度から4月に開催時期を変更することとした。そのため、令和3年度中の実施はしなかった。

動物施設に関しての今後の課題として、冬期の飼育室内の湿度管理は加湿器を用い行なっているが、雨期ではエアコンのみで行なっている。雨期は除湿が不十分なため、今年度は飼育室3のみに除湿器を設置した。それでも湿度が基準を超える時があった。雨季の飼育室内1と2では湿度が100%となるため、来年度は、飼育室1と2にも除湿器の設置が必要と考えられる。また、飼育施設の温度・湿度の環境記録装置が劣化しているため、装置の更新を検討する。

来年度はこのような施設環境の改善と、これ迄と同様に動物実験の研究計画書を審査し、動物への配慮とよりよい動物飼育環境の推進を図る予定である。

9-3-14 2) 遺伝子組換え実験安全小委員会

委員長 市瀬孝道

委員 小嶋光明、岩崎香子

今年度は遺伝子改変動物等を使用する教員がいなかった。

9-3-15 広報・公開講座委員会

委員長 桑野紀子

委員 秋本慶子、安部翼、石丸智子、岡田浩明、小嶋光明、黒木貴子、徳丸由布子、森加苗愛、
矢野亜紀子、渡邊弘己

1) 若葉祭教員企画

今年度は COVID-19 感染拡大状況を考慮し、危機管理委員会と若葉祭実行委員会との協議により中止となった。

2) オープンキャンパス

COVID-19 感染拡大予防のため、7月18日(日)にオンライン開催(LIVE配信)し、学長挨拶、大学紹介、入試概要説明、模擬授業、卒業生・修了生からのメッセージを配信した。また、模擬授業を除いた内容を8月中旬～10月末日の期間、大学ホームページ上でオンライン配信した。後日配信では、動画「学生インタビュー編」「大学教育紹介編」も併せて公開した。オンライン開催に先立ち、事前に大分合同新聞など新聞社3社に記事を掲載、大分県オープンキャンパスガイドで広報し、TOSテレビのホットハート大分でも紹介された。オープンキャンパス当日のLIVE配信は、事前申込総数は207名であったが、アンケート結果によると保護者や友人と参加した方が5割程度であったため、実際の参加者は申込総数を上回った。オープンキャンパス企画の中でも「合格体験談」や「在学生メッセージ」が参考になった、という意見が多かった。動画配信について、本学YouTubeの公式チャンネル登録数は42名、動画再生総数は1,539回(2020年6月2日～2021年3月22日時点迄)と、本学について大いにアピールできた。令和3年度は、大学見学を希望する高校生のニーズに対応するため、申し込みのあった高校生と保護者を対象にキャンパスツアーを2回開催した。令和4年度は、COVID-19 感染拡大予防に配慮しながら、可能な範囲で対面形式でのオープンキャンパス実施を計画する。

3) 出前講義

高校からの依頼により、大学進学を希望する高校生を対象とした出前講義に講師を派遣した。看護系の准教授2名、講師2名、助教1名を派遣した。県立臼杵高校(6月6日)、県立別府青翔高校1年生(9月14日)、熊本県立東陵高校(9月22日オンライン、中止)、県立中津北高校(10月15日オンライン)、県立別府青翔高校2年生(11月6日)の5件(うち一件は中止)であった。2021年度版大学案内を、対面の場合は持参、オンラインの場合は事前に送付し、広報を行った。

4) キャンパスツアー(大学見学)

オープンキャンパスがオンライン開催となったため、大学構内を実際に見学したいという要望に応え、夏季休暇中キャンパスツアーを8月17日(火)、18日(水)に企画した。計7名から参加希望があり、COVID-19の感染拡大予防に配慮しながら対応した。参加者内訳は、8/17(火)2年生1名、3年生2名、8/18(水)3年生4名であった。12月8日(水)にも1件(高校3年生1名とその保護者)申し込みがあり、対応した。令和4年度は、キャンパスツアーの募集は感染状況やオープンキャンパスの実施状況により検討する。

5) 大学 HP、Facebook およびマスメディアによる広報

今年度より刷新された大学 HP の運用を行った。本学の COVID-19 に関する対応について、随時情報を更新した。その他、例年同様大学のイベント案内を掲載（Web オープンキャンパス、オンライン講義、看護国際フォーラム、ホームカミングデイなど）し、それらの実施報告として大学アルバム 24 件（3 月 22 日現在）を掲載した。本学公式 Facebook を利用して大学のイベントの告知や活動・取り組みを卒業生、在校生、受験生など一般に速やかに発信し、各研究室と事務局の持ち回りで大学の風景などについて、48 件（3 月 22 日現在）を掲載した。教員の研究紹介は、全教員の協力のもと毎月更新し 11 件を掲載した。大学 HP に掲載している大学 Q&A は、年 3 回（4 月、5 月、11 月）更新した。本学進学に関心のある高校生や、入試情報を必要とする受験生などを対象とし、随時公開した。大学アルバムと Facebook、その他 SNS の活用によるさらなる効果的な広報活動を行う方法の検討を次年度の検討事項とする。また、HP 上で大学院の広報を充実させる必要があるため、今後検討する。

6) 大学案内パンフレットの作成と活用

委員会委員 5 名が大学案内パンフレット WG に参加し運営した。業者選考では委員全員が参加し、2023 年度版が次年度 4 月中に納品されるように WG の支援を行った。次年度入学生は新カリキュラムで学ぶことになるため、必要箇所を更新した。2022 年度版の大学案内パンフレット約 3,000 部は、出前授業、進学相談時に本学に関心をもつ学生や保護者、高等学校に配布し、本学の認知度の向上や大学生活の具体的な説明などに活用した。大学院などについての記載もあるので、学部生、教職員にも 4 月に配布する。高校への配布資料に同封してもらう。

7) 公開講座

COVID-19 感染拡大予防のため、9 月 11 日（土）にオンライン開催した。今年度のテーマは「ステイホームのいまだからこそアラフォーから足腰の健康を考えよう！健康寿命日本一の実現」と題して、近畿大学生物理工学部准教授で NHK「みんなで筋肉体操」等を通して多くの方に親しまれている谷本道哉氏、本学健康運動学研究室教授の稲垣敦氏の 2 名の講師が講演した。告知のチラシは県下の病院や各種施設等や、6 月の大分県看護協会総会などで早期に配布した。また、大分合同新聞など新聞社 2 社に記事を掲載した他、大分県信用金庫の県下 38 支店のデジタルサイネージにも告知を掲出し、広報した。参加者の年代は 10 代から 60 代以上と幅広く、職業も看護職のみでならず理学療法士や介護職、会社員と様々で、総勢 115 名の参加があった。終了後のアンケートでは、「大変良かった」「良かった」が 98%と高い評価が得られた。今後の開催方法としては、オンライン開催希望が 86%と多かった。次年度も幅広い年齢層から関心の高いテーマで開催できるよう企画する。

8) 大学オリジナルグッズの作成

本学の広報活動推進を目的に、教職員に対し活用促進の取り組みを行ったが、COVID-19 感染拡大のため対面のイベントが中止となり、例年よりも活用機会は少なかった。年度末には各グッズの残数を確認し、次年度はファイルを作成することを確認した。次年度はファイルのデザイン等について検討する。引き続き、課題となっているグッズの販売の可能性についても検討する。

9) 広報誌「風の広場」

広報誌「風の広場」は後援会と共同で年 2 回（7 月 Vol.18、12 月 Vol.19）作成した。県内高校、学部生の保護者、同窓生、県内の実習関連病院などに各号 1,800 部を配布した。掲載内容は、2022

年度カリキュラム改正について、卒業生インタビュー、教員の研究紹介等であった。次年度も年 2 回のペースで作成し、本学の学部生や卒業生、教員の活動等について紹介していく。

10) 活動の課題

令和 4 年度の当委員会の継続課題は、以下の通りである。

- (1) 大学の教育研究活動の状況やその活動の成果に関する情報等を随時ホームページで公開し広報する。
- (2) イベントの開催情報や学生の諸活動等を、新聞や TV などのメディアやホームページ、広報誌等で発信する。
- (3) 一般県民（高校生含）、医療職者のニーズを満たすテーマの公開講座を開催する。
- (4) COVID-19 感染状況をふまえ、感染拡大防止に配慮し可能であれば対面方式で 7 月にオープンキャンパスを開催する。開催日以降もオンラインでもオープンキャンパスの動画等を公開する。
- (5) 県内の高校へ教員を派遣する出前講義で看護学の魅力を伝え、本学への進学希望につなげる。
- (6) HP 上での大学院の広報の充実を図る。

9-3-15 1) 大学案内パンフレットワーキンググループ

リーダー 森加苗愛

メンバー 秋本慶子、内倉佑介、田中佳子、矢野亜紀子、黒木貴子、安部翼

2023 大学案内パンフレットを製作した。新カリキュラムが導入されて初めての大学案内パンフレットであるため、コンセプトは新たなスタート、新緑をイメージする内容とした。印刷業者は小野高速印刷株式会社であり、制作過程では、WG と複数回合同会議を行い内容を検討した。

2020 年から COVID-19 の影響により、卒業生や修了生の写真撮影を控え気味としていたが、感染予防対策を行った上で、所属施設と早めに調整を行いつつ大部分のリニューアルを行うことができた。しかし、実習・演習やサークル活動の様子の写真など、今年度はまだ撮影が難しい状況であったため、次年度は、特に実習施設との調整等試みつつ可能な範囲で写真撮影を行い、内容の刷新を図っていく。

9-3-16 国際交流委員会

委員長 Gerald T. Shirley

副委員長 桑野紀子

委員 石丸智子、岩崎香子、恵谷玲央、尾割勇作、木嶋彩乃、丸山加菜

1) 韓国の蔚山大学校医科大学看護課程交流派遣学生受け入れと交流

蔚山大学から学部交流派遣として学部生 8 名を同行教員 2 名と共に 7 月 26 日から 7 月 30 日まで

の 5 日間受入れ、本学に滞在する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の流行状況及び対応を両校で協議し、今年度は中止とした。

2) 韓国の仁荷大学校医科大学看護学部とのオンライン交流会

感染拡大下でも実施可能な国際交流としてオンライン交流会を企画し、MOU 締結校である韓国仁荷大学の看護学生 16 名と本学学生 16 名が参加、8 月 5 日に実施した。両校参加学生の満足度は高く、今後につながる企画となった。

3) インドネシア ムハマディア大学主催のオンライン国際学会参加

MOU 締結校であるインドネシア ムハマディア大学主催のオンライン国際学会が 8 月 25・26 日に開催された際、交流活動の一環として学部生 3 名と委員会メンバーが参加、シンポジウムではムハマディア大学からの要請に応じて委員会メンバーが講演した。

4) 蔚山大学校医科大学看護課程への本学学生の派遣

本学から学部交流派遣として学部生 8 名を同行教員 2 名と共に 8 月 16 日から 8 月 20 日までの 5 日間、韓国の蔚山大学校医科大学看護課程に派遣予定であったが、新型コロナウイルス感染症の流行状況及び対応を両校で協議し、今年度の派遣事業は中止とした。

5) 第 23 回看護国際フォーラムの開催

新型コロナウイルス感染症の流行状況及び対応のために、大分県看護協会と共催で第 23 回看護国際フォーラムを令和 3 年 10 月 30 日に、Zoom ウェビナーとして開催した。テーマを「コロナ禍における看護職のメンタルサポート」とし、米国から 1 名の講師が録画プレゼンテーション、国内から 1 名の講師がライブプレゼンテーションをした。参加者は 208 名と大盛況であり、その内訳は韓国 3 名、米国 1 名、日本の県内外から 204 名だった。参加者アンケートの結果では講演内容について 94%、質疑応答について 93%が「とても満足」「ほぼ満足」と回答しており、高い満足度を示していた。

6) 英文 Web・パンフレット

令和 3 年度に最新情報を英語 Website にアップし、適宜更新を行った。

令和 4 年度は、令和 3 年度の計画を踏襲した活動を行う予定である。基本的には、学生の国際的視野の育成と教員の研究資質向上のために、国際交流の機会と内容を十分に検討する。また、看護国際フォーラム後に参加者アンケートを実施し、看護職のニーズに沿ったテーマを選定し、地域貢献にもつなげる。

9-3-16 1) 英文 Web・パンフレットワーキンググループ

リーダー Gerald T. Shirley

メンバー 岩崎香子、桑野紀子、丸山加菜

実施状況

令和 3 年度に最新情報を英語 Web サイトにアップし、適宜更新を行った。

今後の課題

海外の方に対して本学の魅力や情報を発信し PR を行うため、また、本学の学生や教職員が海外へ留学・進学する際などにも使用するために令和 4 年度に英文パンフレットを改めて作成する。

9-3-17 図書委員会

委員長 林猪都子

副委員長 安部眞佐子

委員 姫野雄太、水迫祐人（2021 年 4 月～10 月）、渡邊一代（2021 年 11 月～）、黒木貴子（事務局）、白川裕子（図書館）

委員会選定及び学生リクエストによって新たに 1,768 冊の蔵書を整備した。また、「図書館だより」（発行回数 2 回<Vol.15(2021 年 7 月)、Vol.16(2022 年 1 月)>）の発行、図書企画展示（企画展示 4 回、ミニ展示 2 回）の実施、教職員の推薦図書を毎月紹介する「教職員おすすめの一冊」を継続し、教職員・学生の図書館利用拡大を図った。今年度は視聴覚資料 17 点を除籍し、希望する教職員にリユースした。2021 年 9 月には図書館システムのリプレースを行い、蔵書検索画面や個人専用ページのデザインが新しくなり、Web 上での利用環境が改善された。また、研究・教育がより効果的に行うことができるよう、文献デリバリーサービス「Reprints Desk」、医学映像情報センターの映像配信教育「ビジュランクラウド」を継続している。データベース医中誌 Web 版に関しては、学内専用プランから学外からもアクセスできる「フリーアクセスプラン」に変更し、利便性の向上を図った。

学修支援として、授業科目ごとに担当教員に参考図書の推薦を依頼し、「講義の理解を助ける図書・視聴覚資料」として案内を行い、リストを図書館 HP 上で公開している。

また、今年度は大分県大学図書館協議会の当番館であったため、2021 年 9 月に大分県大学図書館協議会総会を書面回議にて行い、2022 年 2 月には研修会（「国立国会図書館デジタル化資料送信／サービス・デジタルコレクションの概要」講師：国立国会図書館職員）を開催した。

今後は卒業生・修了生の入館状況を次年度以降も継続的に調査集計し、利用拡大のための方策を検討していくこととした。

9-3-18 情報ネットワーク委員会

委員長 佐伯圭一郎

副委員長 品川佳満

委員 恵谷玲央、渡邊弘己、宿利優子、伊東美穂、原田千夏

本学のネットワーク運用支援、新入生オリエンテーションでの情報関連ガイダンスや教職員へサポートなどのユーザー支援、メール管理、サイボウズなどによる手続き支援などの定常的に行う業務

を各委員が WG ごとに担当して行なった。

サーバ等の更新について、主たるものとして DHCP サーバ、AD サーバ、無線 LAN 管理サーバ、印刷管理サーバ、SPSS 起動認証 PC を更新した。また、学生ポータルサイト (Nekobus) の切り替え、図書システムの更新を完了した。また SINET6 への移行も無事に終了した。看護研究センターへの無線 LAN ステーション設置検討の支援を行った。教材作成室を院生室に転用する関連で、教材作成室に配備されていた物品の整理を行うとともに、院生室として利用するための LAN 工事を実施した。

教職員向けの情報セキュリティ講習会を 7 月 27 日にオンライン開催した。学生を対象としたオンデマンドによる情報セキュリティ講習会は 7 月に配信し、受講の報告が対象とした 2~4 年次生の 74% から得られた。さらに、本学の情報セキュリティ基本方針等の見直しを開始した。

今後も定常的業務をつつがなく担当していくが、課題としては、オンライン授業/会議が継続する状況下で、トラブルの無い進行をサポートするために、環境の整備、セキュリティ対策、また学生を主たる対象としたサポートの充実などがあげられる。

9-3-19 ハラスメント防止・対策委員会

委員長 岡田浩明

委員 稲垣敦、小野治子、小野美喜、黒木貴子、田中保之 (外部委員、弁護士)、吉村匠平、
関根剛 (オブザーバー)、尾割勇作 (事務局)

令和 3 年度のハラスメント防止・対策委員会として 1)~3) の活動を行った。

1) 委員の選出

学内の教職員、学部生、院生等の立場を代表した委員がされ、外部の専門家 (弁護士) による委員を構成員とした

2) 委員会の開催

9 月 2 日 (online)、3 月 4 日 (online) に委員会を開催した。

3) 教職員向けハラスメント研修会の開催

11 月 29 日に対面及び online で、ことの葉クローバー代表の松本久美子氏を講師として、「セクハラ・パワハラ・ハラいっぱいの現代社会」の演題で、ハラスメント研修会を開催し、69 名の参加があった。

ハラスメントの相談に的確に対応できるよう、ハラスメント相談員の会議の実施を検討するとともに、委員の知識を深めるため、次年度の第 1 回委員会で弁護士の田中委員より、最新の裁判例の紹介を行う。

9-3-20 衛生委員会

1号委員 岡田浩明
2号委員 角匡幸（産業医）
3号委員 小野治子
4号委員 佐伯圭一郎、尾割勇作
オブザーバー 釘宮由美子
事務局 松尾美沙

衛生委員会は、職場の労働災害及び健康障害を防止し、職員の安全及び健康の保持増進を図るために活動を行っている。本年度は、計9回の委員会を開催し、健康診断結果の把握や職場巡視等を行った。

1 職員の健康管理

- (1) 定期健康診断を4月14日に実施した。健康診断結果を確認し、精密検査の必要がある職員に当該精密検査受診を勧奨した。
- (2) 労働安全衛生法に基づくストレスチェックを5月20日から6月2日に実施し、集団分析結果から健康リスクの確認を行った（61名受検、受検率85.9%、前年度比4%増）。
- (3) インフルエンザ予防対策として、予防接種希望者を募り、11月8日に学内接種を行った（希望者30名）。
- (4) 有機溶剤を使用する実験室の作業環境測定を5月25日と11月2日に実施し、その評価の報告を行った。
- (5) 夏季休暇の積極的な取得を教職員へ呼びかけ、取得状況を教育研究審議会等に報告した。

2 健康増進活動支援事業

- (1) 教職員の健康管理への意識向上を図るため、職場ウォーキングラリーを開催し、教職員50名が参加した。
- (2) 昨年度に引き続き、「各種スポーツイベントへの参加支援」としての参加負担金助成は新型コロナウイルス感染症の感染状況を鑑み、実施しなかった。

3 職場巡視

12月6日と1月21日に建物外を巡視した。その結果、路面タイルが割れて破損し散らばっている、樹木の根により路面ブロックが隆起している、樹木が伸びている場所等を確認した。すぐに補修、剪定できる箇所については、大学事務局に依頼し補修等を行った。すぐには対応不可能な部分については、今後状況を見て検討する。

9-3-21 評価委員会

委員長 稲垣敦

委員 梅野貴恵、岡田浩明、福田広美

委員会は、学内申し合わせルールに従って理事長及び理事以外の常勤教員の年間活動に関する評価を行い、理事長に報告する。また、評価方法の改善や昇任人事の準備も当委員会の分掌事項である。本年度は、「2030に向けた本学の課題と解決策」に基づいて、他大学等における非常勤講師を社会貢献の評価対象から外した。また、得点には反映させなかったが、学生による授業アンケートの結果を自己評価書に記載し、次年度の目標を記載する欄を試行として取り入れた。この改定を反映させた自己評価書等の資料の提出を12月21日に教員に依頼した後、所定の方式で評価を行い、その結果が適切であることを合議で確認し、理事長に評価結果を報告した後、理事長名で教員に個人評価票を返却した（3月3日）。今年度は教員からの問い合わせや疑義はなかったが、問い合わせ期間に関する要望があった。また、この教員評価結果を含めた昇任基準に基づいて昇任の可能性を確認し、准教授への昇任1名、講師への昇任1名、学内講師への昇任2名、助教への昇任2名を理事長に提案した。

次年度は、学生による授業アンケート結果を評価点に反映させることを教育研究審議会に諮る予定である。

9-4 FD・SD 活動

1. FD 研修

- 1) 新任教職員研修：4月2日 9:00～16:20（対面）。対象者 12 名に大学組織概要、カリキュラム概要など、8 領域に関する研修を実施した。4月5日 9:30～12:00 と 4月16日 13:00～16:00 に看護系教員 7 名を対象に看護学実習指導を含む看護基礎教育に関する基礎知識の研修を対面で実施した。
- 2) 科研費説明会・研修会・ピアレビュー：7月26日 13:00～14:30（Zoom）。参加者は 43 名。科研費申請の説明を申請事務担当者 1 名（黒木貴子リーダー）、今年度採択者 2 名（丸山加菜助教、佐藤栄治助教）の講義を実施した。また、先立って 4月15日に新採用教員向けに、科研費申請のポイントに関する資料やインターネットサイト等の資料提供をメールにて実施した。科研費申請に先立つベテラン教員による助言（ピアレビュー）は 13 件行われた。
- 3) 教育に関する研修：6月30日 14:00～15:00（対面と Zoom）。参加者 57 名。テーマは「アンガーマネジメントで上手に怒れる人になる」で、学生指導場面や職場内での対人関係を良好に保つための各自の感情のコントロールについての内容であった。講師は、アンガーマネジメントコンサルタントの石井良佳氏。
- 4) 教育に関する研修：12月24日 13:30～14:30（Zoom）。参加者 52 名。テーマは「教育効果をあげるための ICT の活用」で、オンラインを使用した実際の講義の事例、Google Classroom の活用方法についての内容であった。講師は、本学の佐伯圭一郎教授と荒木章裕講師。
- 5) 学生理解に関する研修：12月24日 10:30～11:15（対面）。参加者 46 名。テーマは、「学生のメンタルヘルスの現状理解」で、本学学生のコロナ禍の影響とメンタルヘルスの現状、保健室機能の重要性等についての内容であった。講師は、別府大学名誉教授・本学学生相談担当の大嶋美登子先生。
- 6) 人権に関する研修：3月7日 10:00～11:30（Zoom）。参加者 65 名。テーマは、「部落差別問題」で、部落差別問題の歴史の変遷と現状、差別感情や現代の人権問題等の内容であった。講師は、大分県生活環境部人権尊重・部落差別解消推進課啓発班の江藤裕子氏。

2. 学内競争的研究費

4月12日に募集を行い、奨励研究 1 件、先端研究 3 件、プロジェクト研究 1 件の新規応募があった。5月12日に審査会が開催され、5 件すべての採択およびそれぞれの助成額が決定された。その結果、令和 2 年度採択分（2 年目課題）とあわせ、奨励研究 1 件、先端研究 5 件、プロジェクト研究 1 件への研究助成が行われた。なお、それぞれの成果については、3月7日のアニュアルミーティングにおいて報告された。令和 4 年度の研究費募集を 3月7日に開始した。

3. 国内／海外派遣研修

本年度は、国内／海外派遣ともに応募はなかった。

4. 授業評価

1 年次 35 科目、2 年 39 科目、3 年 31 科目、4 年 5 科目、合計 110 科目について実施した。結果は担当教員に通知され、科目ごとの平均値一覧結果はウェブに掲載された。

5. アニュアルミーティング

3月7日に研究費取得演題 6 題（7 題のうち 1 題は助成期間の変更）、一般演題 6 題が Zoom によるポスター発表形式で実施された。

10 附属組織

10-1 図書館

・2021年度利用者数

図書館入館者数（延べ人数） 20,125人

学外からの利用者数（実人数） 15人

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため学内者のみの利用としていたが
ステージ1となった2021年11月8日～2022年1月10日は通常どおり
学外者も利用可能とした。

・2021年度受入図書冊数 1,768冊

うち購入数 1,739冊

・2021年度受入雑誌タイトル数 203点

うち購入数 143点

・図書等資料蔵書数（2022年3月31日現在）

蔵書冊数 83,631冊

所蔵雑誌タイトル数 644点

電子ジャーナル購読タイトル数 607点

電子ブック購読タイトル数 15点

視聴覚資料 2,268点

10-2 看護研究交流センター

10-2-1 看護研究交流センター推進会議

センター長 稲垣敦

副センター長 影山隆之

メンバー 市瀬孝道、定金香里、高野政子、林猪都子、村嶋幸代、篠原彩、神崎純子

随時、センター規程を見直した。また、NP事業推進チームの名称をNP教育・事業推進チームに変更した。さらに、本学の知的財産マネジメント体制を確立する中で、センターの中に知的財産本部を設置するとともに、知的財産本部規程、共同研究取扱規程、委託研究取扱規程、研究成果有体物取扱規程及びこれらに関する各種契約書、届出書、申込書等の様式を定めた。

次年度は、産学官連携推進チームが中心となり、知的財産マネジメント体制を教職員に周知するための取り組みを支援する。また、認証評価の結果も参考にして、当センターの組織や活動を見直す。

10-2-2 地域交流チーム

リーダー 影山隆之

メンバー 荒木章裕、岡田浩明、尾割勇作、神崎純子、木嶋彩乃、篠原彩、永松いずみ、福田広美、堀裕子

予防的家庭訪問実習の運営、特に新型コロナウイルス感染症下における本実習の対応、及び、おおいた地域連携プラットフォームへの参画のため、チーム会議を年7回開催した。

予防的家庭訪問実習では、コロナの状況を踏まえ協力者に実習受け入れの意向確認と依頼を行い、学内で実習要項の作成、学生・教員へのオリエンテーション、感染対策の取りまとめ、進行状況の管理（学生・協力者・担当教員の調整）を行った。感染拡大の中で予定通りの実施が困難であり、代替措置として学内演習、外部講師による講話、電話による問安などをその都度検討して実施した。特に留意したのは、学生にとっての学習効果と、協力者宅に感染源を持ち込まないことである。地域ステークホルダーとの運営会議を、1回は通常開催、もう1回は書面開催とした。前年度末に新規協力者のリクルートができなかったため協力者未定の学生チームが増えた状況を勘案し、今年度末には多数の新規協力者を開拓する必要があった。このため年度末に、訪問地域で協力者公募のチラシを配布や回覧して周知するとともに、新規候補者への説明訪問を精力的に行った。学生による実際の訪問は、4月の訪問開始後、感染状況の悪化から休止して10月より再開し、自宅での訪問の承諾を得た64のチームが訪問を行うことができた。学生向けの予防的家庭訪問実習通信を計5回発信し、学生の学修状況の確認および次年度の運営の参考にするため学生の年度末レポートを分析した。他方、本実習に長年協力を続けてきた高齢者を対象とし、協力者側の経験や思いを聴き取る研究を企画し、学内の競争的研究資金を獲得して調査を行った。詳しい分析と論文投稿が次年度の課題である。

おおいた地域連携プラットフォームは、県内の高等教育機関と自治体・企業の連携・協働を促進するために本年度から発足した組織で、本学も単位互換や共同科目開発等の協議に参加した。プラットフォームが公募した実践型地域活動事業に採択され、この予算を用いて、情報通信技術を活用した看護学生と高齢者の交流会を試み、フレイル予防への実用可能性について検討した。この結果は同事業成果報告会で発表した。

10-2-3 継続教育推進チーム

リーダー 林猪都子

メンバー 足立綾、佐藤愛、姫野雄太、篠原彩、神崎純子

チームの2021年度の大きな活動は、以下の3点である。

1. 地域貢献としての看護研究支援

5施設（大分県立病院、大分赤十字病院、大分医師会立アルメイダ病院、衛藤病院、別府医療センター）から研究支援の依頼があり、各施設に講師を2～3人派遣し、看護研究支援を実施した。2月にはほとんどの施設の支援が終了し、各施設から意見や要望等が寄せられた。多くの施設は3月末までに研究成果発表会が実施され、支援者による講評が行われた。2021年度の支援については、COVID-19の影響により、Zoomやメール等での支援が多く行われ、施設によっては、派遣講師による看護研究に関する講義を実施した。研究支援に関して、全施設から大変満足の回答があり、次年度以降も全施設から継続希望があった。

2021年8月に予定していた看護研究交流会は、COVID-19のため中止した。次年度に向けて、研究支援を受けている看護管理者、派遣講師、継続教育推進チームにて、受けている支援や研究成果、看護研究支援体制等について、座談会形式で交流会を開催する予定である。

2. ホームカミングデイの実施

6月19日に予定されていたホームカミングデイは、COVID-19の影響を受け、10都道府県が緊急事態宣言下であり、県内もステージⅢで医療機関も切迫しているため、卒業生、修了生が当日勤務の都合をつけるのは厳しい状況であるため中止した。2022年2月に2020年度の卒業生と修了生に対して、COVID-19の流行に際し、最前線で活動している卒業生、修了生に対して、心からの感謝の気持ちを伝えるとともに、学生の心の支えとなることを目的に、学長、教職員、在校生からのメッセージを送付することを企画した。12月までに教職員や在校生にメッセージを依頼し、2月1日に送信した。送信後の卒業生、修了生からのアンケートには「また明日から頑張ろうと思えた」との感想があり、大変喜ばれた。次年度のホームカミングデイは、6月18日（土）に卒業生、修了生に対して、Webで実施する予定である。

3. 就学前に希望する看護技術の再教育

実習中に経験ができず、在学中に不安がある看護技術の練習を通して、根拠に基づいた手技の確認ができ自信をもって入職することを目的に、今年度限りの企画として、希望する4年生に対して入職前看護技術演習を企画した。9名の卒業生が、3月22日と24日に、5項目の基礎看護技術（排泄援助、膀胱留置カテーテルの挿入、陰部洗浄、寝衣交換、採血・注射）等を実施した。実施後のアンケートから、自己の課題の解決や技術に対する不安の軽減につながっていると感想があった。

10-2-4 産学官連携推進チーム

リーダー 市瀬孝道

メンバー 尾割勇作、神崎純子、佐藤栄、篠原彩、田中佳子、樋口幸

産学官連携推進チームでは産学官連携による開発研究、地域連携及びベンチャー精神に富んだ人材育成などを推進する目的で平成 27 年度から発足・活動を行っている。本チームは、県内外の企業や病院との共同及び受託研究を促進し、地域企業の活性化を図ることを使命としている。

産学官連携推進チームではこれ迄に県内外の企業や病院からの研究依頼・技術相談の窓口となり、教員（研究者）への紹介を行って来た（本年度は 3 件）。また、本年度も人材育成の一環として、教員等に他大学の知的財産セミナーの紹介やチームメンバーが東九州メディカルバレー構想推進大会や企業セミナーに参加した。また、令和 3 年度では外部研究機関や企業のニーズと大学教員のシーズのマッチングを図るための取組として大学教員のシーズ集を作成し、本学ホームページの産学官連携推進チームのページに掲載した。今後の課題としては、シーズ集を基に外部機関や企業との共同研究の推進を図ると共に、研究成果物や特許等の知的財産の仕組みについて教員や大学院生に理解を深めるためのセミナー等を行なってゆく必要がある。

10-2-5 NP 教育・事業推進チーム

リーダー 高野政子

メンバー 村嶋幸代、藤内美保、小野美喜、濱中良志、宮内信治、草野淳子、吉田成一、堀裕子、足立綾、宿利優子、甲斐博美、吉田智子(4 月～7 月)、渡邊一代(10 月～3 月)、神崎純子

令和 3 年度はチーム名を「NP 教育・事業推進チーム」と改名し、課題研究の指導体制を整備し、特定行為研修を含む大学院 NP 教育に取り組むことを明記した。また、1)～5)の活動計画にそって活動を行った。

1) 大学院 NP コース学生を育成し、修了生を県内外に輩出する

大学院カリキュラムの展開と質担保のための試験を段階的に行った。1 年次生は 12 月 15 日に口頭試問、2 月 25 日に進級試験を実施した。7 名が受験し 7 名が進級となった。2 年次生には実習前試験を実施（6 月 10 日 OSCE 試験）し、令和 4 年 2 月 22 日の修了試験では修了予定者 11 名が受験し全員合格した。この 11 名は日本 NP 教育大学院協議会の NP 資格試験（令和 4 年 3 月 6 日）に全員合格し NP 資格認定を受けた。年度当初 1 年次生は 8 名であったが、諸事情で退学者 1 名となった。令和 3 年度 NP コース修了者の就職先は県内 6 名、県外 5 名となった。

例年同様に学生の到達目標等をチーム内で協議し、学業等のサポートを行った。

2) NP 修了生の継続教育の実施

入学生や在学生にアンケートをとり、学生の履修環境向上のために、勤務や体調管理面に配慮し週 2 日昼夜開講に変更した。また、コロナ禍の履修環境向上のため、オンラインによる双方向型の遠隔

授業とした。県外や県北で勤務している受講生の利便性にも貢献した。

NP カリキュラムも、学生の授業評価や、チーム会議で年間を通して全科目の内容等を見直し、R5 年度改正を目指すことにした。令和 3 年度から学内進学者を増やすために地域枠特別選抜制度を開始した。今年度は初年度であったが学部 4 年次生 1 名が小児 NP コースに合格し、卒業後県内に就職した。

3) 実習施設連携・特定行為研修

実習前後の実習施設合同会議（6 月、8 月臨時、2 月）を 3 回開催し、実習施設の実習指導者と大学教員との連携体制が強化できた。また、「特定行為に係る看護師の研修制度」を組み込んだカリキュラムを展開したことから、外部委員 4 名を含めた特定行為管理委員会を開催し、特定行為研修の遂行状況を査定していただいた。令和元年度に厚労省からの通知で 1 行為に臨地実習で 5 症例を経験することが指導されていたが、過去 2 年間はコロナ過でもあり実践できていなかった。今年 6 月に指摘を受けてそれまでの学内における高機能シミュレータ教育等で対応していたのを臨地の実習施設 6 医療機関に協力を依頼するなど切り換え、実習施設を開拓した。その結果、3 月 1 日に第 3 回の特定行為管理委員会で研修の修了判定を行い、NP コース 11 名の特定行為研修（21 区分 38 行為）の修了が認定された。

4) NP に関する研究活動を行い、NP 大学院教育の特長を社会に向けて発信する。

令和 3 年度は、NP の修了生の実態調査などを主とする研究計画を立て、学内競争的研究費の先端研究として予算申請した。その結果、令和 3 年度から 4 年度の 2 年間の研究予算を獲得した。しかし、様々な事情で取り組むことができなかったため、1 年延長申請をして令和 4 年度～5 年度の研究となった。

5) 日本 NP 教育大学院協議会事務局の運営

日本 NP 教育大学院協議会の事務局として、全国 11 大学院の NP 教育機関の連携と組織強化を図った。次年度の課題は、大学院で NP 教育を行う大学機関との連携を強化することである。

10-2-6 学術ジャーナルチーム

リーダー 定金香里

メンバー 秋本慶子、神崎純子、G. T. Shirley、白川裕子、徳丸由布子、中釜英里佳、山田貴子、渡邊弘己

本チームは、インターネットジャーナル「看護科学研究」の編集事務局の業務を担っている。それぞれの担当メンバーが、投稿論文の受付、確認作業、編集担当委員の選定、委員・査読者・著者間の連絡作業、英文校正、編集作業、Web ページの作成、J-STAGE への登録といった実務を行った。本年度は、19 巻 1 号（2021 年 4 月）、同 2 号（2021 年 8 月）を発刊した。年間 3 号の発刊目標には及ばなかったが、昨年度の査読付き掲載論文数が 4 編であったのに対し本年度は 8 編だった。

「看護科学研究」編集委員会および学術ジャーナルチームにメンバー交代があったが、作業・業務の引き継ぎは、概ね円滑に行われた。

英文投稿規定や査読委員リスト、編集委員の申し合わせ事項の改訂、改定を行った。

昨年度、ジャーナル専用のドメインを取得し、新規 HP を作成することが決定した。本年度は、新規 HP、メーリングリストの設計、構築を行った。また、現在、メールで受付担当者が行っている委員・査読者・著者間の連絡を、クラウドストレージを介することで事務作業の簡略化ができないか検討したが、価格や仕様の不便さなどから断念した。一方、受付作業や著者情報の確認・削除作業を簡易化することを念頭に HP に投稿用フォームを設計した。今後、使用感を集約し、業者に修正を依頼し、機能性を向上させていく予定である。

近年、査読に時間を要する論文が増加しており、その為、刊行間隔が広がる傾向が継続していることが報告されてきたが、実際に期日を集計したことがなかった。本年度、査読期間や事務手続き作業にかかった日数等を集計したので、今後の作業効率化、3号発刊目標達成に利活用していく。

10-2-7 健康増進プロジェクトチーム

リーダー 稲垣敦

メンバー 赤星琴美、石丸智子、小野治子、甲斐博美、木嶋彩乃、桑野紀子、佐藤愛、篠原彩、秦さと子、田中佳子、濱中良志、樋口幸、掘裕子、丸山加菜、森加苗愛

研究・産学官連携に関しては、大分県産業科学技術センターから、日田の下駄メーカーとの共同研究の打診があり、①加速度から見た一本歯下駄を履いた歩行の安定性、②一本歯下駄を履いた歩行のエネルギー代謝に関する2つのパイロットスタディを実施した(6/18-2/7)。また、第80回日本公衆衛生学会総会で「離島住民の健康寿命とコミュニケーションの機会：大分県姫島村について」を発表した(12/21-23)。

社会貢献活動としては、大分県からの要請で、大分市内で合宿した東京2020オリンピックのポルトガル陸上競技選手団のPCR検査に協力した(7/18-28)。また、トヨタカローラ大分主催のオレンジフェスタで、検温・マスク着用・除菌・アクリル板使用の下で、健康チェックを実施し、548名がブースに参加した(11/6-7)。さらに、大分市営陸上競技場及び津留運動公園の指定管理者予定者選定に協力した(8/19-10/26)。一方、おおいた地域連携プラットフォームの「大分県が県内大学等との連携を希望する取組」の課題No.3「健康無関心層に対する健康アプリ『おおいた歩得(あるとっく)』の活用推進」に応募した(11/17)。スポーツ救護ナースの派遣事業は大分県スポーツ学会から日本スポーツ救護看護学会に移り、今後も派遣に協力してゆくこととなった。

広報に関しては、大分県スポーツ学会機関誌「スポーツおおいた」第6号に当プロジェクトのこれまでの活動報告を掲載し(5/11)、また、本学の公開講座「ステイホームの今だからこそ アラフォーからの足腰の健康を考えよう！」で、これまでの当プロジェクトの活動やめじろん元気アップ体操等の紹介を行った(9/11)。

次年度については、COVID-19の感染が縮小すれば、以前の活動を再開し、また、感染状況が変わらなければコロナ禍でも可能な新事業を展開する。

11 設備等

(1) 校舎

所在地 大分市大字廻栖野 2 9 4 4 番地の 9

○ 校地 (単位：m²)

区 分	面 積
校舎敷地	57,990
運動場用地	13,140
駐 車 場	7,734
計	78,864

○ 校舎建物 (単位：m²)

区 分	面 積	構 造
管 理 棟	2,224	鉄筋コンクリート3階建
講 義 棟	2,816	鉄筋コンクリート3階建
図書館・食堂棟	3,346	鉄筋コンクリート3階建
実習・研究棟	5,882	鉄筋コンクリート3階建
交 流 棟	930	鉄筋コンクリート3階建
体 育 館	1,067	鉄筋コンクリート平屋建
実験動物施設	102	鉄筋コンクリート平屋建
車 庫	69	軽量鉄骨平屋建
倉庫及び機械室	49	鉄筋コンクリート平屋建
計	16,485	

(2) 南大分キャンパス (研修・実習センター)

所在地 大分市豊饒二丁目 7 番 2 号

敷地面積 2,354 m²

延床面積 1,077 m² 鉄筋コンクリート2階建

(3) 職員住宅

所在地 大分市大字廻栖野 3 2 0 2 番地の 1

敷地面積 2,147 m²

延床面積 754 m² 鉄筋コンクリート3階建等(2棟・12戸)

12 名簿

12-1 役員

理事長（学長）		村嶋幸代
理事	学部長	福田広美
理事	研究科長	稲垣敦
理事	事務局長	岡田浩明
理事（非常勤）	大分大学医学部附属病院長	三股浩光
理事（非常勤）	大分県立病院長	佐藤昌司
理事（非常勤）	（株）大分銀行相談役	姫野昌治
監事（非常勤）	公益社団法人認知症の人と家族の会 大分県支部 代表	中野洋子
監事（非常勤）	公認会計士	福田安孝

12-2 審議会委員

経営審議会

学内委員	理事長	村嶋幸代
学内委員	理事	福田広美
学内委員	理事	稲垣敦
学内委員	理事	岡田浩明
学外委員	理事（非常勤）	三股浩光
学外委員	理事（非常勤）	佐藤昌司
学外委員	理事（非常勤）	姫野昌治
学外委員	弁護士	千野博之
学外委員	立命館アジア太平洋大学教授	吉松秀孝
学外委員	大分合同新聞社常務取締役	佐藤政昭
学外委員	大分県看護協会長	大戸朋子

教育研究審議会

学内委員	学長	村嶋幸代
学内委員	学部長	福田広美
学内委員	研究科長	稲垣敦
学内委員	事務局長	岡田浩明
学内委員	生体科学教授	濱中良志
学内委員	生体反応学教授	市瀬孝道
学内委員	人間関係学准教授	吉村匠平
学内委員	環境保健学准教授	小嶋光明

学内委員	健康情報科学教授	佐伯圭一郎
学内委員	言語学教授	G.T.Shirley
学内委員	基礎看護学教授	廣田真里
学内委員	看護アセスメント学教授	藤内美保
学内委員	成人・老年看護学教授	小野美喜
学内委員	小児看護学教授	高野政子
学内委員	母性看護学教授	林猪都子
学内委員	助産学教授	梅野貴恵
学内委員	精神看護学教授	影山隆之
学内委員	地域看護学教授	赤星琴美
学内委員	国際看護学准教授	桑野紀子
学外委員	大分大学名誉教授	犀川哲典

12-3 教職員

12-3-1 専任教員

生体科学	教授	濱中良志			
	准教授	安部眞佐子			
	学内講師	岩崎香子			
生体反応学	教授	市瀬孝道	R4.3.31	退職	
	准教授	吉田成一			
	学内講師	定金香里			
健康運動学	教授	稲垣敦			
人間関係学	准教授	吉村匠平			
	准教授	関根剛			
	非常勤助手	秋本慶子			
環境保健学	准教授	小嶋光明			
	助教	恵谷玲央			
健康情報科学	教授	佐伯圭一郎			
	准教授	品川佳満			
	助教	渡邊弘己	R4.3.31	退職	
言語学	教授	G.T.Shirley			
	准教授	宮内信治			
基礎看護学	教授	廣田真里			
	准教授	秦さと子			
	助教	石丸智子			
	助教	田中佳子			
	臨時助手	神矢恵美	R3.4.1	採用	
	非常勤助手	水迫祐人	R3.4.1	採用	
看護アセスメント学	教授	藤内美保			
	准教授	石田佳代子			
	助教	山田貴子			
	助手	内倉佑介			
	成人・老年看護学	教授	小野美喜		
		准教授	森加苗愛		
講師		堀裕子			
助教		中釜英里佳			
助教		宿利優子			
(NP コース担当) 助教	佐藤栄治				
		甲斐博美	R3.10.31	退職	

	臨時助手	吉田智子	R3.4.1	採用
			R3.7.31	退職
小児看護学	臨時助手	渡邊一代	R3.10.1	採用
	教授	高野政子	R4.3.31	退職
母性看護学	准教授	草野淳子		
	助教	足立綾		
	教授	林猪都子		
	助教	永松いずみ		
助産学	助教	徳丸由布子		
	臨時助手	今村知子	R3.9.1	採用
	教授	梅野貴恵		
	准教授	樋口幸		
精神看護学	助教	姫野綾		
	助手	矢野杏子	R3.4.1	採用
	教授	影山隆之		
	准教授	杉本圭以子		
保健管理学	助教	後藤成人		
	教授	福田広美		
地域看護学	講師	荒木章裕	R3.4.1	採用
	助教	姫野雄太	R3.4.1	採用
	助手	矢野亜紀子	R3.4.1	採用
	教授	赤星琴美	R4.3.31	退職
	助教	小野治子		
	助教	佐藤愛		
国際看護学	助教	木嶋彩乃	R4.3.31	退職
	臨時助手	橋本志乃	R3.4.1	採用
			R4.3.31	退職
	准教授	桑野紀子		
看護研究交流センター	助教	丸山加菜		
	臨時助手	篠原彩	R3.6.30	退職
	助教	篠原彩	R3.7.1	採用

12-3-2 就職相談員

就職相談員 竹中愛子

12-3-3 非常勤講師（学部）

小川伊作	音楽とこころ
澤田佳孝	美術とこころ
松田美香	言語表現法
黄炳峻	韓国語
西英久	哲学入門
大杉至	社会学入門
二宮孝富	法学入門（日本国憲法）
足立恵理	文化人類学入門
平野互	医療福祉と人権、 社会保障システム論、看護の倫理
松本昂	微生物免疫論
石本田鶴子	大学ナビ講座
松尾和行	大学ナビ講座
松久美	災害看護論
麻生良太	教職概論、教育方法論
生田淳一	教職概論
堀本フカエ	教職概論
横山秀樹	教職概論
鈴木篤	教育学概論、 道徳、総合的な学習及び特別活動
飯田法子	教育相談
長谷川祐介	生徒指導
河野伸子	教育相談
中島暢美	教育相談
藤田文	学校教育心理学
今井航	教育課程論、教育制度論
霜山朋子	学校保健学
手嶋康深	学校保健学
吉田知佐子	学校保健学
古賀精治	特別支援教育論
藤野陽生	特別支援教育論

12-3-4 非常勤講師（大学院）

立川洋一	老年アセスメント学演習
小野克重	病態生理学特論
黒川竜紀	病態生理学特論
大田えりか	看護科学研究、健康科学研究特論
平野互	健康社会科学特論、看護科学研究、健康科学研究特論、 社会保障システム論、保健医療福祉政策論、 母子成育特論
甲斐仁美	看護管理学特論
柿本貴之	看護管理学特論
佐藤弥生	看護管理学特論
志田京子	看護管理学特論
山崎清男	看護教育特論
竹村陽子	看護コンサルテーション論
小池智子	看護政策論
小山秀夫	看護政策論
立森久照	看護政策論
中西三春	看護政策論
伊東朋子	基盤看護学演習
黒木雪絵	小児看護学特論、小児 NP 特論
後藤愛	小児看護学特論、小児 NP 特論
佐々木真理子	小児看護学特論、小児 NP 特論
式田由美子	小児看護学特論、小児 NP 特論
菅谷愛美	小児看護学特論、小児 NP 特論、 小児アセスメント演習
庄山由美	老年 NP 特論
高根利依子	老年 NP 特論
一万田正彦	老年疾病特論
糸永一朗	老年疾病特論
木村成志	老年疾病特論
甲原芳範	老年疾病特論
小寺隆元	老年疾病特論
財前博文	老年疾病特論
竹下泰	老年疾病特論
平井健一	老年疾病特論
伊東弘樹	老年臨床薬理学特論
塩月成則	老年臨床薬理学特論、老年薬理学演習
田中遼大	老年臨床薬理学特論

大仲將美	老年薬理演習
阿部航	老年診察・診断学特論
安東優	老年診察診断学特論
加隈哲也	老年診察診断学特論
上田徹	老年診察診断学特論
佐分利能生	老年診察診断学特論
永瀬公明	老年診察診断学特論
中村朋子	老年診療診断学特論
中村雄介	老年実践演習、老年診察診断学特論
西水翔子	老年診察診断学特論
藤谷直明	老年診察診断学特論
溝口博本	老年診察診断学特論
宮崎美樹	老年診察診断学特論
立川洋一	老年アセスメント学演習
宮川ミカ	老年アセスメント学演習
迫秀則	老年実践演習
佐藤博	老年実践演習
竹内山水	老年実践演習
田村委子	NP 論・老年実践演習
藤谷悦子	老年実践演習
古川雅英	老年実践演習
松久美	老年実践演習、小児実践演習
山本真	老年実践演習
日高美晴	老年 NP 実習 I
谷山尚子	老年 NP 実習 II III
上野聖子	老年 NP 実習 III
清原小百合	老年 NP 実習 III
光根美保	NP 論
大末美代子	小児 NP 特論
松本佳代	小児 NP 特論
糸永知代	小児疾病特論
井上真紀	小児疾病特論
大野拓郎	小児疾病特論、小児診察診断学特論
久我修二	小児疾病特論、小児診察診断学特論
末延聡一	小児疾病特論
福永拙	小児疾病特論
保科隆之	小児疾病特論、小児診察診断学
佐藤圭右	小児疾病特論、小児診察診断学

松本康弘	小児薬理学特論
石和翔	小児診察診断学特論
井原健二	小児診察診断学特論
江口春彦	小児診察診断学特論
岡成和夫	小児診察診断学特論
清田晃生	小児診察診断学特論
小林修	小児診察診断学特論
関口和人	小児診察診断学特論
長濱明日香	小児診察診断学特論
別府幹庸	小児診察診断学特論
前田知己	小児診察診断学特論
川崎涼子	広域看護学概論
藤内修二	広域看護学概論、健康危機管理論、 疾病予防学特論
市原恭子	地域母子保健学特論、地域保健特論
大津孝彦	地域保健特論
鈴木由美	地域保健特論、地域母子保健学特論
高波利恵	産業保健特論
吉田愛	産業保健特論
玉井文洋	健康危機管理論
本山秀樹	健康危機管理論
高城翔平	広域看護アセスメント学演習
池邊淑子	疾病予防学特論
三浦源太	疾病予防学特論
井上真	薬剤マネジメント特論
甲斐倫明	環境保健特論、ウイメンズヘルスト論、 放射線健康科学、特別演習
飯田浩一	周産期特論
後藤清美	周産期特論
佐藤昌司	周産期特論、周産期診断技術演習
豊福一輝	周産期特論
井上祥明	母子成育支援特論
上野桂子	母子成育支援特論
佐藤敬子	母子成育支援特論
井上貴史	リプロダクティブ・ヘルスト論
井上尚実	リプロダクティブ・ヘルスト論
宇津宮隆史	リプロダクティブ・ヘルスト論
竹内正久	リプロダクティブ・ヘルスト論

中村聡	リプロダクティブ・ヘルスト論
花田克浩	リプロダクティブ・ヘルスト論
實崎美奈	ウイメンズヘルスト論
生野末子	分娩期診断技術特論、助産マネジメント論、 助産マネジメント演習
安部真紀	周産期診断技術演習、助産マネジメント論、 助産マネジメント演習
戸高佐枝子	助産マネジメント論

12-3-5 事務職員

	局長	岡田浩明	R3.4.1	採用
総務グループ				
	副主幹	尾割勇作	R3.4.1	転入
	主査	松尾美沙		
	事務員	木下明美		
	事務員	石田真樹	R3.6.30	退職
	事務員	花木真弓	R3.6.1	採用
財務グループ				
	主幹	黒木貴子	R4.3.31	転出
	主幹	伊東美穂	R3.4.1	転入
	主任	久保紘子		
	主事	安部翼	R3.4.1	採用
	事務員	宮川眞美		
教務学生グループ				
	主幹	菊池誉志	R3.4.1	転入
	副主幹	原田千夏		
	主査	佐藤英		
	主任	神崎正太		
	事務員	内倉沙希		
	事務員	岸田美由紀		
	保健室職員	秋吉好子	R3.4.16	採用
			R3.4.30	退職
	保健室職員	釘宮由美子	R3.6.1	採用
図書館管理グループ				
	サブリーダー	白川裕子		
	非常勤司書	川上裕		
	非常勤司書	中野智子	R3.6.14	採用
看護研究交流センター				
	事務員	神崎純子		